茨城県教育財団文化財調査報告第20集

常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書5

鹿の子C遺跡

－遺構・遺物編(上)－

昭和58年3月

財団法人　茨城県教育財団

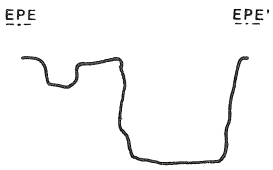
鹿の子C遺跡（遺構・遺物編上・下）正誤表

頁	行	誤	正
1	9行	報告書Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅵ	1・2・3・4
5	2行	漆しぼり料	漆を絞る料
37	2行	東南壁に	北・東・南壁下に
39	表－1・2各2行目	整　形	調整
45	表－2　1行	開き，かえりをもつ。器肉は	開き，器肉は
80	表－27　2～3行	断面を呈す	方形を呈する。
90	31行	B4h_2区を確認	B4h_2区を中心に確認
92	下から6行	ピットは8か	ピットは9か
98	図　上	26G	26
105	表－7　4行	数　所	数か所
121	第79図タイトル	遺物実測実	遺物実測図
134	表－2　1行	器面は	器高は
154	表－3　1行	断面Vをし，字形を	断面V字形を
167	表－22・23	高盤	高坏
179	24行	P_1～P_6 が	P_1・P_2・P_4・P_6 が
181	表－6　3行	外上方へ	外下方へ
194	22行	漆しぼり料	漆を絞る料
201	表－13・14	高坏	高盤
202	表－17	短頸壺	長頸壺
212	32行	壁高は	壁溝は
232	8行目～12行目	なお中央部から……。の文章	(95号竪穴住居跡)27行目にはいる
237	32行	漆しぼり料	漆を絞る料
271	表－16　3行	内部と底部内面は	体部と底部内面は
323	22行	漆しぼり料	漆を絞る料
323	23行	漆しぼり料	漆を絞る料
327	18行	漆しぼり料	漆を絞る料
327	20行	漆しぼり料	漆を絞る料
371	28行	推積	堆積
379	表－13　1行	やや明瞭な角瞭な角かれ	やや明瞭な角度で分かれ
384	表－2　1行	明瞭な色度	明瞭な角度
384	表－2　2行	丸くおくおさめ	丸くおさめ
415	31行	漆しぼり料	漆を絞る料

頁	頁	誤	正
415	表－4　　1行	熔岩	熔岩
446	観察表	172号竪穴住居出土	172号竪穴住居跡出土
466	表－25～27	25・26は未整品か	25・26は未製品か
487	表－6　　3行	外上方に	外下方に
488	表－21　　法量	A（23.3）	A（32.3）
535	17行	2.65m（7尺）	2.65m（9尺）
555	第419図エレベーション		
587	表－9　　1～2行	直立気味に立ち	やや丸く屈曲し
587	表－11　　備考	良　好	硬質
592	表－7　　備考	良　好	やや硬質
603	表－7　　備考	良　好	やや硬質
610	5行	末尾に	（佐藤正好）
648	表－48	長頸壺	長頸瓶
669	表－2　　3行	削りの横ナデ	削りと横ナデ
699	表－2　　1行	外上方	外下方
723	表－26　　1行	平井頂部	天井頂部
724	表－41　　2行	斜め面を	斜めに面を
744	9行	規格される。	規格化される。
752	表 SI75A　出土遺物 2行目	漆しぼり料	漆を絞る料
753	表 SI98　出土遺物 1～2	漆しぼり料	漆を絞る料
754	表 SI134B 出土遺物 1行目	漆しぼり料	漆を絞る料
754	表 SI137　出土遺物 1行目	漆しぼり料	漆を絞る料
756	表 SI163　出土遺物 1行目	漆しぼり料	漆を絞る料
760	19～20行	東京工業大学製鉄研究会	東京工業大学製鉄史研究会
771	32行	錆化	銹化
787	№. 172	宮人	官人
793	4行	「続古代の技術」	「古代の技術」

下図は555頁第419図エレベーション訂正用です。

右図は原寸図ですので
該当頁に切り貼りして
使用してください。



茨城県教育財団文化財調査報告第20集

常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書5

鹿の子C遺跡

―遺構・遺物編(上)―

昭和58年3月

財団法人　茨城県教育財団

序

常磐自動車道の建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査は，茨城県教育財団が日本道路公団からの委託事業として，昭和53年度から実施してまいりました。

昭和54年11月から開始した茨城県石岡市鹿ノ子に所在する鹿の子Ｃ遺跡の発掘調査は，２年３か月をついやして終了することができました。調査の過程において，全く予測もつかなかった漆紙文書の出土や連房式竪穴遺構など，次々と貴重な遺構・遺物が発見され，県民はもとより，全国の研究者から注目を浴びることになった遺跡であります。

その概要については，すでに「鹿の子Ｃ遺跡」として昭和56年度に刊行しておりますが，この度，漆紙文書の解読など２年間にわたる出土品の整理を終了し，ここに鹿の子Ｃ遺跡発掘調査報告書を刊行する運びになりました。

現代に甦った漆紙文書など多くの歴史資料とともに，本報告書が学術・教育ならびに文化財保護の資料として，広くご活用いただければ幸甚に存じます。

最後に，発掘調査及び整理に当たり，お世話になった日本道路公団はもとより，多大な御指導と御協力を賜わりました文化庁，東京国立文化財研究所，茨城県教育委員会，石岡市教育委員会をはじめ，関係諸機関ならびに関係者各位に対し，深く感謝の意を表すとともに，御多忙の中で漆紙文書の調査・解読にあたられた井上満郎先生をはじめとする５名の先生方に対し，厚く御礼申し上げます。

昭和58年３月

財団法人　茨城県教育財団

理事長　大金　新一

例　　言

1．本書は，日本道路公団の委託をうけ，財団法人茨城県教育財団が，昭和54年11月15日から昭和57年２月27日まで調査を実施した，石岡市鹿の子Ｃ遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査及び整理に関する組織は次のとおりである。

理事長		竹内　藤男	～昭和56年11月
		大金　新一	昭和56年12月～
副理事長		古橋　　靖	
常務理事		川野辺四郎	～昭和57年３月
		綿引　一夫	昭和57年４月～
事務局長		大内　秀夫	～昭和55年３月
		小林　義久	昭和55年４月～
調査課長		川俣吉之助	～昭和55年３月
		大塚　　博	～昭和56年３月
		寺内　　寛	昭和56年４月～
企画管理班	企画管理班長	坏　　秀雄	～昭和57年５月（昭和55・56年度調査班長兼務）
	企画管理班長	今村　信夫	昭和57年６月～
	主任調査員	加藤　雅美	
	主事	鈴木　三郎	
	主事	海野　孝志	～昭和56年３月
	主事	海老沢一夫	昭和57年４月～
	主事	綿引　良人	昭和56年４月～
調査及び整理担当者	調査第三班長	高根　信和	（昭和54年度調査）
	主任調査員	中村　幸雄	（昭和54年度調査）
	調査員	山本　静男	（昭和54年度調査）
	調査員	佐藤　正好	（昭和54・55年度調査，昭和56年度整理・執筆）
	主任調査員	倉本冨美男	（昭和55年度調査）
	主任調査員	渡辺　俊夫	（昭和55年度調査）
	調査員	川井　正一	（昭和56年度調査，昭和57年度整理・執筆）
	調査員	高村　　勇	（昭和56年度調査）
補助員		仙波　　享	（昭和54・55・56年度調査）
		園部　正明	（昭和56年度調査）

3　本書は，発掘担当者の協力を得て，昭和54・55年度の発掘調査分を佐藤正好が，昭和56年度の発掘調査分を川井正一が，それぞれ整理・執筆し，川井正一が総括編集を行った。なお，文末にその執筆責任者名を記した。

4　漆紙文書の解読および執筆は，下記の方々に依頼した。

井上　満郎（京都産業大学）　　岡田　芳朗（女子美術大学）

鎌田　元一（富山大学）　　志田　諄一（茨城キリスト教大学）

西山　良平（京都大学）　　（五十音順・当時）

5　本調査に係る概要については，昭和56年度に「鹿の子Ｃ遺跡」として刊行しているが，本書をもって正式報告とする。

6　漆紙文書の保存処理については，東京国立文化財研究所に依存し，付着物質の同定については同研究所の見城敏子氏に，光学顕微鏡による観察については石川陸郎氏にそれぞれ執筆を依頼した。

7　鉱滓の分析については，東京工業大学製鉄研究会の桂敬氏に依頼した。

8　鉄製品の分析については，日本検査株式会社東京理化学試験所に依頼した。

9　土器内面付着物の同定については，国際キリスト教大学化学研究室に依頼した。

10　須恵器の胎土分析については，奈良教育大学の三辻利一氏に依頼した。

11　遺跡全体図および遺構実測図の航空測量は，中央航業株式会社に委託した。

12　発掘調査および本報告書作成にあたっては，関係諸機関をはじめ多くの方々から指導・助言をいただいた。記して感謝の意を表したい。

凡　　例

本書の記述ならびに掲載挿図等については，次の凡例による。

1　挿図等に使用した遺構略号は，次のとおりである。

ＳＩ－竪穴住居跡，ＳＢ－掘立柱建物跡，ＳＸ－工房跡，ＳＫ－土壙，ＳＤ－溝，ＳＦ－道路跡，ＳＡ－柵列状遺構

2　本書における土層は，小山正忠・竹原秀雄編著「新版標準土色帖」（日本色研事業株式会社）を用いて色相を観察し，それを略号で表示した。

3　竪穴住居跡の床面で，踏み固められた範囲は，一点鎖線で表現した。

4　主軸方向は，竪穴住居跡の場合，座標北に対する竈を通る住居跡の中軸線との夾角で，掘立柱建物跡の場合は，座標北に対する棟方向との夾角で，それぞれ示した。

5　遺構実測図における出土遺物は，次の記号で示した。

○　土　器　　■　砥　石

△　瓦　　★　鉱　滓

□　鉄製品　　●　漆　紙

☆　鞴羽口

6　遺構実測図における砂（竈袖・炉壁），焼土（炉床），粘土，鉱滓群は，次のスクリーントーンで示した。

砂　　粘　土

焼　土　　鉱滓群

7　掘立柱建物跡の柱痕跡，柱抜き取り痕は，次のスクリーントーンで示した。

柱痕跡　　柱抜き取り痕

8　内黒土器，施釉陶器は，次のスクリーントーンで示した。

内黒土器　　施釉陶器

9　遺物観察表に関する略号は，次のとおりである。

H　土師器	A　口　径	D　高台径
S　須恵器	B　器　高	E　裾　径
T　陶　器	C　底　径	F　胴部最大径

10　遺構実測図における出土遺物に付した数字は，遺物実測図の番号を指す。

目　　次

序
例　言
凡　例
目　次
(上)
第１章　調査の経緯……1
第２章　位置と環境……8
　1　地理的環境……8
　2　歴史的環境……8
第３章　遺構と遺物……14
　1　竪穴住居跡……16
(下)
　2　連房式竪穴遺構……473
　3　掘立柱建物跡……515
　4　工房跡……560
　5　土壙……663
　6　溝……691
　7　その他の遺構……734
第４章　まとめ……738
　1　出土土器について……738
　2　集落の変遷について……747
　3　鍛冶工房について……760
　4　鉄製品について……770
　5　墨書土器について……780
　6　結語……788

第1章　調査の経緯

1　調査に至る経過

日本経済の発展に伴い，都心と東北地方を結ぶ常磐自動車道の建設が昭和40年代に計画され，同時に埋蔵文化財の分布調査が茨城県教育委員会及び日本道路公団によって実施された。

昭和52年度に入り，茨城県教育委員会は文化財保護の立場から，埋蔵文化財の取り扱いについて日本道路公団と協議を重ねた結果，現状保存が困難なので記録保存の措置を講ずることに決定した。

茨城県教育財団は，昭和53年４月１日付けで日本道路公団と埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し，同年５月筑波郡谷和原村東楢戸古墳の発掘調査を開始し，新治郡桜村・千代田村・石岡市・西茨城郡岩間町・東茨城郡内原町・水戸市へとルートを北上し，本年度までに26遺跡の発掘調査を終了し，４冊の報告書（常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅵ）が刊行されている。

昭和53年以降に調査した遺跡は下記の通りである。

No.	遺跡名	種類	時代	発掘年度	No.	遺跡名	種類	時代	発掘年度
1	東楢戸古墳	古墳	古墳	昭和53年	14	宮部遺跡	集落跡	縄文・中世	昭和54年
2	下広岡遺跡	集落跡	縄文・古墳	昭和53・54年	15	鹿の子A遺跡	集落跡	奈良・平安	昭和54年
3	上稲吉西原古墳	古墳	古墳	昭和53年	16	鹿の子C遺跡	集落跡	奈良・平安	昭和54・55・56年
4	上稲吉西原A遺跡	集落跡	弥生・古墳	昭和53年	17	塚原古墳群(２基)	古墳	古墳	昭和54年
5	上稲吉西原B遺跡	集落跡	弥生・古墳	昭和53年	18	湿気遺跡	集落跡	古墳・近世	昭和54年
6	上稲吉西原C遺跡	包蔵地	歴史	昭和53年	19	大塚新地遺跡	集落跡	弥生・古墳・平安	昭和54・55年
7	中佐谷十百遺跡	包蔵地	歴史	昭和53年	20	松原遺跡	集落跡	弥生・古墳・歴史	昭和54年
8	中佐谷殿内遺跡	包蔵地	歴史	昭和55年	21	南原古墳群(２基)	塚・集落跡	奈良・平安・中世以降	昭和54年
9	中佐谷A遺跡	集落跡	古墳	昭和53年	22	砂川遺跡	集落跡	縄文・奈良・平安	昭和55年
10	中佐谷B遺跡	集落跡	古墳	昭和53年	23	木葉下遺跡	窯跡	奈良・平安	昭和56年
11	大塚古墳群(15基)	古墳	古墳	昭和53・54年	24	石神外宿A遺跡	集落跡	奈良・平安	昭和57年
12	松延古墳群(２基)	古墳	古墳	昭和54年	25	石神外宿B遺跡	集落跡	弥生・古墳	昭和57年
13	志筑遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳	昭和53・54年	26	二本松古墳	古墳	古墳	昭和56年

第1図　常磐自動車道に係る遺跡分布図

2　調査の経過

鹿の子Ｃ遺跡の発掘調査は，昭和54年11月15日から開始し，昭和56年３月31日まで調査区域の中央部を南北に縦断する石岡市道４号線（通称谷向街道）の東側（Ａ地区）の調査を，昭和56年４月１日から昭和57年２月27日まで谷向街道の西側（Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆ地区）および東側の一部（Ｂ地区）の調査を実施した。Ａ地区の面積は6,600㎡，Ｂ地区の面積は970㎡，Ｃ～Ｆ地区の面積は9,517㎡で，調査面積は合わせて17,087㎡である。

調査方法は，当初，日本道路公団の一等多角点を基準杭とし，磁北方向を基準線として調査区を設定して調査を進めた。その後，航空写真測量の導入にあたり，平面直角座標・第Ⅺ座標系，Ｘ軸（南北）＋22.4km・Ｙ軸（東西）＋39.1kmを基準線として，40ｍ四方の大調査区を，さらに大調査区内を４ｍ四方の小調査区に再分割した。調査区の名称は，大調査区においては北から南へＡ・Ｂ・Ｃ……，西から東へ０・１・２……とし，小調査区は北から南へａ・ｂ・ｃ……ｉ・ｊ，西から東へ１・２……９・０とアルファベットと数字を用いて表し，たとえばA1a1・B2b1のように表記した。

以下，鹿の子Ｃ遺跡の調査経緯を記述する。

昭和54年11月～昭和55年３月

Ａ地区内に調査区を設定し，Ｂ３・４区，Ｃ３・４区から遺構確認調査を開始する。中央部から東西に走る溝状の落ち込み，北西部の緩斜面から多量の鉱滓を出土する楕円形・隅丸長方形の落ち込みがそれぞれ確認される。各調査区から，多量の鉱滓をはじめ土師器・須恵器・鞴羽口・砥石・瓦などが出土する。遺構確認の段階で，遺構の形態や出土遺物から，本遺跡は鍛冶遺構を伴う遺跡と判断した。

１月以降，３月末までは，鹿の子Ａ遺跡・宮部遺跡の調査を実施するため，本遺跡については遺構確認までを行って，昭和54年度の調査を終え，昭和55年度への継続調査とした。

昭和55年４月

昭和55年度の調査は，当初８月末までの予定で開始したが，調査区域内に用地の取得が完了していない部分が残されており，調査に若干の支障をきたすことがあった。

この期間は，昭和54年度に残したＢ４区の表土除去を行い，遺構プランを確認する。また，６号・７号・47号竪穴住居跡等の遺構精査も開始した。６号竪穴住居跡から，内面に付着物がみられる土器が検出された。

５月

確認した各遺構の精査，および遺構計測を行う。21号・30号・32号・33号・34号遺構は，平面形が楕円形を呈し，全体に掘り込みが深く，確認の段階で予測されたように鍛冶工房跡であった。

また，２号・５号・18号・19号・23号・24号竪穴住居跡の精査を実施した。

なお，６号竪穴住居跡から出土した土器内面の付着物は，国際キリスト教大学化学研究室に分析依頼した結果，漆と判明した。

６月

各竪穴住居跡・工房跡および１号連房式竪穴遺構の精査を実施する。１号連房式竪穴遺構は，当初，比較的浅い溝とみられたが，調査の進展に伴い，良好な床面や等間隔に柱穴・竈が検出され，形態が竪穴住居跡に類似していることから，連房式竪穴遺構であることが判明した。しかし，本遺構は，用地未取得地に延び，遺構全体の調査が実施できないため，調査区域の確保について日本道路公団（以下「公団」とする）と協議を重ねた。

また，６号竪穴住居跡に続いて，11号・28号・43号竪穴住居跡の覆土から漆付着土器が検出された。

７月

引き続き，各遺構の精査・計測を実施する。

８月

遺構・遺物の検出状況からみて，調査範囲の再検討が必要となり，文化庁記念物課浪貝毅文化財調査官の指導を仰ぎ，あわせて公団等と協議の結果，調査面積の拡張および期間の延長を図ることになった。

遺構精査のなかで，42号竪穴住居跡の床面から，半円形の黒ずんだ樹皮または皮革状の遺物が検出された。

９月

遺跡の取扱いについて，公団と協議を重ねた結果，残土処理地およびＣ地区の追加調査を実施することが決定したので，遺構確認調査を開始する。

中旬，東京国立文化財研究所，江本義理保存科学部長，樋口清治第三修復技術研究室長から，皮革状遺物の取扱いについて指導を受ける。

10～11月

Ｃ４・Ｄ４区の遺構確認調査及び１号連房式竪穴遺構の精査を進める。

12月

１号連房式竪穴遺構，鍛冶工房跡の精査および計測を進める。

42号竪穴住居跡から出土した皮革状遺物に対して，赤外線写真撮影を試みたところ，文字の存在が確認され，宮城県多賀城跡などで出土しているものと同じような，漆紙文書であることが判明した。

昭和56年１月

各遺構の精査，竈の計測を実施する。また，新たに調査を開始したＢ３区の77号竪穴住居跡から，漆紙・漆しぼり料が検出された。

２月

各竪穴住居跡，工房跡の精査・計測を実施する。

上旬，Ｃ地区から検出された２号連房式竪穴遺構の取り扱いについて，文化庁，県教育委員会および公団と協議を行い，その結果，同遺構が将来側道として使用される部分にあるため，調査終了後埋め戻して保存することとなった。

３月

遺跡が，さらに拡大する様相になったため，Ｃ地区の調査は昭和56年度への継続調査とし，Ａ地区の一部を残して各遺構の計測・写真撮影を実施し，３月27日をもって，昭和56年度の調査を終了した。

４月

昭和57年度の調査を，９月末日までの予定で開始した。

本年度の調査対象区域は，Ｂ地区およびＣ地区の合わせて3,764㎡であるが，前年度調査終了予定であったＡ地区に未調査の遺構が残っているため，その調査から開始する。これは，主として70号から80号代の竪穴住居跡の竈・柱穴の精査および計測である。

５月

Ａ地区の調査と並行して，Ｃ地区内の工事用道路設置部分の調査を開始する。遺構確認の結果，竪穴住居跡約40軒と東西・南北に走る溝等が検出された。108号から119号竪穴住居跡の精査を行ったが，Ｃ地区はＡ地区に比べて遺構の分布が希薄で，整然と配置されたような状態を呈し，また，個々の遺構は概して浅く，遺物も少ないことが明らかになる。

14日，これまでの調査状況等について報道機関に対して発表する。これによって，以後報道関係者・研究者・一般見学者等が，多数遺跡を訪れることとなる。

下旬に，Ａ地区の調査を終了する。

６月

Ｃ地区の遺構精査・計測と並行して，遺跡の航空写真測量図を作成するため，Ａ地区全域の清掃を行い，19日，１回目の航空写真撮影を実施する。

４号連房式竪穴遺構は，当初，竪穴住居跡の重複とみられたが，連房式竪穴遺構であることを確認する。

７月

126～145号竪穴住居跡の精査・計測を実施する。また，当初は単なる竪穴遺構とみられた５号連房式竪穴遺構は，精査の結果，廃絶後鍛冶工房として利用されていたことが明らかになる。

8日，C地区北部の工事用道路設置部分について調査が終了したので，2回目の航空写真撮影を行い，公団へ引き渡した。

8月

137～145号竪穴住居跡及び溝についての精査を実施し，143号竪穴住居跡から漆紙3点を検出する。調査の進展に伴い，調査区域の西側にも溝などの遺構が延びていることが明らかになり，文化庁の指導に基づいて，公団・県教育委員会と協議を行い，C地区西側に約2,000㎡を拡張し，追加調査することに決定した。

9月

C地区西側拡張部の表土を重機で除去し，遺構確認を行ったところ，竪穴住居跡6軒・掘立柱建物跡10棟等が確認された。これらと，C地区から確認された遺構の調査を9月末をもって終了させるため作業員を増員するなどの措置を講じ，調査を急ピッチで進めた。

当遺跡から出土した漆紙文書の解読を，京都産業大学井上満郎氏を初めとする5名の先生方に依頼することになり，9月3日第1回目の会合を開く。

10月

C地区西側拡張部のさらに西方にも遺構の存在が確認されたので，関係諸機関と協議のうえ，D地区として1,500㎡の追加調査と，期間の延長が図られた。D地区の表土を除去したところ，掘立柱建物跡が数棟確認されたほか，これらの掘立柱建物跡が溝によって囲まれ，東側を画する溝のほぼ中央部に6号掘立柱建物跡と呼称した門跡が存在することも明らかになった。また，門跡から西方へ向けて，道路跡が延びていることも確認された。

10月18日，これまでの調査経緯と当日までに判明した成果について，当遺跡で現地説明会を実施し，県内外から約300名の参加者をみた。翌19日，C・D地区を対象とした3回目の航空写真撮影を実施した。

11月

C地区およびD地区の調査を，11月4日をもって終了し，続いてB地区の調査を開始した。B地区からは，遺構確認の結果，20数軒の竪穴住居跡が検出された。155～164号，175～178号竪穴住居跡の精査を行い，157・158・163号竪穴住居跡から漆紙を検出した。

12月

165～169号竪穴住居跡，176号工房跡の精査・計測を実施した。176号工房跡からは，14基の炉跡と多量の鉱滓が検出され，鍛冶工房跡であることを確認した。また，165・167・168号竪穴住居跡から，土師器・須恵器などと共に，大形の漆紙を検出した。

昭和57年1月

172～178号竪穴住居跡の精査・計測および写真撮影を行い，B地区の調査を終了した。

Ｂ地区の調査終了に先立ち，Ｃ地区の南側約400m²（Ｅ地区）とＤ地区の西側約500m²（Ｆ地区）の追加調査を実施することを，公団および県教育委員会と協議のうえ決定する。

Ｅ地区の調査は，すでに調査したところの道路跡が，６号掘立柱建物跡（門跡）の東側にも延びているかどうかを確認することが主たる目的であった。しかしながら，調査前まで存在した民家の建築による攪乱を受け，その存否は確認できず，180号竪穴住居跡・25号掘立柱建物跡等，若干の遺構を確認したに留まった。

２月

Ｅ地区の調査と併せて，Ｆ地区の調査を開始し，179号竪穴住居跡，26・27・28号掘立柱建物跡および縄文時代のものとみられる，いわゆるＴピットなどが検出された。なお，道路跡は西方の調査区域外へ延びていることが確認された。

２月27日をもって，遺構計測・写真撮影等，全ての現場作業を終了し，２年３か月にわたった鹿の子Ｃ遺跡の発掘調査を完了した。

調査終了後の昭和57年９月，調査区域の中央部を南北に縦断する通称谷向街道の路線変更に伴って，路面下における遺構の存否確認を，公団・県教育委員会の立ち合いのもとで行った。その結果は，北端部から竪穴住居跡の存在を思わせる焼土が，若干認められただけであった。

なお，今回調査した遺構のうち，２号連房式竪穴遺構・竪穴住居跡約50軒・工房跡７基など，側道として使用される部分にかかる遺構は，公団と県教育委員会との協議で保存が図られることとなり，砂を埋め戻して側道下に保存してある。

（佐藤正好・川井正一）

第2章　位置と環境

1　地理的環境

鹿の子C遺跡は，茨城県石岡市鹿ノ子1丁目8,994番地ほかに所在する。

石岡市は，茨城県のほぼ中央部，筑波山の東に位置し，南は恋瀬川，北は園部川を境として，千代田村，美野里町と接している。また，南は霞ケ浦の一部を含み，北西には標高201.6mの竜神山があり，八郷町との境界をなしている。

石岡市は，地形的には，常総台地の北部につらなる標高24～26mの石岡台地上にある。石岡台地は洪積台地で，台地南側には，八郷町にその源を発し，南東に流れて霞ケ浦に注ぐ恋瀬川の沖積地が広がり，北側は園部川によって限られ，南北幅は約4kmである。竜神山の東側付近には，南に開口する谷が深く入り込んでいるものの，台地南側の縁辺部は，傾斜のきつい斜面をなしている。台地頂部は，なだらかな起伏を有し，台地北側は南側と様相を異にし，徐々に標高を落としながら，やがて沖積地に接してゆく。

本遺跡は，石岡市街地の北西約2kmに位置し，柏原池を水源とし，石岡台地を二分するように南東に流れて霞ケ浦に注ぐ山王川の右岸台地上に立地している。台地は標高22～26mで，遺跡の西側には浅い谷が入り込み，あたかも舌状台地の様相をみせている。また，北側は約3度の傾斜で低くなり，約2mの比高をもって沖積面へと続く。この北側斜面は，水はけが悪く，雨期になると遺構が水没することもある。北側沖積面は，幅約100mで，現在は水田として利用されている。

なお，調査前の調査区域は，宅地と畑である。

（佐藤正好）

2　歴史的環境

石岡市には，台地平坦部や恋瀬川・園部川・山王川の河川周辺を中心として，多くの遺跡が存在している。すでに発掘調査が実施された遺跡も何か所かあり，時期的には，先土器時代からの遺跡がみられる。

以下，鹿の子C遺跡の立地する石岡台地を中心に，時代を追いながら周辺の遺跡を概観してみたい。

先土器時代の遺跡は，宮平遺跡〈6〉注，正月平遺跡〈44〉が確認されているが，いずれもまと

注　遺跡名の次の〈　〉内の数字は，第2図中の遺跡番号を示す。

番号	遺跡名	時代
1	碁石沢遺跡	縄文（中）
2	村上遺跡	土師・須恵
3	根当西遺跡	縄文（前）
4	正上内遺跡	縄文（前）
5	柏原西遺跡	縄文
6	宮平遺跡	先土器・縄文（中・後）
7	波付岩遺跡	縄文（中）
8	染谷古墳群	古墳
9	染谷遺跡	縄文（早）
10	狐塚遺跡	縄文（前）・土師・須恵
11	高根貝塚	縄文（早）
12	餓鬼塚遺跡	縄文（早）
13	宮部遺跡	縄文（草創・早・前）
14	鹿の子遺跡	奈良・平安
15	鹿の子A遺跡	奈良・平安
16	鹿の子C遺跡	平安
17	北ノ谷遺跡	縄文（前）・土師・須恵
18	常陸国分尼寺跡	奈良・平安
19	常陸国分僧寺跡	奈良・平安
20	元真地遺跡	縄文（中）
21	国府跡	奈良～
22	泉台遺跡	土師・須恵
23	行里川遺跡	縄文（前）
24	根小屋遺跡	縄文（中）
25	上人塚遺跡	縄文（前）
26	東大橋原遺跡	縄文（中）
27	下坪遺跡	土師・須恵
28	古館遺跡	奈良・平安
29	茨城廃寺跡	奈良・平安
30	兵崎遺跡	縄文（前）・平安
31	新池台遺跡	縄文（前）
32	対馬塚遺跡	縄文（前）
33	大谷津A遺跡	縄文（前）
34	大谷津B遺跡	縄文（前）
35	外山遺跡	縄文（前）・弥生・古墳
36	東田中貝塚	縄文
37	愛宕山古墳	古墳
38	舟塚山古墳	古墳
39	関戸遺跡	縄文・弥生
40	ぜんぶ塚古墳	古墳
41	地蔵平遺跡	縄文
42	三村地蔵窪貝塚	縄文（早）
43	下宮遺跡	縄文（後）
44	正月平遺跡	先土器・縄文（中・後）
45	御前山遺跡	縄文（中・後）
46	海老坪遺跡	縄文（中・後）

第2図　鹿の子C遺跡位置図および周辺遺跡

第3図　鹿の子C遺跡地形図

まった資料にはなっていない。当地域の先土器時代の資料は少なく，今後，本格的な調査，研究が待たれる。

縄文時代の遺跡は，石岡市内全域で39遺跡が確認されており，草創期から後期にわたって存在するが，晩期の遺跡は確認されていない。

草創期の資料は，宮部遺跡〈13〉から検出されているにすぎない（茨城県教育財団1982）。

早期の資料は破片が多く，明確な遺構に伴って出土する例はきわめて少ない。この期の遺跡としては，染谷遺跡〈９〉・高根貝塚〈11〉（鈴木1970）・餓鬼塚遺跡〈12〉（伊東1980）・三村地蔵窪貝塚〈42〉（慶応義塾高等学校考古学会1956）等があり，これらの遺跡は，いずれも台地先端部に形成されている。

前期の遺跡は，８遺跡が確認されている。前述した宮部遺跡からは，黒浜期の住居跡１軒が，外山遺跡〈35〉からは，浮島・諸磯期の集落が検出されている（茨城県教育財団1982）。

中期になると，阿玉台・加曽利Ｅ期を中心とし，遺跡数は急増する。東大橋原遺跡〈26〉は，阿玉台・加曽利Ｅ期の集落である（川崎他1978・1979・1980）。

後期の資料は，堀之内期を中心に５か所で確認されている。

弥生時代の遺跡は少なく，３遺跡だけが知られている。発掘調査が行われたのは，前述した外山遺跡だけで，今後新たな遺跡が確認される可能性が高い。

古墳時代の遺跡は多く，台地に密集して確認されている。

古墳群は，染谷古墳群〈８〉・舟塚山古墳群等がある。舟塚山古墳群は，県下第１位の規模を誇り，５世紀中葉と推定される舟塚山古墳〈38〉を盟主として，愛宕山古墳〈37〉や24基の陪塚によって形成される一大古墳群である（大塚他1964）。

古墳時代の集落跡は，古墳群の位置する台地上に確認されるが，未調査の遺跡が多い。

奈良時代に入ると，常陸国府〈21〉や，現在，国の特別史跡に指定されている常陸国分僧寺〈19〉・国分尼寺〈18〉が置かれ，常陸国の中心地として栄えた。また，市街地東南方の貝地・田島には，昭和54～56年に調査され，茨城郡の郡寺と推定された茨城廃寺〈29〉（小笠原他1980・1982）や，茨城郡衙跡と推定されている古館遺跡〈28〉がある。さらに，当鹿の子Ｃ遺跡の周辺には，昭和55年度に当財団が調査した鹿の子Ａ遺跡〈15〉（茨城県教育財団 1982）や鹿の子遺跡〈14〉（伊東1980）などの集落跡がみられ，奈良・平安時代には，石岡市街地を中心として大規模な集落が存在していたものとみられる。

（佐藤正好）

第３章　遺構と遺物

本遺跡から検出された遺構は，竪穴住居跡169軒・連房式竪穴遺構５棟・掘立柱建物跡31棟・工房跡19基・土壙136基・溝16条・道路跡１条・柵列跡３列である。これらの遺構は，調査区域の全域にわたって分布している。遺構の検出にあたっては，表土（耕作土）から地山（ローム）までの堆積が浅いため，地山（ローム）上面で確認した。

なお，各遺構内の堆積土については，色相と含有物を次のように記号化し，挿図に示した。

色　相

1　褐　　色　Hue7.5YR$\frac{4}{3}$・$\frac{4}{4}$・$\frac{6}{4}$，Hue10YR$\frac{4}{4}$・$\frac{4}{6}$

2　暗　褐　色　Hue7.5YR$\frac{3}{3}$・$\frac{3}{4}$，Hue10YR$\frac{3}{3}$・$\frac{3}{4}$

3　黒　褐　色　Hue7.5YR$\frac{3}{1}$・$\frac{3}{2}$・$\frac{2}{2}$，Hue10YR$\frac{3}{1}$・$\frac{3}{2}$・$\frac{2}{2}$・$\frac{2}{3}$，Hue2.5Y$\frac{3}{1}$・$\frac{3}{2}$

4　明　褐　色　Hue7.5YR$\frac{5}{6}$・$\frac{5}{8}$

5　黄　褐　色　Hue10YR$\frac{5}{6}$・$\frac{5}{8}$

6　橙　　色　Hue7.5YR$\frac{7}{6}$・$\frac{6}{6}$・$\frac{6}{8}$，Hue5YR$\frac{7}{6}$・$\frac{7}{8}$・$\frac{6}{6}$・$\frac{6}{8}$，Hue2.5YR$\frac{7}{6}$・$\frac{7}{8}$・$\frac{6}{6}$・$\frac{6}{8}$

7　極暗褐色　Hue7.5YR$\frac{2}{3}$

8　黒　　色　Hue7.5YR$\frac{2}{1}$・Hue10YR$\frac{2}{1}$

9　にぶい褐色　Hue7.5YR$\frac{6}{3}$・$\frac{5}{3}$・$\frac{5}{4}$

10　暗赤褐色　Hue2.5YR$\frac{3}{2}$・$\frac{3}{3}$・$\frac{3}{4}$・$\frac{3}{6}$，Hue 5 YR$\frac{3}{2}$・$\frac{3}{3}$・$\frac{3}{4}$・$\frac{3}{6}$

11　赤　褐　色　Hue2.5YR$\frac{4}{6}$・$\frac{4}{8}$，Hue 5 YR$\frac{4}{6}$・$\frac{4}{8}$

12　明赤褐色　Hue2.5YR$\frac{5}{6}$・$\frac{5}{8}$，Hue 5 YR$\frac{5}{6}$・$\frac{5}{8}$

13　極暗赤褐色　Hue 5 YR$\frac{2}{3}$・$\frac{2}{4}$

14　にぶい赤褐色　Hue 5 YR$\frac{5}{3}$・$\frac{5}{4}$・$\frac{4}{3}$・$\frac{4}{4}$

15　にぶい橙色　Hue 5 YR$\frac{7}{3}$・$\frac{7}{4}$・$\frac{6}{3}$・$\frac{6}{4}$

16　赤　　色　Hue10R$\frac{5}{6}$・$\frac{5}{8}$・$\frac{4}{6}$・$\frac{4}{8}$

17　灰　褐　色　Hue 5 YR$\frac{6}{2}$・$\frac{5}{2}$・$\frac{4}{2}$，Hue7.5YR$\frac{6}{2}$・$\frac{5}{2}$・$\frac{4}{2}$

18　灰　白　色　Hue7.5YR$\frac{8}{1}$・$\frac{8}{2}$

19　浅黄橙色　Hue7.5YR$\frac{8}{3}$・$\frac{8}{4}$・$\frac{8}{6}$，Hue10YR$\frac{8}{3}$・$\frac{8}{4}$

20　黄　橙　色　Hue7.5YR$\frac{8}{8}$・$\frac{7}{8}$，Hue10YR$\frac{8}{6}$・$\frac{8}{8}$・$\frac{7}{6}$

21　にぶい橙色　Hue7.5YR $\frac{6}{3}$・$\frac{5}{3}$・$\frac{5}{4}$

22　にぶい黄橙色　Hue10YR$\frac{7}{2}$・$\frac{7}{3}$・$\frac{7}{4}$・$\frac{6}{3}$・$\frac{6}{4}$

23　明黄褐色　Hue10YR7/6・6/6・6/8，Hue2.5Y7/6・6/6・6/8

24　褐　灰　色　Hue10YR6/1・5/1・4/1

25　灰黄褐色　Hue10YR6/2・5/2・4/2

26　にぶい黄褐色　Hue10YR5/3・5/4・4/3

27　淡　黄　色　Hue2.5Y8/3・8/4

28　にぶい黄色　Hue2.5Y6/3・6/4

29　灰　　色　Hue 5 Y6/1・5/1・4/1，Hue7.5Y6/1・5/1・4/1，Hue10Y 6/1・5/1・4/1

30　オリーブ黒色　Hue 5 Y3/1・2/1・2/2，Hue10Y3/1・3/2

31　灰　白　色　Hue10Y8/1・8/2・7/1・7/2，Hue2.5GY8/1

32　オリーブ灰色　Hue10Y6/2・5/2・4/2，Hue2.5GY6/1・5/1

33　暗オリーブ灰色　Hue 5 GY4/1・3/1

34　緑　灰　色　Hue10GY6/1・5/1

35　青　灰　色　Hue10BG6/1・5/1

36　暗青灰色　Hue10BG4/1・3/1

37　青　黒　色　Hue10BG2/1

含　有　物

A　ロームブロックを多量含む

a　ロームブロックを少量含む

B　ロームブロック・炭化粒子を多量含む

b　ロームブロック・炭化粒子を少量含む

C　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子を多量含む

c　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子を少量含む

D　焼土粒子を多量含む

d　焼土粒子を少量含む

E　焼土粒子・炭化粒子を多量含む

e　焼土粒子・炭化粒子を少量含む

F　砂粒・炭化粒子・焼土粒子を多量含む

f　砂粒・炭化粒子・焼土粒子を少量含む

G　砂粒・焼土粒子を多量含む

g　砂粒・焼土粒子を少量含む

H　砂粒・ロームブロックを多量含む

h　砂粒・ロームブロック・焼土を含む

I　砂粒・ロームブロック・焼土を含む

J　砂・山砂

K　粘土

L　粘土・砂粒・焼土

M　粘土・焼土

N　小鉄片・砂鉄

1　竪穴住居跡

今回の調査で検出された竪穴住居跡は169軒で，大部分は，調査区域東側のＣ地区に集中して検出されている。

竪穴住居跡の調査方法は，平面プラン確認後，竈を通る主軸と，それに直交する方向の十文字にセクションベルトを設定し，ベルトによって区画された四つの区画を床面まで掘り下げることを原則とした。出土遺物に関しては，完形・半完形等は柱状に出土位置を残し，細片は層を明記して取り上げた。柱状に残した遺物は，掘り下げ終了後，遺構平面と共にその位置を図化した。

竈は，焚口から煙道を通る縦軸と，両袖を横断する横軸を基本にして十文字に切断し，復元的に検出し図化した。

なお，住居跡番号は，工房跡と連番で，原則として調査順に付していったが，確認の段階で３軒の竪穴住居跡としてとらえていたものが，連房式竪穴遺構と判明したため，欠番となったものがある。

１号竪穴住居跡（第４図）

調査区Ｃ4d_2区を中心に確認され，１号連房式竪穴遺構内から検出された。東西4.4ｍ・南北5.45ｍを測り，主軸方向Ｎ－２°－Ｗを指し，ほぼ隈丸長方形を呈している。

壁は，床面から斜めに立ち上がり，壁高60cmを測る。床面は全体に良く踏み固められており，保存状態が良い。壁溝は幅10cmを測り，ほぼ全周している。柱穴は18か所検出されたが，本遺構に伴うものか，１号連房式竪穴遺構に伴うものかは不明なものがある。

竈は，北壁中央部に位置し，残存状態は良好である。北壁を掘り込み，両袖・天井部とも粘土・砂によって作られ，火床からなだらかに立ち上がっている。

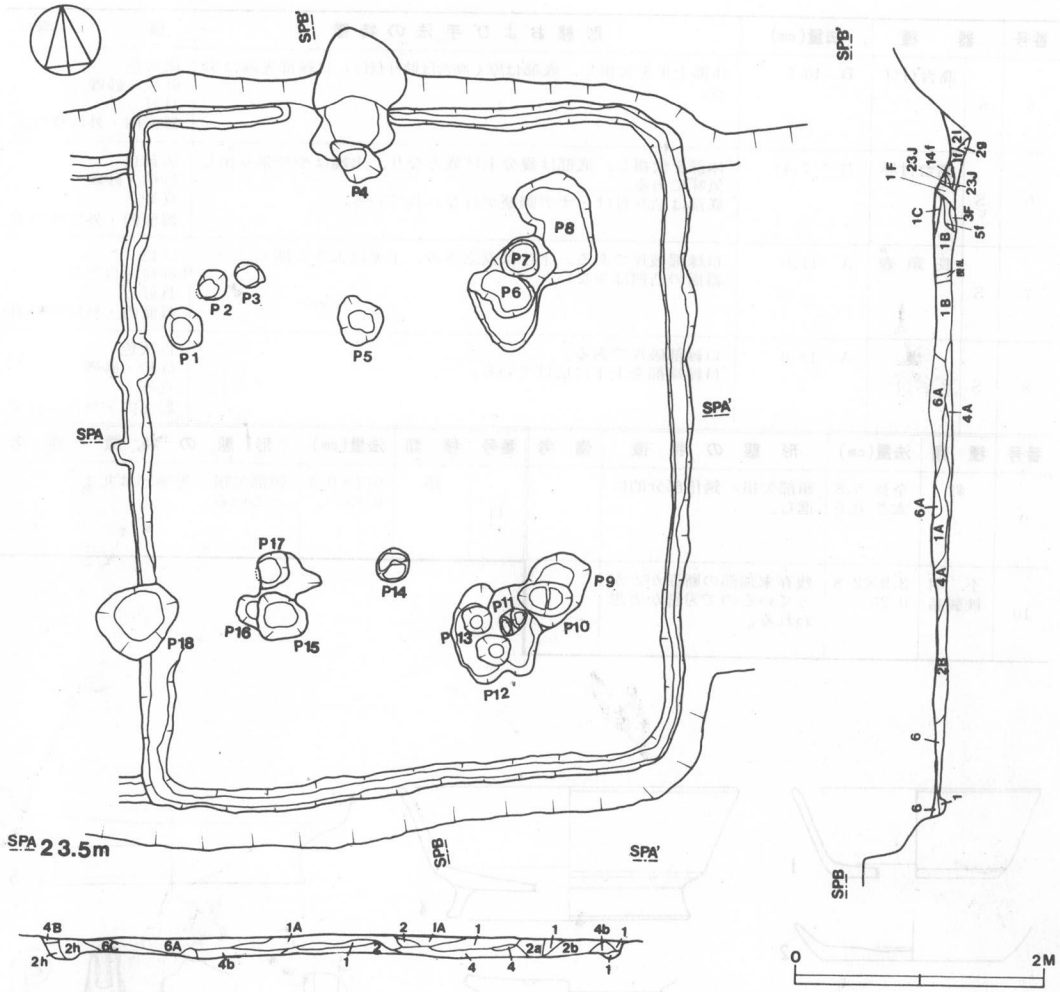
本住居跡は，１号連房式竪穴遺構上部から検出され，調査の結果，連房式竪穴遺構廃棄埋没後に構築されていることが判明した。

遺物は，土師器・須恵器・瓦を出土している。

２号竪穴住居跡（第６図）

調査区Ｃ3c_5区を中心に確認され，東西5.43ｍ・南北5.1ｍを測り，主軸方向Ｎ－13°－Ｅを指し，ほぼ方形を呈している。

壁は，床面からほぼ垂直に立ち上がり，壁高は54cmほどである。床面はやや軟弱であるが，竈付近は非常によく踏み固められており，凹凸も少ない。壁溝は認められない。ピットは５か所確認でき，深さは30～35cmを測る。



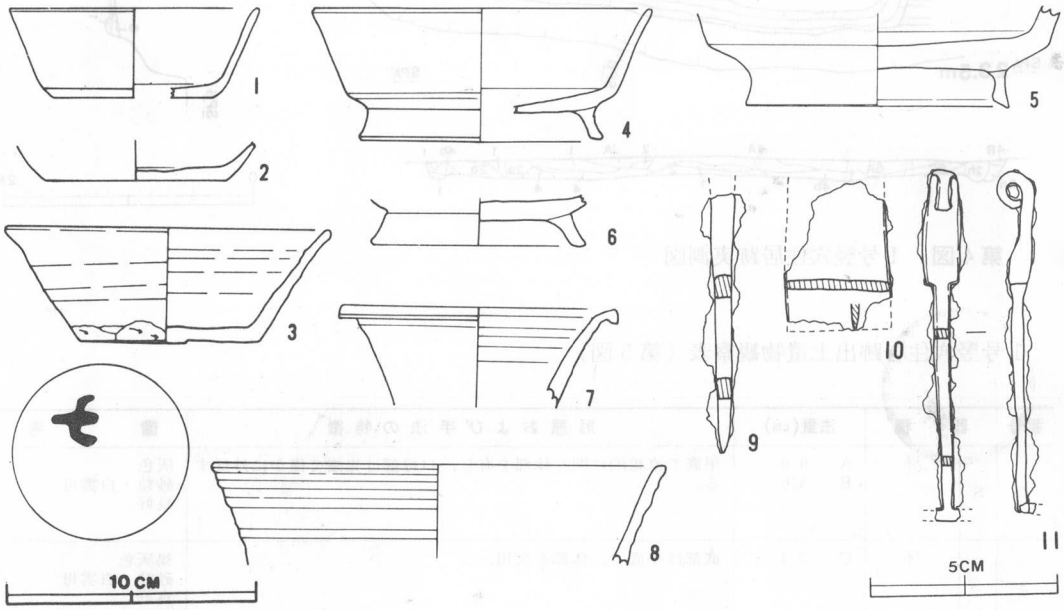
第4図　1号竪穴住居跡実測図

1号竪穴住居跡出土遺物観察表（第5図）

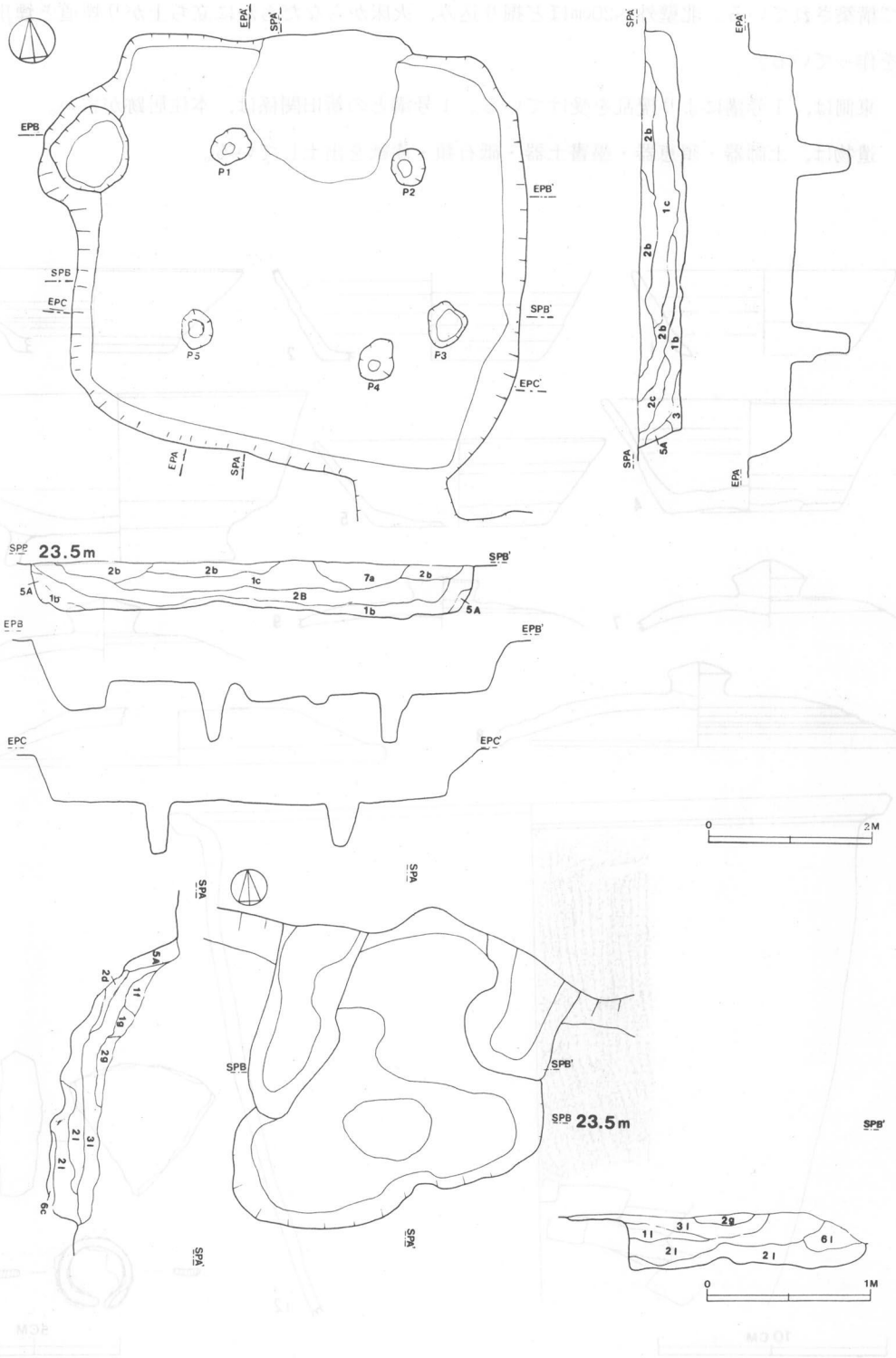
番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 9.9 B 3.6	平底で直線的に開く体部を有し，口縁部は先端で僅かに外反する。	灰色 砂粒・白雲母 良好
2	S	坏	C 7.1	底部は平底で，体部を欠損。	褐灰色 砂粒・白雲母 良好
3	S	坏	A 12.8 B 4.6 C 7.1	底部は平底で，体部と底部は明瞭な角度で分かれる。体部はやや外反気味に外上方にのび，口縁端部を丸くおさめている。水挽き成形と思われ，口縁部内・外面は横ナデ調整。体部下端部は手持ち箆削り調整。	底部外面に漆書
4	S	高台付坏	A 13.3 B 5.3 D 9.1	体部は厚みのあるつくりでゆるやかに内彎しながら大きく開く。高台は厚く，強く張り出し，末端は小さく突出する。 ロクロ水挽き成形で，高台は貼り付けナデ調整が行なわれている。	白黄色 砂粒・砂礫・白雲母 良好

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
5	S	高台付坏	D 10.5	体部上半を欠損し，底部は厚く高台は貼り付け，口縁部先端は尖る。	灰黄色 砂粒・砂礫 良好 器面内・外に漆付着
6	S	高台付坏	D 7.4	体部を欠損し，底部は幾分上げ底となり，末端はやや張り出し気味である。 底部は貼り付け・ナデ調整が行なわれている。	灰黄色 砂粒・砂礫 良好 器面内・外に漆付着
7	S	長頸壺	A 11.0	口縁部破片である。下半は直立ぎみ，上半は大きく開く。 器面の凸凹は少ない。	灰色 砂粒・白雲母 良好 器面内・外に漆付着
8	S	甕 高台坏	A 18.0	口縁部破片である。 口縁端部を上下に広げている。	白灰色 砂粒・砂礫 良好 器面内・外に漆付着

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
9	釘	全長 5.8 太さ 0.6	頭部欠損。錆化部分的に進む。		11	鏃	9.3×0.4 0.25	頸部欠損。先端部は丸まっている。	
10	不明 鉄製品	3.9×2.8 0.25	残存末端部の断面がとがっているので刃部かと思われる。						



第5図　1号竪穴住居跡出土遺物実測図

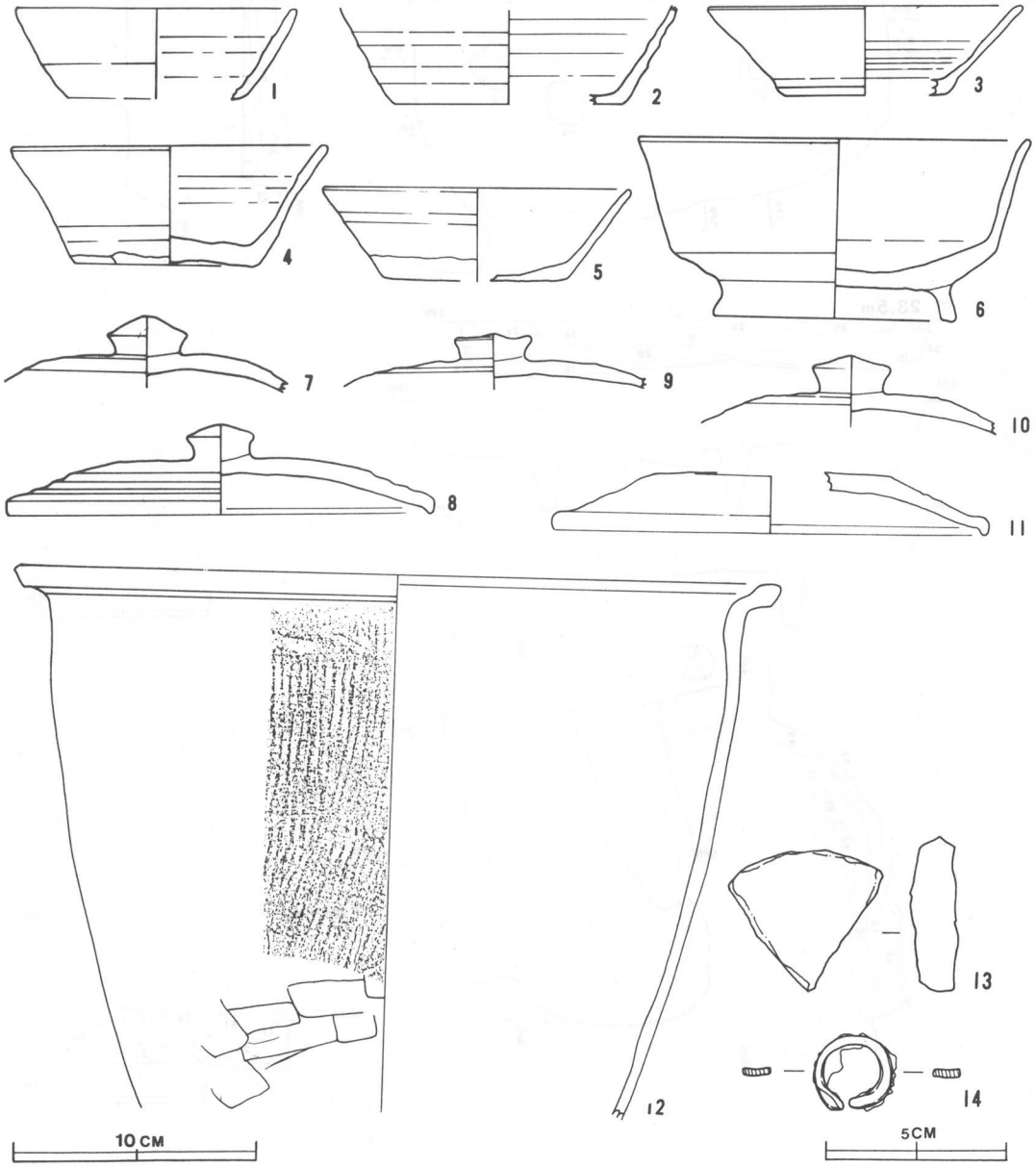


第6図　2号竪穴住居跡・竈実測図

竈は，北壁中央に位置し，残存状態は良好である。両袖・天井部とも粘土・砂を多量に使用して構築されている。北壁外へ20cmほど掘り込み，火床からなだらかに立ち上がり煙道と煙出し孔を作っている。

東側は，１号溝により攪乱を受けている。１号溝との新旧関係は，本住居跡が古い。

遺物は，土師器・須恵器・墨書土器・砥石類・漆紙を出土している。



第７図　２号竪穴住居跡出土遺物実測図

2号竪穴住居跡出土遺物観察表（第7図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 11.5	底部を欠損。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反気味に開く。 器面はロクロ水挽き成形。	灰白色 砂粒・砂礫 良好
2	S	坏	C 9.6	口縁部を欠損。 平底で直線的に開く体部を有す。 ロクロ水挽き成形で，器面に凸凹が残る。	灰白色 砂粒・砂礫 良好
3	S	坏	A 13.1 B 3.7	一部底部を欠損しているが，平底を呈し，体部は直線的に開く。 ロクロ水挽き成形で，器面に凸凹が残る。	灰白色 砂粒・砂礫 良好
4	S	坏	A 13.2 B 5.0 C 7.4	上げ底となり，体部は直線的に開く。口縁部は内彎しながら外反する。 器面はロクロ水挽き成形，外周は篦削り。	灰色 砂粒・砂礫 良好
5	S	坏	A 12.8 B 3.9 C 7.4	一部底部を欠損。体部は直線的に開き，口縁部は内彎しながら外反する。 器面はロクロ水挽き成形。	灰白色 砂粒・砂礫 良好
6	S	高台付坏	A 16.4 B 7.4	高台を有し，体部は直線的に開く。口縁部先端は細くなり折れる。高台は開かず，直立気味である。ロクロ水挽き成形で，高台は貼り付け，貼り付け部はナデが行なわれている。	灰色 砂粒・砂礫 良好
7	S	蓋	A 17.5 B 3.8	つまみは宝珠形。天井部より丸味をもって開き，身受け部が「く」の字状に屈曲し，身受け端部は若干丸味を帯びる。 ロクロ成形。天井部外面は回転篦削り。	灰白色 砂粒・砂礫 良好
8	S	蓋		天井部のみ。つまみはやや扁平なボタン形状を呈す。つまみ部周辺は篦削り。	灰色 良好
9	S	蓋		天井部のみ。つまみは宝珠形。天井部より丸みをもって開く。	灰色 良好
10	S	蓋		天井部のみ。つまみは宝珠形。天井部より丸みをもって開く。	灰色 良好
11	S	蓋	A 18.0	天井部はぶ厚い作り。身受け部は扁平となっている。 天井部は篦削り。	灰色 良好
12	S	甑	A 31.9	口縁部に最大径をもち，頸部に稜を有し，口縁部は外反する。 胴部は平行叩き目，下半は斜方向の篦削りがなされている。	灰白色 砂粒・砂礫 良好

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
13	砥石	4.2×3.8 1.2	三角形を呈し，全面に使用痕が認められる。稜は研磨により摩滅して滑らかで丸味を帯びている。	凝灰岩	14	リング	直径2.15 厚さ0.15	完形品。一方の端が外側にややひねってある。	

3号竪穴住居跡（第8図）

調査区C3e5区を中心に確認され，1号連房式竪穴遺構・1号溝と重複している。東西5.5m・南北5.0mを測り，主軸方向N－12°－Eを指し，隅丸方形を呈している。

壁は，床面から垂直に立ち上がり，壁高50cmを測る。床面は全体に硬く，良く踏み固められている。壁溝は検出されず，柱穴は7か所確認され，いずれも深さ60～70cmを測る。北壁は，1号連房式竪穴遺構により攪乱を受け消滅している。竈は検出されない。

本住居跡と重複関係にある1号連房式竪穴遺構・1号溝の新旧関係は，本住居跡が古く，本住居埋没後に連房式竪穴遺構・溝が構築されている。

遺物は，土師器・須恵器・漆付着土器・羽口・銙帯具（かたいぐ）・鉄滓を出土している。

4号竪穴住居跡（第11図）

調査区C3g5区を中心に確認され，東西3.08m・南北3.7mを測り，主軸方向N－8°－Wを指し，方形を呈している。

壁は，ほぼ垂直に立ち上がり，壁高は4cmを測る。床面は良く踏み固められており，保存状態が良い。壁溝は，幅12cm・深さ4cmでほぼ全周している。

本住居跡は，1号溝により中央部を南北に攪乱されている。

遺物は，土師器・須恵器を出土している。

5号竪穴住居跡（第13・14図）

調査区C3c7区を中心に確認され，東西5.2m・南北4.27mを測り，主軸方向N－15°－Eを指し，方形を呈している。

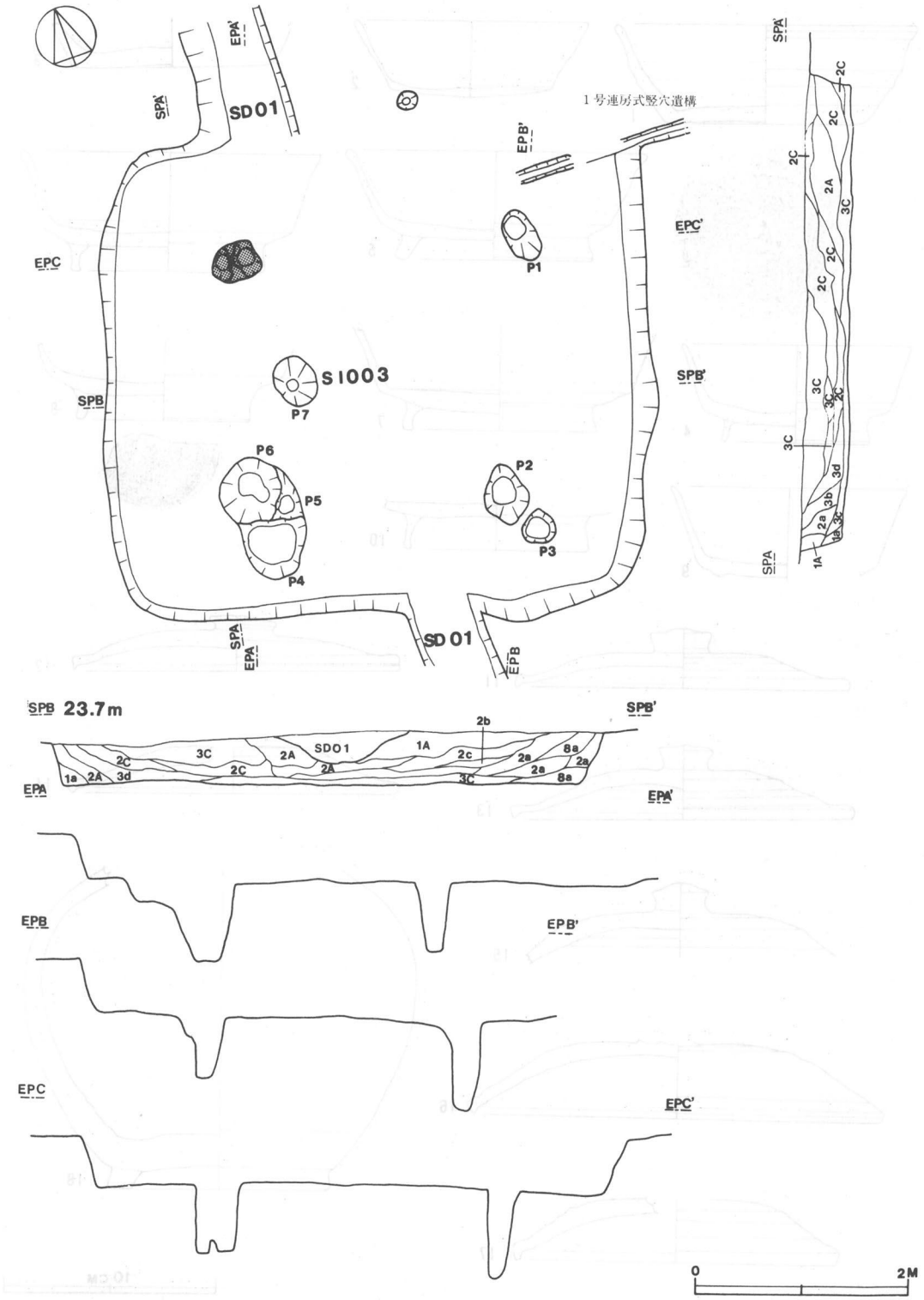
壁は，床面からほぼ垂直に立ち上がり，壁高47cmを測る。床面は凸凹が著しく，やや軟弱であるが，竈付近は非常に良く踏み固められている。壁溝は認められず，ピットは8か所確認でき，いずれも，深さは20～30cmを測る。

竈は，北壁中央部に位置し，遺存状態は良好であり，両袖・天井部とも粘土・砂を多量に使用して構築されている。壁外へ39cmほど掘り込み，火床からなだらかに立ち上がり，煙道と煙出し孔を作っている。

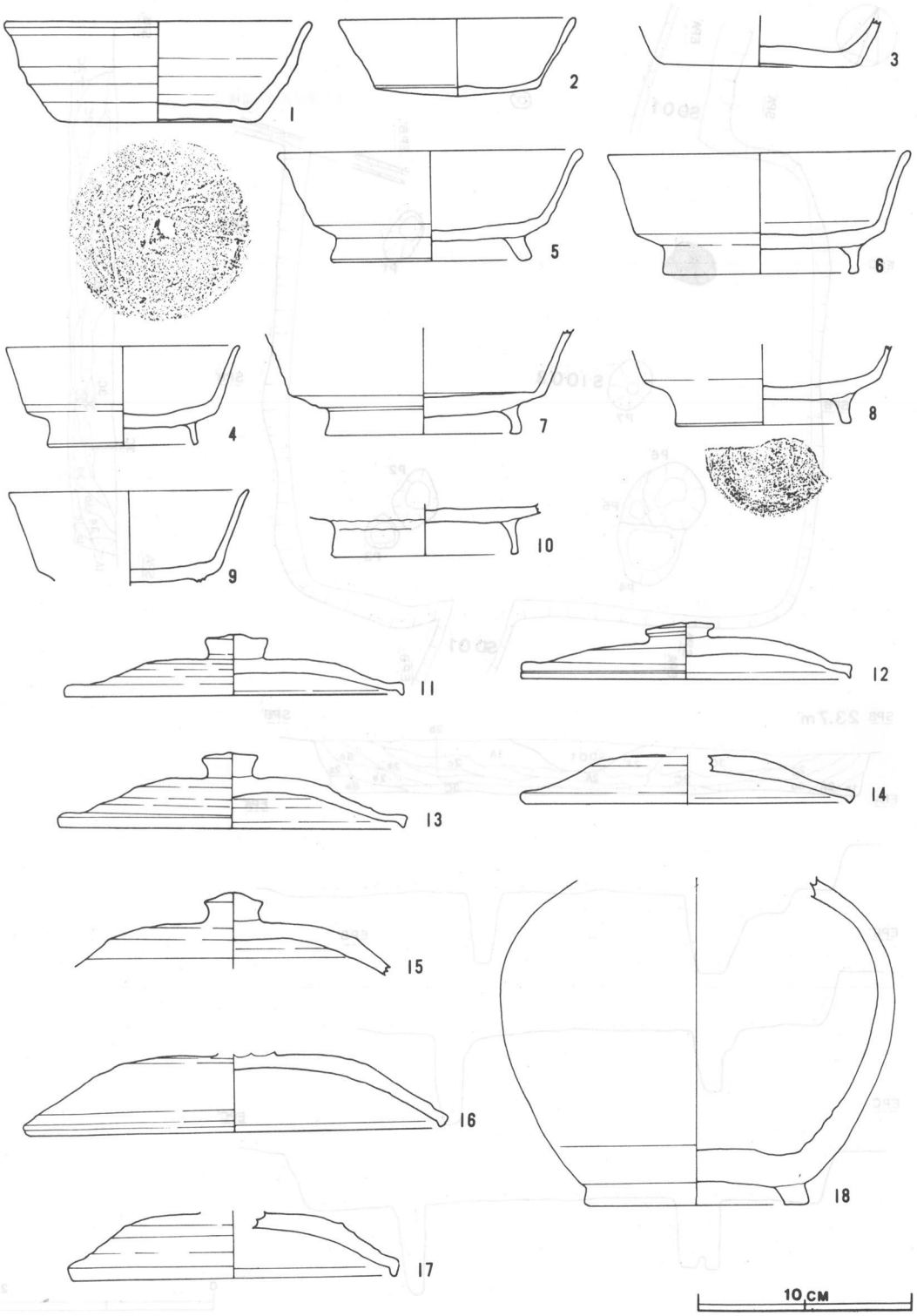
本住居跡覆土中には，鉄滓・木炭・焼土等が多量に含まれている。

本住居跡南側は，1号連房式竪穴遺構と重複しており，新旧関係は本住居跡が古い。

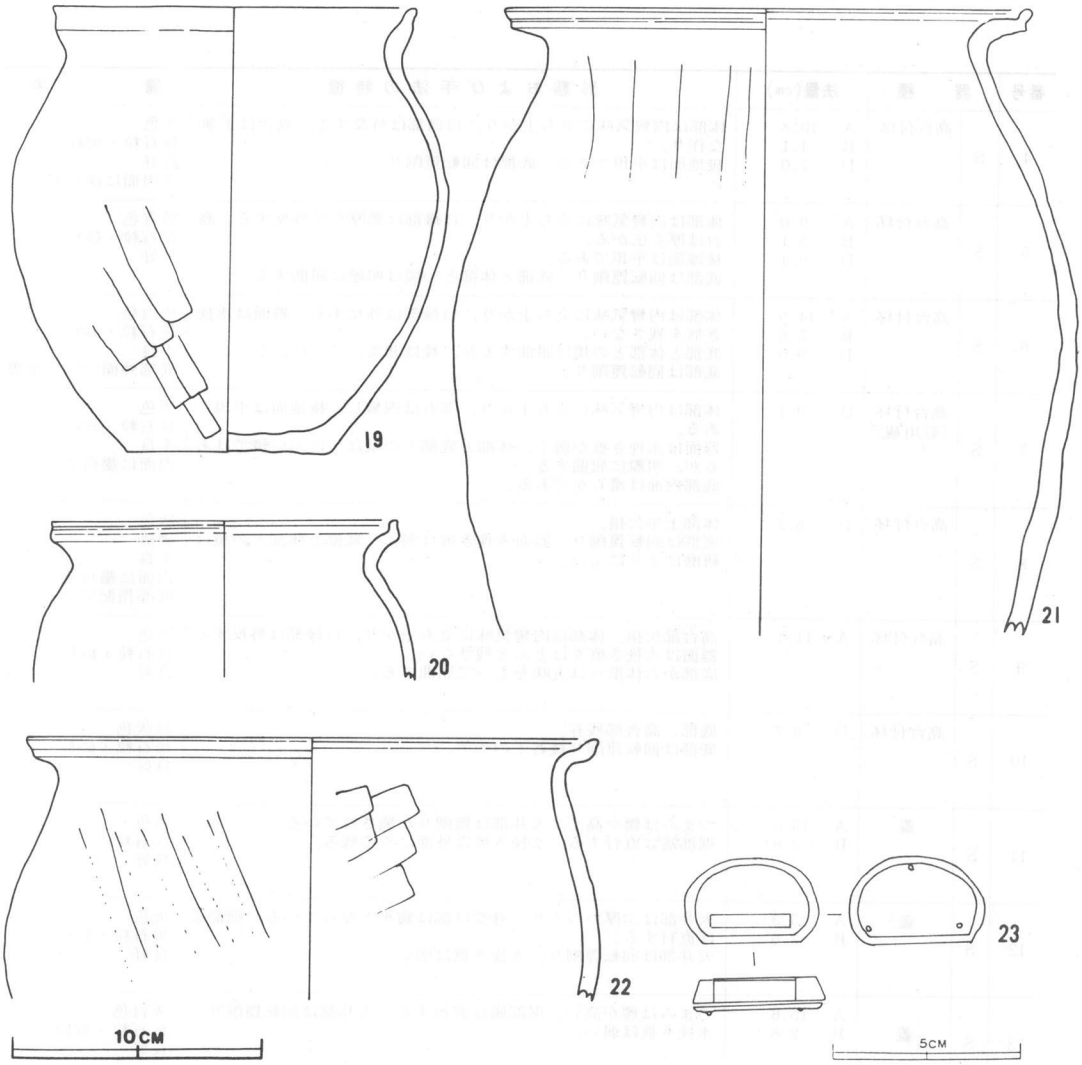
遺物は，土師器・須恵器・墨書土器・漆付着土器・鉄製品・瓦が出土している。



第8図　3号竪穴住居跡実測図



第9図　3号竪穴住居跡出土遺物実測図　(1)



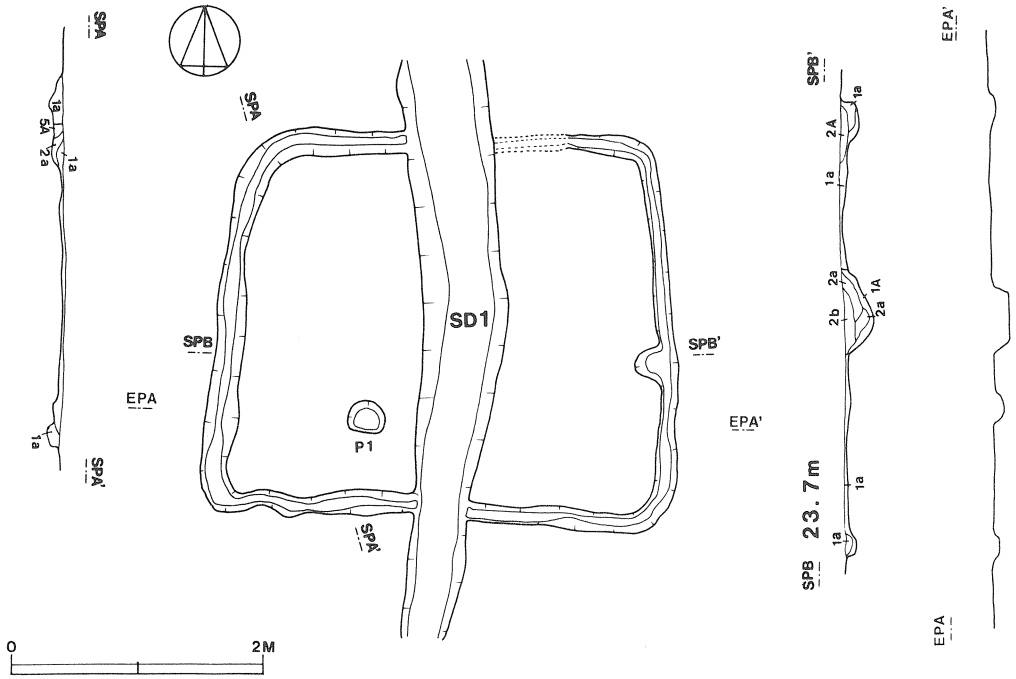
第10図　3号竪穴住居跡出土遺物実測図 (2)

3号竪穴住居跡出土遺物観察表（第9・10図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 14.0 B 4.7 C 9.3	口縁部は僅かに内彎気味に開き，器肉は厚く，先端部は尖り気味で，底部は上げ底である。 器面外部はロクロ成形。底部の中央・外周は篦削りされている。	灰白色 砂粒・砂礫・白雲母 良好 底部篦記号
2	S	坏	A 11.0 B 3.6 C 7.6	体部は直線的に立ち上がり，器肉は薄く，先端部は尖り気味である。底部は丸底を呈す。器面内横ナデ，器面外は水挽き痕。 底部は回転篦削り。	灰色 長石粒・細砂 良好
3	S	坏 (転用硯)	C 9.4	底部破片である。底部は回転篦切り後に篦工具にてナデ。底部と体部との境は摩滅して不明瞭であり，内面は滑らかである。	灰色 長石粒・細砂 良好 内部墨付着

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
4	S	高台付坏	A 10.8 B 4.1 D 7.0	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反する。高台は丁寧な作り。 接地面は平坦である。底部は回転篦削り。	灰色 長石粒・細砂 良好 器内面に漆付着
5	S	高台付坏	A 9.0 B 5.1 D 9.4	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は肥厚して外反する。高台は厚く広がる。 接地面は平坦である。 底部は回転篦削り。底部と体部との境は明瞭に屈曲する。	暗青色 長石粒・砂粒 良好
6	S	高台付坏	A 14.0 B 5.6 D 9.0	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反する。器面は水挽き痕を残さない。 底部と体部との境は屈曲するが，稜は非常ににぶい。 底部は回転篦削り。	灰白色 長石粒・砂粒 不良 底部外面「高」の墨書
7	S	高台付坏 (転用硯)	D 9.1	体部は内彎気味に立ち上がり，高台は内彎し，接地面は平坦である。 器面は水挽き痕が弱く，体部と底部との境は，にぶい稜ではあるが，明瞭に屈曲する。 底部内面は滑らかである。	灰色 長石粒・細砂 不良 内面に墨付着
8	S	高台付坏	D 8.2	体部上半欠損。 底部は回転篦削り。器面水挽き痕は弱く，底部と体部との境は研磨によりにぶい。	灰色 細砂 不良 内面に墨付着 底部篦記号
9	S	高台付坏	A 11.1	高台部欠損。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反する。 器面は水挽き痕をほとんど残さない。 底部から体部へは丸味をもって屈曲する。	灰色 長石粒・砂粒 良好
10	S	高台付坏	D 8.7	底部。高台部残存。 底部は回転篦削り後若干のナデ。	緑灰色 長石粒・砂粒 良好
11	S	蓋	A 15.6 B 2.8	つまみは腰が高く，天井部は篦削りが施されている。 裾部端は直行する。水挽き痕は外面にやや残る。	灰色 長石粒 良好
12	S	蓋	A 15.3 B 2.6	天井部はぶ厚いつくり。身受け部は扁平となっている。裾部端は直行する。 天井部は回転篦削り。水挽き痕は弱い。	灰色 長石粒・砂粒 良好
13	S	蓋	A 15.8 B 2.8	つまみは腰が高い。裾部端は直行する。天井部は回転篦削り。 水挽き痕は弱い。	灰白色 長石粒・細砂 良好
14	S	蓋	A 15.1	つまみ欠損。天井部は回転篦削り。裾部端は直行する。	灰色 長石粒・砂粒 良好
15	S	蓋		つまみは宝珠形を呈し，身受け部は扁平となる。 天井部は回転篦削り。	灰色 長石粒・小砂利・細砂 良好　重ね焼き 内面に自然釉
16	S	蓋	A 19.7	つまみ欠損。裾部端は直行する。身受け部は扁平となる。 天井部は回転篦削り。器面水挽き痕はやや弱い。	灰白色 長石粒・細砂 不良
17	S	蓋	A 15.0	つまみ欠損。裾部端は直行する。身受け部は扁平となる。 天井部は回転篦削り。器面水挽き痕はやや残る。	灰色 長石粒・細砂 良好
18	S	台付 短頸壺	F 18.0	最大径は胴上部にある。器外面肩部から自然釉が流下している。 胴下半は回転篦削りされている。高台は幅広。平坦で接地面が多い。	灰色 長石粒・細砂 良好 墨色斑点あり 釉は黄緑色

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
19	H	甕	A (14.4) B 17.7 C 8.0	底部は平底で,体部は内彎しつつ立ち上がる。口縁部はやや「く」の字状に屈曲し端部を外上方につまみ出し，丸味を有する。 口頸部は横ナデ調整。	にぶい橙色 砂粒・砂礫・長石・スコリア 良好
20	H	甕	A (13.8) B 6.4	丸く胴の張った体部から，やや「く」の字状に屈曲する口縁部が付き，端部はほぼ垂直につまみ出す。 口頸部内・外面は，横ナデ調整。体部内・外面は箆ナデ調整。	にぶい橫橙色 砂粒・砂礫・スコリア・白雲母 良好
21	H	甕	A 20.8 B 24.9	体部は内彎しつつ立ち上がり,「く」の字状に屈曲する。口縁部が付き，端部は外上方につまみ出し，丸くおさめる。口頸部内・外面は横ナデ調整。体部内面と体部外面上位は箆ナデ調整。体部外面中位から下位は箆削り調整。やや摩滅が進行。	明赤褐色 砂粒・長石粒・スコリア 不良
22	H	甕	A 22.6 B 10.5	胴の張った体部から「く」の字状に屈曲する口縁部が付き，端部は外上方につまみ出す。口頸部内・外面は横ナデ調整。体部内・外面は箆ナデ調整。	にぶい赤褐色 砂粒・砂礫・長石粒 良好
23	銙帯具（丸鞆）		2.2×3.7 厚み0.8	0.3×2.3cmの透し孔をもつ。裏面には,3個の鋲が三角形状に打たれており，裏金具がついている。遺存状態良好。表側に黒漆とみられる物が斑点状に遺存している。	銅製品

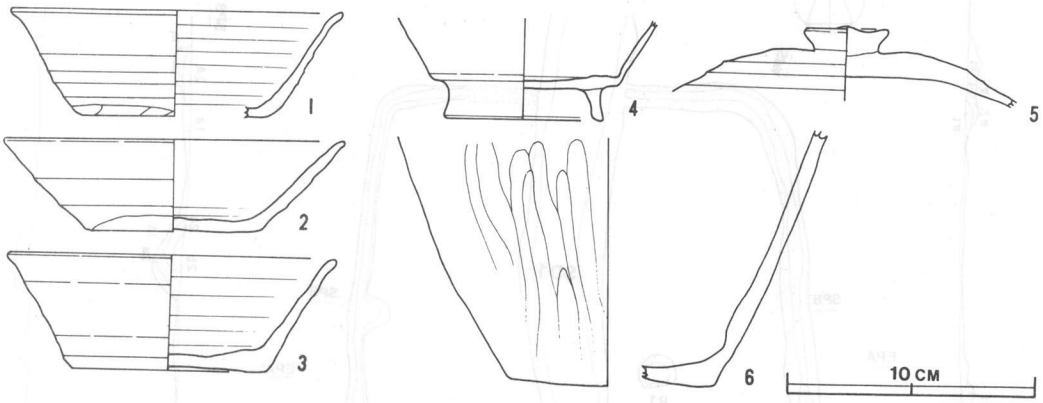


第11図　4号竪穴住居跡実測図

4号竪穴住居跡出土遺物観察表（第12図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 13.4 B 9.3 C 7.5	体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外反する。 底部は平坦。水挽き成形。外周は箆削り。	灰色 砂粒・砂 良好

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
2	S	坏	A 13.8 B 3.7 C 7.0	体部は内反気味に開く。底部はやや上げ底気味で厚手の作りである。 器面外は水挽き成形。外周は篦削り。	灰黄褐色 砂粒・砂礫・雲母 良好
3	S	坏	A 13.2 B 4.6 C 7.7	体部は内彎し，口唇部が外反する。底部は上げ底気味。 水挽き成形。底部は篦削り。内面は平滑に仕上げられている。	灰色 砂粒・砂礫 良好
4	S	高台付坏	B 4.0 D 6.4	胴部は直線的に開く。高台が,「ハ」の字状に開き，先端は尖り気味である。 底部と体部との境は屈曲するが，稜はにぶい。	灰色 砂粒・砂礫 良好
5	S	蓋	B 2.9	口縁部が欠損。体部の立ち上がりは直線的にのびる。 つまみは腰が高く天井部はぶ厚い作り。身受け部は扁平。	灰色 砂粒・砂礫 良好
6	H	甕	B 10.3 C 8.3	底部破片である。胴下半は縦に篦削りされ，内面に輪積み痕があり，上から強くナデている。	赤褐色 砂粒・砂礫・雲母 良好 底部外面木葉痕



第12図　4号竪穴住居跡出土遺物実測図

6号竪穴住居跡（第16図）

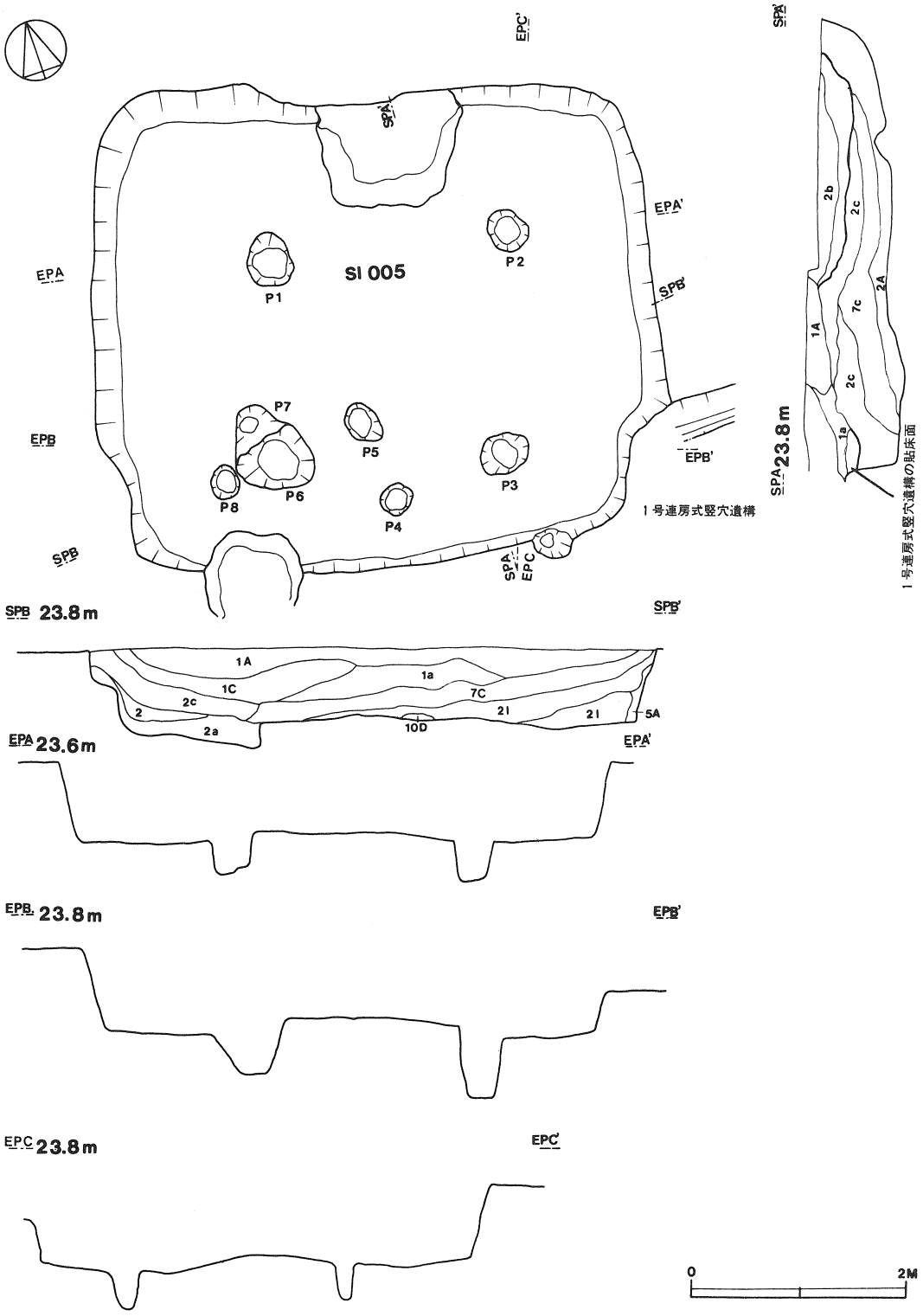
調査区C3f7区を中心に確認され,東西5.25m・南北4.85mを測り，主軸方向N－12°－Eを指し，方形を呈している。

壁は，床面からほぼ垂直に立ち上がり，壁高55cmを測る。床面は全体に硬く，竈付近は非常に良く踏み固められている。壁溝は東壁下・南壁下に部分的に検出され，幅19cm・深さ8cmを測り，ピットは5か所確認でき，深さは25～30cmを測る。

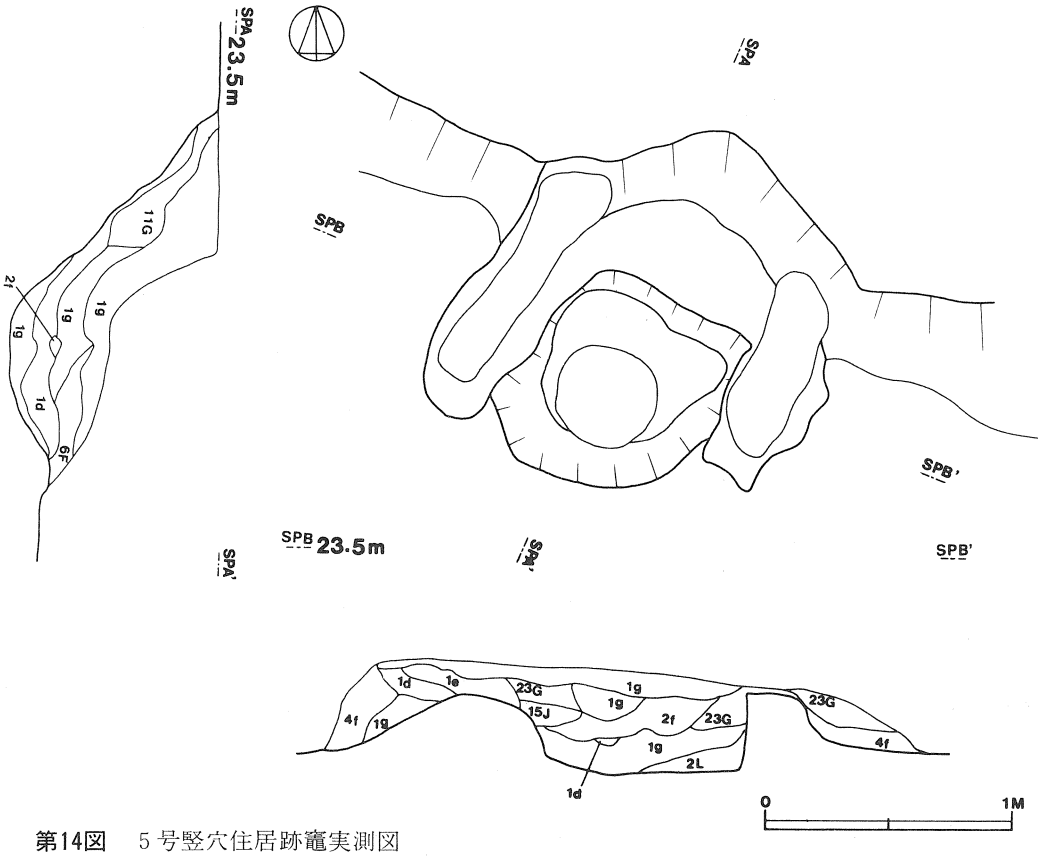
竈は，北壁中央部よりやや東側に位置し，遺存状態は良好で，両袖部・天井部とも粘土・砂を使用して構築されている。

本住居跡東側は，7号竪穴住居跡と重複している。

遺物は，土師器・須恵器・墨書土器・漆付着土器・瓦・鉄滓・漆紙を出土している。



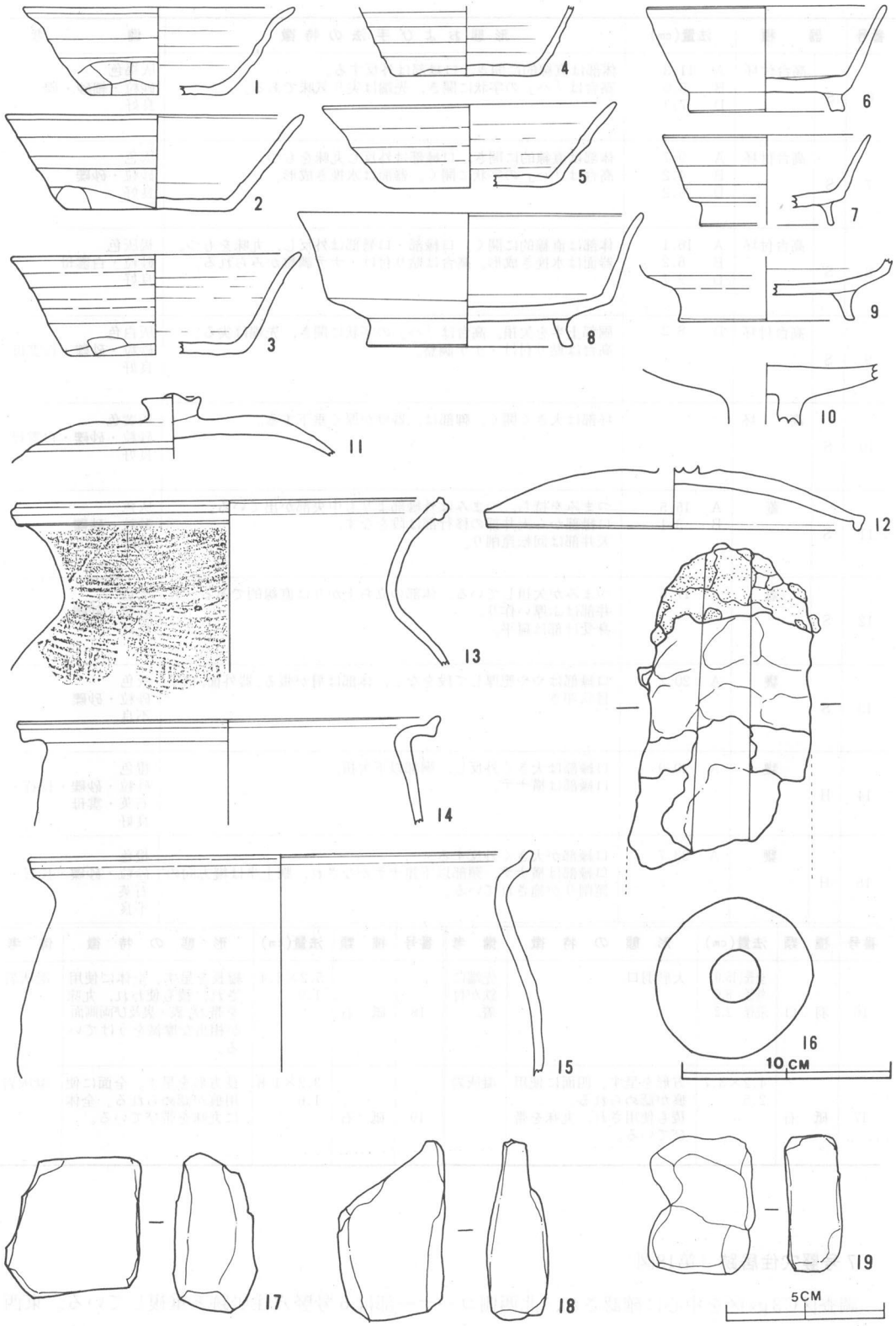
第13図　5号竪穴住居跡実測図



第14図　5号竪穴住居跡竈実測図

5号竪穴住居跡出土遺物観察表（第15図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 12.7 B 4.1 C 6.4	体部は内反気味に開き，底部は平坦である。 器面は，水挽き成形。底部は篦切り，篦削りが施されている。	灰色 砂粒・砂礫 良好
2	S	坏	A 14.0 B 4.5 C 7.7	体部は内反気味に立ち上がって開き，底部は平坦である。 器面は水挽き成形で，外周は篦削り。	灰色 砂粒・砂礫 良好
3	S	坏	A 13.1 B 4.7 C 8.3	体部は内反気味に開き，口縁部は外反する。底部は上げ底気味。 器面は水挽き成形，底部は篦切り後篦削り。	灰色 砂粒・砂礫 良好
4	S	坏	C 6.7	体部は直線的に開く。 底部は平底となり器肉は厚い。底部は篦切り，体部は水挽き成形。	灰白色 砂粒・砂礫 良好
5	S	坏	A 13.8 B 3.9 C 7.5	体部は内反気味に開き，口縁部は外反する。底部は平底を呈し，器肉は厚い。 底部は篦切り，体部は水挽き成形。	灰黄色 砂粒・砂礫 不良



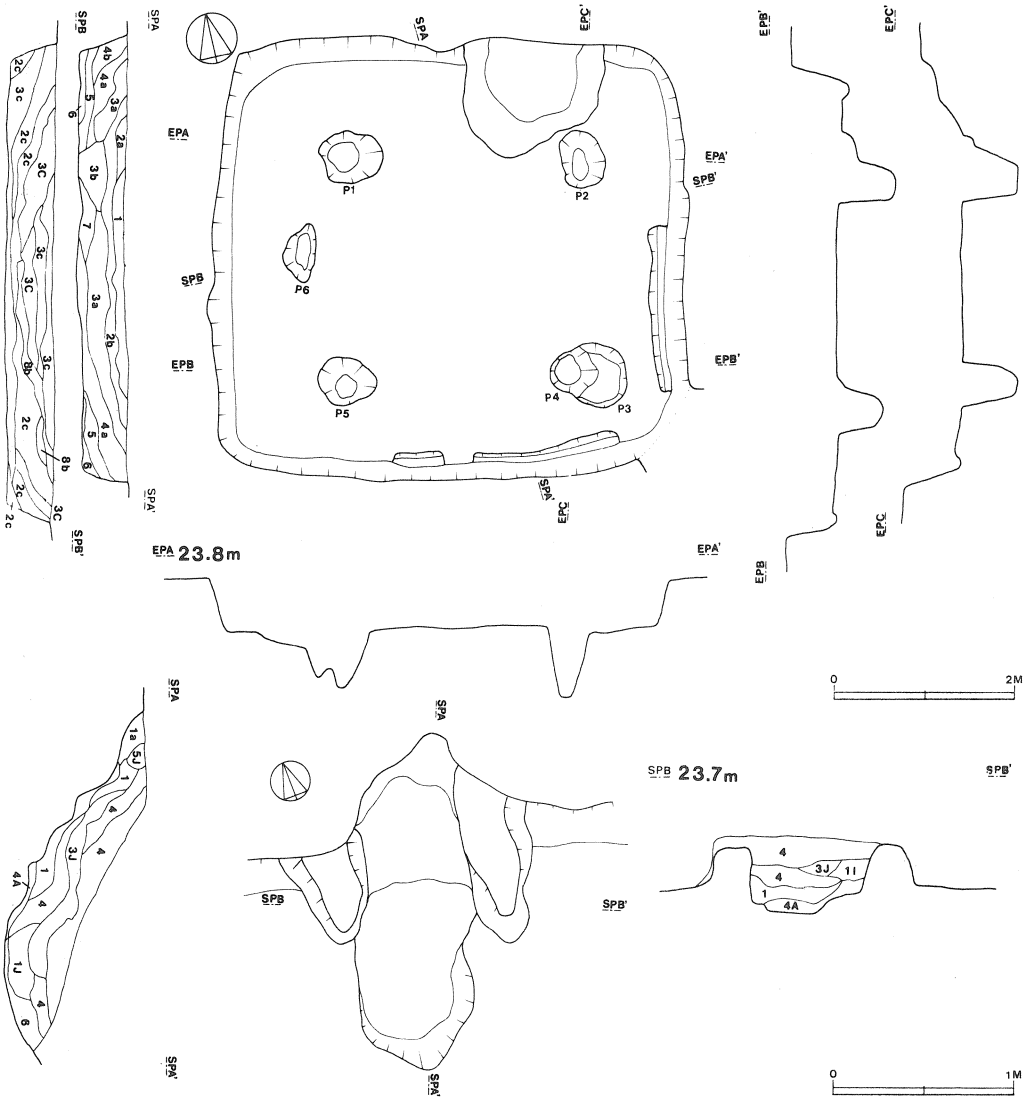
第15図　5号竪穴住居跡出土遺物実測図

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
6	S	高台付坏	A 11.3 B 5.0 D 7.3	体部は直線的に開き，口縁部は外反する。 高台は「ハ」の字状に開き，先端は尖り気味である。	灰褐色 砂粒・細砂・礫 良好
7	S	高台付坏	A 9.7 B 4.2 D 6.2	体部は直線的に開き，口縁部は外反し丸味をもつ。 高台は「ハ」の字状に開く。器面は水挽き成形。	灰色 砂粒・砂礫 良好
8	S	高台付坏	A 16.1 B 6.2 D 9.7	体部は直線的に開く。口縁部・口唇部は外反し，丸味をもつ。 器面は水挽き成形。高台は貼り付け・ナデ調整がみられる。	褐灰色 砂粒・白雲母 良好
9	S	高台付坏	D 8.2	胴部上半を欠損。高台は「ハ」の字状に開き，先端は尖る。 高台は貼り付け・ナデ調整。	灰白色 砂粒・砂礫・白雲母 良好
10	S	高　坏		坏部は大きく開く。脚部は，器壁が厚く垂下する。	灰黄色 砂粒・砂礫・白雲母 良好
11	S	蓋	A 15.5 B 3.1	つまみを持ち，つまみは外縁部よりも中央部が出ている。 口縁部から天井部の移行部は段をなす。 天井部は回転篦削り。	灰色 砂粒・砂礫 良好
12	S	蓋	A 17.6	つまみが欠損している。体部の立ち上がりは直線的である。天井部はぶ厚い作り。 身受け部は扁平。	灰色 砂粒・砂礫 良好
13	S	甕	A 20.2	口縁部はやや肥厚して段をなし，体部は肩が張る。器外面，格子目状叩き。	灰色 砂粒・砂礫 不良
14	H	甕	A 20.0	口縁部は大きく外反し，胴部以下欠損。 口縁部は横ナデ。	橙色 砂粒・砂礫・長石・石英・雲母 良好
15	H	甕	A 23.7	口縁部が大きく外反する。 口縁部は横ナデ，頸部以下篦ナデがなされ，胴上半は縦方向の篦削りが施されている。	橙色 砂粒・砂礫・長石・石英 不良

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
16	羽口	全長(15.0) 外径 8.0 孔径 2.2	大形羽口。	先端に鉄が付着。	18	砥石	5.2×3.4 1.9	縦長を呈す。全体に使用され，稜も使われ，丸味を帯び，表・裏及び両側面が相当な摩滅をうけている。	凝灰岩
17	砥石	4.2×3.7 2.5	方形を呈す。四面に使用痕が認められる。 稜も使用され，丸味を帯びている。	凝灰岩	19	砥石	3.2×1.8 1.6	長方形を呈す。全面に使用痕が認められる。全体に丸味を帯びている。	凝灰岩

7号竪穴住居跡（第18図）

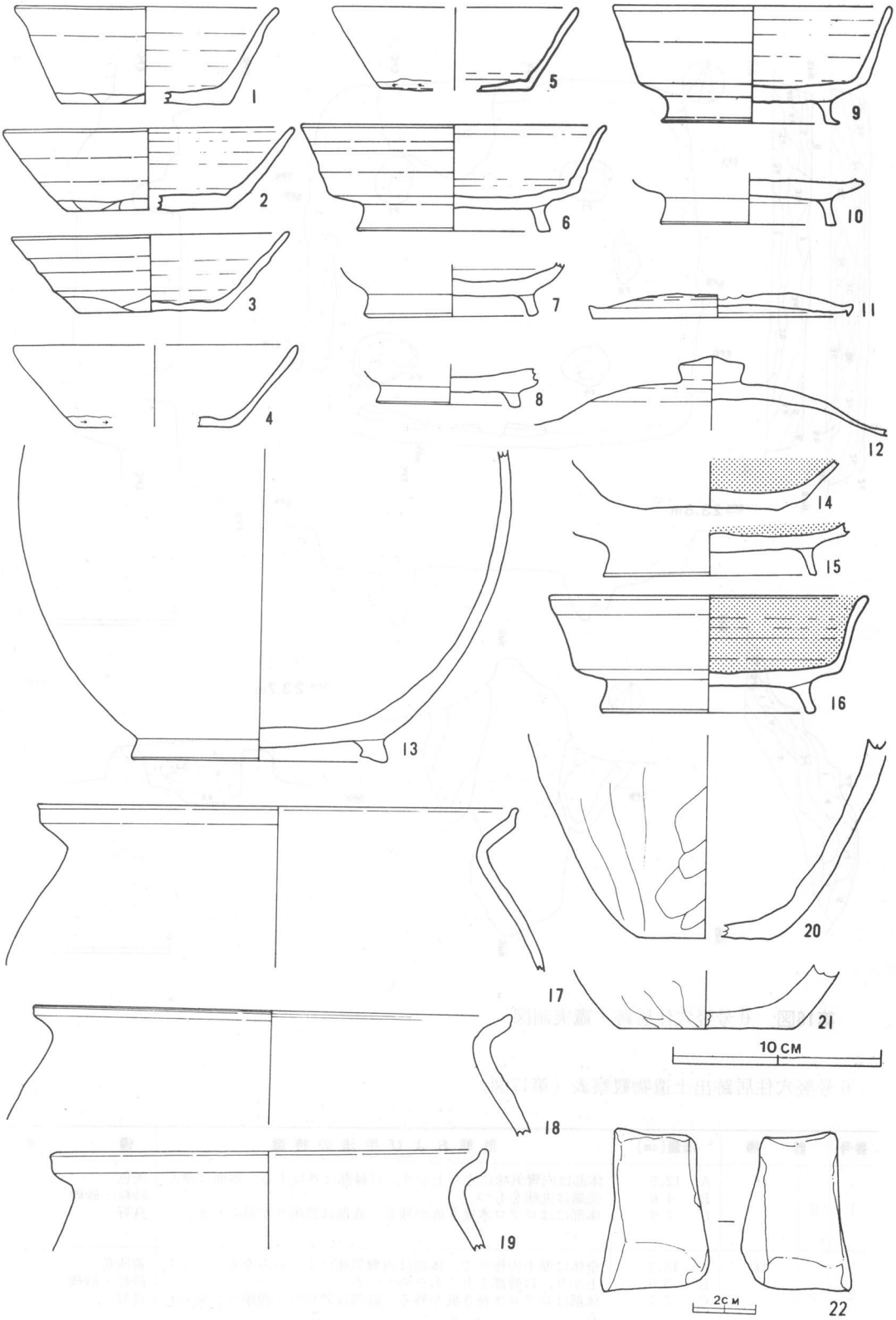
調査区C3g_8区を中心に確認され，北西側コーナー部は6号竪穴住居跡と重複している。東西3.9m・南北4.1mを測り，主軸方向N－13°－Eを指し，方形を呈している。



第16図　6号竪穴住居跡・竈実測図

6号竪穴住居跡出土遺物観察表（第17図）

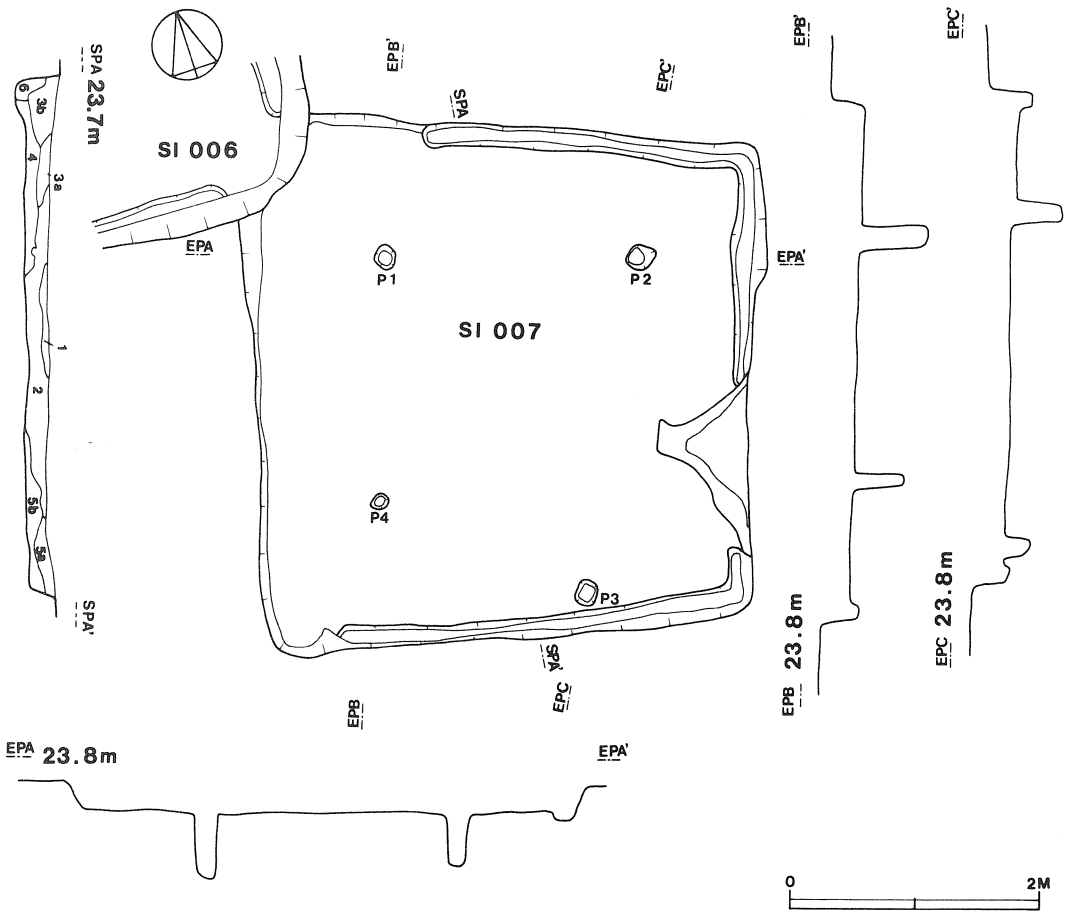
番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 12.5 B 4.6 C 7.9	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反する。器面は厚く先端は丸味をもつ。 体部にはロクロ水挽き痕が残る。底部は篦削りが見られる。	灰色 砂粒・砂礫 良好
2	S	坏	A 13.2 B 3.9 C 7.7	全体に厚手の作りで，体部は内彎気味にふくらみをもって立ち上がり，口唇部を丸くおさめている。 体部はロクロ水挽き痕が残る。底部は篦切り・篦削りが見られる。	黄灰色 砂粒・砂礫 良好



第17図　6号竪穴住居跡出土遺物実測図

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
3	S	坏	A 13.2 B 3.7 C 6.9	底部は平底を呈し，体部は内彎気味に立ち上がり，口唇部を丸くおさめている。 体部はロクロ水挽き痕が残る。底部は篦削りが見られる。	灰色 砂粒・砂礫 良好
4	S	坏	A 13.6 B 4.0	体部は外反気味に立ち上がる。底部は器肉が厚い。 器面外は篦ナデ成形が施されている。	緑灰色 砂粒・砂礫 良好
5	S	坏	A 12.0 B 4.0	体部は外反気味に立ち上がる。器肉は薄く，先端は尖り気味。 器面外部はロクロ成形。篦削り調整。	灰白色 砂粒・雲母 良好
6	S	高台付坏	A 14.5 B 15.1 D 9.2	体部は内彎気味に立ち上がり，口唇部は外反する。体部と底部との境は稜ではあるが，明瞭に屈曲する。高台は「ハ」の字状に開き，接地面は平坦である。体部はロクロ水挽き痕が残る。	灰色 砂粒・砂礫 良好
7	S	高台付坏	D 8.0	底部破片である。 高台は外反して開き，接地面は丸味をもつ。	灰色 砂粒・砂礫・小礫 良好
8	S	高台付坏	D 7.0	底部破片である。 高台は外側に開き，接地面は平坦である。	黄橙色 砂粒・砂礫・雲母 良好
9	S	高台付坏	A 13.2 B 5.6 D 8.5	体部は内彎気味に立ち上がり，高台は外反し，接地面は平坦である。 器面は水挽き痕がみられ，体部と底部の境は明瞭に屈曲する。 底部は回転篦削り。	灰色 砂粒・砂礫 良好
10	S	高台付坏	D 8.3	底部破片。高台は開き，接地面は平坦である。 底部は回転篦削り。	灰色 砂粒・砂礫 良好
11	S	蓋	A 12.5	つまみ欠損。口縁部から天井部の移行部は段をなす。身け受部は扁平で，裾部端は直行する。 天井部は回転篦削り。	灰色 砂粒・砂礫 良好
12	S	蓋		宝珠形のつまみを有し，口径に比べて器高が低い。身受け部が「く」の字状に屈曲し，丸味を帯びる。 天井部は篦削りが施されている。	灰白色 砂粒・砂礫・白雲母 良好
13	S	台付壺		高台は全体的に丸味を帯び，中央部はやや上がっている。 全体の器形は不明である。	灰色　砂粒 良好 器面外部に黄色の自然釉付着
14	H	坏		底部破片である。器面内部は黒色処理。外部にはナデ調整が施されている。	黒褐色 砂粒・長石粒 良好
15	H	高台付坏	D 10.1	底部破片である。 高台は薄く，接地面は平坦である。 底部は回転篦削り。器面内部黒色処理。	黒褐色 砂粒・砂礫 良好
16	H	高台付坏	A 15.1 B 5.6 D 10.0	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反し，丸味をもつ。 体部と底部の境は，明瞭に屈曲する。 器面は水挽き痕がみられ，底部は回転篦削り。 器面内部黒色処理。	にぶい橙色 砂粒・砂礫・雲母 良好
17	H	甕	A 23.0 B 7.8	胴の張った体部から「く」の字状に屈曲する口縁部が付き，端部は外上方につまみ出す。口頸部内・外面は横ナデ調整。 体部内・外面は篦ナデ調整。	にぶい橙色 砂粒・砂礫・スコリア 良好

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
18	H	甕	A 22.9	口縁部破片である。口縁部は大きく外反する。 口縁部は横ナデ，頸部以下は，箆ナデ調整。	にぶい橙色 砂粒・長石・雲母 良好
19	H	甕	A 22.9 B 5.5	胴の張った体部から「く」の字状に屈曲する口縁部が付き，端部は丸く，口頸部内・外面は横ナデ調整，体部内外面はナデ調整。	にぶい橙色 砂粒・砂礫・長石粒 普通
20	H	甕	C 6.3	底部破片である。 器面内・外面にナデ・箆削りが施されている。	灰黄褐色 砂粒・石英・雲母 良好
21	H	甕	C 8.5	底部破片である。 器面外にナデが施されている。	にぶい橙色 砂粒・石英粒・雲母 良好 底部外面に木葉痕
22	砥石		5.0×3.0 2.2	長方形を呈す。五面に使用痕が認められる。研磨による摩滅がみられ，滑らかで丸味を帯びている。	凝灰岩



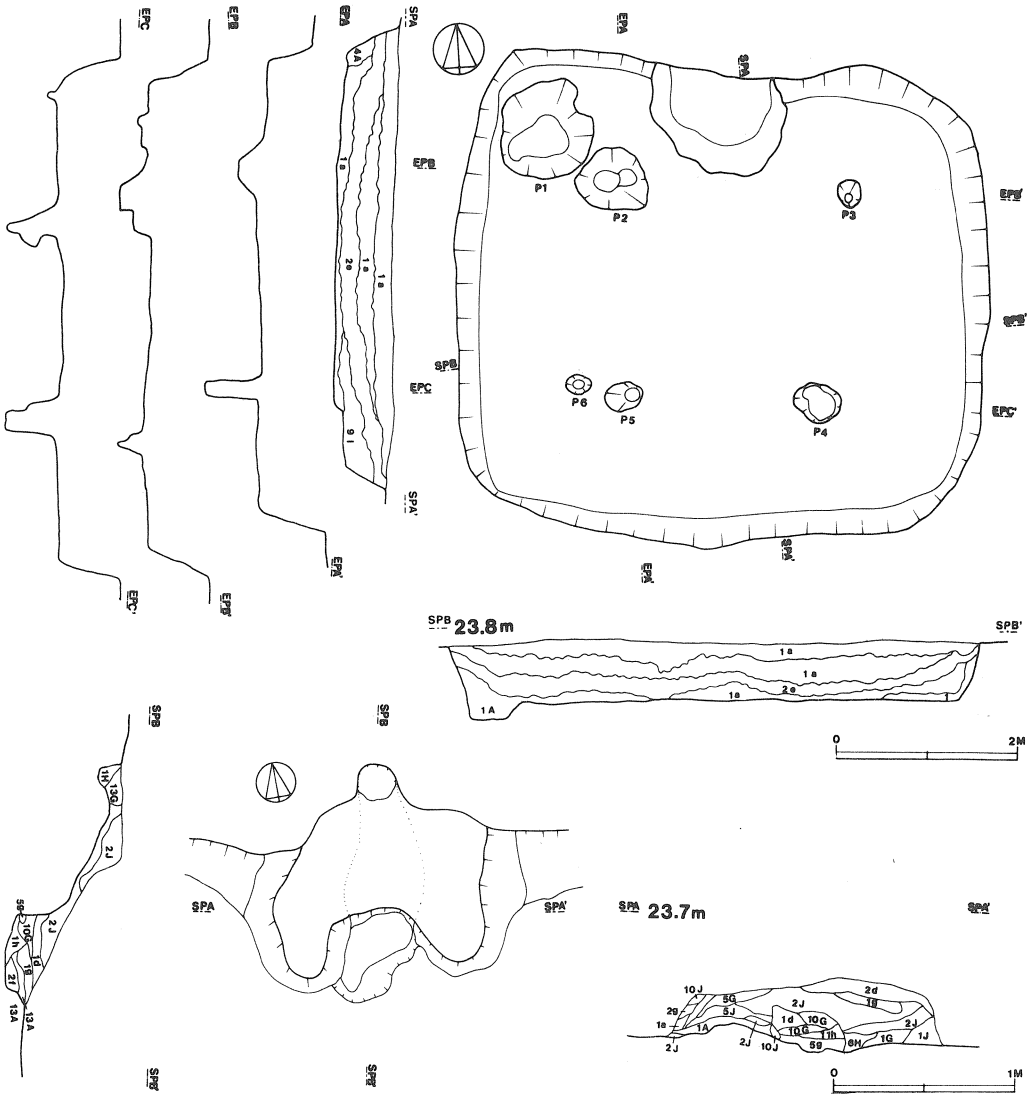
第18図　7号竪穴住居跡実測図

壁は，床面から垂直に立ち上がり，壁高24cmを測り，比較的浅い。床面は，全体に硬く凸凹が著しい。柱穴は４本確認され，深さは20～25cmを測る。壁溝は東南壁に検出され，幅14cm・深さ７cmを測る。

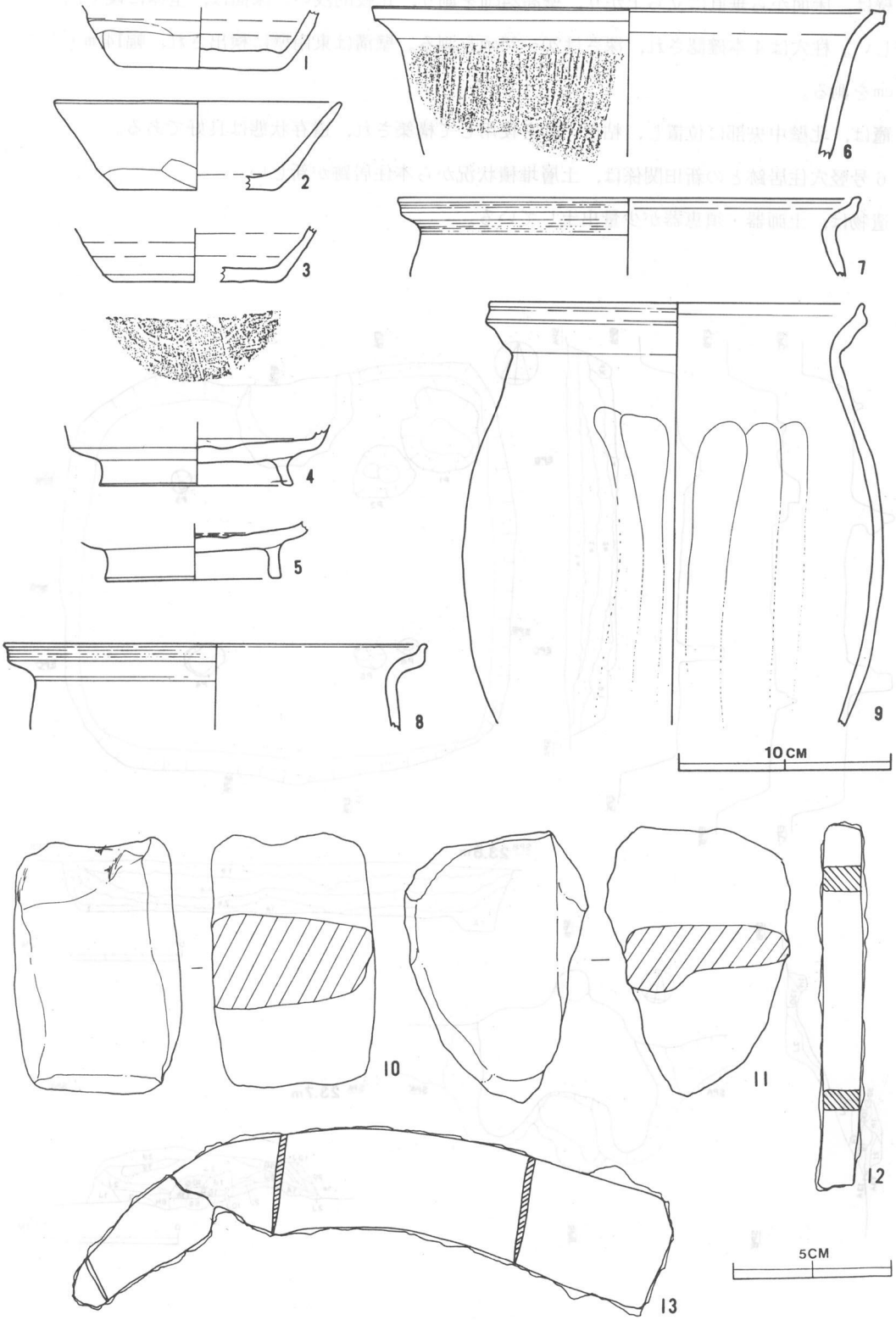
竈は，北壁中央部に位置し，粘土・砂を使用して構築され，遺存状態は良好である。

６号竪穴住居跡との新旧関係は，土層堆積状況から本住居跡が新しい。

遺物は，土師器・須恵器が少量出土している。



第19図　８号竪穴住居跡・竈実測図



第20図　8号竪穴住居跡出土遺物実測図

8号竪穴住居跡（第19図）

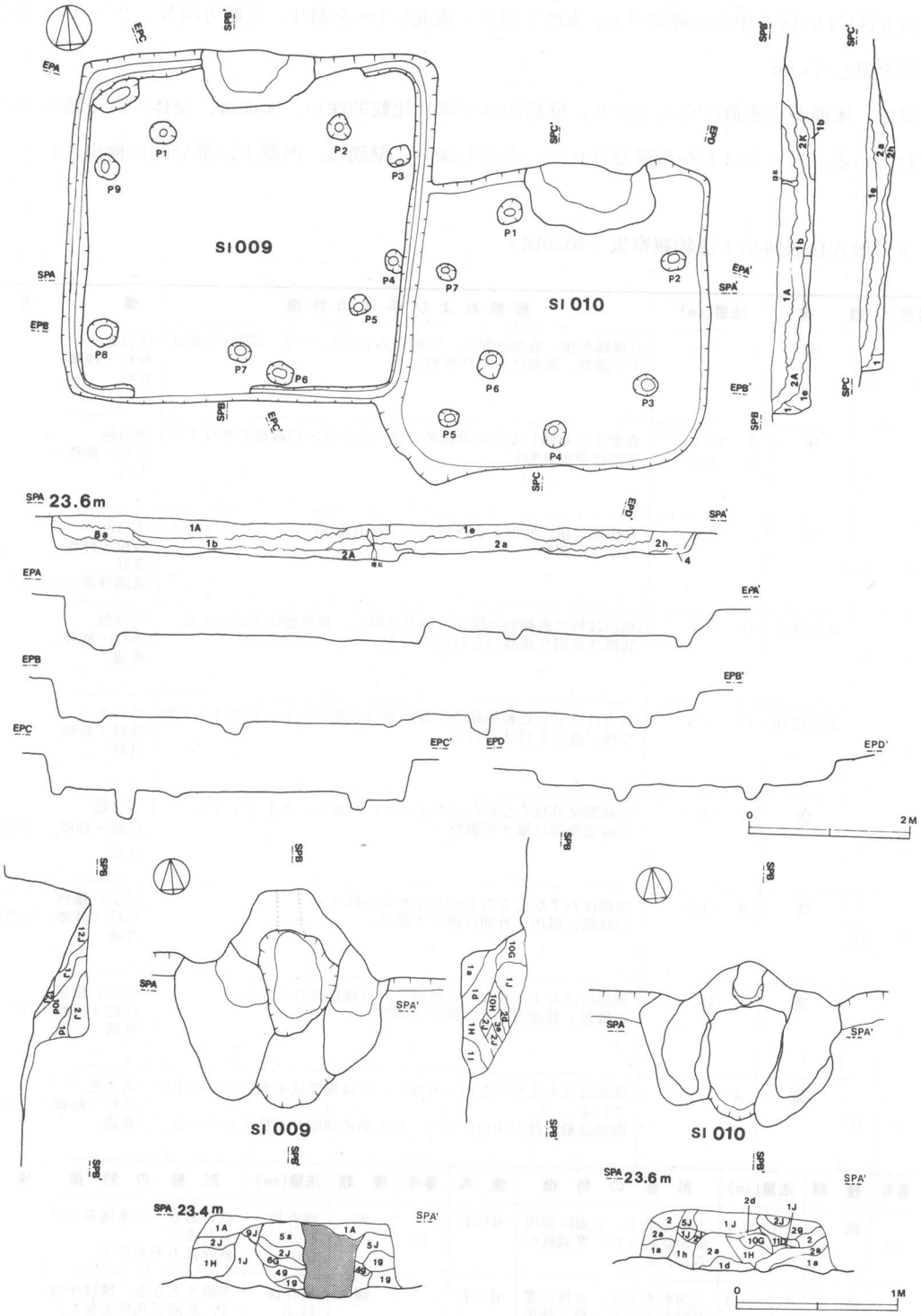
調査区C4h1区を中心に確認され，東西5.84m・南北5.1mを測り，主軸方向N－2°－Wを指し，方形を呈している。

壁は，床面から垂直に立ち上がり，壁高50cmを測り比較的深い。床面は，全体に良く踏み固められている。ピットは6か所確認され，いずれも深い。壁溝は，西壁下に部分的に検出された。

8号竪穴住居跡出土遺物観察表（第20図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	C 7.8	口縁部欠損。底部は厚く，内彎ぎみに立ち上がる。器内・外面はナデ調整。底部は篦削り整形。	灰白色 砂粒・砂礫 良好
2	S	坏	A 13.5 B 4.2	底部より外傾しながら直線的に立ち上がり，口縁部で外反する。底部は篦削り整形。	灰白色 砂粒・砂礫・礫 不良
3	S	坏	C 7.8	口縁部欠損。底部より外傾しながら直線的に立ち上がる。器内・外はナデ調整。	灰白色 砂粒・砂礫 良好 底部外面に篦記号
4	S	高台付坏	D 9.1	高台は外に直線的に開く。端部は厚く，接地面は平坦である。底部は篦削り後高台を付けている。	灰白色 砂粒・砂礫 普通
5	S	高台付坏	D 8.3	高台は直立し比較的高く，接地面は平坦である。底部はヘラ削り後，高台を付けている。	灰白色 砂粒・砂礫 良好
6	S	甕	A 24.0	口縁部は外反しながら立ち上がり，断面が三角形を呈する。口縁部頸部は横ナデ調整。	灰白色 砂粒・砂礫・白雲母 良好
7	H	甕	A 21.8	頸部はわずかに立ち上がりながら外傾する。口縁部，器内・外面は横ナデ調整。	にぶい褐色 砂粒・砂礫・白雲母 普通
8	H	甕	A 19.7	頸部は立ち上がりながら外傾し，口縁部は外反する。口縁部，器面内・外は横ナデ調整。	にぶい橙色 砂粒・砂礫・白雲母 普通
9	H	甕	A 17.7	頸部は立ち上がりながら外傾し，口縁端部は垂直につまみ上げている。胴部は最大径が中位にあり，縦方向の篦削りが施されている。	明赤色 砂粒・砂礫・白雲母 普通

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
10	砥石	7.8×5.1 2.7	方形を呈す。全面に使用痕が認められ，摩滅痕がみられる。	凝灰岩	12	釘	残存長 11.5 幅0.6	鉄釘あるいは茎残存と思われる。断面は方形を呈す。	
11	砥石	8.3×5.4 2.1	三角形を呈す。全体に摩滅痕がみられ，稜も使用され丸みを帯びている。	凝灰岩	13	鎌	残存長 11.0 中央部身幅2.6	先細りとなる。棟は平棟で，断面三角形を呈し，棟と刃がほぼ同様なカーブで彎曲する。基部は全体を折り曲げている。	



第21図　9・10号竪穴住居跡・竈実測図

竈は，北壁中央部に位置し，粘土・砂を使用して構築され，火床からなだらかに立ち上がっている。

遺物は，土師器・須恵器・砥石・鉄製品が出土している。

9号竪穴住居跡（第21図）

調査区C4e1区を中心に確認され，東壁部分において10号竪穴住居跡と重複している。東西4.4m・南北4.35mを測り，主軸方向N－1°－Wを指し，方形を呈している。

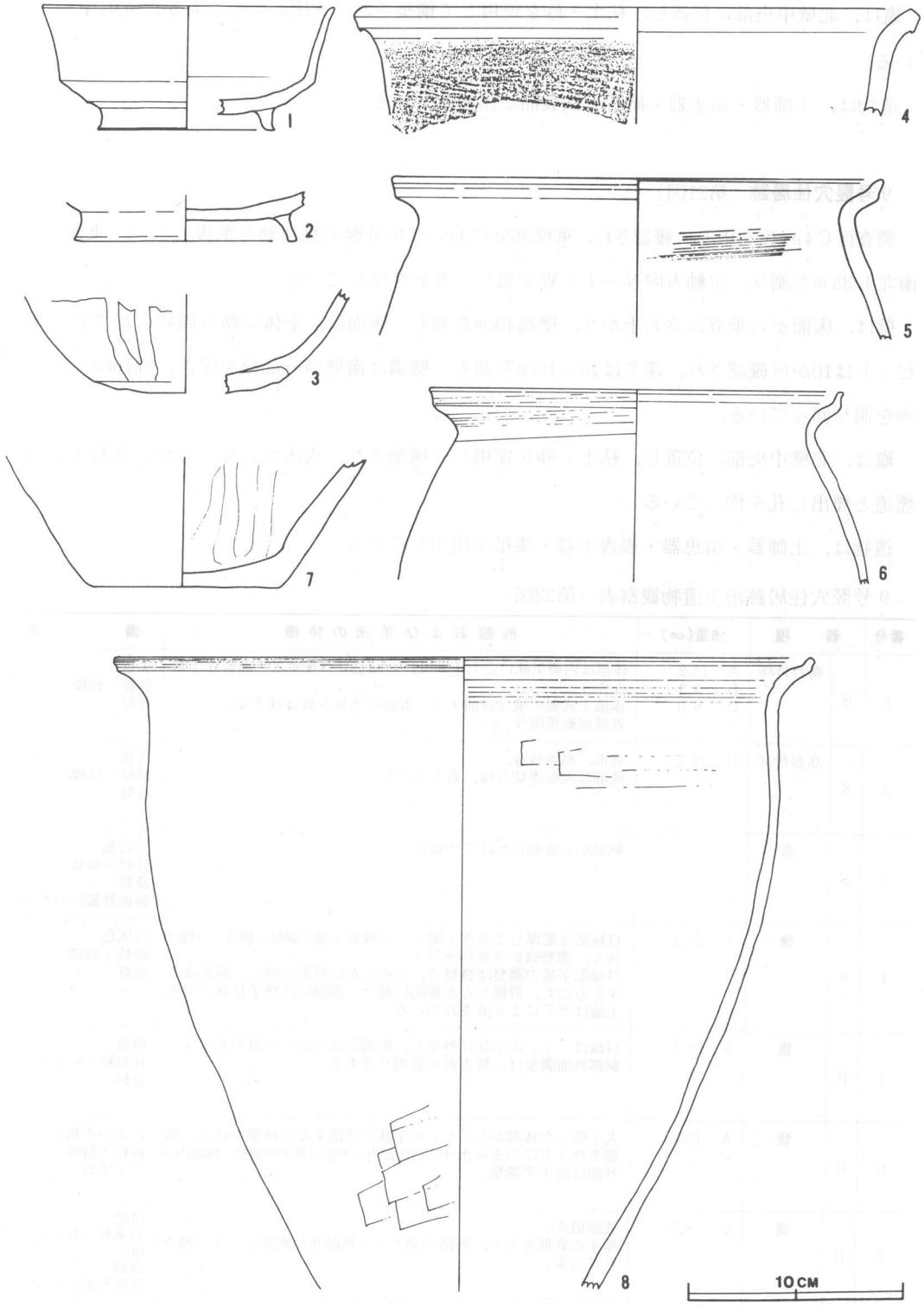
壁は，床面から垂直に立ち上がり，壁高40cmを測る。床面は，全体に踏み固められており硬い。ピットは10か所確認され，深さは10～15cmを測る。壁溝は南壁の一部分を除き，幅18cm・深さ11cmを測り回っている。

竈は，北壁中央部に位置し，粘土・砂を使用して構築され，火床からなだらかに立ち上がり，煙道と煙出し孔を作っている。

遺物は，土師器・須恵器・墨書土器・漆紙が出土している。

9号竪穴住居跡出土遺物観察表（第22図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	高台付坏	A 13.2 B 5.1 D 8.0	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反する。高台は丁寧な作り。 体部と底部の境は屈曲する。器面に水挽き痕は残さない。 底部回転篦削り。	灰色 砂粒・砂礫 良好
2	S	高台付坏	D 10.2	底部，高台残存。 底部は回転篦切り後，若干のナデ。	灰色 砂粒・砂礫 良好
3	S	壺		胴部から底部にかけての破片。	灰白色 砂粒・砂礫 良好 器面外部に自然釉
4	S	甕	A 25.3	口縁部は肥厚して大きく開く。口縁部上端の調整は押さえた様に強く，調整痕が沈線状を呈す。 口縁部下端の調整は良好で，なめらかに肩部に続く。胴部は張りをもたず，肩部から直線的に続く。胴部には格子目状の叩き，上端はナデにより消されている。	白灰色 砂粒・砂礫 良好
5	H	甕	A 22.5	口縁は「く」の字状に外反し，胴部が張り出した器形を呈す。 胴部外面調整は，横方向の篦削りである。	橙色 長石粒・石英粒 良好
6	H	甕	A (19.2)	丸く張った体部から，「く」の字状に屈曲する口縁部が付き，端部を外上方につまみ出す。口頸部内・外面は横ナデ調整。体部内・外面は篦ナデ調整。	にぶい赤褐色 砂粒・砂礫・スコリア・雲母
7	H	甕	C 8.5	底部破片。 厚手の底部をもち，胴部の篦ナデ・篦削りが底部近くまで施されている。	橙色 石英粒・長石粒・雲母 普通 底部外面に木葉痕
8	H	甕	A (32.3)	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は丸く屈曲し，端部を外上方につまみ出す。口頸部内・外面は横ナデ調整。体部外面はナデ調整で，下位は篦削り調整。体部内面に粘土紐痕を残す。	にぶい橙色 砂粒・砂礫・長石粒・石英粒少・スコリア 普通



第22図　9号竪穴住居跡出土遺物実測図

10号竪穴住居跡（第21図）

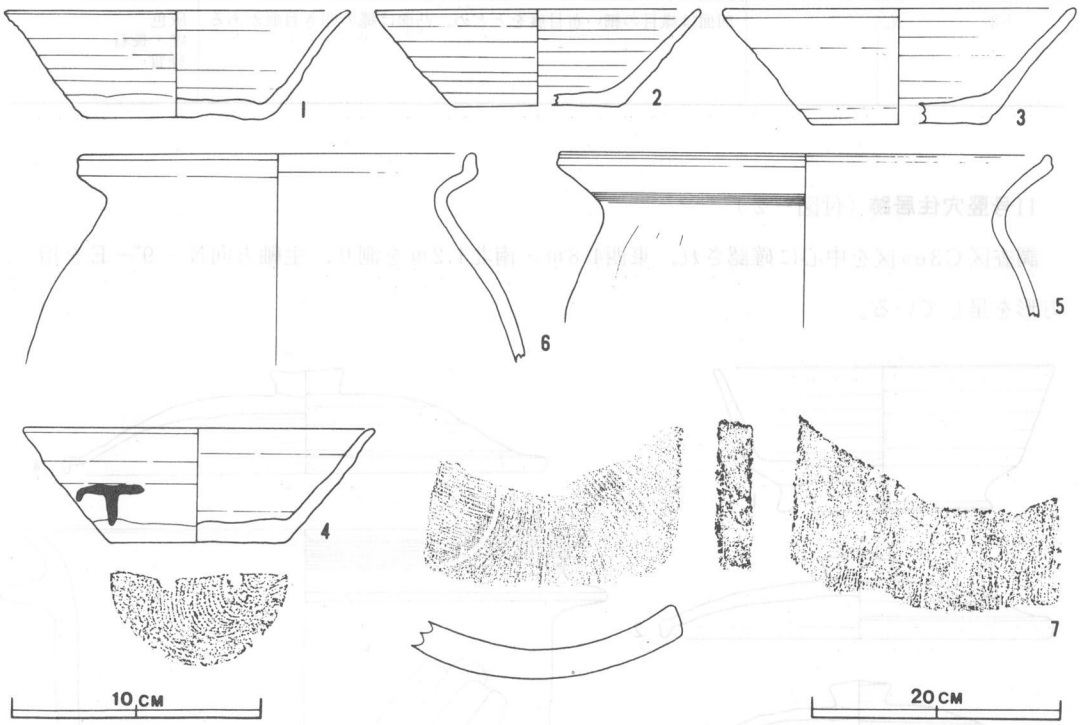
調査区C4f₂区を中心に確認され，東西3.84m・南北3.78mを測り，主軸方向N－0°を指し，方形を呈している。

壁は，床面から垂直に立ち上がり，壁高23cmを測る。床面は，全体に硬く良く踏み固められている。ピットは7か所検出された。壁溝は確認されない。

竈は，北壁中央部に位置し，粘土・砂を使用して構築され，火床からなだらかに立ち上がり，煙道と煙出し孔を作っている。

本住居跡と重複している9号竪穴住居跡との新旧関係は，本住居跡が新しい。

遺物は，土師器・須恵器・墨書土器・漆付着土器が出土している。



第23図　10号竪穴住居跡出土遺物実測図

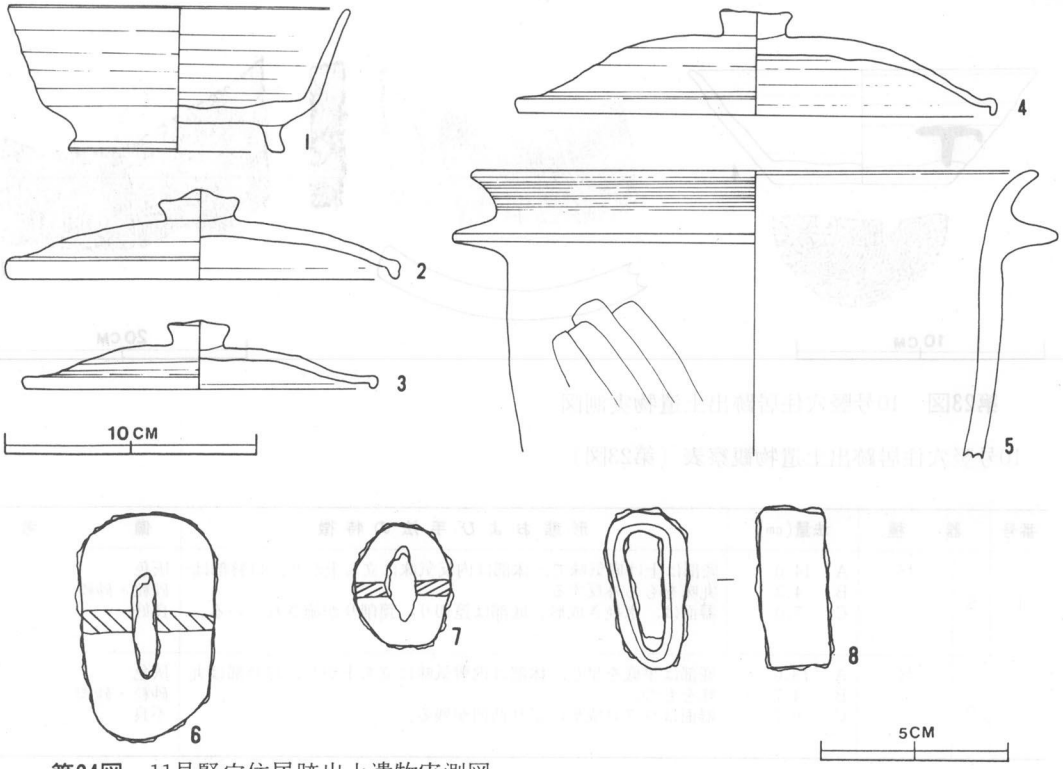
10号竪穴住居跡出土遺物観察表（第23図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 14.0 B 4.3 C 7.0	底部は上げ底気味で，体部は内反気味に立ち上がり，口唇部は丸味をもち外反する。 器面は，水挽き成形。底部は篦切り，篦削りが施されている。	灰色 砂粒・砂礫 良好
2	S	坏	A 13.0 B 4.7 C 6.7	底部は平底を呈し，体部は内彎気味に立ち上がり，口唇部は丸味をもつ。 器面はロクロ成形により凸凹が残る。	灰色 砂粒・砂礫 不良

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
3	S	坏	A 14.2 B 4.7 C 7.0	底部は平底を呈し，底部と体部の境は厚い。 体部は内彎気味に立ち上がる。 器面はロクロ水挽き成形により凸凹が残る。外周は篦削りが，中央部は篦切りが施されている。	黄灰色 砂粒・砂礫 不良
4	S	坏	A 14.0 B 4.5 C 7.0	平底を呈し，体部は内彎気味に立ち上がるが，口縁部は欠損している。 体部はロクロ水挽き痕が残り，底部は回転糸切り後に周辺篦削りを施している。	灰白色 砂粒・砂礫 良好 体部外面に墨書
5	H	甕	A 16.0	口縁部破片。 口縁部は「く」の字状に外反し，胴部が張り出した器形を呈する。 胴部外面は，縦方向の篦削り。	赤褐色 砂粒・砂礫・長石 良好
6	H	甕	A 20.0	口縁部破片。 口縁部は「く」の字状に外反し，胴部外面は縦方向の篦削り。	橙色 長石粒・砂粒・雲母 良好
7	平瓦			凹面は織目の細い布目痕をとどめ，凸面は縄の叩き目痕がある。	灰色 礫・長石 硬質

11号竪穴住居跡（付図－２）

調査区C3e9区を中心に確認され，東西4.8m・南北4.2mを測り，主軸方向N－9°－Eを指し，方形を呈している。



第24図　11号竪穴住居跡出土遺物実測図

壁は，床面から垂直に立ち上がり，壁高35cmを測る。北壁は，１号連房式竪穴遺構と重複している。床面は，全体に硬く良く踏み固められている。ピットは５か所検出された。壁溝は部分的に確認され，幅15cm・深さ４cmを測る。

竈は，粘土・砂を使用して構築されているが，１号連房式竪穴遺構の構築によって，袖が部分的に残されているだけである。

本住居跡と１号連房式竪穴遺構との新旧関係は，本住居跡の方が古い。

遺物は，土師器・須恵器・墨書土器・漆付着土器・瓦・鉄製品・漆紙が出土している。

11号竪穴住居跡出土遺物観察表（第24図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	高台付坏	A 13.7 B 5.8 C 8.7	扁平な底部より，体部は大きく開き，口縁部は外反する。高台は接地面が平坦である。 ロクロ水挽き成形。高台は貼り付け。	黄灰色 砂粒・砂礫 良好
2	S	蓋	A 15.6 B 3.6	つまみは宝珠形。天井部より丸味をもって開き，かえりをもつ。器肉は天井部周辺の内面が肥厚するしっかりした作り。身受け部が「く」の字状に屈曲する。 ロクロ水挽き成形・天井部外面は回転篦削り。つまみは貼り付け。	褐灰色 砂粒・砂礫 良好
3	S	蓋	A 14.0 B 2.8	宝珠状のつまみを持ち，つまみは外縁部より中央部が出ている。口縁部から天井部の移行部は段をなす。身受け部が「く」の字状に屈曲する。	黄灰色 砂粒・砂礫 良好
4	S	蓋	A 19.0 B 4.1	天井部は平坦で，篦削りされている。身受け部が「く」の字状に屈曲する。 つまみは扁平で，腰高である。	褐灰色 砂粒・砂礫 良好
5	H	羽釜	A 22.3	底部を欠損。胴部に突帯が回る。口縁部は外反し，先端は尖る。突帯下に輪積み痕が残る。胴部に刷毛目整形痕。	橙色 砂粒・長石粒・雲母 良好

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
6	鍔	最大長 5.9 幅3.5 厚さ0.6 櫃穴 3.3×0.6	倒卵形を呈し，完形品。		8	鏃	最大長 4.3 幅1.8 櫃穴 3.3×0.8	完形品。	
7	切羽か	最大長 3.3 幅2.3 厚さ0.35 櫃穴 1.7×0.65	楕円形を呈し，完形品。						

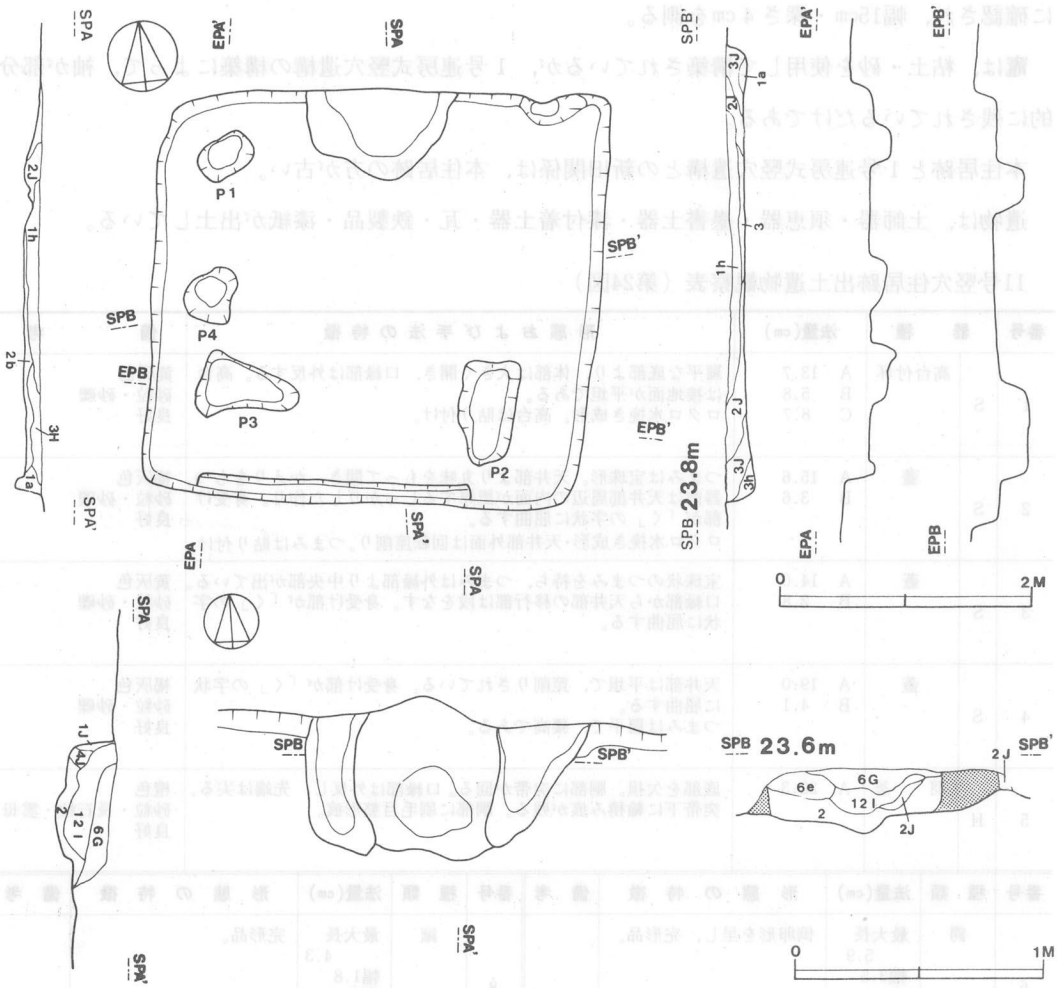
12号竪穴住居跡（第25図）

調査区 C3f9区を中心に確認され，東西3.61ｍ・南北3.32ｍを測り，主軸方向Ｎ－3°－Ｅを指し，方形を呈している。

壁は，床面から垂直に立ち上がり，壁高20cmを測る比較的浅い住居跡である。床面は全体に硬く，良く跡み固められている。ピットは４か所検出され，深さは10～15cmを測る。壁溝は，幅10cm・深さ５cmを測り，南壁下のみ存在する。

竈は，粘土・砂を使用して構築され，煙道と煙出し孔を作っている。

遺物は，土師器・須恵器・瓦が出土している。



第25図　12号竪穴住居跡・竈実測図

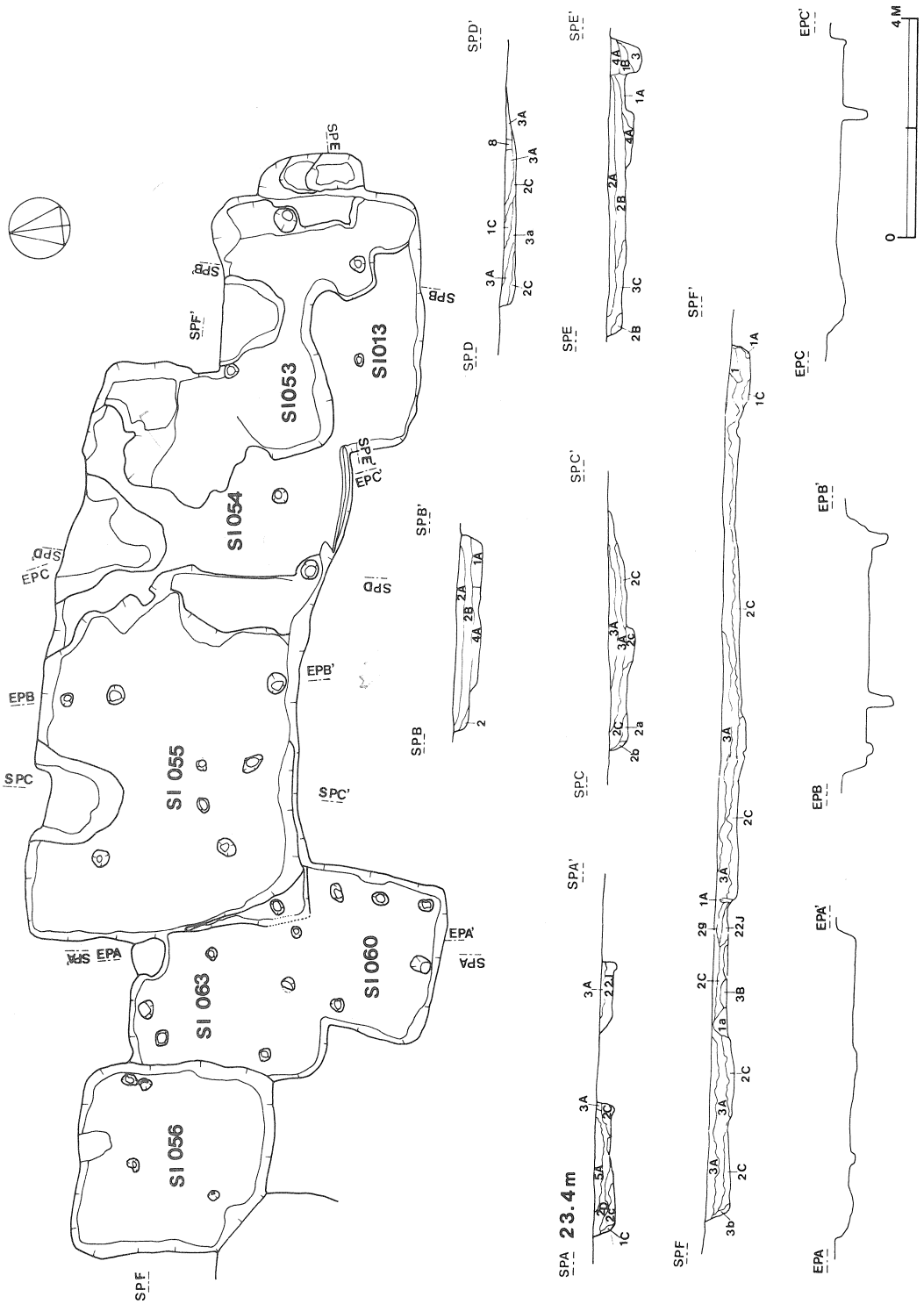
13号竪穴住居跡（第26図）

調査区C4c5区を中心に確認され，東西5.35m・南北3.72mを測り，主軸方向N－1°－Eを指し，方形を呈している。西壁において53号竪穴住居跡と重複している。

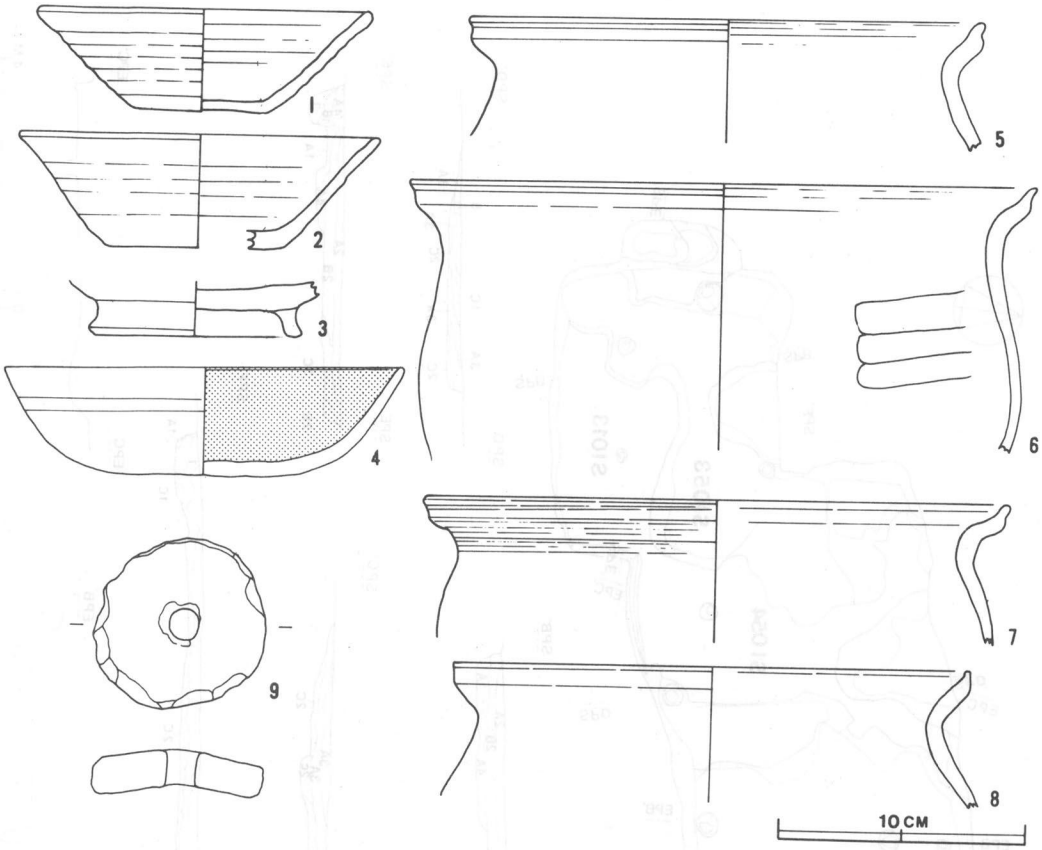
壁は，床面から垂直に立ち上がり，壁高は26cmを測る。壁溝は，確認されない。床面は全体に凸凹がみられ，黒色土・ロームブロック混じりで明確に把握できず，西側部分は重複により捉えられない。ピットは4か所検出され，深さは30～50cmを測る。

竈は，北壁中央部に位置し，粘土・砂を使用して構築され，壁を掘り込み，火床からなだらかに立ち上がって，煙道と煙出し孔を作っている。

遺物は，土師器・須恵器・漆付着土器が出土している。



第26図　13・53・54・55・56・60・63号竪穴住居跡実測図



第27図　13号竪穴住居跡出土遺物実測図

13号竪穴住居跡出土遺物観察表（第27図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 13.0 B 4.1 C 5.2	体部は外反気味に立ち上がり,口縁部は内反気味に開く。底部は上げ底気味。 器面外部はロクロ水挽き成形で，内面は平坦である。 底部は篦切り後篦削り。	暗灰黄色 砂粒・雲母 良好
2	S	坏	A 14.2 B 4.7	体部は外反気味に立ち上がり，口縁部は内反気味に開く。厚手の作りである。 器面外部はロクロ水挽き痕が残る。底部は篦切り後篦削り。	褐灰色 砂粒・砂礫 良好
3	S	高台付坏	D 8.0	底部は破片である。 高台は「ハ」の字状に開き，接地面は平坦である。	灰色 砂粒・砂礫 良好
4	H	坏	A 16.0 B 4.3 C 6.7	器面内部黒色処理。底部は丸底気味で，口縁部はやや斜めに立ち上がる。 外周は回転篦削り。底部は回転篦切り。	にぶい橙色 砂粒・長石・石英粒 良好
5	H	甕	A 20.8	胴部以下を欠損。 口縁部が外反する。口縁部周辺は横ナデ調整。	橙色 砂粒・砂礫 良好

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
6	H	甕	A 25.2	胴部以下を欠損。 口縁部が外反する。口縁部周辺は横ナデ，頸部以下は箆ナデが横方向に施されている。	明赤褐色 砂粒・砂礫 良好
7	H	甕	A (23.8)	胴の張った体部からやや丸く屈曲する口縁部が付き，端部を外上方につまみ出し，丸くおさめる。口頸部内・外面は横ナデ調整。体部内・外面は箆ナデ調整。	にぶい褐色 砂粒・長石粒・石英粒・スコリア・雲母 普通
8	H	甕	A (21.0)	胴の張った体部から「く」の字状に屈曲する口縁部が付き，端部はやや丸くおさめる。口頸部内・外面は横ナデ調整。体部内・外面は箆ナデ調整。	赤褐色 砂粒少・砂礫・白雲母 良好
9	有孔円板		径 7.0 厚さ1.5 孔径1.2	外周はごく一部を除き磨いてある。 孔は瓦の表から穿つ。	平瓦を利用 81g

14号竪穴住居跡（第28図）

調査区C4b7区を中心に確認され，東西5.34m・南北5.68mを測り，主軸方向N－12°－Eを指し，方形を呈している。

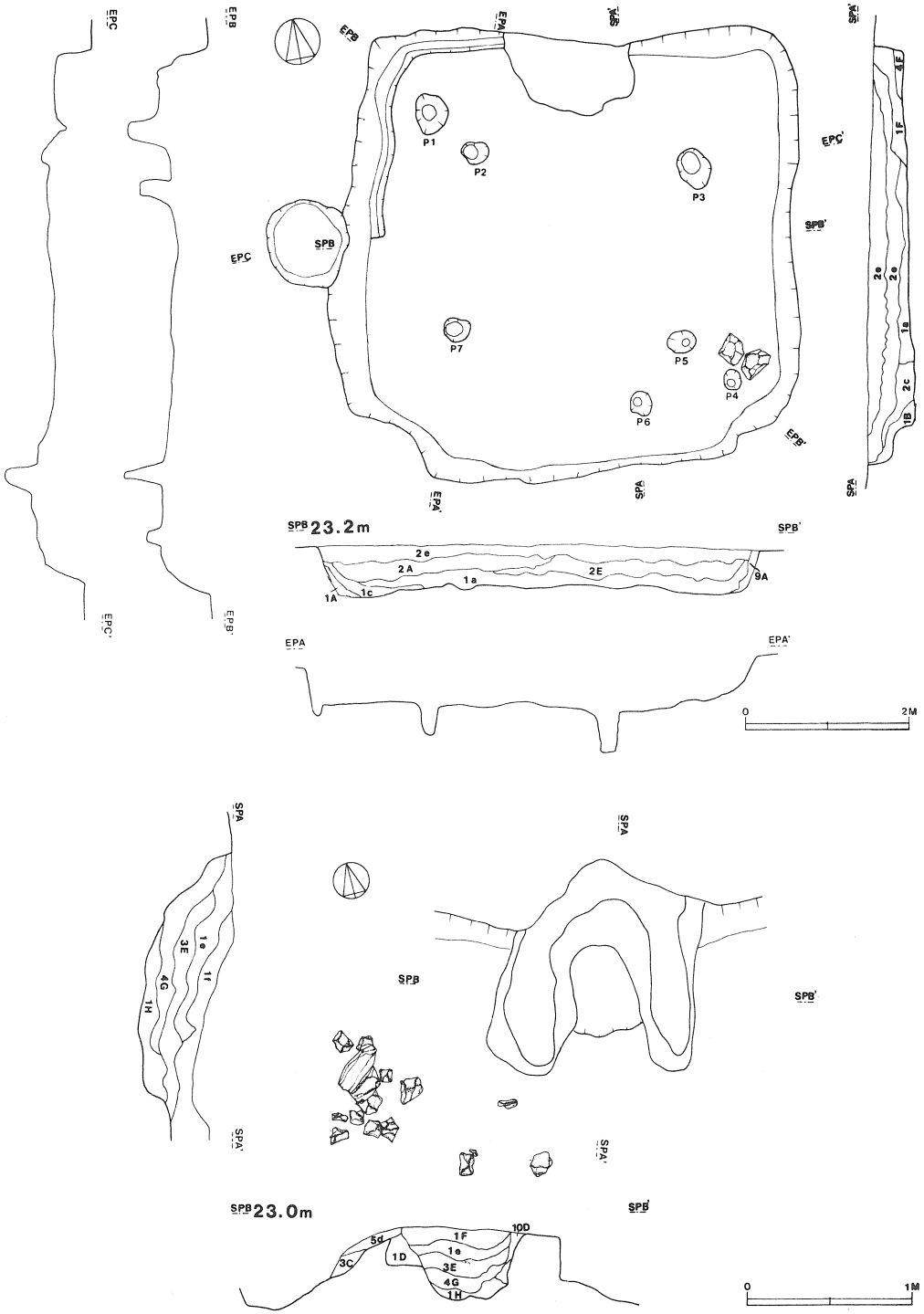
覆土中に，焼土・木炭が全体に堆積している。壁は床面からやや斜めに立ち上がり，壁高60cmを測る。床面は黒色土混じりで全体に凹凸が著しいが，部分的に良く踏み固められている。壁溝は幅14cm・深さ14cmを測るが，全体に壁直下に位置せず，壁下より25cm内側に確認されている。このことにより，壁の崩壊が考えられる。ピットは7か所検出され，30～40cmの楕円形を呈し，35～50cmの深さを測る。掘り込みは，垂直でなくやや斜めである。

竈は，北壁中央部に位置し，壁を掘り込み，粘土・砂を使用して構築され，火床からなだらかに立ち上がり，煙道と煙出し孔を作っている。

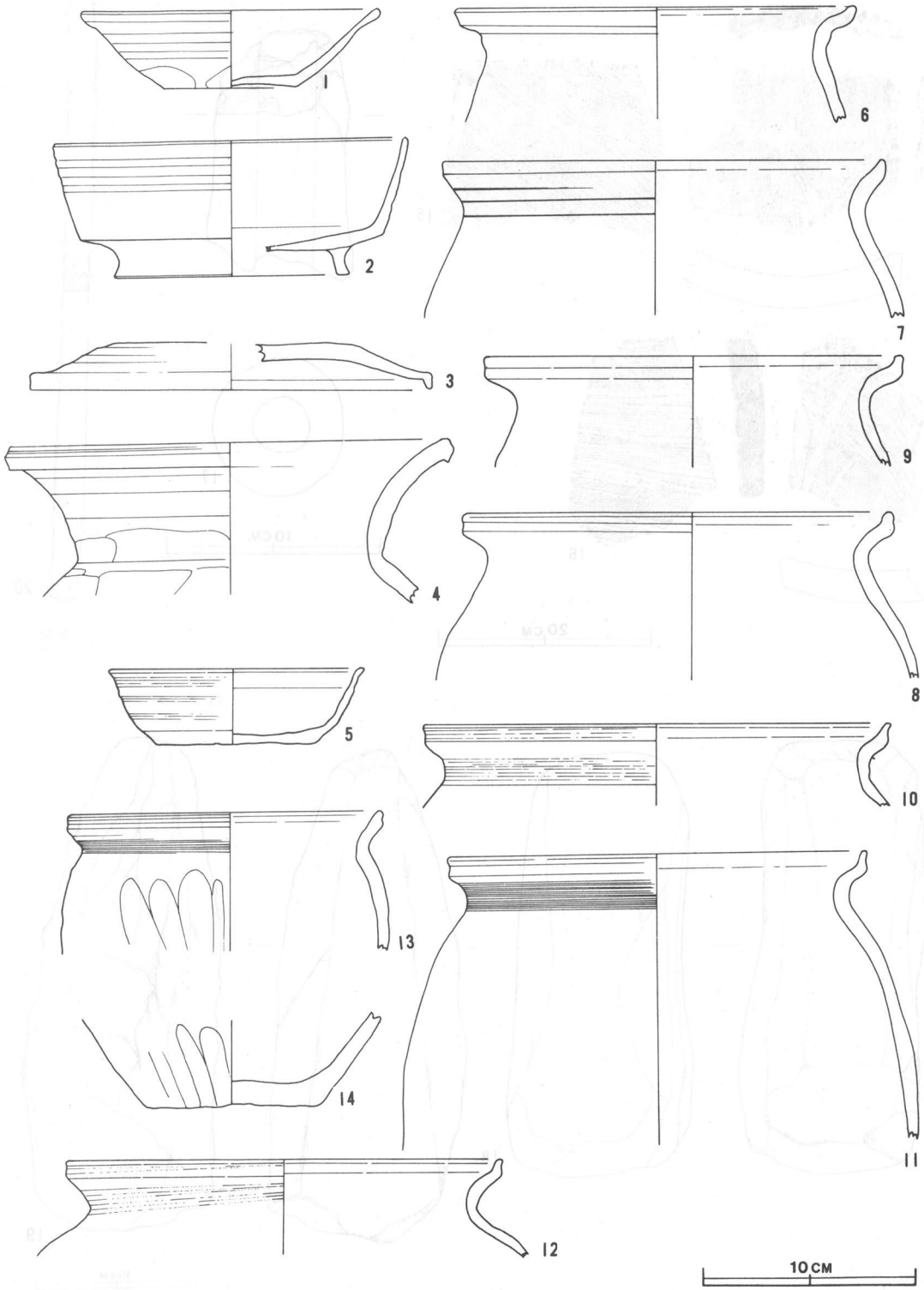
遺物は，土師器・須恵器・漆付着土器・瓦・羽口・鉄製品・鉄滓が出土している。

14号竪穴住居跡出土遺物観察表（第29・30図）

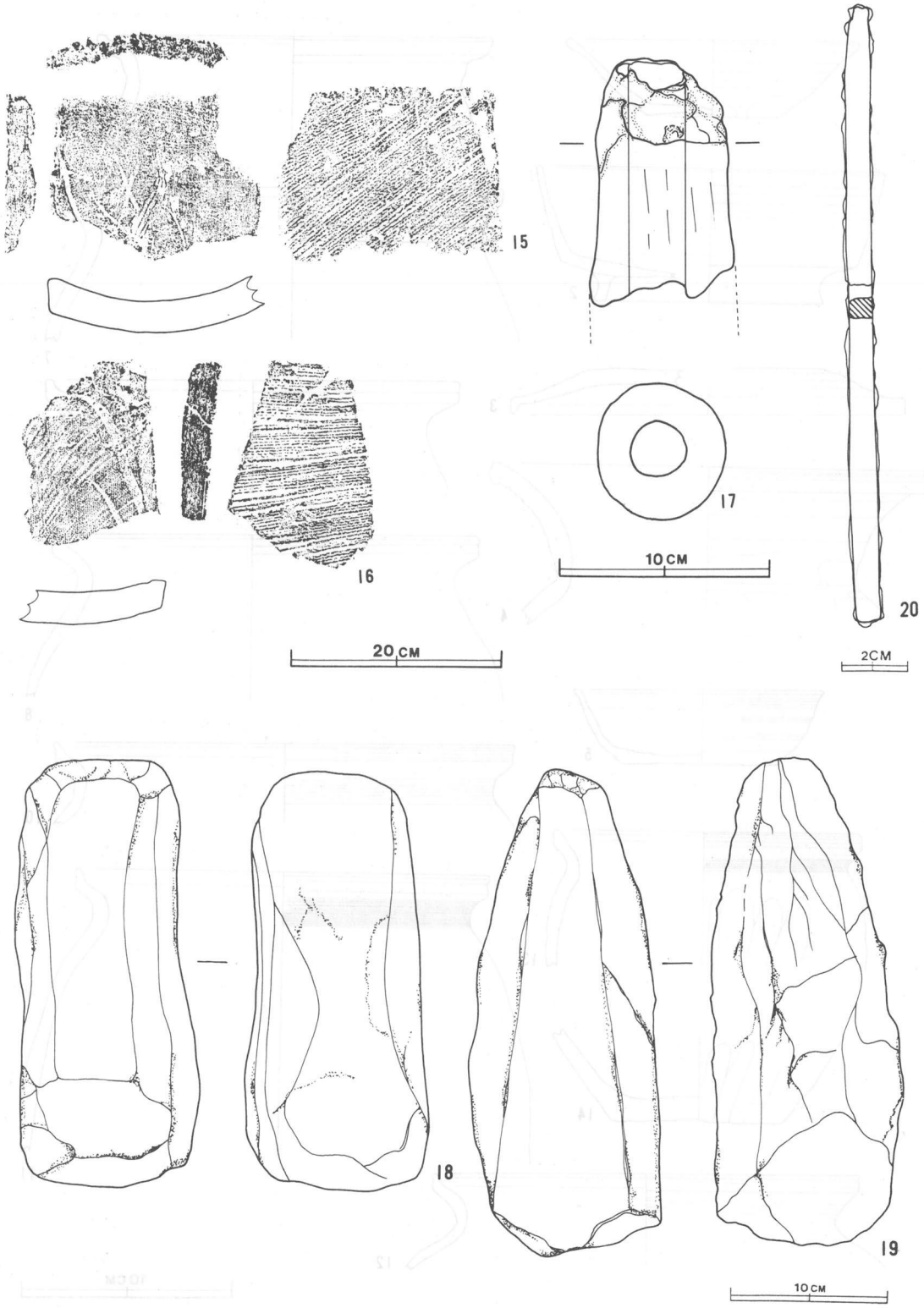
番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 13.1 B 4.7 C 7.8	体部は外反気味に立ち上がり，口縁部は内彎気味に開く。内面の立ち上がり部には稜が残る。 外周は箆削り，底部は上げ底気味で箆切り。	褐灰色 砂粒・砂礫 良好 体部内面に漆付着
2	S	高台付坏	A 12.9 B 4.3 D 6.5	体部は外反気味であるが，直線的に開く。体部と底部の境は屈曲するが，稜はにぶい。高台は丁寧な作り。接地面は平坦である。胴部にロクロ水挽き痕が残る。	灰色 砂粒・砂礫 良好
3	S	蓋	A 18.4	つまみが欠損。口縁部から天井部の移行部は段をなす。裾部端は直行する。天井部は回転箆削り。	灰色 砂粒・砂礫 良好



第28図　14号竪穴住居跡・竈実測図



第29図　14号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1)



第30図　14号竪穴住居跡出土遺物実測図 (2)

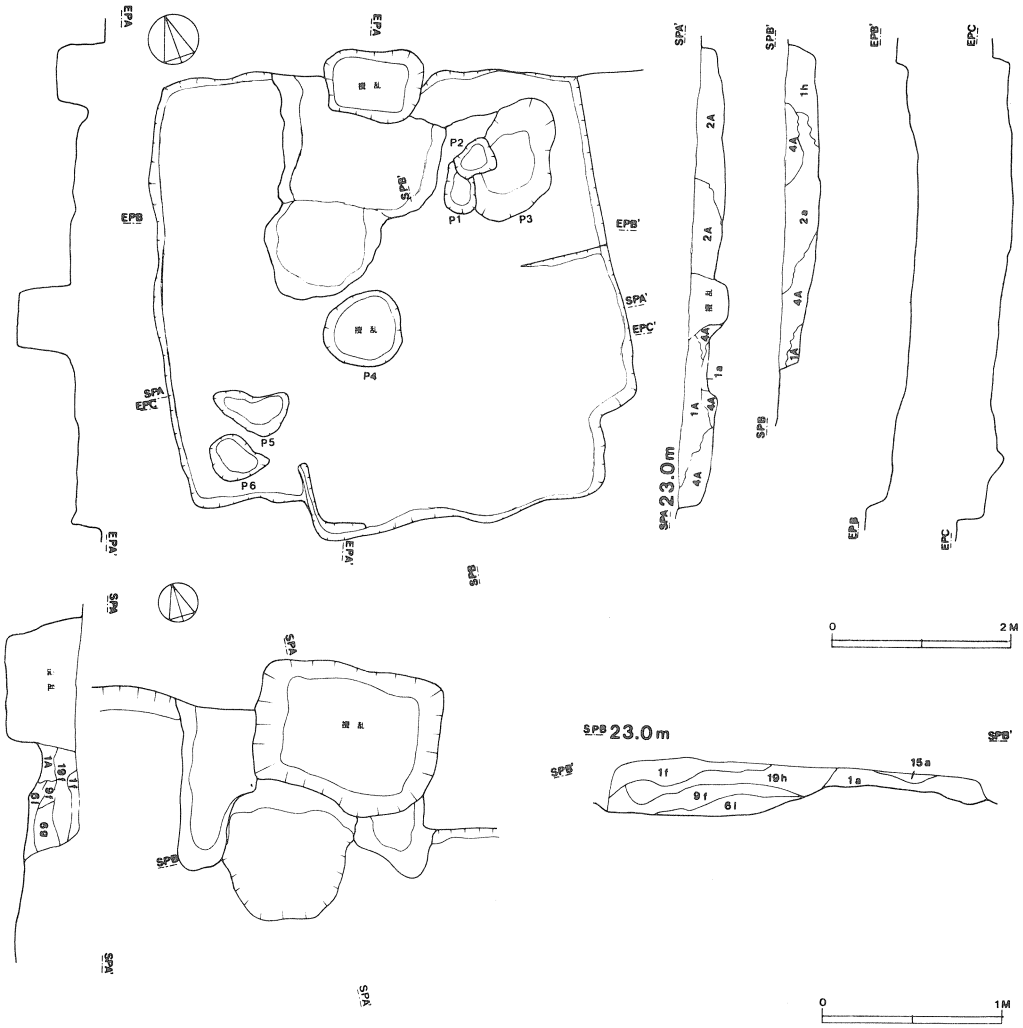
番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
4	S	甕	A 20.4	口縁部破片。口縁部はやや肥厚して段をなす。頸部から体部にかけて肩が張る。頸部には箆ナデが施される。	褐灰色 砂粒・砂礫 良好
5	H	坏	A 12.0 B 3.6 C 7.3	底部は平底で，体部は内彎気味に外上方にのび，口縁部はやや外反し，端部をやや丸くおさめている。 右ロクロ水挽き成形で，底部は回転箆切りで無調整。内面全体は横ナデ調整。	にぶい橙色 砂粒少・雲母・スコリア少 普通
6	H	甕	A 18.6	口縁部破片。口縁部は「く」の字状に外反する。頸部から胴部が張り出した器形である。頸部は横ナデ調整。	橙色 砂粒・長石粒・石英粒・スコリア・雲母 良好
7	H	甕	A 20.6	口縁部破片。口縁部は「く」の字状に外反する。 頸部から胴部が張り出した器形。口縁部・器面内部は横ナデ・胴部はナデ調整。	橙色 砂粒・長石粒・石英粒 良好
8	H	甕	A 19.9	口縁部破片。口縁部は横ナデ，胴部はナデ調整。	橙色 砂粒・長石粒・石英粒 良好
9	H	甕	A (19.8)	胴の張った体部から丸く屈曲する口縁部が付き端部をほぼ垂直につまみ出し，丸くおさめている。 口頸部内・外面は横ナデ調整。体部内・外面は箆ナデ調整。	にぶい黄橙色 砂粒少・砂礫・スコリア・雲母 普通 体部に二次焼成痕
10	H	甕	A (22.0)	胴の張った体部から頸部は僅かに立ち上り，口縁部はやや内彎気味に開く。口頸部内・外面は横ナデ調整。体部内・外面は箆ナデ調整。	灰黄褐色 砂粒・砂礫・スコリア・雲母 良好
11	H	甕	A 19.6	口縁部破片。口縁部，器面内・外面は横ナデ。胴部はナデ調整。	褐色 砂粒・長石粒・石英粒 良好
12	H	甕	A (20.4)	胴の張った体部から「く」の字状に鋭く屈曲する口縁部が付き，端部をほぼ垂直につまみ出す。 口頸部内・外面は横ナデ調整。体部内・外面は箆ナデ調整。	にぶい褐色 砂粒・砂礫・スコリア・雲母 普通
13	H	甕	A 14.4	口縁部破片。口縁部は「く」の字状に外反する。口縁部は横ナデ，胴部外面の調整は縦方向の箆削り。	赤褐色 砂粒・長石粒・石英粒 良好
14	H	甕	C 8.0	底部破片。器面調整は，粗い箆削りとナデが施されている。	赤褐色 砂粒・長石粒・石英粒・雲母 良好 底部外面木葉痕
15	平瓦			凹面は織目の粗い布目痕をとどめ，凸面は縄目の叩きがある。 両面とも瓦当部周縁にわたって箆削りが施されている。	にぶい黄橙色 砂礫 軟質
16	平瓦			凹面は織目の細い布目痕をとどめ，凸面は縄目の叩きがある。	浅黄色 砂礫 やや硬質　2次焼成を受け自然釉付着

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
17	羽口	全長(11.5) 外径 6.8 孔径 2.8	末端がやや太くなっている。	先端に鉄が付着。	19	砥石	厚さ 11.0	大形の砥石である。三～五面に使用痕が認められ平坦部分が最も良く利用されている。中央部分は若干彎曲する。	凝灰質砂岩
18	砥石	最大長 26.9 厚さ 10.0	大形の砥石である。三～五面に使用痕が認められ，平坦部分が最も良く利用されている。中央部分は若干彎曲する。	凝灰質砂岩	20	不明鉄製品	残存長 11.5	釘あるいは茎残存と思われる鉄器である。	

15号竪穴住居跡（第31図）

調査区 C4b9区を中心に確認され，東西5.19m・南北4.97mを測り，主軸方向N－24°－Eを指し，方形を呈している。北東部コーナーにおいて51号竪穴住居跡と重複している。

覆土中には，木炭・焼土・鉄滓が多量に認められる。壁は西側で壁高20～25cmを測り，垂直に立ち上がるが，東壁は斜めに立ち上がる。床面に凹凸がみられるが，良く踏み固められてい

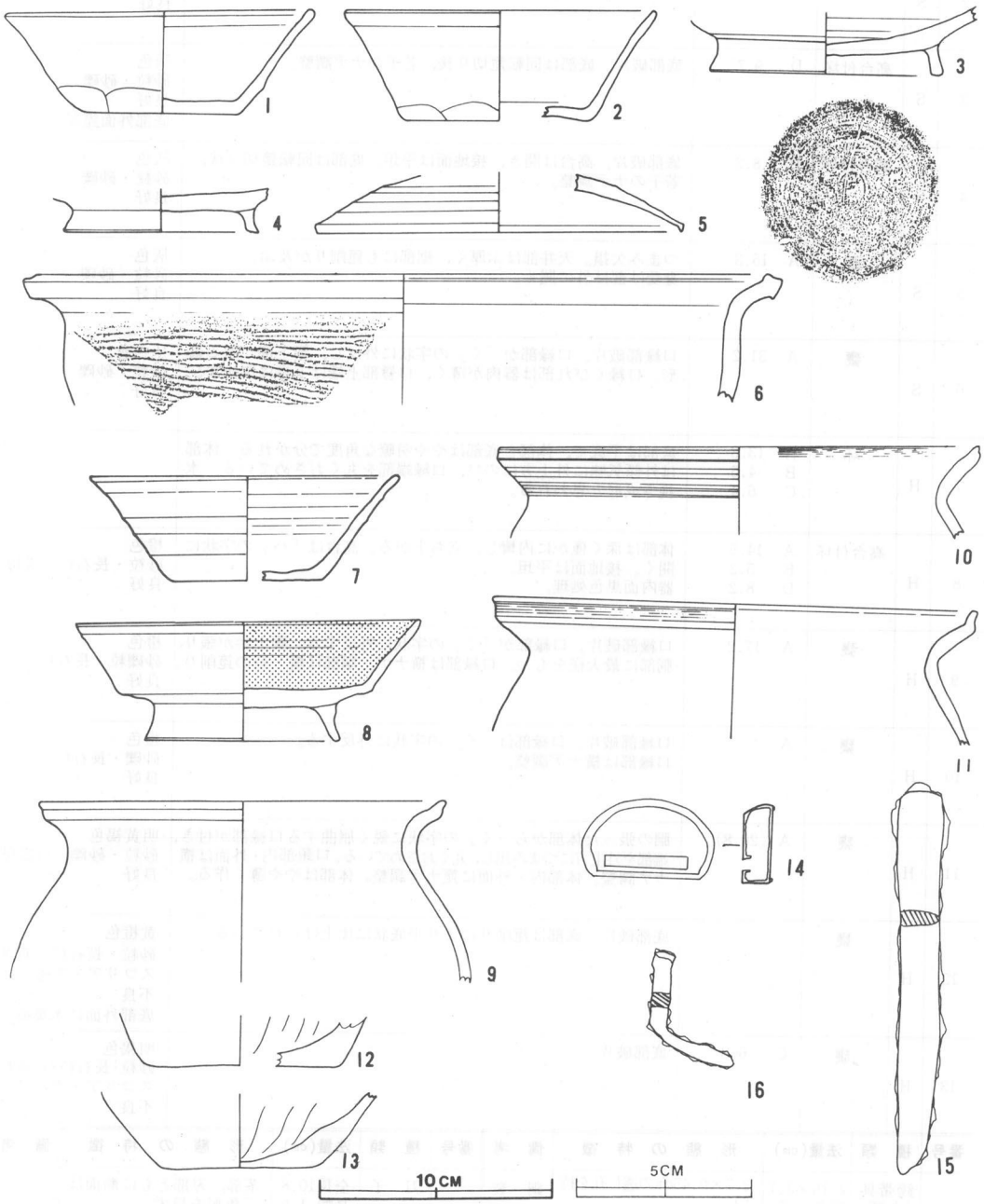


第31図　15号竪穴住居跡・竈実測図

る。壁溝は南壁下に一部検出され，幅15cm・深さ10cmを測る。ピットは，6か所検出された。

竈は，北壁中央部に位置し，袖部は残存しているが，煙道・煙出し孔は攪乱により確認できない。

遺物は，土師器・須恵器・墨書土器・漆付着土器・砥石・鋳帯具・鉄滓が出土している。鉄滓の量は膨大である。



第32図　15号竪穴住居跡出土遺物実測図

15号竪穴住居跡出土遺物観察表（第32図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 12.9 B 4.3 C 6.5	体部は外反気味に立ち上がり，口縁部は内彎気味に外反する。外周は篦削りで面取りする。	灰色 砂粒・砂礫 良好
2	S	坏	A 13.1 B 4.7	体部は外反気味に立ち上がり，口縁部はさらにおれる。体部は水挽き成形。底部は篦切り後篦削り。	灰色 砂粒・砂礫 良好
3	S	高台付坏	D 9.7	底部破片。底部は回転篦切り後，若干のナデ調整。	灰色 砂粒・砂礫 良好 底部外面篦記号
4	S	高台付坏	D 8.2	底部破片。高台は開き，接地面は平坦。底部は回転篦切り後，若干のナデ調整。	灰色 砂粒・砂礫 良好
5	S	蓋	A 15.3	つまみ欠損。天井部はぶ厚く，裾部にも篦削りが及ぶ。身受け部は外に開く。	灰色 砂粒・砂礫 良好
6	S	甕	A 31.2	口縁部破片。口縁部が「く」の字状に外反し，胴上部が張る器形。口縁くびれ部は器肉が薄く，口唇部上端は上半に突出する。	灰白色 砂粒・砂礫 良好
7	H	坏	A 13.3 B 4.5 C 6.4	底部は平底で，体部と底部はやや明瞭な角度で分かれる。体部は外傾気味に外上方にのび，口縁端部を丸くおさめている。水挽き成形と思われる。	
8	H	高台付坏	A 14.5 B 5.2 D 8.2	体部は深く僅かに内彎し，立ち上がる。高台は「ハ」の字状に開く。接地面は平坦。 器内面黒色処理。	橙色 砂粒・長石粒・雲母 良好
9	H	甕	A 17.2	口縁部破片。口縁部が「く」の字状に外反する。胴上半が張り，胴部に最大径をもつ。口縁部は横ナデ。胴部は横・斜の篦削り。	橙色 砂礫粒・長石粒 良好
10	H	甕	A	口縁部破片。口縁部は「く」の字状に外反する。 口縁部は横ナデ調整。	橙色 砂礫・長石粒 良好
11	H	甕	A (20.8)	胴の張った体部から「く」の字状に鋭く屈曲する口縁部が付き，端部を外上方につまみ出し，丸くおさめている。口頸部内・外面は横ナデ調整。体部内・外面に篦ナデ調整。体部はやや薄く作る。	明黄褐色 砂粒・砂礫・白雲母 良好
12	H	甕		底部破片。底部は篦削りにより平底状に仕上げられている。	黄橙色 砂粒・長石粒　石英粒 スコリア・雲母 不良 底部外面に木葉痕
13	H	甕	C 6.8	底部破片。	明褐色 砂粒・長石粒・石英粒・スコリア・雲母 不良

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
14	銙帯具（丸鞆）	2.15×3.7 厚さ0.65	2.7×0.45cmの透し孔を持つ。 裏面には長さ0.5cmの鋲が3本三角形状に打たれている。裏金具は欠損。	銅製	15	刀子	全長10.8 身幅 1.0 身厚0.45	茎部，刃部ともに断面は三角形を呈す。 銹化が進行している。	

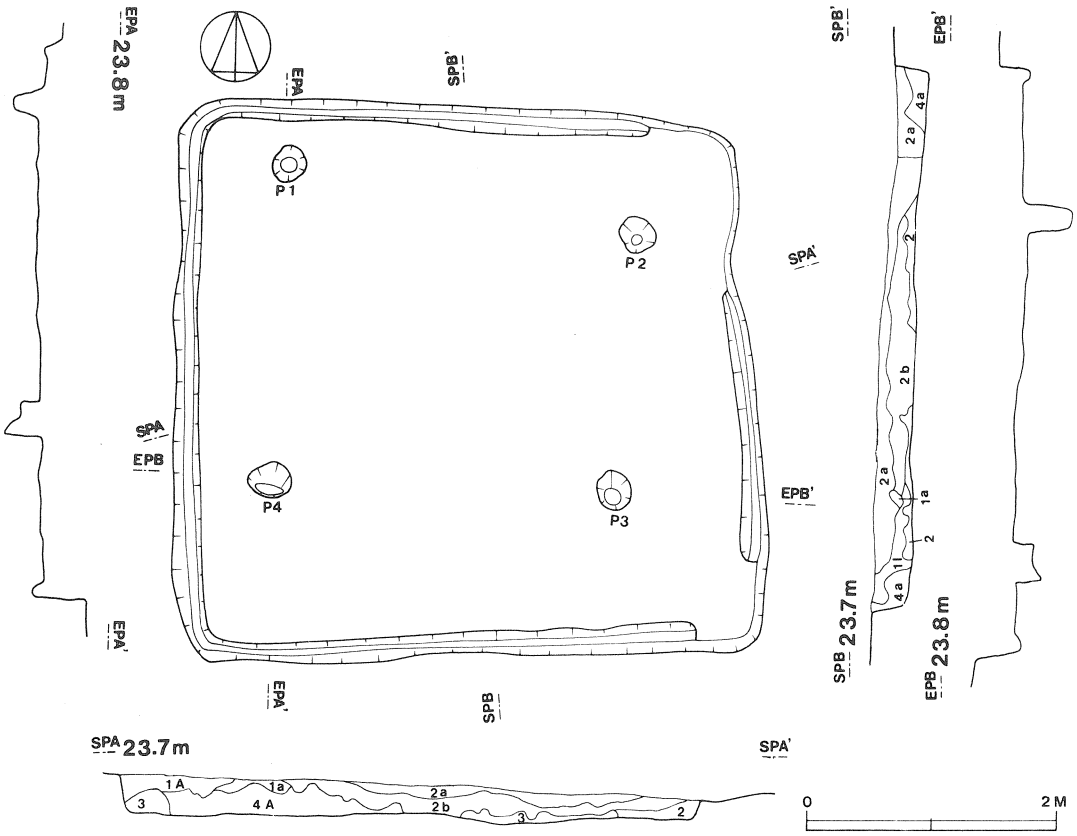
番号	種　類	法量(cm)	形　態　の　特　徴	備　考
16	釘	全長5.0 太さ0.4	頭部を折り曲げ，断面は方形を呈す。	先端に一部木質付着。

16号竪穴住居跡（第33図）

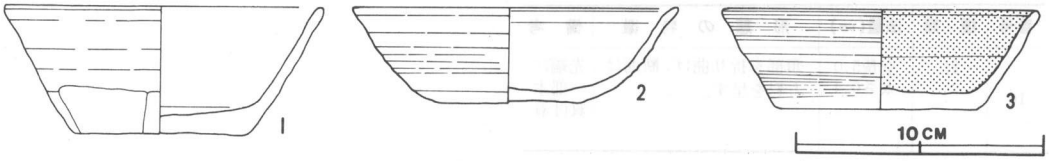
調査区C4f$_4$区を中心に確認され，東西4.64m・南北4.38mを測り，主軸方向N－6°－Wを指し，方形を呈している。

覆土中には，全体に木炭粒子を含み，下部においては焼土が多量に含まれている。壁は床面から垂直に立ち上がり，壁高33cmを測る。床面は全体に平坦であり，硬く良好である。壁溝は幅15cm・深さ10cmを測り，北東コーナー部を除いて，ほぼ全周している。ピットは4か所あり，直径20～25cm・深さ15～35cmを測り，全体に垂直に掘られている。

遺物は，土師器・須恵器・漆付着土器が出土している。



第33図　16号竪穴住居跡実測図



第34図　16号竪穴住居跡出土遺物実測図

16号竪穴住居跡出土遺物観察表（第34図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 13.0 B 5.1 C 7.0	口縁部は内反気味に開き，底部はやや上げ底気味で厚手の作り。底部から体部下端に回転箆削り。底部中央において僅かに回転箆切り痕。	灰色 砂粒・砂礫粒 良好 器内面に漆付着
2	H	坏	A 13.0 B 3.8 C 5.6	やや盛り上がった平底の底部から体部は内彎気味に外上方にのびる。口縁部はやや外反して端部を丸くおさめている。	
3	H	坏	A 12.6 B 4.0 C 8.2	底部は平底で，体部はやや内彎気味に外上方にのび，口縁端部を丸くおさめている。水挽き成形と思われ，内面は黒色処理。	にぶい褐色 砂粒・砂礫・長石粒・雲母 良好

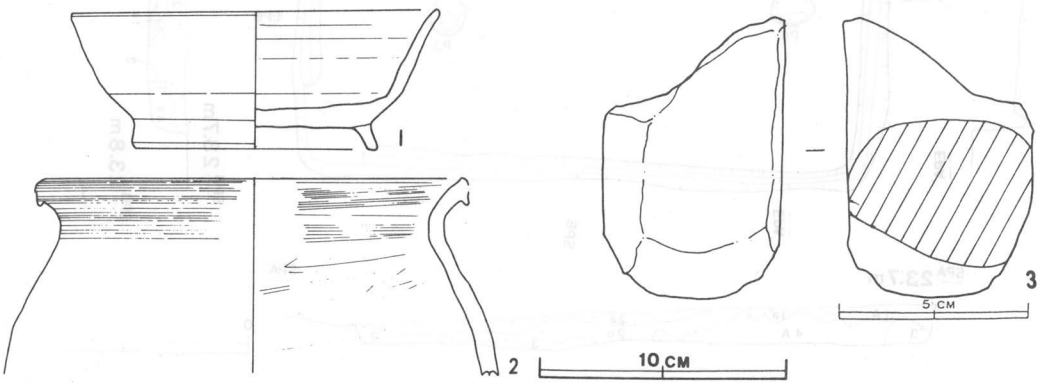
17号竪穴住居跡（第36図）

調査区C4j_6区を中心に確認され，東西4.35m・南北3.93mを測り，主軸方向N－18°－Eを指し，方形を呈している。

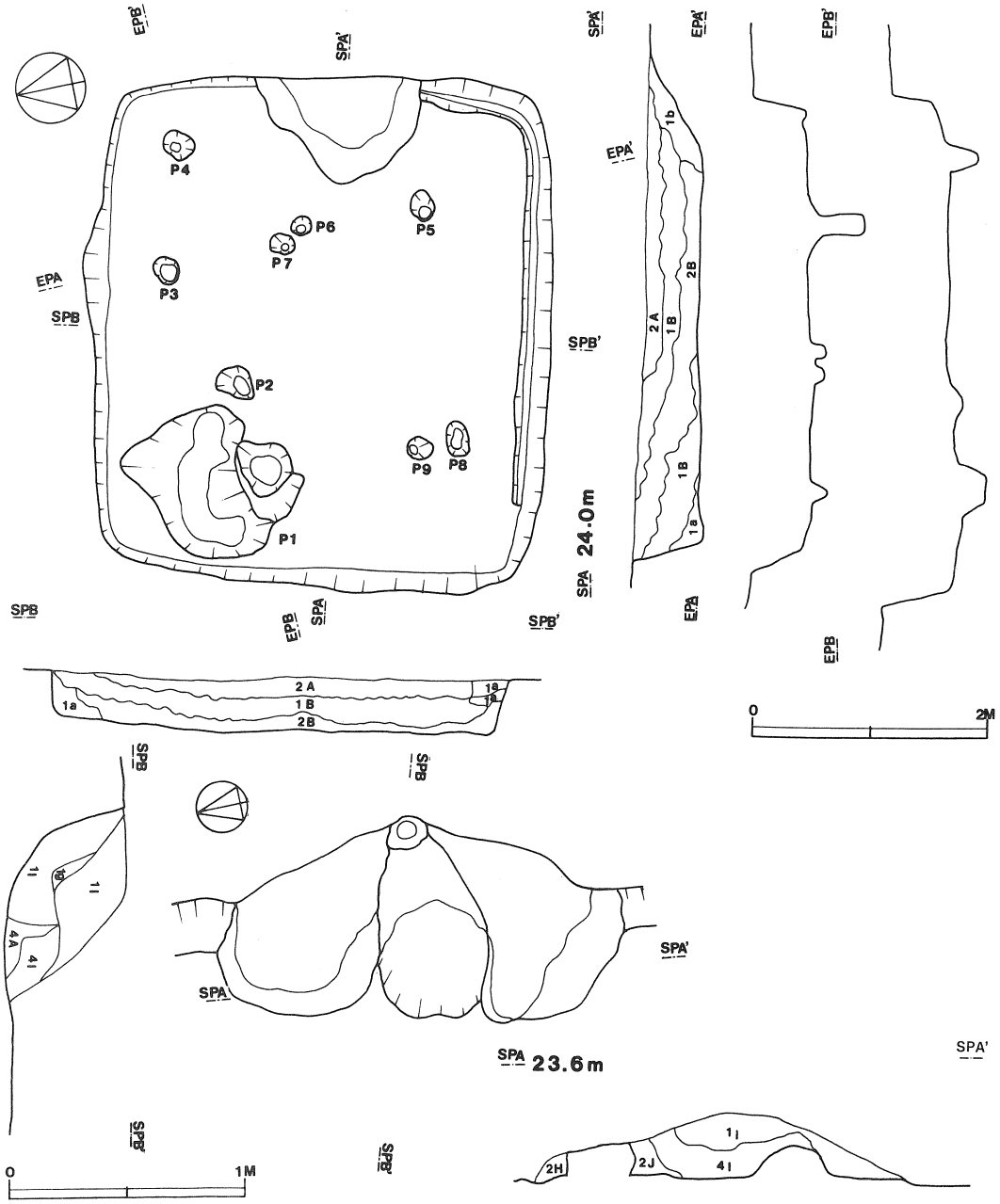
壁は，床面から垂直に立ち上がり，壁高42cmを測る。床面は全体に平坦で，硬く良好である。壁溝は，幅10cm・深さ4cmを測る。ピットは9か所検出され，上部径は25～35cm・底面径15～20cmを測り，広口になっている。

竈は，東壁中央部に位置し，粘土・砂を使用して構築され，壁を掘り込み，火床からなだらかに立ち上がり，煙道と煙出し孔を作っている。

遺物は，土師器・須恵器・瓦・砥石・鉄滓が出土している。



第35図　17号竪穴住居跡出土遺物実測図



第36図　17号竪穴住居跡・竈実測図

17号竪穴住居跡出土遺物観察表（第35図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	高台付坏	A 15.0 B 5.5 D 10.0	体部は内彎気味に立ち上がり，口唇部近くで僅かに外反し，丸味をもつ。高台は貼り付け。ナデが施されている。接地面は平坦である。	灰色 砂粒・砂礫 良好

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
2	H	甕	A (17.3)	口縁部は外反し,「く」の字状を呈し，横ナデが施されている。頸部以下は箆ナデが横方向に，内面はナデ調整。	橙色 砂粒・長石粒・石英粒 良好
3	砥石		7.5×5 3.8	長方形を呈す。研磨による摩滅がみられ，滑らかで丸味を帯びている。	凝灰岩

18号竪穴住居跡（第37図）

調査区B3j_0区を中心に確認され，東西6.65m・南北5.65mを測り，主軸方向N－16°－Eを指し，隅丸方形を呈している。

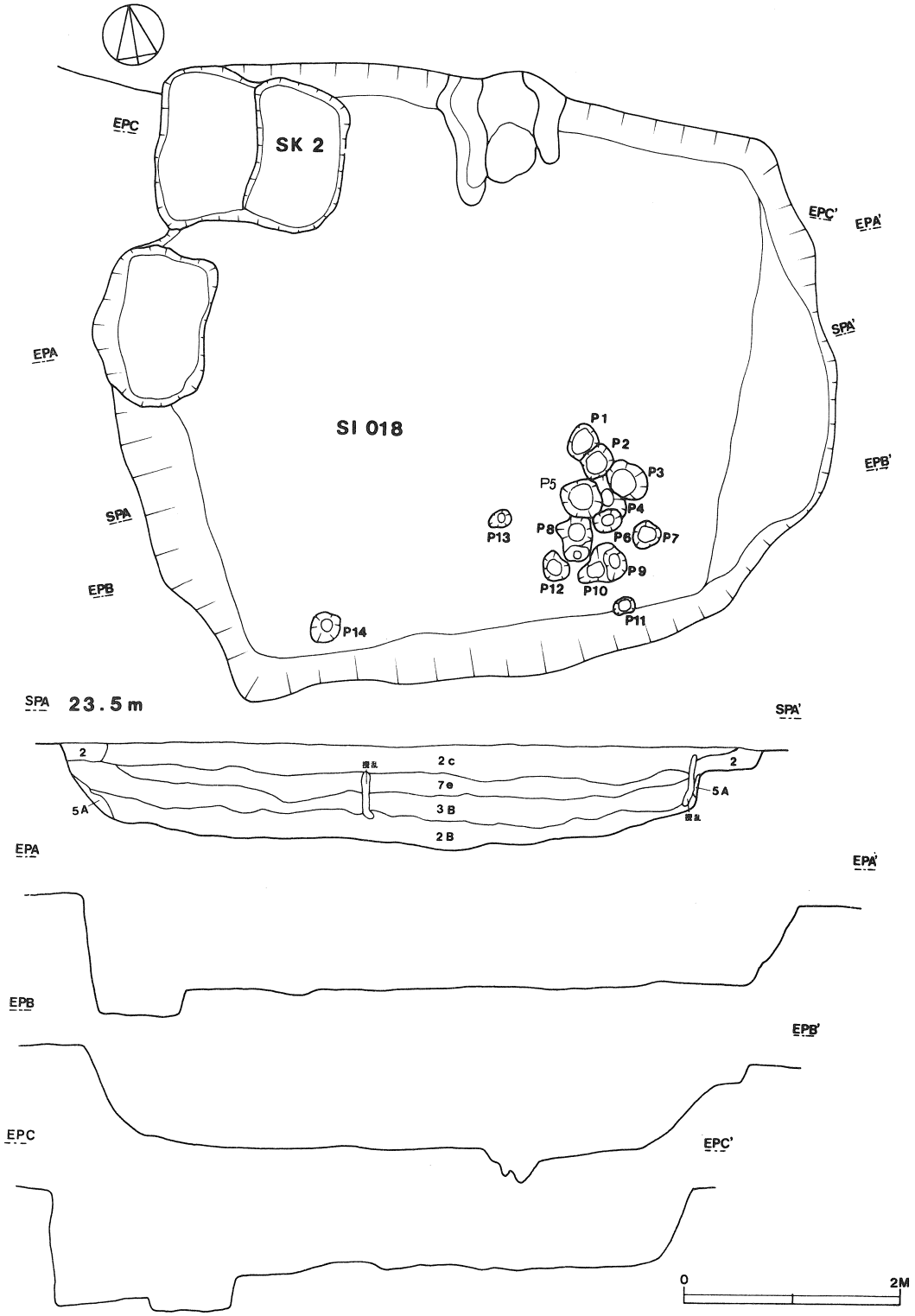
覆土は，全体にロームブロック・焼土粒子を含んでいる。壁は床面からやや斜めに立ち上がり，壁高80cmを測る。床面の南側の部分に凹凸がみられるが，硬く良好である。壁溝は確認されなかった。柱穴は15か所あり，浅いものもみられるが，全体に深い。

竈は，北壁中央部に位置し，粘土・砂を使用して構築され，焚口・火床からなだらかな立ち上がり，煙道と煙出し孔を作っている。

遺物は，土師器・須恵器・墨書土器・漆付着土器が出土している。

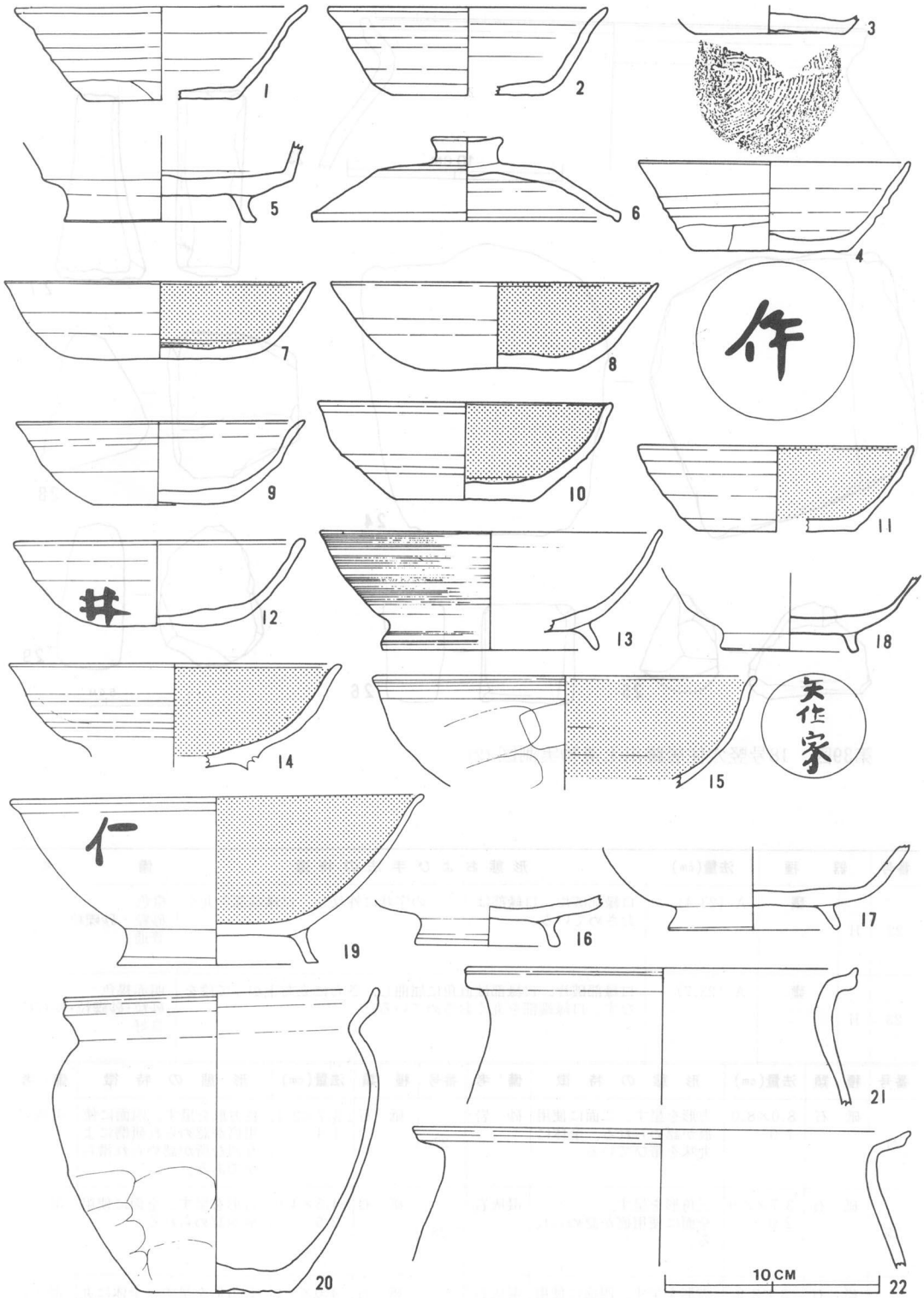
18号竪穴住居跡出土遺物観察表（第38・39図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 12.5 B 4.3 C 6.9	底部は平底を呈し，箆削り，口縁部は外反気味に立ち上がる。体部と口縁部の境目あたりの器肉は薄く，口唇部はやや肥厚している。器面には水挽き痕が残る。	黄灰色 砂粒・砂礫 良好
2	S	坏	A 13.0 B 4.1 C 7.0	底部は平底を呈し，器肉が厚く，口縁部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反する。器面には水挽き痕が残り，底部は上げ底を呈し，箆削り。	灰色 砂粒・砂礫 良好
3	S	坏		底部破片。底部は糸切り後に箆削り調整が施されている。	灰白色 砂粒・砂礫 良好 内面に漆付着
4	S	坏	A 13.7 B 4.2 C 7.5	体部は外反気味に立ち上がり，底部が平底を呈す。底部，体部下半に箆削り。	灰色 砂粒 良好 底部外面に「件」の字墨書
5	S	高台付坏	D 15.5	底部破片。高台接地面は平坦である。	灰色 砂粒・砂礫 良好
6	S	蓋	A 14.0	口径に比べて器高が低い。身受け部「く」の字状に屈曲する。身受け端部は若干丸味を帯びる。つまみは扁平な形状を呈す。天井部に回転箆削り。	灰赤色 砂粒・砂礫・白雲母 良好

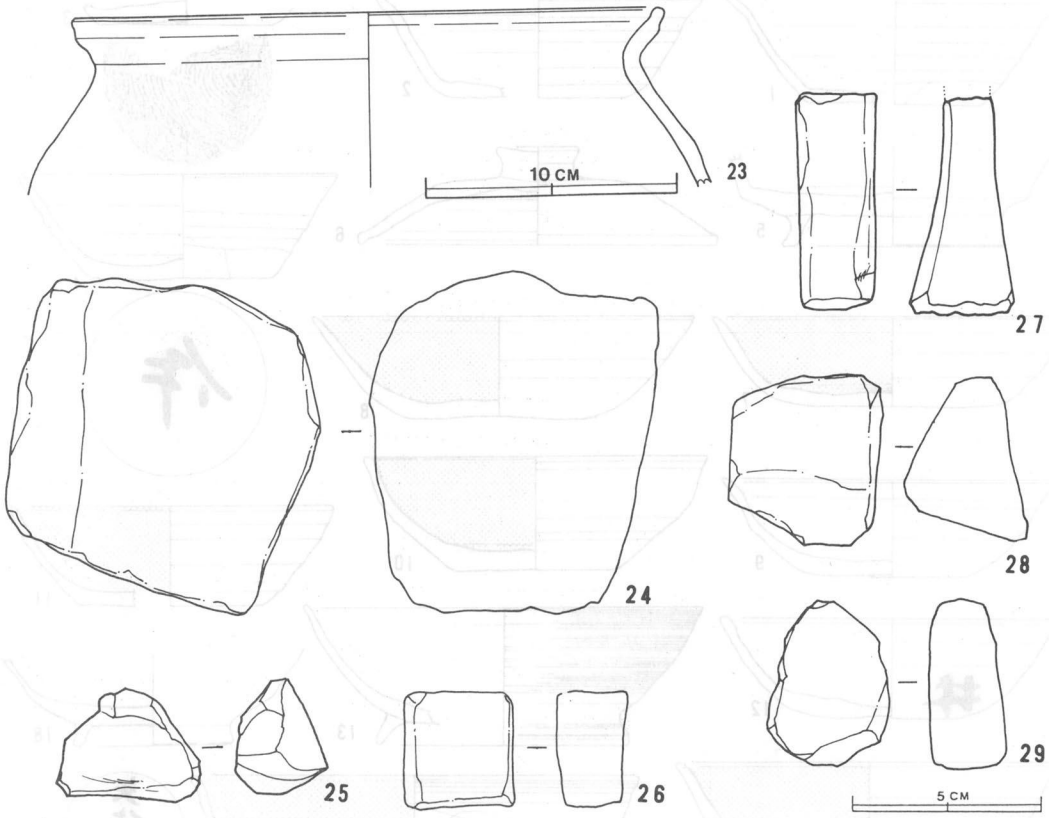


第37図　18号竪穴住居跡実測図

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
7	H	坏	A 14.5 B 3.6 C 7.5	底部及び体部下半に左回りの回転篦削りを行い，再調整を施す。内面は底部に一方向の篦磨きを施し，体部に斜め及び横方向の篦磨き仕上げ，内面は黒色処理。体部は直線的に開き，口縁端部まで至る。	橙色 砂粒・砂礫・長石粒 良好
8	H	坏	A 12.2 B 4.0 C 7.0	体部は直線的に開き，口縁端部まで至る。底部と体部下半に篦削り，内面は調整痕が認められ，黒色処理が施されている。	橙色 砂粒・砂礫粒・長石粒・石英粒 良好
9	H	坏	A (13.3) B 3.9 C 5.9	底部は平底で，体部と底部の境界はあまり明瞭でない。体部は内彎気味に外上方にのび，口縁部は外反して端部を丸くおさめる。全体に摩滅が進行。	にぶい橙色 砂粒・砂礫 普通
10	H	坏	A (13.6) B 4.6 C 6.4	底部は平底で，体部と底部は明瞭な角度で分かれる。体部は内彎気味に外上方にのび，口縁部はやや外反し，端部を丸くおさめる。水挽き成形で，底部は篦ナデ調整，内面は黒色処理。	にぶい橙色 砂粒・砂礫・雲母少 普通
11	H	坏	A (13.8) B 4.0 C 7.4	底部は平底で，体部と底部はやや明瞭な角度で分かれる。体部は内彎気味に外上方にのび，口縁部はやや肥厚して端部を丸くおさめる。水挽き成形で，内面は黒色処理。	にぶい橙色 砂粒・砂礫・スコリア・雲母 普通
12	H	坏	A (13.3) B 4.0 C 6.6	丸味を帯びた底部から，体部は内彎気味に外上方にのび，口縁端部を丸くおさめる。水挽き成形と思われ，底部は回転篦切り後篦ナデ調整か。	灰黄色 砂粒・砂礫 ・雲母 良好 体部外面に墨書
13	H	高台付坏	A 15.9 B 5.5 D 10.0	口縁部が外反気味に立ち上がり，高台は「ハ」の字状を呈し，先端は尖る。底部と体部下半は横ナデが施され，体部外面は水挽き後に篦整形がみられる。底部は左回りの回転篦切り。	明赤褐色 砂粒・砂礫 良好
14	H	高台付坏	A 15.4	口縁部が外反気味に立ち上がる。底部・高台部は欠損している体部外面に水挽き痕が認められ，内面は篦磨きで仕上げ，内面黒色処理。	褐色 砂粒・砂礫・長石粒 普通
15	H	高台付坏	A 17.5	口縁部は外反して立ち上がる。底部欠損。体部は水挽き後にナデがみられる。内面は篦磨きで仕上げ，黒色処理。	にぶい橙色 砂粒・砂礫 良好
16	H	高台付坏	D 6.4	底部・高台破片。高台は貼り付け，ナデ調整。	淡橙色 砂粒・石英粒 良好
17	H	高台付坏	D 7.8	底部・高台破片。高台接地面は尖る。高台は貼り付け，ナデ調整。	赤褐色 砂粒・長石・石英粒 良好
18	H	高台付坏	D 6.2	体部は内彎気味に外上方にのびる。高台は貼り付けで「ハ」の字状に外下方にのび，端部は平坦をなす。	底部外面に墨書
19	H	高台付坏	A 19.3 B 7.8 D 9.4	口縁部は外反気味に立ち上がり，高台接地面は平坦である。底部及び体部下半に右回りの回転篦削り。内面は篦磨きで黒色処理。	淡橙色 砂粒・長石・石英粒 良好 体部に墨書
20	H	甕	A 14.7 B 14.0 C 7.1	口縁部は「く」の字状に屈曲して立ち上がって段をなし，口縁部端部を丸くおさめている。体部はロクロナデの後底部近くで横方向の篦削り。胴部周辺は，縦方向に篦削り。内面はナデの後，篦状工具によってナデが施されている。	橙色 砂粒・砂礫粒 普通
21	H	甕	A (18.5)	口縁部破片。口縁部はほぼ直角に屈曲し，さらに立ち上がって段をなす。口縁部内側は外側の段に対応せず，頸部との境に急な変化点をもつ。	橙色 砂粒・砂礫粒・長石・石英粒・スコリア・雲母 普通



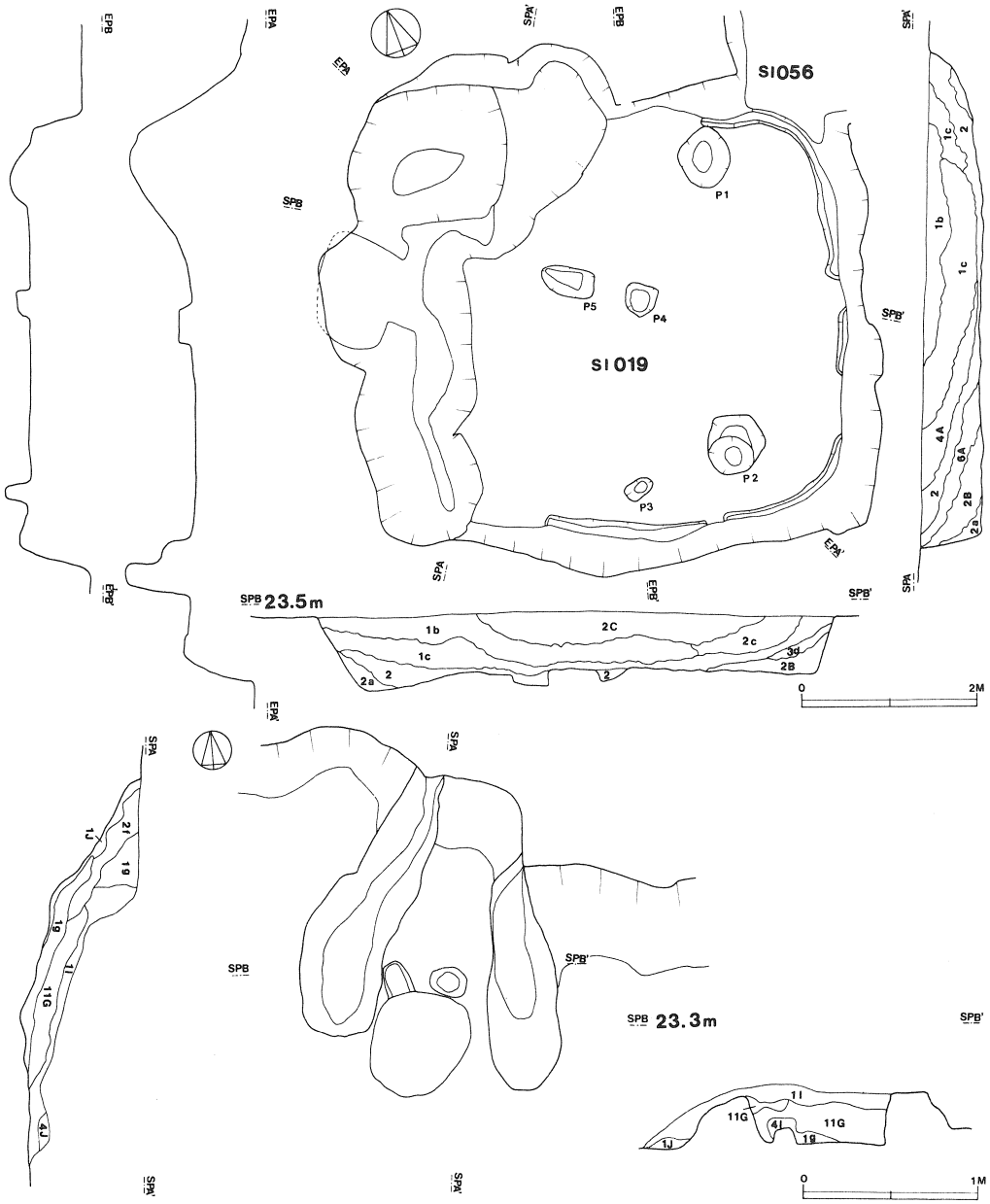
第38図　18号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1)



第39図　18号竪穴住居跡出土遺物実測図 (2)

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
22	H	甕	A (23.4)	口縁部破片。口縁部は「く」の字状に外反し，口縁端部を丸くおさめている。	橙色 砂粒・砂礫粒 普通
23	H	甕	A (23.7)	口縁部破片。口縁部は直角に屈曲し，さらに立ち上がって段をなす。口縁端部を丸くおさめている。	明赤褐色 砂粒・砂礫粒・長石粒 良好

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
24	砥石	8.0×8.0 7.0	方形を呈す。二面に使用痕が認められる。全体に丸味を帯びている。	砂岩	27	砥石	5.7×2.1 1.4	長方形を呈す。四面に使用痕が認められ研磨により凹む所が認められ滑らかである。	凝灰岩
25	砥石	3.7×2.9 2.0	三角形を呈す。 全面に使用痕が認められる。	凝灰岩	28	砥石	4.5×4.0 2.5	台形を呈す。全面に使用痕が認められる。	凝灰岩
26	砥石	3 ×2.9 1.8	方形を呈す。四面に使用痕が認められる。全体に滑らかである。	凝灰岩	29	砥石	4.0×3.2 2.0	長方形を呈す。全体に丸味を帯びている。稜は明確ではない。	凝灰岩



第40図　19号竪穴住居跡・竈実測図

19号竪穴住居跡（第40図）

調査区C4c1区を中心に確認され，東西6.15m・南北6.10mを測り，主軸方向N－20°－Eを指し，隅丸方形を呈している。

覆土中には，木炭・焼土が認められ，また部分的にロームブロックが混入している状態からこれらの混入物は投棄されたものと思われる。壁はやや斜めに立ち上がり，壁高75cmを測る。床面

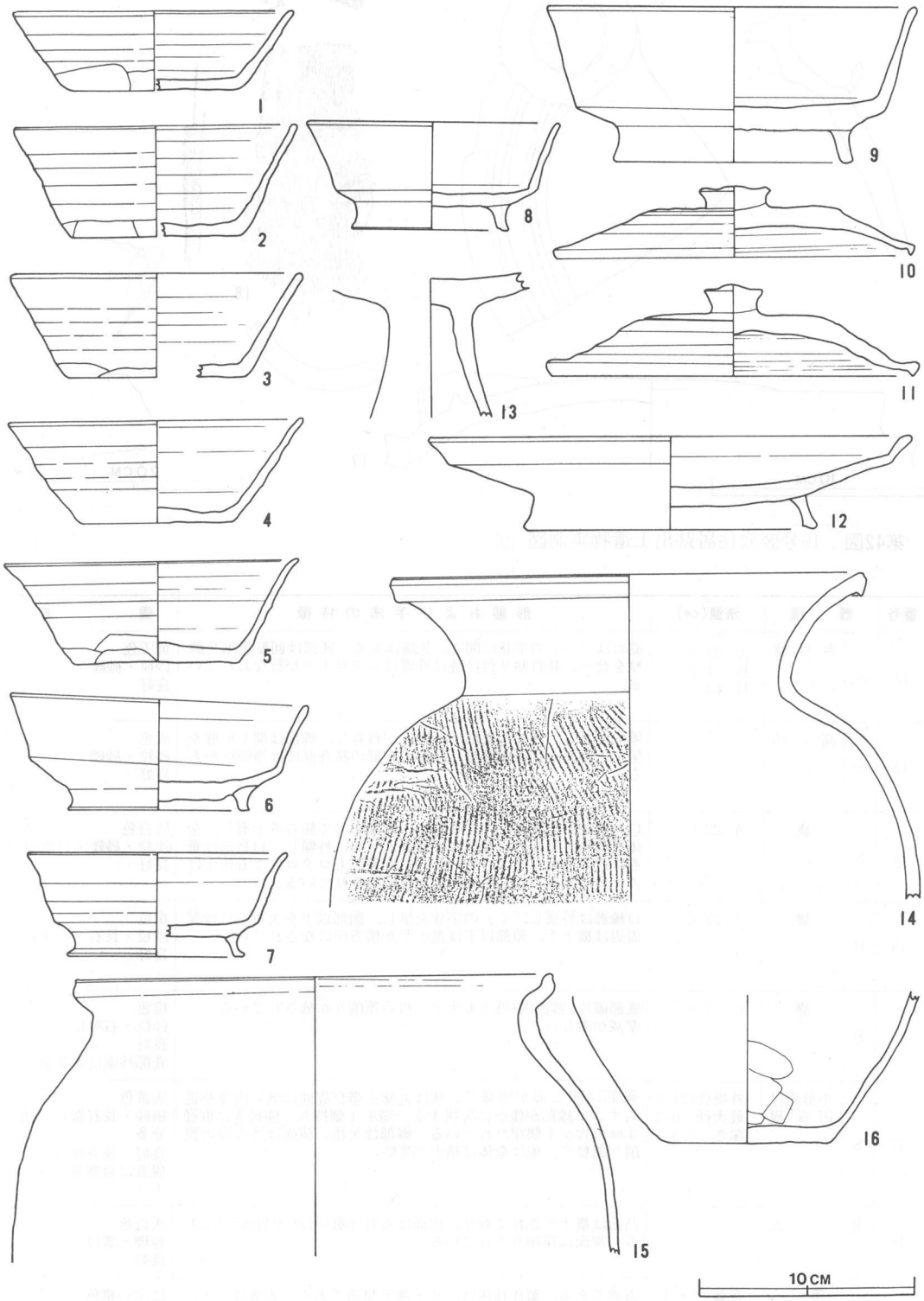
は全体に硬く，凹凸が著しい。柱穴は5か所確認され，全体に深い。壁溝は幅3㎝・深さ5㎝を測り，全周している。

竈は，北壁中央部に位置し，粘土・砂を使用して構築され，焚口・火床からなだらかに立ち上がり，煙道と煙出し孔を作っている。袖部に瓦・礫を使用している。

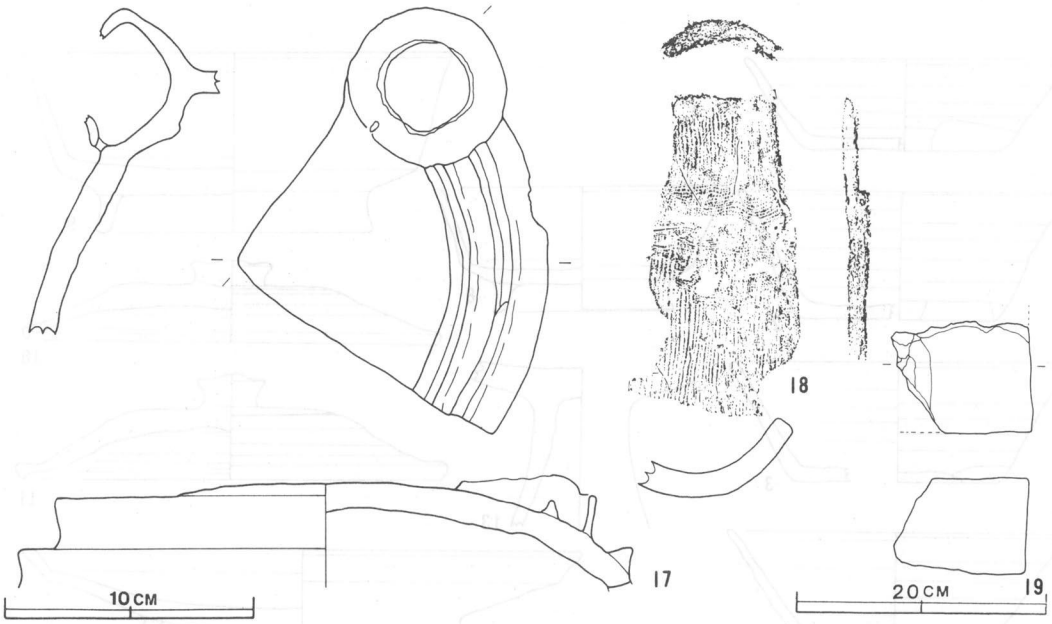
遺物は，土師器・須恵器・墨書土器・硯・瓦・羽口・鉄滓が出土している。

19号竪穴住居跡出土遺物観察表（第41・42図）

番号	器種		法量(㎝)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 12.9 B 3.7 C 7.7	体部は外反して立ち上がり，口縁部は内彎気味に外反する。口縁部先端は丸みをもつ。外周は篦削り，面取り。器面にロクロ水挽き痕が残る。	灰色 砂粒・砂礫 普通 器面内・外部に漆付着
2	S	坏	A 13.1 B 5.1 C 7.8	体部は外反して直線的に立ち上がり，底部は上げ底を呈し，器肉は厚い。外周は篦切り後篦削りが施されている。	灰色 砂粒・砂礫 良好
3	S	坏	A 13.5 B 4.8 C 8.2	体部は外反し，直線的に立ち上がる。口縁部先端は丸味をもつ。外周は篦切り後篦削りが施されている。	灰色 砂粒・砂礫・礫 良好
4	S	坏	A 13.7 B 4.7 C 7.0	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は丸味をもつ。底部はやや上げ底気味で，厚手の作りである。体部にロクロ水挽き成形時の凸凹が残る。	灰白色 砂粒・砂礫 良好
5	S	坏	A 13.7 B 4.7 C 7.6	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部が外反する。ロクロ水挽き成形で，器面に凸凹が残る。	灰色 砂粒・砂礫・礫 良好
6	S	高台付坏	A 13.9 B 5.1 D 8.4	高台を有し，直線的に開く体部である。口縁部先端は細くなり外反する。高台は開かずに直立気味なものである。ロクロ水挽き成形で，高台貼り付け部はナデが施されている。	灰色 砂粒・砂礫 良好
7	S	高台付坏	A 12.0 B 4.8 D 8.3	高台を有し，直線的に開く体部である。口縁部先端は細くなり，丸味をもつ。高台は開く。ロクロ水挽き成形で，高台貼り付け部はナデが施されている。器面に凸凹が残る。	灰色 砂粒・砂礫 良好
8	S	高台付坏	A 11.8 B 4.9 D 7.4	高台を有し，体部は直線的に開き，口縁部は丸みをもち外反する。高台は直立気味なものであり，高台貼り付け部はナデ調整。	灰黄褐色 砂粒・砂礫 普通
9	S	高台付坏	A 17.3 B 7.2 D 11.2	高台を有し，直線的に開く体部である。口縁部は丸みをもち外反する。高台は直立気味なものであり，高台の貼り付け部はナデ調整。	灰黄褐色 砂粒・砂礫 普通
10	S	蓋	A 16.5	口径に対して器高が低く，身受け部が「く」の字状に屈曲する。身受け端部は若干丸みを帯びる。つまみはやや扁平なボタン形状を呈す。天井部に回転篦削りが施される。	灰白色 砂粒・砂礫・白雲母 良好
11	S	蓋	A 16.8	宝珠形のつまみを有し，身受け部が「く」の字状に屈曲する。身受け端部は丸味をもつ。天井部は回転篦削り。	灰色 砂粒・砂礫 良好



第41図　19号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1)



第42図　19号竪穴住居跡出土遺物実測図 (2)

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
12	S	台付盤	A 23.3 B 4.3 D 13.3	高台は「ハ」の字状に開き，先端は尖る。底部は回転篦削り調整を行い，高台貼り付け時に外周にロクロナデが行なわれている。	黄灰色 砂粒・砂礫 良好
13	S	高坏		破片である。坏部の底部から脚部が残存し，脚部は開く形態を呈す。外面にロクロ調整，坏部・脚部の接合部には指頭痕がある。	灰色 砂粒・砂礫 良好
14	S	甕	A 22.0	口縁部から体部にかけて残存し，体部上半で膨らみを有し，全体に球形を呈す。口縁部はやや直立気味に外傾し，口唇部は垂直に近い面取りをうけている。内・外面ともロクロによる仕上げのナデが加えられ，外面に叩き目が施されている。	灰白色 砂粒・砂礫・白雲母 良好
15	H	甕	A 22.2	口縁部は外反し，「く」の字状を呈し，胴部以下を欠損。口縁部周辺は横ナデ，頸部以下は篦ナデが横方向になされている。	橙色 砂粒・長石・石英粒 良好
16	H	甕	C 7.6	底部破片。器面内・外ともナデ。粗い篦削りが施されている。摩滅が激しい。	橙色 砂粒・石英粒 良好 底部外面に木葉痕
17	S	小形壺付円面硯	外堤径(21.6) 最大径 6.3 深さ (3.1)	硯部は陸と海が明確で，陸は丸味を帯び周囲に低い内堤を巡らす。口縁部が僅かに欠損する。壺を1個持ち，陸続きに直径3mmの穴が1個穿たれている。脚部は欠損。硯面は多方向の篦削り調整で，他は全体に横ナデ調整。	灰黄色 細砂・長石微粒・鉄分多 良好　逆さ焼き 硯背に自然釉とフリモノ
18	丸瓦			凸面は横ナデされており，凹面は布目圧痕の合わせ目痕がみられる。端面は篦削りされている。	灰白色 砂礫・雲母 良好
19	塼		長軸 (8.4) 厚さ 7.5	方塼である。製作技法は，粘土塊充塡法である。表裏はナデ，側面は篦削り調整。	にぶい橙色 長石・石英・スコリア やや硬質

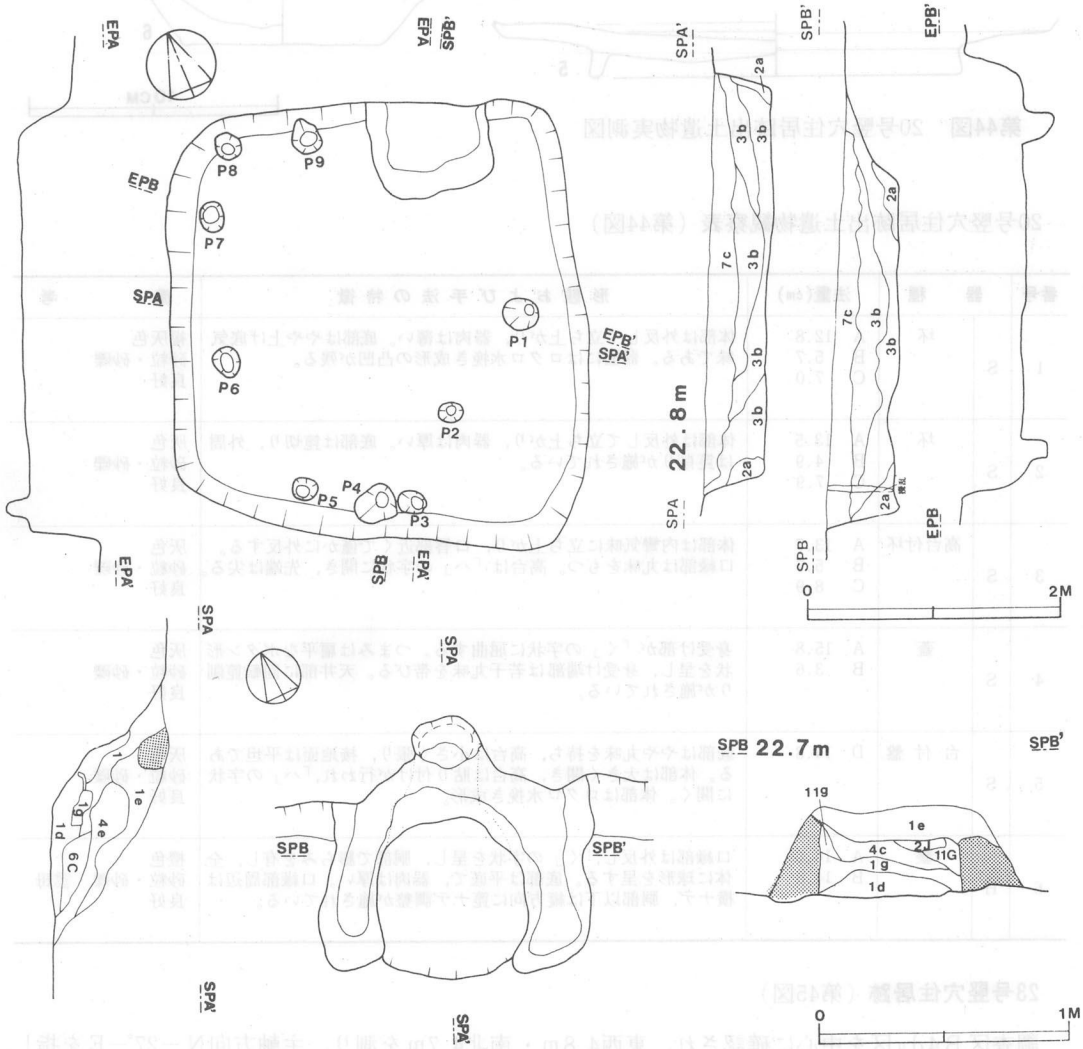
20号竪穴住居跡（第43図）

調査区B3bo区を中心に確認され，東西3.38m・南北3.5mを測り，主軸方向N－19°－Eを指し，隅丸方形を呈している。

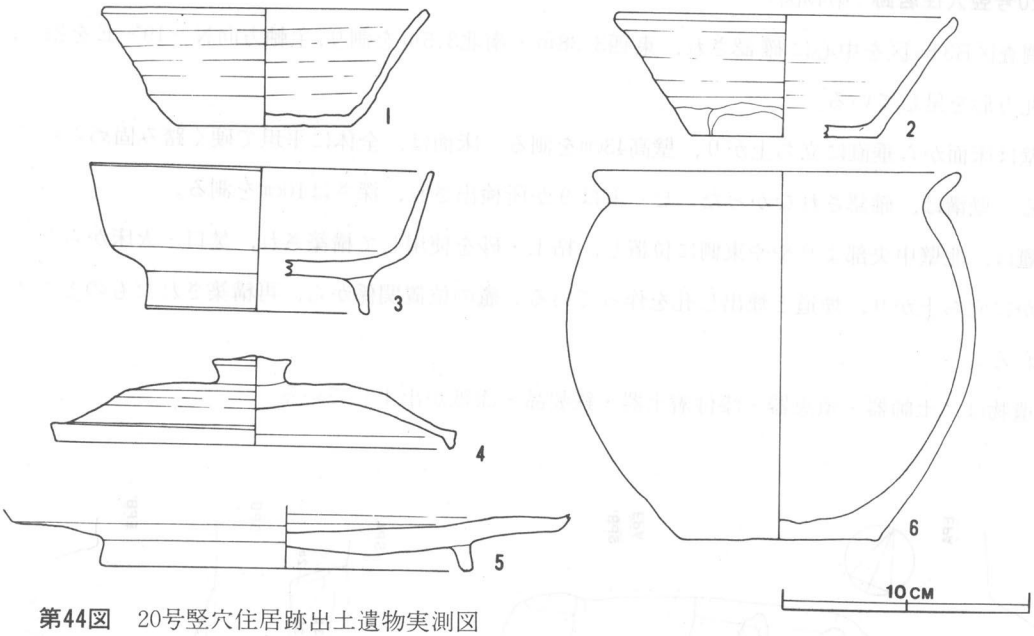
壁は床面から垂直に立ち上がり，壁高43cmを測る。床面は，全体に平坦で硬く踏み固められている。壁溝は，確認されなかった。ピットは9か所検出され，深さは10cmを測る。

竈は，北壁中央部よりやや東側に位置し，粘土・砂を使用して構築され，焚口・火床からなだらかに立ち上がり，煙道と煙出し孔を作っている。竈の位置関係から，再構築されたものと考えられる。

遺物は，土師器・須恵器・漆付着土器・鉄製品・漆紙が出土している。



第43図　20号竪穴住居跡・竈実測図



第44図　20号竪穴住居跡出土遺物実測図

20号竪穴住居跡出土遺物観察表（第44図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 12.8 B 5.7 C 7.0	体部は外反して立ち上がり，器肉は薄い。底部はやや上げ底気味である。器面にはロクロ水挽き成形の凸凹が残る。	褐灰色 砂粒・砂礫 良好
2	S	坏	A 13.5 B 4.9 C 7.9	体部は外反して立ち上がり，器肉は厚い。底部は篦切り，外周は篦削りが施されている。	灰色 砂粒・砂礫 良好
3	S	高台付坏	A 13.7 B 5.7 C 8.9	体部は内彎気味に立ち上がり，口唇部近くで僅かに外反する。口縁部は丸味をもつ。高台は「ハ」の字状に開き，先端は尖る。	灰色 砂粒・砂礫 良好
4	S	蓋	A 15.8 B 3.6	身受け部が「く」の字状に屈曲する。つまみは扁平なボタン形状を呈し，身受け端部は若干丸味を帯びる。天井部に回転篦削りが施されている。	灰色 砂粒・砂礫 良好
5	S	台付盤	D 14.8	底部はやや丸味を持ち，高台は小さく張り，接地面は平坦である。体部は大きく開き，高台は貼り付けが行われ，「ハ」の字状に開く。体部はロクロ水挽き成形。	灰色 砂粒・砂礫 良好
6	H	甕	A 14.6 B 14.8	口縁部は外反し，「く」の字状を呈し，胴部で膨らみを有し，全体に球形を呈する。底部は平底で，器肉は厚い。口縁部周辺は横ナデ，胴部以下は縦方向に篦ナデ調整が施されている。	橙色 砂粒・砂礫・雲母 良好

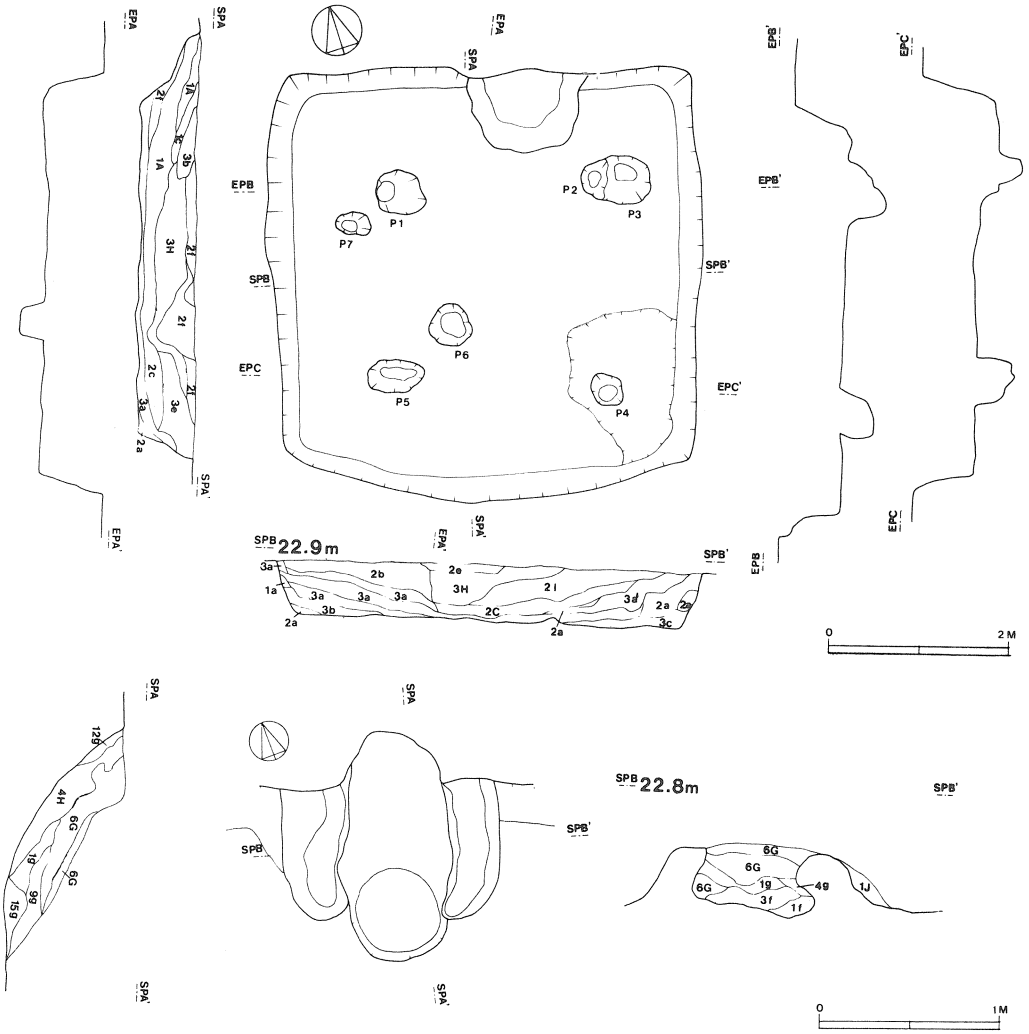
23号竪穴住居跡（第45図）

調査区B4d$_9$区を中心に確認され，東西4.8m・南北4.7mを測り，主軸方向N－27°－Eを指し，隅丸方形を呈している。

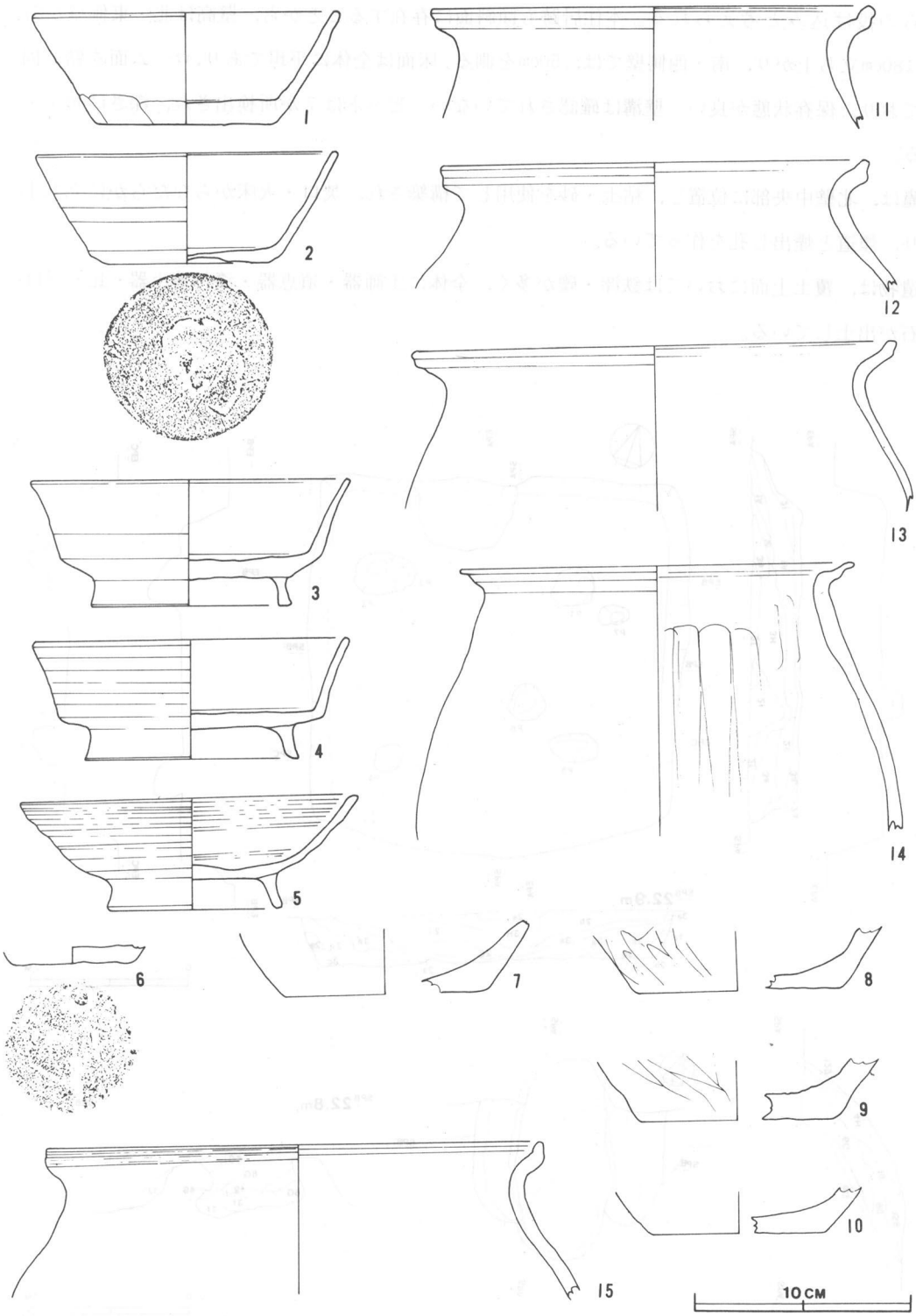
覆土中には，全体にロームブロック・木炭・焼土がみられ，堆積状況から判断すると鍛冶工房からの投げ込みと考えられる。本住居跡も傾斜面に存在することから，壁高は北・東側壁が斜めに80cm立ち上がり，南・西側壁では，50cmを測る。床面は全体に平坦であり，ローム面を踏み固めており，保存状態が良い。壁溝は確認されていない。ピットは7か所検出され，深さは40cmを測る。

竈は，北壁中央部に位置し，粘土・砂を使用して構築され，焚口・火床からなだらかに立ち上がり，煙道と煙出し孔を作っている。

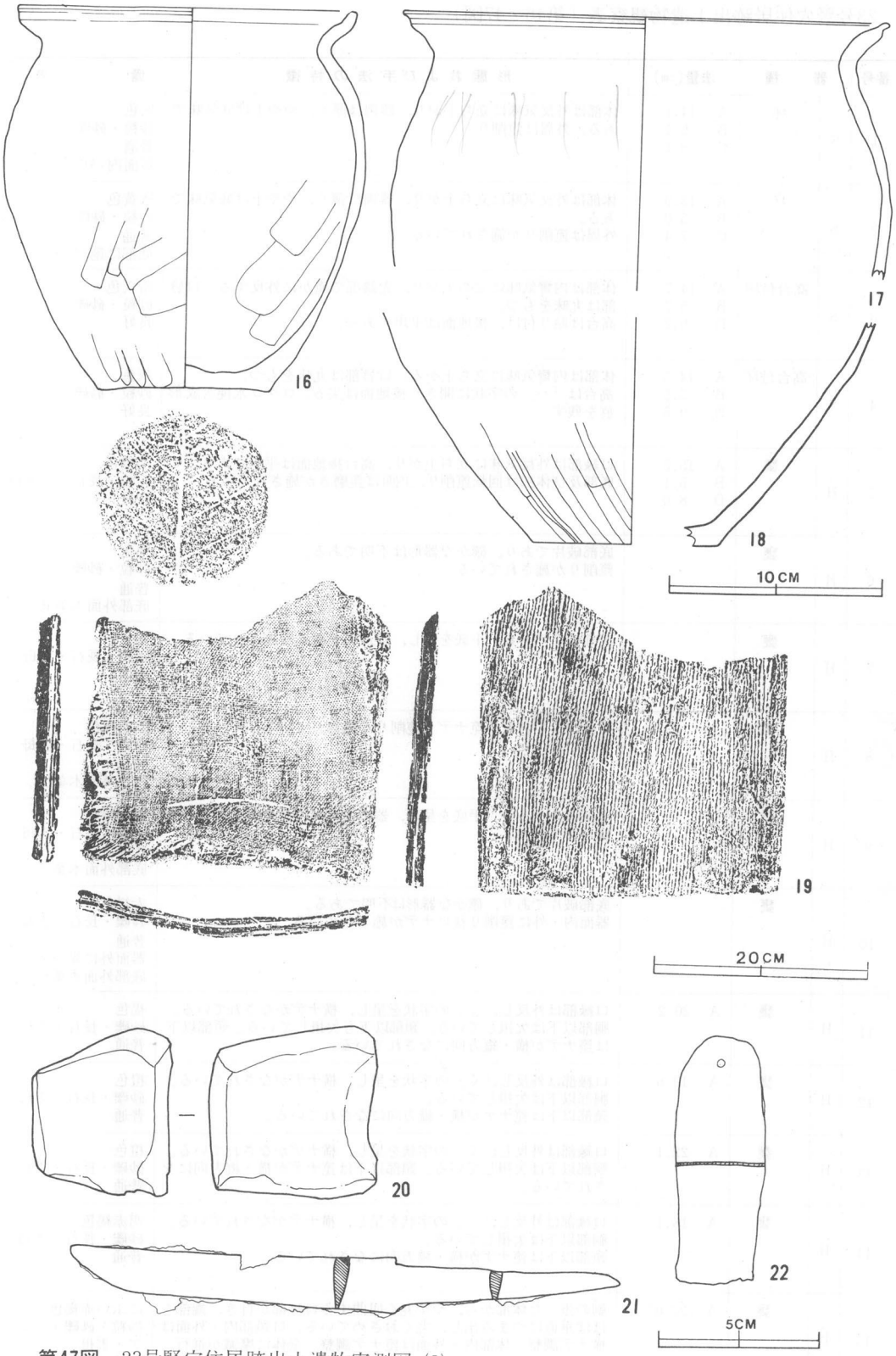
遺物は，覆土上面においては鉄滓・礫が多く，全体に土師器・須恵器・漆付着土器・瓦・羽口・砥石が出土している。



第45図　23号竪穴住居跡・竈実測図



第46図　23号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1)



第47図　23号竪穴住居跡出土遺物実測図 (2)

23号竪穴住居跡出土遺物観察表（第46・47図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 14.1 B 5.1 C 8.1	体部は外反気味に立ち上がり，器肉は厚く，やや上げ底気味である。外周は篦削り。	灰色 砂粒・砂礫 普通 器面内・外に漆付着
2	S	坏	A 13.9 B 5.0 C 7.4	体部は外反気味に立ち上がり，器肉は薄く，やや上げ底気味である。 外周は篦削りが施されている。	灰黄色 砂粒・砂礫 普通 底部に篦記号
3	S	高台付坏	A 14.7 B 5.7 D 9.2	体部は内彎気味に立ち上がり，先端部で僅かに外反する。口唇部は丸味をもつ。 高台は貼り付け，接地面は平坦である。	暗灰色 砂粒・砂礫 良好
4	S	高台付坏	A 14.5 B 5.5 D 9.8	体部は内彎気味に立ち上がる。口唇部は丸味をもつ。 高台は「ハ」の字状に開き，接地面は尖る。ロクロ水挽き成形痕を残す。	灰色 砂粒・砂礫 良好
5	H	甕	A 15.5 B 5.1 D 8.0	口縁部は外反気味に立ち上がり，高台接地面は平坦である。 底部及び体部は回転篦削り，内面は篦磨きが施されている。	淡橙色 砂粒・長石・石英粒 良好
6	H	甕		底部破片であり，確かな器形は不明である。 篦削りが施されている。	褐色 砂粒・砂礫 普通 底部外面木葉痕
7	H	甕		底部破片である。平底を呈し，器面に篦削りが施されている。	褐色 砂礫・長石・雲母 普通
8	H	甕		底部破片である。篦ナデ・篦削りが施されている。 摩滅が著しい。	明赤褐色 砂礫・長石・雲母 普通 底部外面木葉痕
9	H	甕		底部破片である。平底を呈し，器面内・外に篦ナデ・篦削りが施されている。	明赤褐色 砂礫・長石・雲母 普通 底部外面木葉痕
10	H	甕		底部破片であり，確かな器形は不明である。 器面内・外に篦削り後にナデが施されている。	赤褐色 砂礫・長石・雲母 普通 器面外に煤付着 底部外面木葉痕
11	H	甕	A 20.2	口縁部は外反し，「く」の字状を呈し，横ナデがなされている。 胴部以下は欠損している。頸部以下も欠損している。頸部以下は篦ナデが横・縦方向になされている。	褐色 砂礫・長石・雲母 普通
12	H	甕	A 19.6	口縁部は外反し，「く」の字状を呈し，横ナデがなされている。 胴部以下は欠損している。 頸部以下は篦ナデが横・縦方向になされている。	橙色 砂礫・長石・雲母 普通
13	H	甕	A 22.1	口縁部は外反し，「く」の字状を呈し，横ナデがなされている。 胴部以下は欠損している。頸部以下は篦ナデが横・縦方向になされている。	橙色 砂礫・長石・雲母 普通
14	H	甕	A 18.1	口縁部は外反し，「く」の字状を呈し，横ナデがなされている。 胴部以下は欠損している。 頸部以下は篦ナデが横・縦方向になされている。	明赤褐色 砂礫・長石・雲母 普通
15	H	甕	A（22.6）	胴の張った体部から，やや丸く屈曲する口縁部が付き，端部をほぼ垂直につまみ出し，丸くおさめている。口頸部内・外面は横ナデ調整。体部内・外面は篦ナデ調整。全体に摩滅が進行。	にぶい赤褐色 砂粒・砂礫・スコリア・雲母 不良

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
16	H	甕	A 15.9 B 17.9 C 8.1	器厚は底部から胴部に行くに従い薄くなり，口縁部周辺では厚くなる。体部は平底の底部より内彎気味立ち上がり，「く」の字状に屈曲して口縁部に至る。体部下半外面に篦削り，内面はナデが施されている。	橙色 砂粒・長石・石英粒・雲母 良好 底部外面木葉痕
17	H	甕	A（22.8）	丸く胴の張った体部から，やや「く」の字状に屈曲する口縁部が付き，外端部は凹ませる。口頸部内・外面は横ナデ調整，内部内・外面は篦ナデ調整。	にぶい橙色 砂粒・砂礫・スコリア・雲母 普通
18	H	甕	C（ 8.7）	底部は平底で，体部は内彎気味に外上方にのびる。体部内面は篦ナデ調整，体部外面は斜位の篦削り調整。	にぶい赤褐色 砂粒・砂礫・石英粒・長石粒・スコリア 不良 底部外面に木葉痕
19	平瓦			凸面に縄目叩きが施されているが粗い。凹面は布目痕を有している。切り離しは糸切りで行っており，瓦の周縁部を篦で磨いている。	褐灰色 砂礫・長石 やや硬質

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
20	砥石	5.1×5.0 3.5	方形を呈す。五面に使用痕が認められ，研磨により凹みがみられる。	凝灰岩	22	短冊形鉄製品	全長7.8 幅 2.6	下方へいくにつれ幅が狭くなる。 上部中央に径0.25cm程の孔が穿ってある。	
21	刀子	最大長 17.6 身幅1.5 身厚0.3 茎幅0.9 茎厚0.2	わずかに反り，両関のものである。 完形品。	茎部に木質付着					

24号竪穴住居跡（第48図）

調査区B4f₁区を中心に確認され，東西6.67m・南北5.65mを測り，主軸方向N－15°－Eを指し，隅丸方形を呈している。

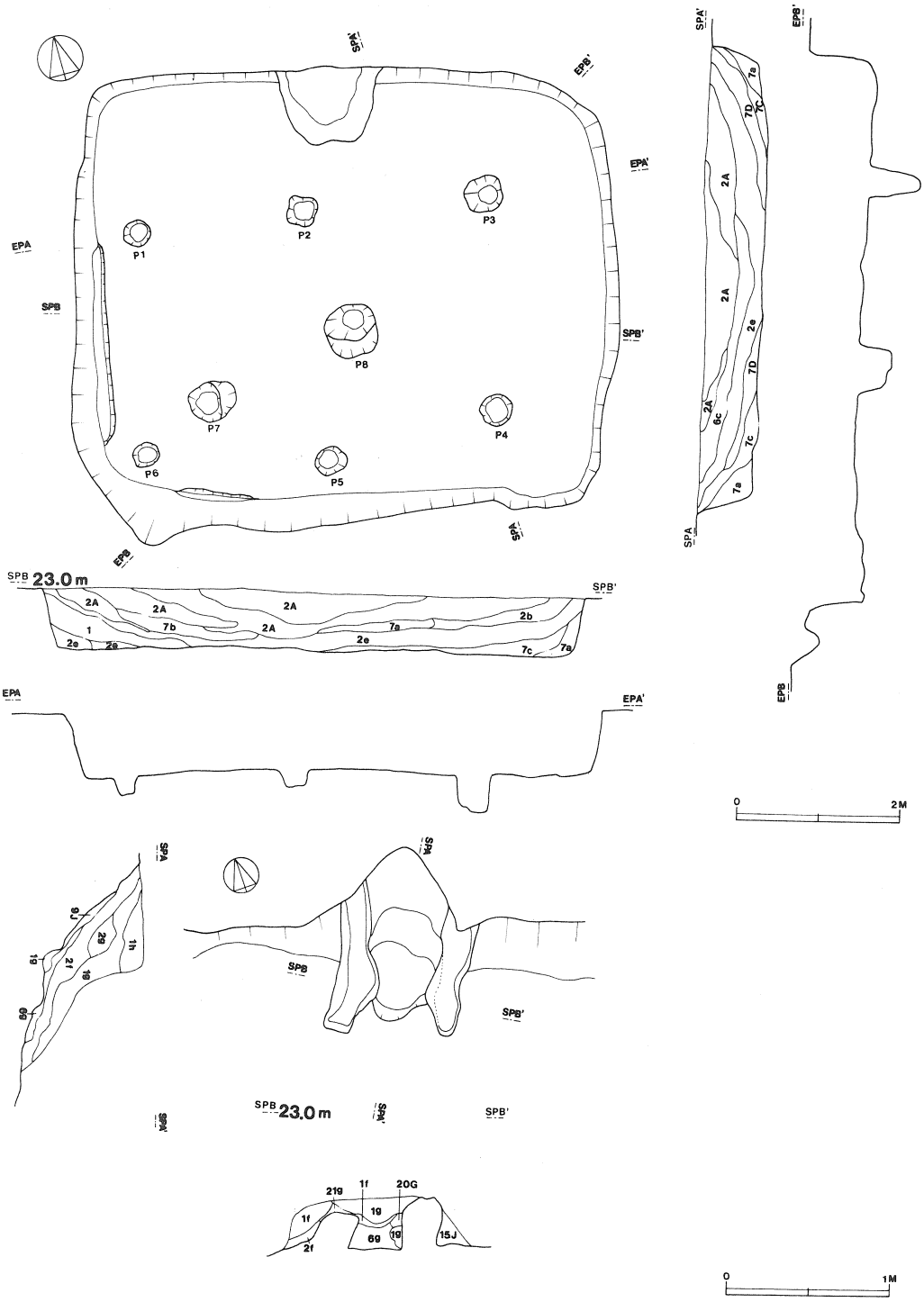
覆土の堆積状況は，上層に木炭・焼土・鉄滓が若干含まれ，工房等からの投棄と思われる。壁は高さ80cmを測り，垂直に立ち上がっている。床面は全体に平坦であり，ローム面を良く踏み固めている。壁溝は確認されていない。ピットは8か所検出され，深さは10～30cmを測る。

竈は，北壁中央部に位置し，粘土・砂を使用して構築され，壁を掘り込んで煙道と煙出し孔を作っている。

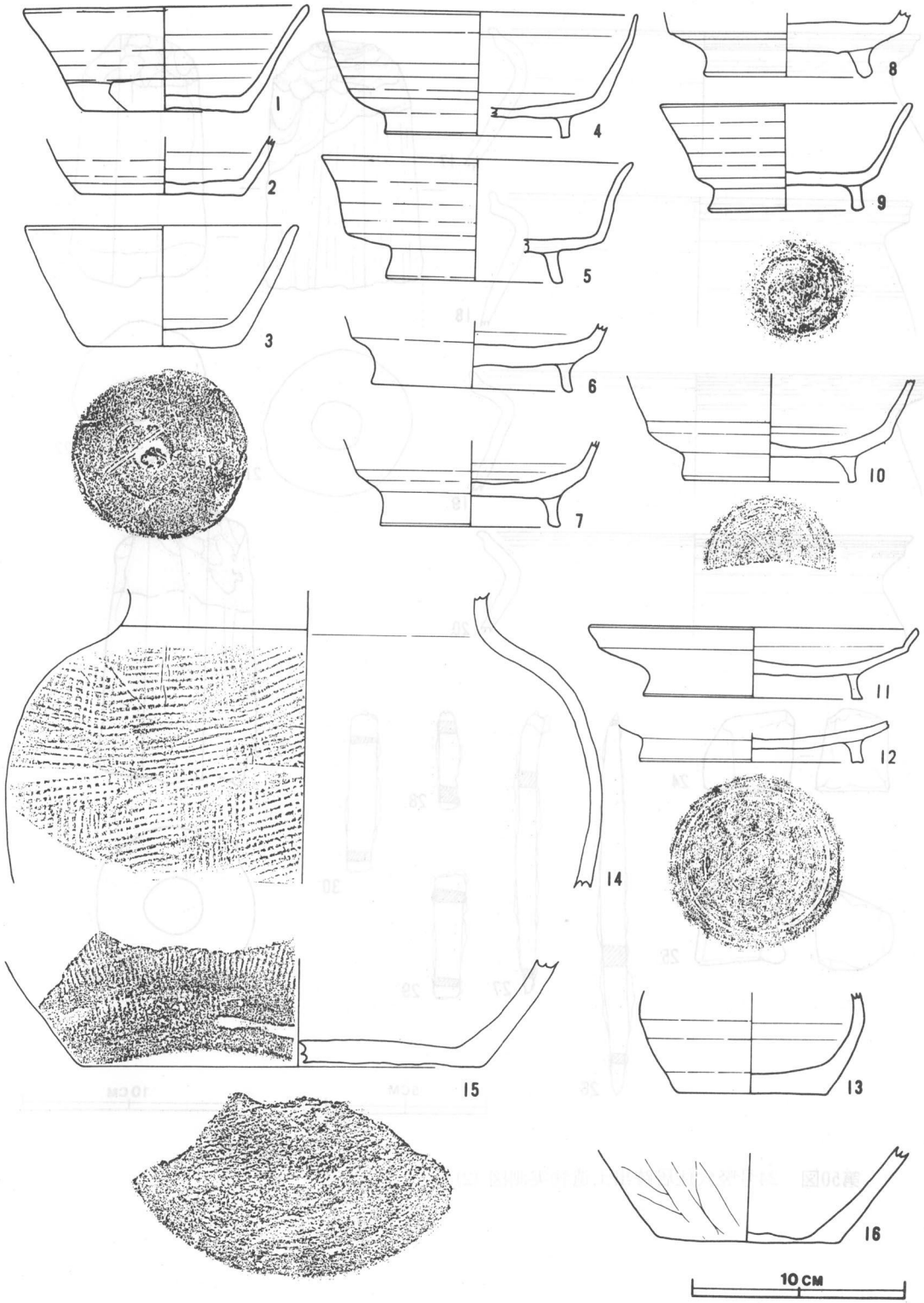
遺物は，土師器・須恵器・墨書土器・瓦・羽口・鉄製品が出土している。

24号竪穴住居跡出土遺物観察表（第49・50図）

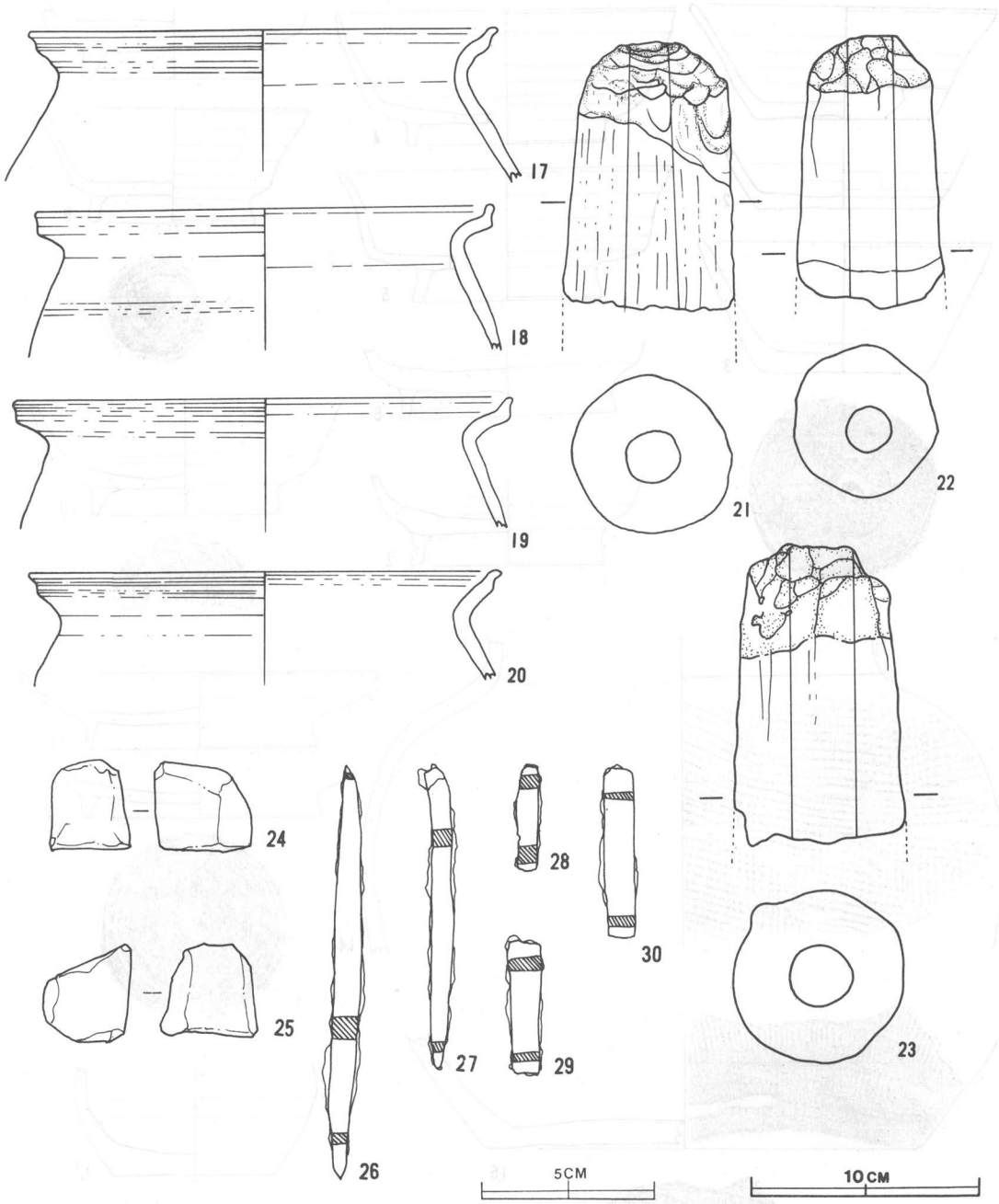
番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 13.3 B 4.9 C 7.6	体部は内彎気味に立ち上がる。底部は器肉が厚く，上げ底気味である。 外周は篦削りが施されている。	青灰色 砂粒・砂礫 良好
2	S	坏	C 3.8	口縁部欠損。 体部は内彎気味に立ち上がり，底部器肉は厚い。 体部は水挽き痕が残る。	灰色 砂粒・砂礫 普通



第48図　24号竪穴住居跡・竈実測図



第49図　24号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1)



第50図　24号竪穴住居跡出土遺物実測図 (2)

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
3	S	坏	A 12.8 B 5.6 C 7.1	体部は外反気味に立ち上がり，口唇部は更に折れ，丸味をもつ。器肉は厚く，底部は平底を呈す。	灰色 砂粒・砂礫 普通 底部に箆記号
4	S	高台付坏	A 14.7 B 5.8 D 8.7	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は直立し，口唇部は丸味をもつ。体部と底部の境は明瞭に屈曲する。高台接地面は平坦であり，貼り付け高台である。 器面はロクロ水挽き痕を残す。	灰色 砂粒・砂礫 良好
5	S	高台付坏	A 14.6 B 5.7 D 8.2	体部は外反気味に立ち上がり，口縁部は更に外反し折れる。口唇部は丸味をもつ。体部と底部の境は明瞭に屈曲する。 高台接地面は平坦であり，貼り付け高台である。器面はロクロ水挽き痕を残す。	灰色 砂粒・砂礫 良好
6	S	高台付坏	D 9.4	口縁部欠損。体部は外反気味に立ち上がる。 高台接地面は尖る。	灰白色 砂粒・砂礫・雲母 不良
7	S	高台付坏	D 8.5	口縁部欠損。体部は外反気味に立ち上がる。 高台接地面は尖る。体部と底部の境は明瞭な稜は残さない。	灰色 砂粒・砂礫 良好
8	S	高台付坏	D 8.0	口縁部欠損。体部は外反気味に立ち上がる。体部と底部の境は明瞭に屈曲する。 高台接地面は尖る。	灰白色 砂粒・砂礫・雲母 不良
9	S	高台付坏	A 11.8 B 5.0 D 7.3	体部は外反気味に立ち上がり，口縁部で更に外反し丸味をもつ。体部と底部の境は明瞭に屈曲する。高台接地面は平坦であり，貼り付け高台である。ロクロ水挽き痕を残す。	灰色 砂粒・砂礫 良好 底部に箆記号
10	S	高台付坏	D 8.1	口縁部欠損。体部は外反気味に立ち上がる。 高台接地面は平坦である。	灰白色 砂粒・砂礫・雲母 不良 底部に箆記号
11	S	盤	A 15.5 B 3.2 D 10.4	底部はやや丸味をもち，高台は小さく張り，接地面は平坦である。体部は大きく開き，口縁部は屈曲して立ち上がり，端部は丸味を帯びる。高台は貼り付けが行なわれ，体部はロクロのナデ調整である。	灰色 砂粒・砂礫 良好
12	S	盤	D 10.5	口縁部欠損。 底部はやや丸味をもち，高台は小さく張り，接地面は平坦である。 高台は貼り付け高台である。	灰色 砂粒・砂礫 良好 底部に箆記号
13	S	壺	C 7.0	底部破片である。胴部は球形を呈し，器肉は厚く，底部は平底を呈す。	灰色 砂粒・砂礫 良好
14	S	甕		肩部に張りをもち，口縁部と底部を欠損する。幅広の輪積みにより形成され，外面全体にわたり叩き目が残る。	橙色 砂粒・雲母 良好
15	S	甕	C 18.8	底部破片である。 幅広の輪積みにより形成され，外面に叩き目が残る。	黒褐色 砂粒・砂礫・雲母 良好
16	H	甕	C 8.6	底部破片。 器肉は厚く，器面内・外は箆削り。ナデが施されている。	橙色 砂粒・長石・石英 良好
17	H	甕	A 20.2	口縁部破片である。口縁部は内彎気味に立ち上がり，「く」の字状に屈曲して口唇部に至る。 口縁部は横ナデ。頸部以下は横方向へ箆ナデが施されている。	橙色 砂粒・砂礫・雲母 良好

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
18	H	甕	A 20.0	口縁部破片である。体部はやや強く外に張って口縁部に至る。口唇部は外に開き，やや丸味をもち立ち上がる。口縁部は横ナデ，頸部以下は横方向へ篦ナデが施されている。	橙色 砂粒・砂礫・雲母 良好
19	H	甕	A 21.5	口縁部破片である。体部は内彎して頸部に至りやや外傾して，口縁部に至る。口唇部は外にひらき，やや丸味をもつ。口縁部は横ナデ，頸部以下は横方向へ篦ナデが施されている。	橙色 砂粒・砂礫・雲母 良好
20	H	甕	A 20.3	口縁部破片である。体部は内彎して頸部に至り，外傾して口唇部に立ち上がる。口唇部はやや外反する。口縁部は横ナデ，頸部以下は横方向へ篦ナデが施されている。	橙色 砂粒・砂礫・雲母 良好

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
21	羽口	全長(10.3) 外径7.0 孔径2.3	先端部である。	鉄の付着した部分はみられない。溶解した部分は認められる。	26	刀子	全長11.5 身幅0.8 身厚0.65	銹化が激しく，遺存状態はよくない。	
22	羽口	全長(10.3) 外径6.0 孔径2.0	先端部である。	鉄の付着した部分はみられない。溶解した部分は認められる。	27	釘	全長(8.6) 太さ0.5	先端の断面は，やや尖っているが，幹部は断面を呈す。頭部はやや扁平になっているが，折頭式の頭部が若干残っている。	
23	羽口	全長(13.0) 外径7.0 孔径2.7		先端に鉄が付着。	28	釘	全長(3.2) 太さ0.5	頭部・先端部欠損。	
24	砥石	2.8×2.5 1.7	方形を呈す。全面に使用痕が認められる。	凝灰岩	29	釘	全長(3.9) 太さ0.4	頭部・先端部欠損。	
25	砥石	3.0×2.5 1.7	台形を呈す。全面に使用痕が認められる。	凝灰岩	30	釘	全長(5.0) 太さ0.45	頭部・先端部欠損。	

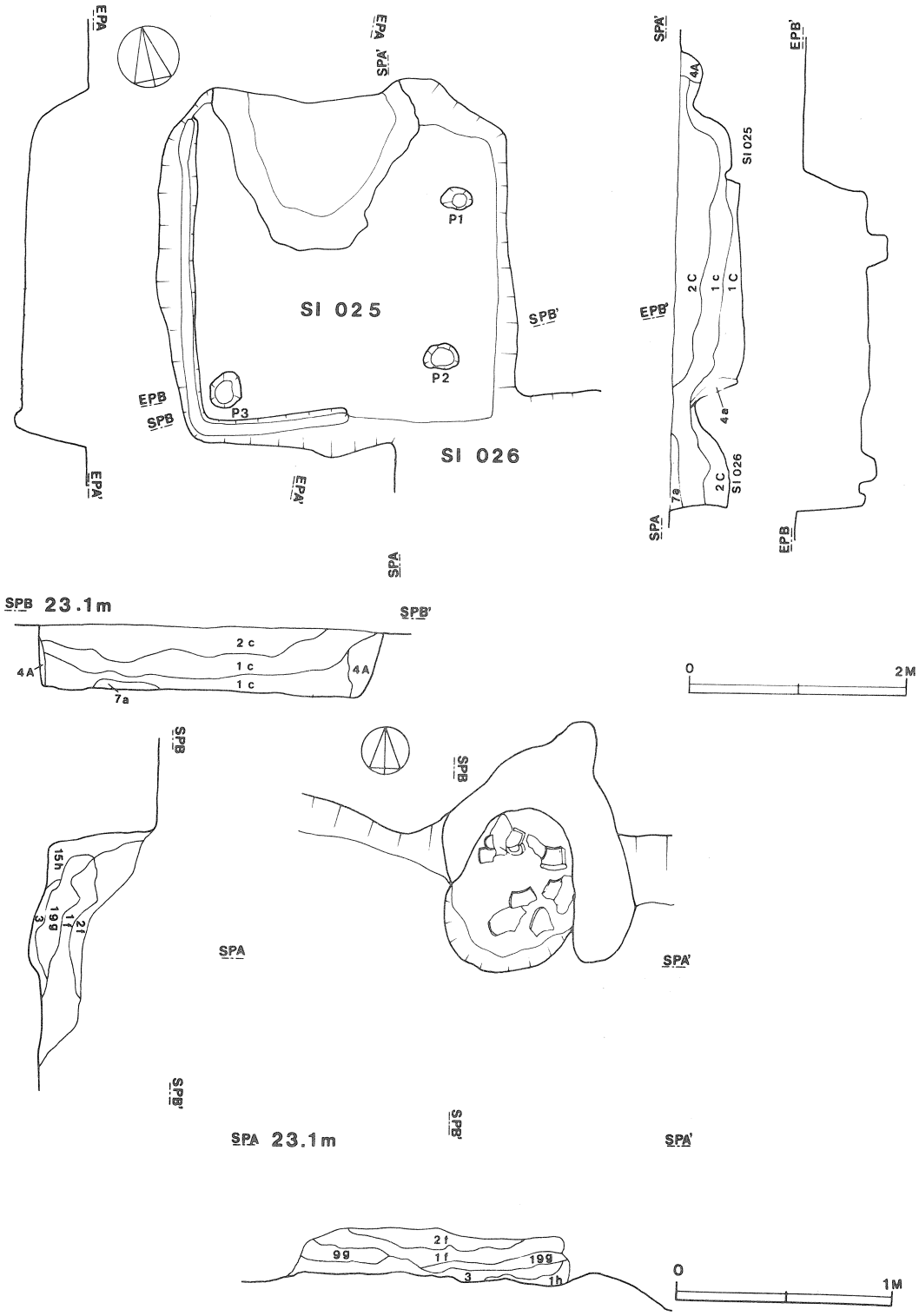
25号竪穴住居跡（第51図）

調査区B4g1区を中心に確認され，東西3.25m・南北3.25mを測り，主軸方向N－12°－Eを指し，方形を呈している。南東コーナ部は，26号竪穴住居跡と重複している。

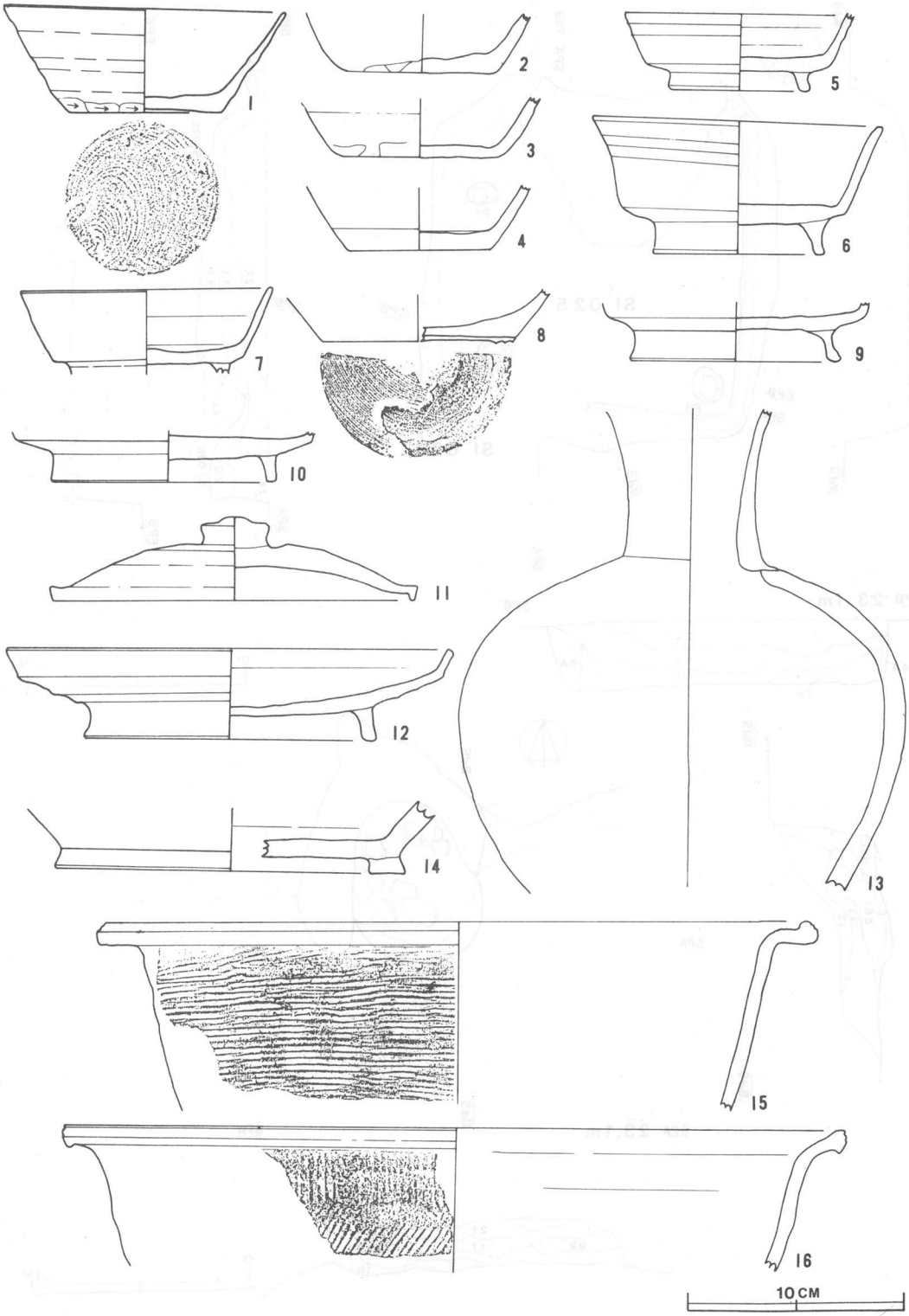
覆土中には，全体に木炭・焼土を含んでいる。壁は床面から垂直に立ち上がり，壁高60cmを測り，南壁はやや斜めに立ち上がる。床面は平坦で，非常に良く踏み固められている。柱穴は3本検出され，深さは20数cmを測る。壁溝は西壁・南壁下に検出され，幅15cm・深さ5cmを測る。

竈は，北壁中央部に位置し，残存状態は良好である。両袖・天井部とも粘土・砂を使用して構築され，壁を掘り込み，火床からなだらかに立ち上がり，煙道と煙出し孔を作っている。

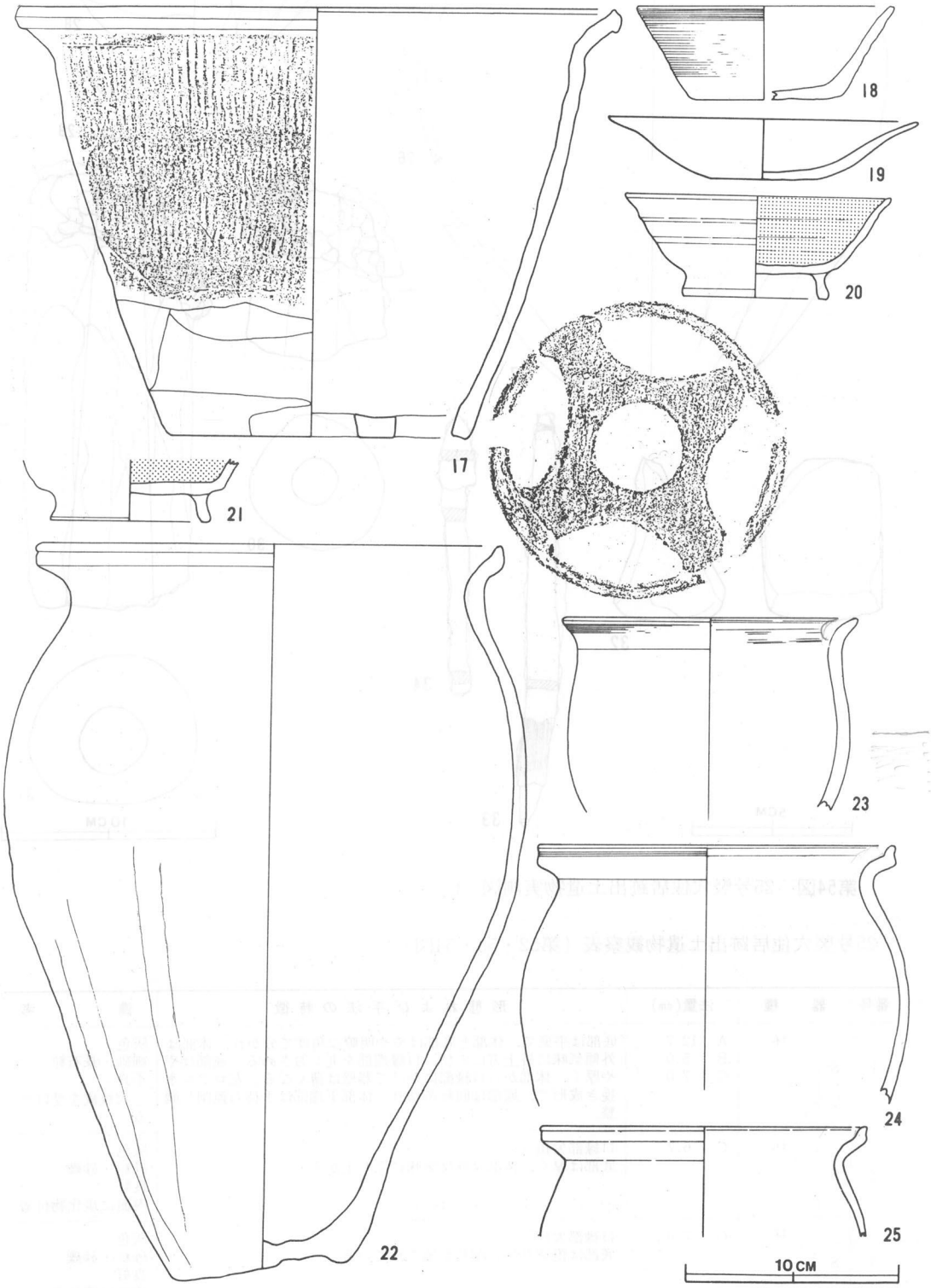
遺物は，土師器・須恵器・墨書土器・漆付着土器・鉄製品が出土している。



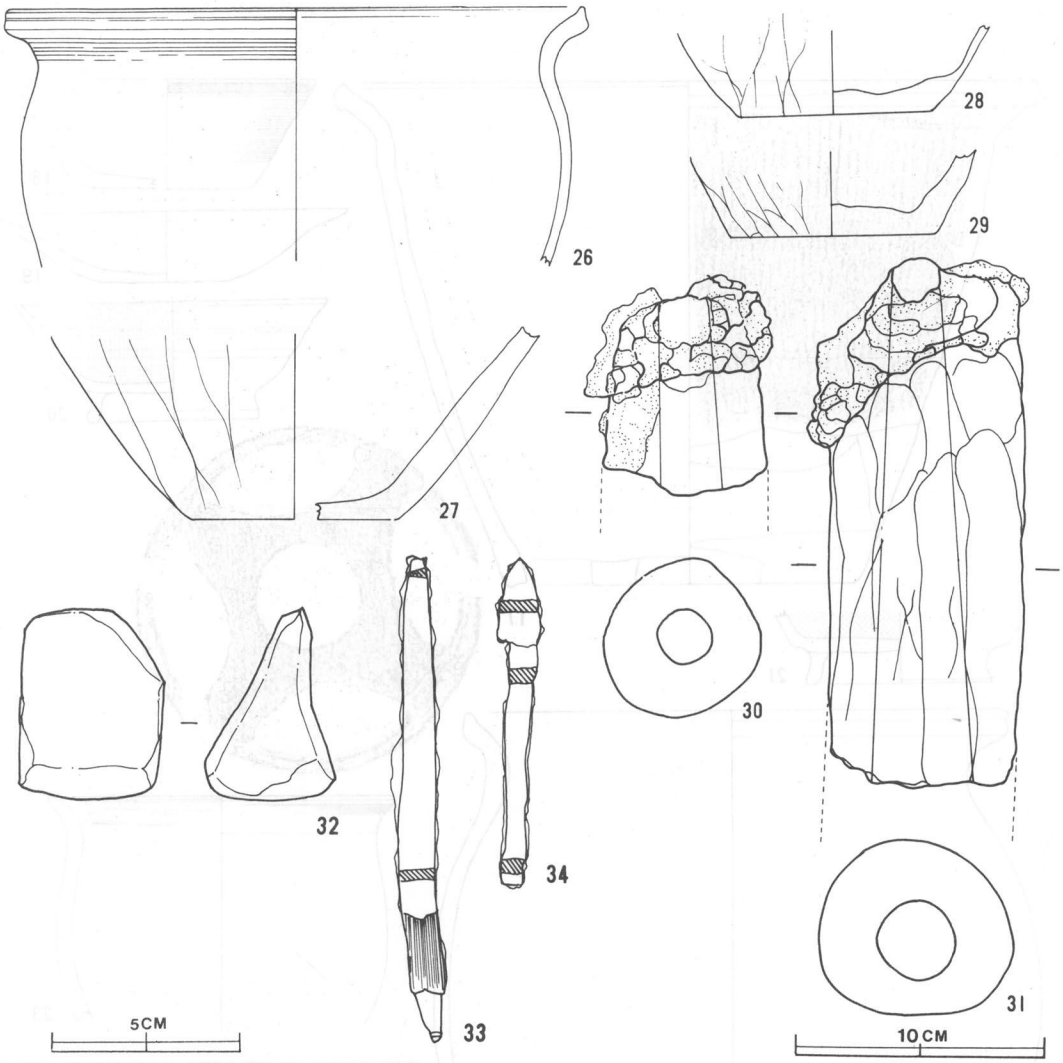
第51図　25号竪穴住居跡・竈実測図



第52図　25号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1)



第53図　25号竪穴住居跡出土遺物実測図 (2)



第54図　25号竪穴住居跡出土遺物実測図 (3)

25号竪穴住居跡出土遺物観察表（第52・53・54図）

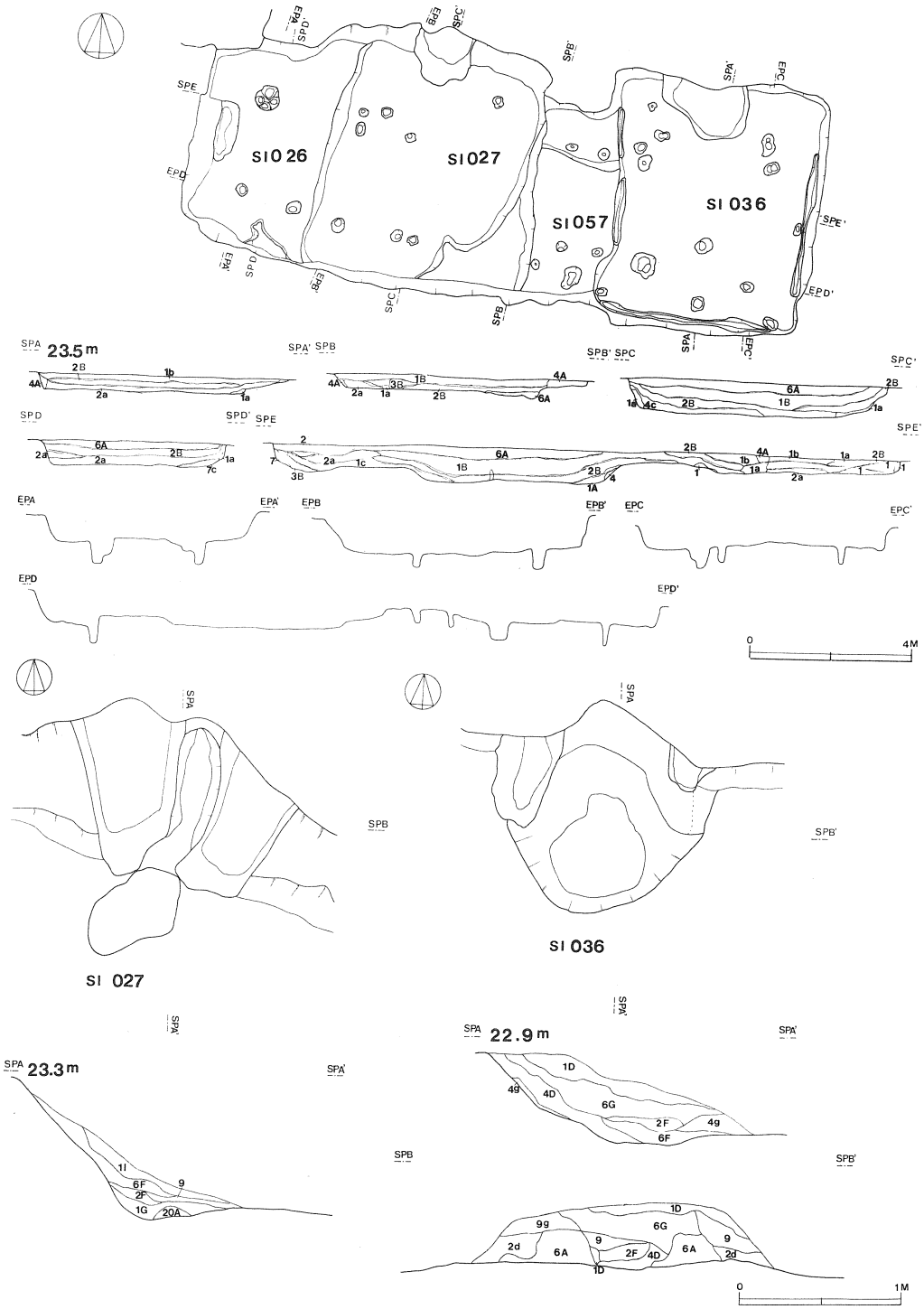
番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 12.7 B 5.0 C 7.0	底部は平底で，体部と底部はやや明瞭な角度で分かれ，体部は外傾気味に外上方にのび，口縁端部を丸くおさめる。底部はやや厚く，体部から口縁部にかけて器壁は薄くなる。左ロクロ水挽き成形で，底部は回転糸切り。体部下端部は手持ち箆削り調整。	灰色 細砂・長石粒 不良 二次焼成を受けている
2	S	坏	C 6.7	口縁部欠損。 底部は厚く，体部は外反気味に立ち上がる。	灰色 砂粒・砂礫 良好 内面に炭化物付着
3	S	坏	C 7.0	口縁部欠損。 底部は箆切り後箆削りが施されている。	灰色 砂粒・砂礫 良好 内面に漆付着

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
4	S	坏	C 6.5	口縁部欠損。 平底を呈し，体部は外反気味に立ち上がる。	灰色 砂粒・砂礫・白雲母 良好
5	S	高台付坏	D 6.6	口縁部欠損。 体部は水挽き成形により，器面に凸凹が残る。高台は貼り付け，ナデ調整。	灰色 砂粒・砂礫 良好
6	S	高台付坏	A 13.4 B 6.2 D 7.9	体部は厚みのある作りで，ゆるやかに内彎しながら大きく開く。 高台は貼り付け，ナデ調整。先端は平坦である。 器面はロクロ水挽き成形。	灰白色 砂粒・砂礫 良好
7	S	高台付坏	A 11.6	高台欠損。体部は内彎気味に立ち上がり，口唇部近くで僅かに外反する。器面はロクロ水挽き成形により，凸凹が残る。	灰白色 砂粒・砂礫 良好
8	S	高台付坏		口縁部・高台欠損。 底部は回転糸切りで再度，薄い粘土板が接合されている。高台貼り付け後，ナデ調整が行われている。	灰褐色 砂粒・砂礫 良好 内部に自然釉が付着
9	S	高台付坏	D 10.8	高台破片。 高台は「ハ」の字状に開く。	灰白色 砂粒・砂礫 良好 内面⅓ぐらいに漆付着
10	S	高台付坏	D 10.4	高台破片。 高台は開き，接地面は平坦。高台は貼り付け，ナデ調整。	灰白色 砂粒・砂礫 良好
11	S	蓋	A 14.5 B 3.9	天井部に宝珠状のつまみを有し，頂部はなだらかに張りをみせ，肩から直線的に開きながら下がる。身受け部はあまり張らず，「く」の字状に屈曲する。 ロクロ水挽き成形。	灰色 砂粒・砂礫 良好
12	S	台付盤	A 20.5 B 4.2 D 13.5	高台は小さく張り，体部は直線的に開く。先端にいくに従い徐々に薄くなり，口縁部は強く外反する。 体部はナデの凸凹が残る。	灰褐色 砂粒・砂礫 良好
13	S	長頸壺		口縁部・底部を欠損している。球形胴部をもち，口縁部は直立して強く外反すると思われる。水挽き成形後，回転ナデ調整が施されている。	灰白色 砂粒・砂礫 良好
14	S	台付甕	D 16.1	口縁部欠損で，厚みのある高台を有し，体部は直線的に開く。 高台は貼り付け，ナデ調整。	灰白色 砂粒・砂礫 良好
15	S	甕	A 32.5	口縁部破片。 体部はなだらかに立ち上がり，口縁部は強く短く外反する。口唇部は上下に突出し，外に面をつくる。器面外部には，全面平行叩き目が施されている。	灰色 砂粒・砂礫 良好
16	S	甕	A 36.0	口縁部から体部にかけて残存し，頸部は直立気味に立ち上がり，口縁部は外反する。 口縁部に輪積みの痕跡が残り，胴部には全体にわたって平行叩き目が残る。	灰色 砂粒・砂礫 良好
17	S	甑	A 27.5	口縁部は「く」の字状に外反し，胴部最大径は口頸部屈曲点と一致する。底部は「五孔式」に属する。口縁部の成形は貼り付け法によっている。器面外部に平行叩き目が施されている。	灰色 砂粒・砂礫 良好
18	H	坏	A 12.2 B 4.4	平底をなし，部分的に厚みをもつ。底部から体部にかけてはゆるやかに開き，口唇部は小さく丸味を有する。 口縁部は横ナデ，底部は箆削り調整が施されている。	黄橙色 砂粒・長石粒・石英粒 良好

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
19	H	坏	A 14.6 B 2.8 C 5.6	やや浅い坏。底部は平底で，体部はやや内彎気味に外上方にのび，口縁部は僅かに外反して大きく開く。水挽き成形と思われ，底部は回転篦切り。やや摩滅が進行。	砂粒・石礫・スコリア・白雲母 良好
20	H	高台付坏		体部は内彎しながら大きく開く。口縁先端部は薄くなり，さらに折れる。 器面に水挽き時の凸凹が残る。器面内は黒色処理。	橙色　砂粒・長石粒・石英粒・雲母 良好
21	H	高台付坏		体部は内彎しながら開く。口唇部は丸味をもつ。 高台はあまり張らず，接地面は平坦である。器面に水挽きの凸凹が残る。 器面内は黒色処理。	橙色 砂粒・長石粒・石英粒・雲母 良好
22	H	甕	A 21.4 B 34.9 C 8.2	胴部に最大径をもち，頸部は直立し，口縁部は小さく外反する。口唇部には浅く沈線が周回する。底部には下方向への篦削りが施されている。	橙色 砂粒・長石粒・石英粒・雲母 良好 底部木葉痕
23	H	甕	A 15.0	底部を欠損し，なだらかな肩部から曲線をもつ頸部へとつながり，口縁部では小さく外反する。 口唇部に浅い沈線が周回する。	橙色 砂粒・長石粒・石英粒・雲母 良好
24	H	甕		底部欠損。胴部に最大径を有す。頸部は直立し，口縁部は小さく外反する。口唇部には浅く沈線が周回する。口縁部は横ナデ調整，頸部はナデ，肩部は横方向への篦削り。胴下半は下方向の篦削り。	橙色 砂粒・長石粒・石英粒・雲母 良好
25	H	甕	A (15.4)	やや小形の甕。丸く張った体部から，「く」の字状に屈曲する口縁部が付き，端部を外上方につまみ出し，丸くおさめている。 口頸部内・外面は横ナデ調整，体部内・外面は篦ナデ調整。	にぶい赤褐色 砂粒・砂礫・白雲母 良好
26	H	甕		底部欠損。胴部に最大径を有す。頸部は直立し，口縁部は小さく外反する。口唇部には浅く沈線が周回する。口縁部は横ナデ調整，頸部はナデ，肩部は斜め方向への篦削り，胴下半は下方向への篦削り。	橙色 砂粒・長石粒・石英・雲母 良好
27	H	甕		底部破片。 平底を呈し，器肉は厚く，下方向への篦削りが施されている。	橙色 砂粒・砂礫・長石・石英粒 良好 底部木葉痕
28	H	甕	C 7.7	底部破片。 平底を呈し，器肉は厚く，下方向への篦削りが施されている。	橙色 砂粒・砂礫・長石・石英粒 良好 底部木葉痕
29	H	甕	C 8.3	底部破片。 平底を呈し，器肉は厚く，下方向への篦削りが施されている。	橙色 砂粒・砂礫・長石・石英粒 良好 底部木葉痕

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
30	羽口	全長(8.0) 外径6.2 孔径2.0	先端部がやや細くなっている。	先端部で，鉄の付着が多い。
31	羽口	全長(21.0) 外径7.9 孔径2.0	大形羽口。羽口の表面および側面に篦削りがみられる。末端部分は製作時の様相を呈す。	先端部に鉄が付着しているが，その他は地ハダのまま。
32	砥石	5×3.8 1.4	方形を呈す。全体で滑らかに丸味を帯びている。使用痕が数面に認められ，摩滅がみられる。	凝灰岩

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
33	刀子	全長12.8 刀身幅 0.55 茎幅0.85 身厚0.25	茎部の断面は三角形，刃部の断面は方形を呈す。茎部に残る木質部は，柄の一部と思われる。	
34	槍鉋	全長8.65 刀身幅 1.0 柄幅0.55 身厚0.4	先端部の断面は三角形を呈し，柄部分が若干残る。銹化が進んでいる。	



第55図　26・27・36・57号竪穴住居跡・27・36号竪穴住居跡竈実測図

26号竪穴住居跡（第55図）

調査区Ｂ4h1区を中心に確認され，東西5.2m・南北3.3mを測り，主軸方向Ｎ－18°－Ｅを指し，北西部で25号竪穴住居跡，東側で27号竪穴住居跡と重複しているため全容は検出できなかった。

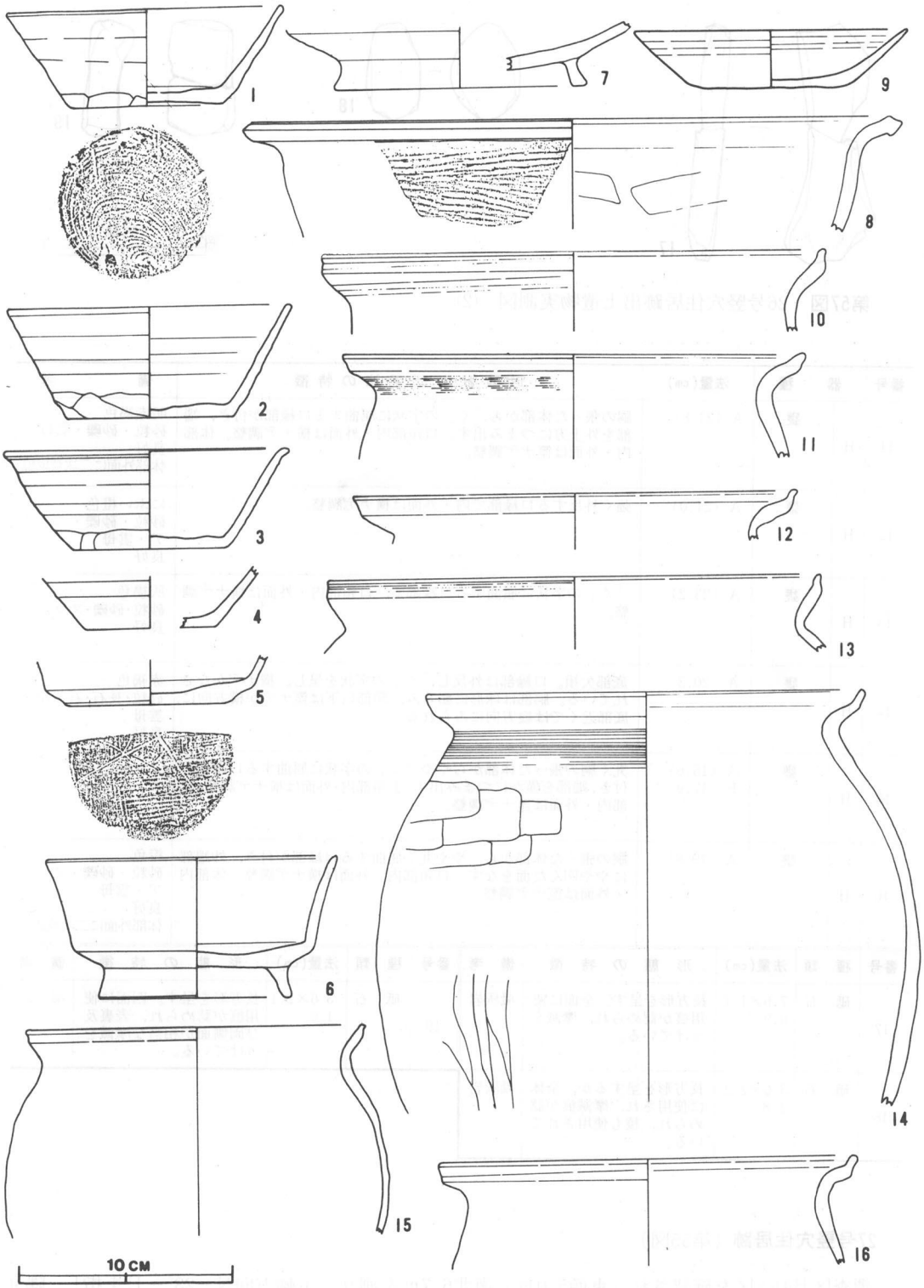
覆土は，黒色土層にロームブロック・木炭・焼土を含み，全体にロームブロック混じりである。壁は床面からやや斜めに立ち上がり，壁高は65cmを測る。床面は硬い部分もあるが，全体的にやや軟弱であり，明確に把握できない。柱穴は３か所検出され，深さ50cmを測る。壁溝は認められない。

竈は，検出されなかったが，すでに破壊されたものと思われる。

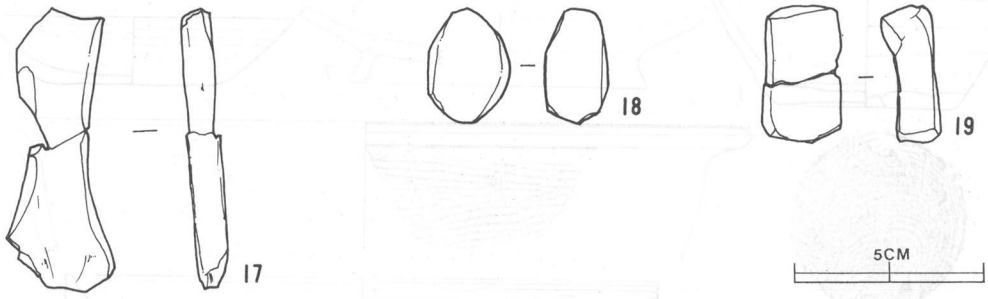
遺物は，土師器・須恵器・漆付着土器が出土している。

26号竪穴住居跡出土遺物観察表（第56・57図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 12.8 B 4.5 C 7.0	体部は外反気味に立ち上がり，口唇部は丸味をもつ。 体部はロクロ水挽き成形。底部は回転糸切り。	灰褐色 砂粒・雲母 良好
2	S	坏	A 13.1 B 5.2 C 7.6	体部は外反気味に立ち上がり，口唇部は内彎気味で丸味をもつ。 体部はロクロ水挽き成形。外周は篦削り。	灰色 砂粒・砂礫 良好
3	S	坏	A 13.0 B 4.6 C 7.0	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反し，口唇部は丸味をもつ。 体部はロクロ水挽き成形・篦削りが施されている。	灰色 砂粒・砂礫 良好
4	S	坏	C 6.0	底部破片である。 体部は外反気味に立ち上がり，底部は平底を呈す。器面は水挽き成形。	灰褐色 砂粒・雲母 良好
5	S	坏	C 7.6	底部破片である。	灰褐色 砂粒・雲母 良好 底部に篦記号
6	S	高台付坏	A 13.5 B 6.6 D 8.6	底部は丸味をもち，高台は「ハ」の字状に開き，接地面は平坦である。 体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反する。高台は貼り付け。	灰褐色 砂粒・雲母 良好
7	S	台付盤	D 11.5	底部破片である。底部はやや丸味をもち，高台は小さく張り，接地面は平坦である。体部はナデ調整が施されている。	灰褐色 砂粒・長石・石英粒・雲母 良好
8	S	甕	A 30.0	口縁部から体部にかけて残存し，頸部は直立気味に立ち上がる。 口縁部は外反する。 口縁部には，輪積みの痕跡が残り，胴部には全体にわたって平行叩き目が残る。	灰黄色 砂粒・雲母 良好
9	H	坏	A (13.0) B 3.2 C 7.4	浅い坏。底部は平底で，体部はやや内彎気味に外上方にのび，口縁端部を丸くおさめている。水挽き成形と思われ，底部は回転篦切り。	にぶい橙色 砂粒・砂礫・スコリア 良好
10	H	甕	A (23.8)	口縁部はかるく外反し，端部をつまみ出して丸くおさめている。 体部以下は欠損。口頸部内・外面は横ナデ調整。	にぶい橙色 砂粒・砂礫・スコリア・雲母 良好



第56図　26号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1)



第57図　26号竪穴住居跡出土遺物実測図　(2)

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
11	H	甕	A (21.8)	胴の張った体部から,「く」の字状に屈曲する口縁部が付き，端部を外上方につまみ出す。口頸部内・外面は横ナデ調整。体部内・外面は箆ナデ調整。	明赤褐色 砂粒・砂礫・雲母 良好 体部外面に二次焼成痕
12	H	甕	A (21.0)	強く外反する口縁部で内・外面は横ナデ調整。	にぶい橙色 砂粒・砂礫・スコリア・雲母 良好
13	H	甕	A (23.2)	「く」の字状に屈曲する口縁部で，口頸部内・外面は横ナデ調整。	灰褐色 砂粒・砂礫・スコリア 良好
14	H	甕	A 20.3	底部欠損。口縁部は外反し,「く」の字状を呈し，横ナデがなされている。胴部は球形に膨らみ，頸部以下は箆ナデが横方向に,底部近くでは縦方向にみられる。	赤褐色 砂粒・長石・石英粒・雲母 良好
15	H	甕	A (15.6) F 17.9	丸く胴の張った体部からやや「く」の字状に屈曲する口縁部が付き,端部を僅かにつまみ出す。上頸部内・外面は横ナデ調整,体部内・外面は箆ナデ調整。	
16	H	甕	A (19.8)	胴の張った体部から，やや丸く屈曲する口縁部が付き，外端部にやや凹んだ面をなす。口頸部内・外面は横ナデ調整。体部内・外面は箆ナデ調整。	橙色 砂粒・砂礫・スコリア・雲母 良好 体部外面に二次焼成痕

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
17	砥石	7.6×1.7 0.9	長方形を呈す。全面に使用痕が認められ，摩滅をうけている。	凝灰岩	19	砥石	3.6×2.1 1.0	長方形を呈す。四面に使用痕が認められ，表裏及び両側面が相当な摩滅をうけている。	凝灰岩
18	砥石	3.0×2.2 1.8	長方形を呈するが，全体に使用され，摩滅痕が認められ，稜も使用されている。	凝灰岩					

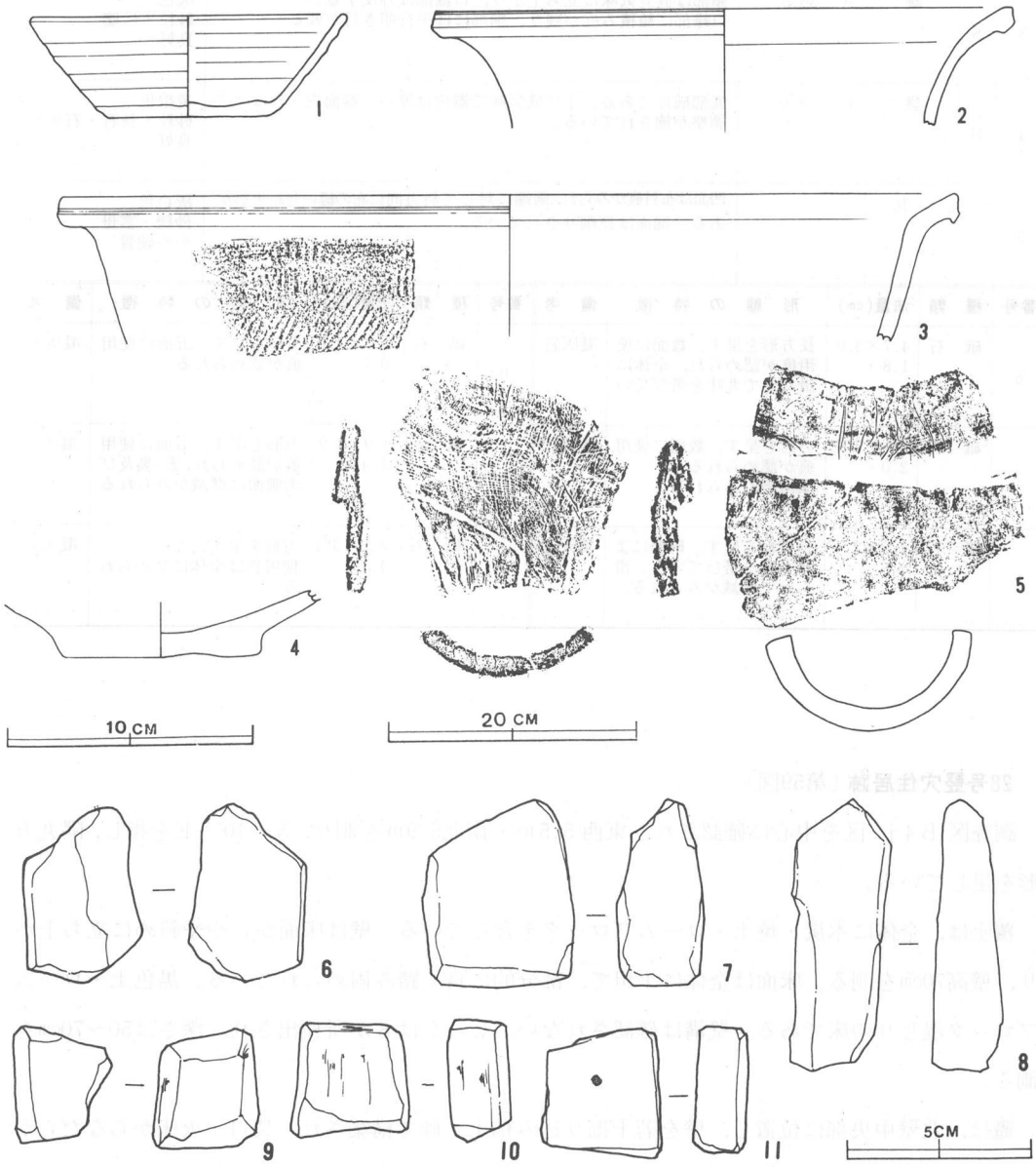
27号竪穴住居跡（第55図）

調査区B4h2区を確認され，東西5.0m・南北6.7mを測り，主軸方向N－23°－Eを指し，隅丸方形を呈している。26・57号竪穴住居跡と重複しているため，全容は検出できなかった。

覆土は，全体にロームブロックと若干の木炭を含む。壁は床面から垂直に立ち上がり，南壁ではやや斜めに立ち上がっている。壁高は80cmを測る。床面は26号竪穴住居跡より26cm低く平坦であるが，ロームブロック・黒色土を床面として，やや軟弱である。

竈は，北壁中央部よりやや西側に位置し，粘土・砂によって構築され，壁を掘り込み煙道・煙出し孔を作っているが，両袖部は失われている。

遺物は，土師器・須恵器・漆付着土器・瓦・鉄製品が出土している。



第58図　27号竪穴住居跡出土遺物実測図

27号竪穴住居跡出土遺物観察表（第58図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 12.7 B 4.2 C 6.5	体部は外反気味に立ち上がり，口唇部は内彎し丸味をもつ。底部は平底を呈する。 器面はロクロ水挽き成形，底部は篦削り。	灰黄褐色 砂粒・砂礫 不良
2	S	甕	A 23.5	頸部は直立気味に立ち上がり，口縁部は外反する。 口縁部に輪積みの痕跡が残る。	灰色 砂粒・砂礫 良好
3	S	甕	A 36.5	頸部は直立気味に立ち上がり，口縁部は外反する。 口縁部に輪積み痕が残り，胴部には平行叩き目が残る。	灰色 砂粒・砂礫 良好
4	H	甕	C 8.0	底部破片である。上げ底気味で器肉は厚い。器面内・外はナデ調整が施されている。	黄橙色 砂粒・長石・石英粒 良好
5	丸瓦			凹面は布目痕がみられ，側端に対して斜方向に布の縫い合わせ痕がある。端面は篦削りされている。	灰白色 砂礫・雲母 やや硬質

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
6	砥石	4.7×3.0 1.8	長方形を呈す。数面に使用痕が認められ，全体に滑らかで丸味を帯びている。	凝灰岩	9	砥石	3.1×2.7 0.7	方形を呈す。五面に使用痕が認められる。	凝灰岩
7	砥石	5.0×4.0 2.0	方形を呈す。数面に使用痕が認められる。 摩滅痕もみられる。	凝灰岩	10	砥石	3.0×2.9 1.4	方形を呈す。五面に使用痕が認められ，表・裏及び両側面に摩滅がみられる	凝灰岩
8	砥石	7.2×2.4 1.5	長方形を呈す。研磨により丸味を帯びている。滑らかで摩滅がみられる。	凝灰岩	11	砥石	3.3×3.1 1.1	方形を呈す。 使用痕は全体に認められる。	凝灰岩

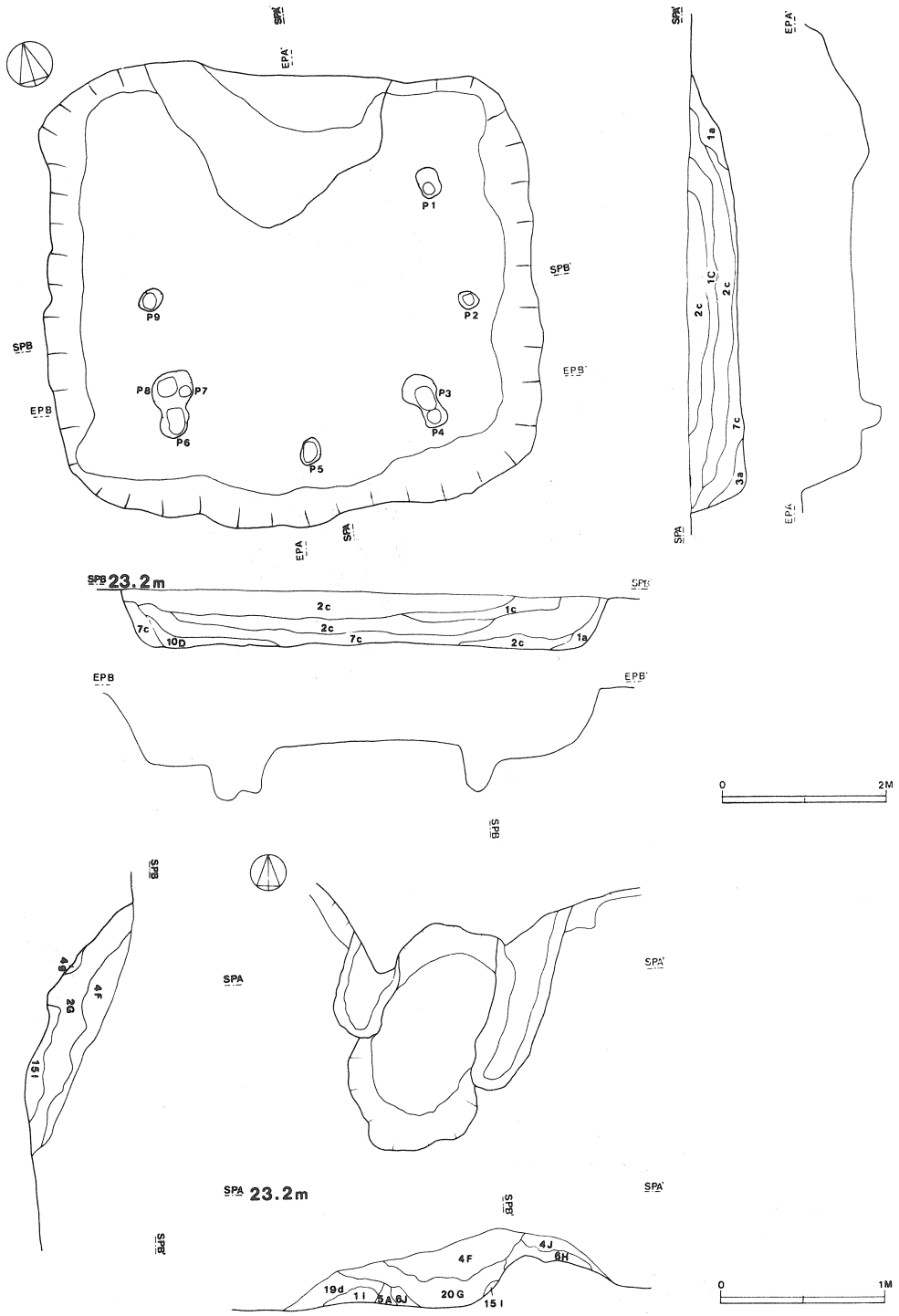
28号竪穴住居跡（第59図）

調査区 B4j2区を中心に確認され，東西5.5m・南北5.9mを測り，N－10°－Eを指し，隅丸方形を呈している。

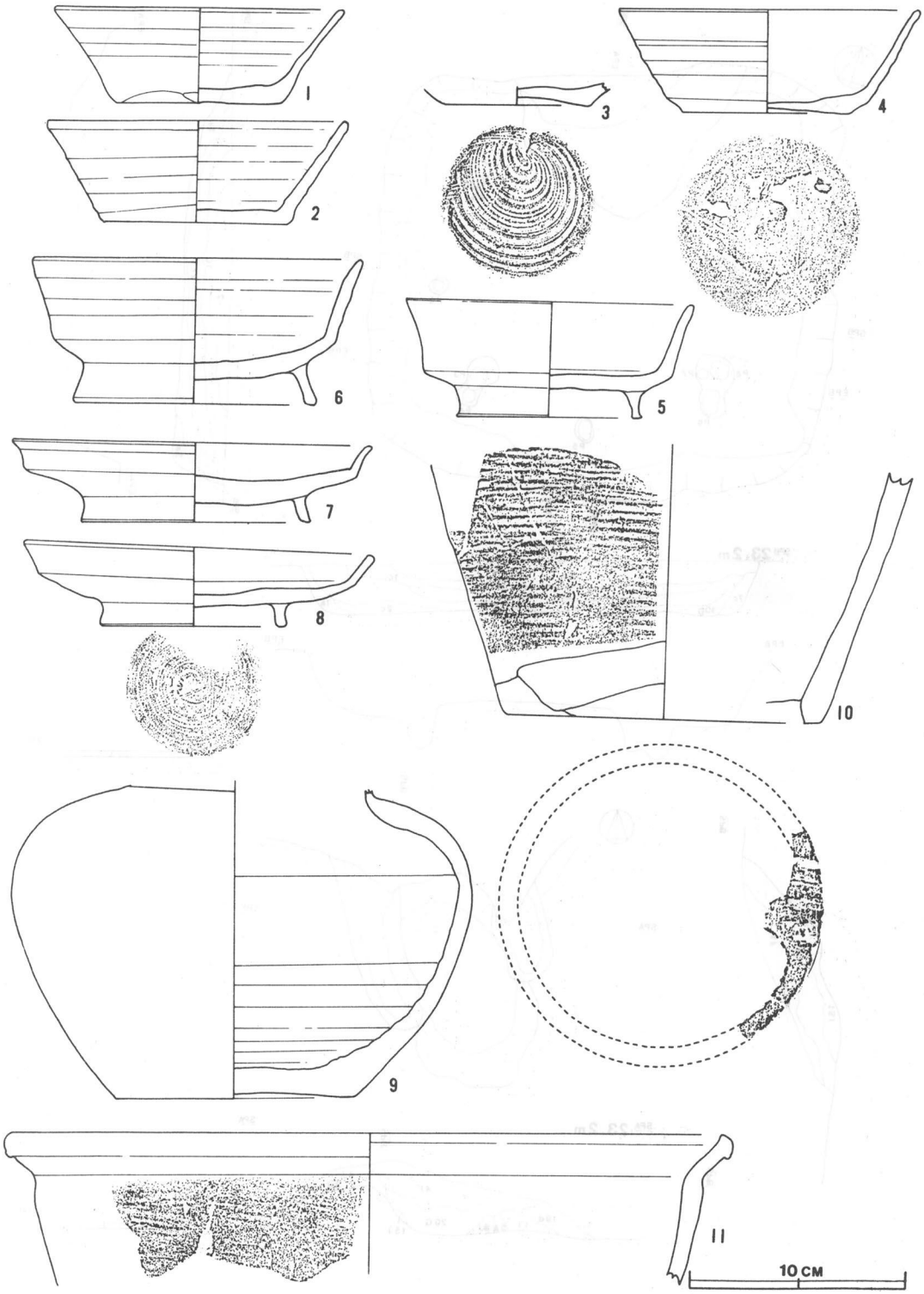
覆土は，全体に木炭・焼土・ロームブロックを含んでいる。壁は床面からやや斜めに立ち上がり，壁高70cmを測る。床面は全体に平坦で，部分的に良く踏み固められている。黒色土・ロームブロック混じりの床である。壁溝は確認されない。ピットは8か所検出され，深さは50～70cmを測る。

竈は，北壁中央部に位置し，壁を若干掘り込み粘土・砂で構築され，焚口・火床からなだらかに立ち上がり，煙道と煙出し孔を作っているが，遺存状態は良くない。

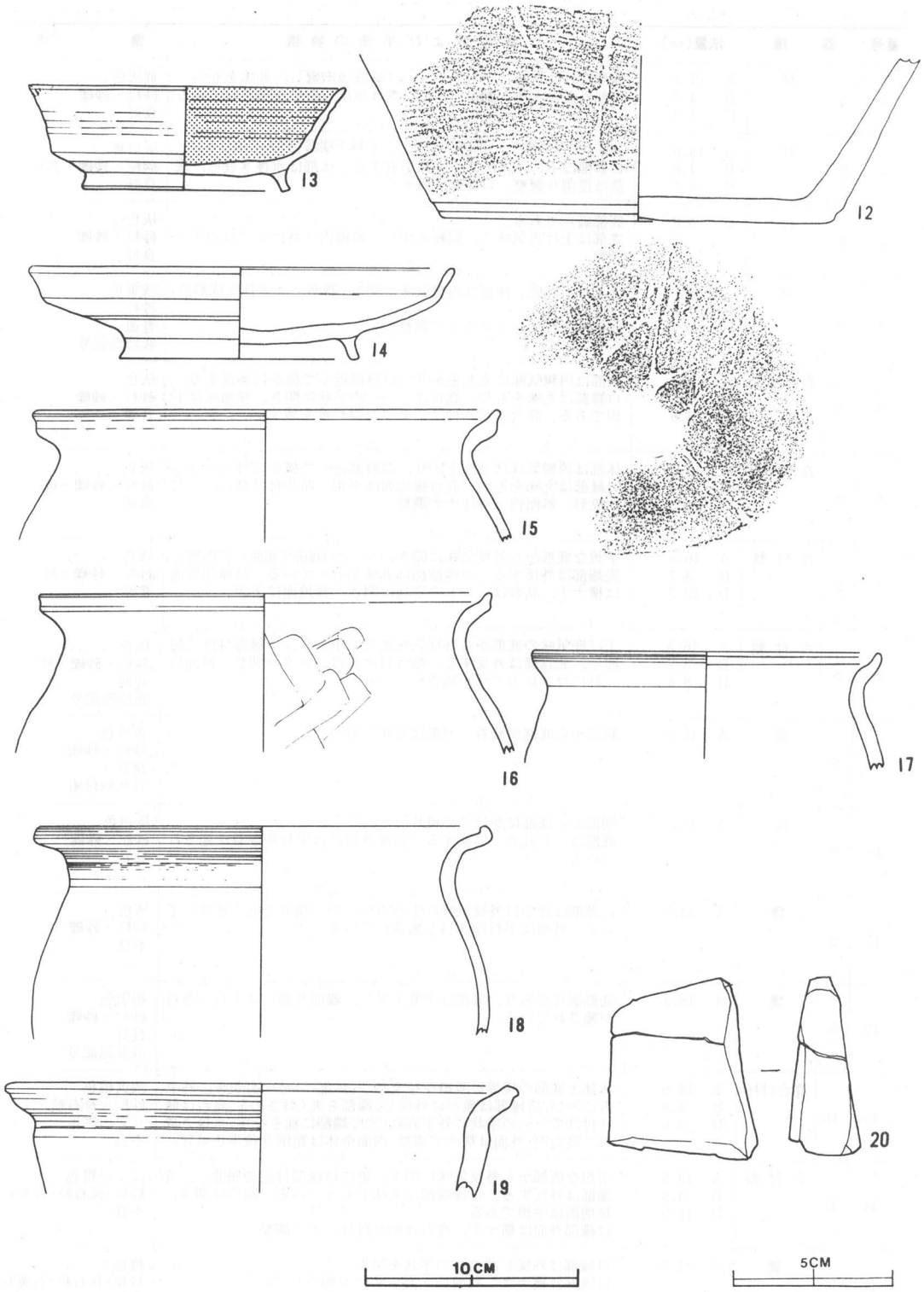
遺物は，土師器・須恵器・墨書土器・瓦・砥石・漆紙が出土している。



第59図　28号竪穴住居跡・竈実測図



第60図　28号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1)



第61図　28号竪穴住居跡出土遺物実測図 (2)

28号竪穴住居跡出土遺物観察表（第60・61図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 13.4 B 4.5 C 7.9	体部は外反気味に立ち上がり，口縁部は内彎し，丸味をもつ。体部外面は水挽き成形，体部下端は篦削り調整が施されている。	黄灰色 砂粒・砂礫 良好
2	S	坏	A 13.9 B 4.8 C 8.7	体部は外反気味で，ゆるやかに開く。口縁下端部で凹みを生じる。口唇部はそのまま小さく丸味を有する。体部は水挽き成形，底部は篦削り調整。口縁部は横ナデ。	灰白色 砂粒・砂礫・雲母 良好
3	S	坏	C 6.8	底部破片である。 底部は上げ底気味で，回転糸切り。器面内・外にロクロのナデ調整。	灰色 砂粒・砂礫 良好
4	S	坏	A 14.0 B 4.9 C 7.9	底部は上げ底。体部は内彎気味に開き，器面には水挽き成形時の凸凹が残る。 内・外面にはロクロのナデ調整。	浅黄色 砂粒 普通 底部篦記号
5	S	高台付坏	A 13.4 B 5.6 C 8.6	体部は内彎気味に立ち上がり，口唇部近くで僅かに外反する。口唇部は丸味をもつ。高台は「ハ」の字状に開き，接地面は平坦である。高台は貼り付け，ロクロ調整痕を残す。	灰色 砂粒・砂礫 普通
6	S	高台付坏	A 15.3 B 6.9 D 11.3	体部は内彎気味に立ち上がり，口唇部近くで僅かに外反する。口縁部は丸味をもつ。高台接地面は平坦。貼り付け高台，ロクロ成形。器面内・外はナデ調整。	灰色 砂粒・砂礫・礫 普通
7	S	台付盤	A 16.8 B 3.7 D 10.7	平坦な底部から外反気味に開き，さらに口縁部で屈曲して内彎し，先端部は外反する。口縁端部は丸味をもっている。口縁部外面は横ナデ，高台は「ハ」の字状に開き，接地面は平坦。	灰色 砂粒・砂礫・礫 普通
8	S	台付盤	A 16.3 B 3.7 D 8.8	上げ底気味の底部から外反気味に立ち上がり，口縁部付近で屈曲し，先端部は外反する。貼り付け高台，ロクロ調整。器面内・外にロクロのナデが施されている。	灰色 砂粒・砂礫・礫 普通 底部篦記号
9	S	壺	A 11.0	胴部から底部が残存。肩部は丸味をもつ。	黄灰色 砂粒・砂礫 良好 自然釉付着
10	S	甑	A 13.0	胴部から底部にかけての破片。 底部は「五孔式」に属する。器面外部には平行叩き目が施されている。	灰白色 砂粒・砂礫 良好
11	S	甕	A 33.5	口頸部は僅かに外反気味に上外方にのび，端部で丸く肥厚している。外面は平行叩き目が施されている。	灰色 砂粒・砂礫 不良
12	S	甕	A 18.3	底部破片であり，底部は平底を呈し，器面外部には平行叩き目が施されている。	褐灰色 砂粒・砂礫 良好 底部篦記号
13	H	高台付坏	A（14.6） B 4.8 D 9.6	体部と底部の境界に明瞭な稜を持つ。体部はやや外傾気味に外上方にのび，口縁部は僅かに外反し，端部を丸くおさめる。高台は貼り付けで「ハ」の字状に外下方にのび，端部に面をなす。水挽き成形で高台内・外面は横ナデ調整。内面全体は篦削り後黒色処理。	浅黄橙色 砂粒・長石粒・スコリア・雲母 不良
14	H	台付盤	A 19.5 B 4.3 D 11.0	平坦な底部から外反気味に開き，更に口縁部付近で屈曲し，先端部は外反する。口縁端部は丸味をもっている。高台は開き，接地面は平坦である。 口縁部外面は横ナデ，高台は貼り付け，ナデ調整。	にぶい橙色 砂粒・長石粒・石英粒 不良
15	H	甕	A 21.5	口縁部は外反し，「く」の字状を呈す。 口縁部は横ナデ。器面内・外にナデが施されている。	橙色 砂粒・長石粒・石英粒 良好

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
16	H	甕	A 21.0	口縁部破片である。口縁部は僅かに外反し，先端部は直立気味で丸味をもつ。 口縁部は横ナデが施されている。	橙色 砂粒・長石粒・石英粒 良好
17	H	甕	A 16.2	口縁部は外反し,「く」の字状を呈し，横ナデが施されている。	赤褐色 砂粒・長石・石英粒 良好
18	H	甕	A 20.7	口縁部破片である。口縁部は外反し，口唇部は内彎し丸味をもつ。口縁部は横ナデ，器面内・外にナデが施されている。	明赤褐色 砂粒・長石粒・石英粒 良好
19	H	甕	A 23.4	口縁部は外反し，頸部以下は直立気味である。 口縁部・頸部は横ナデが施されている。	にぶい橙色 砂粒・長石・石英粒 良好
20	砥石		5.5×4.1 1.3	方形を呈す。使用痕が数面に認められ，摩滅がみられる。稜も使用されている。	凝灰岩

29号竪穴住居跡（第62図）

調査区C4d4区を中心に確認され，1号連房式竪穴遺構と重複している。東西5.0m・南北4.5mを測り，主軸方向N－20°－Eを指し，方形を呈している。

壁は，床面からやや斜めに立ち上がり，床面はやや軟弱である。壁溝は確認されない。ピットは9か所検出された。

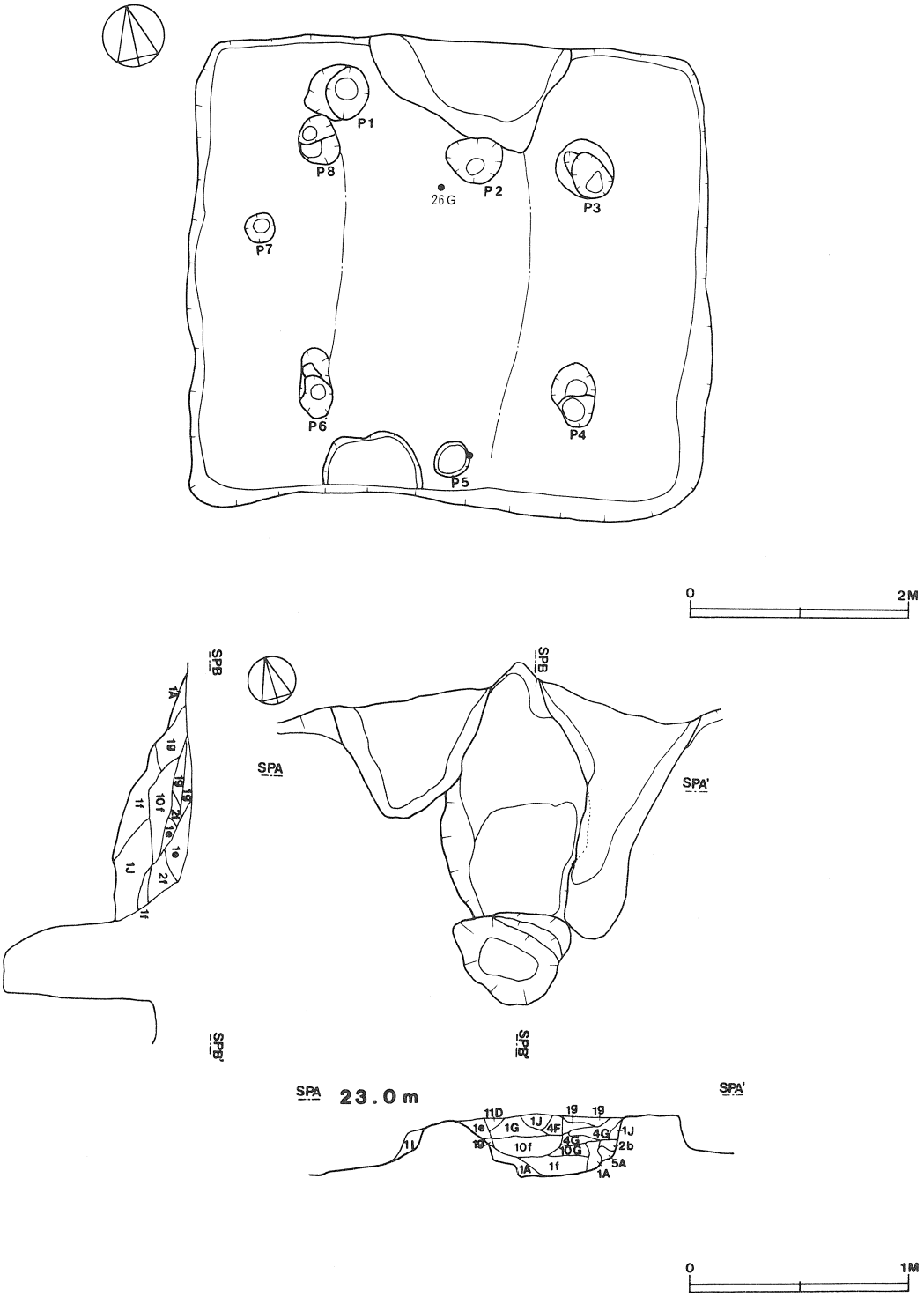
竈は，北壁中央部に位置し，壁を掘り込み，粘土・砂で構築され，焚口・火床からなだらかに立ち上がり，煙道・煙出し孔を作っているが，保存状態は良くない。

本住居跡は，1号連房式竪穴遺構内にあり，連房式竪穴遺構より古い。

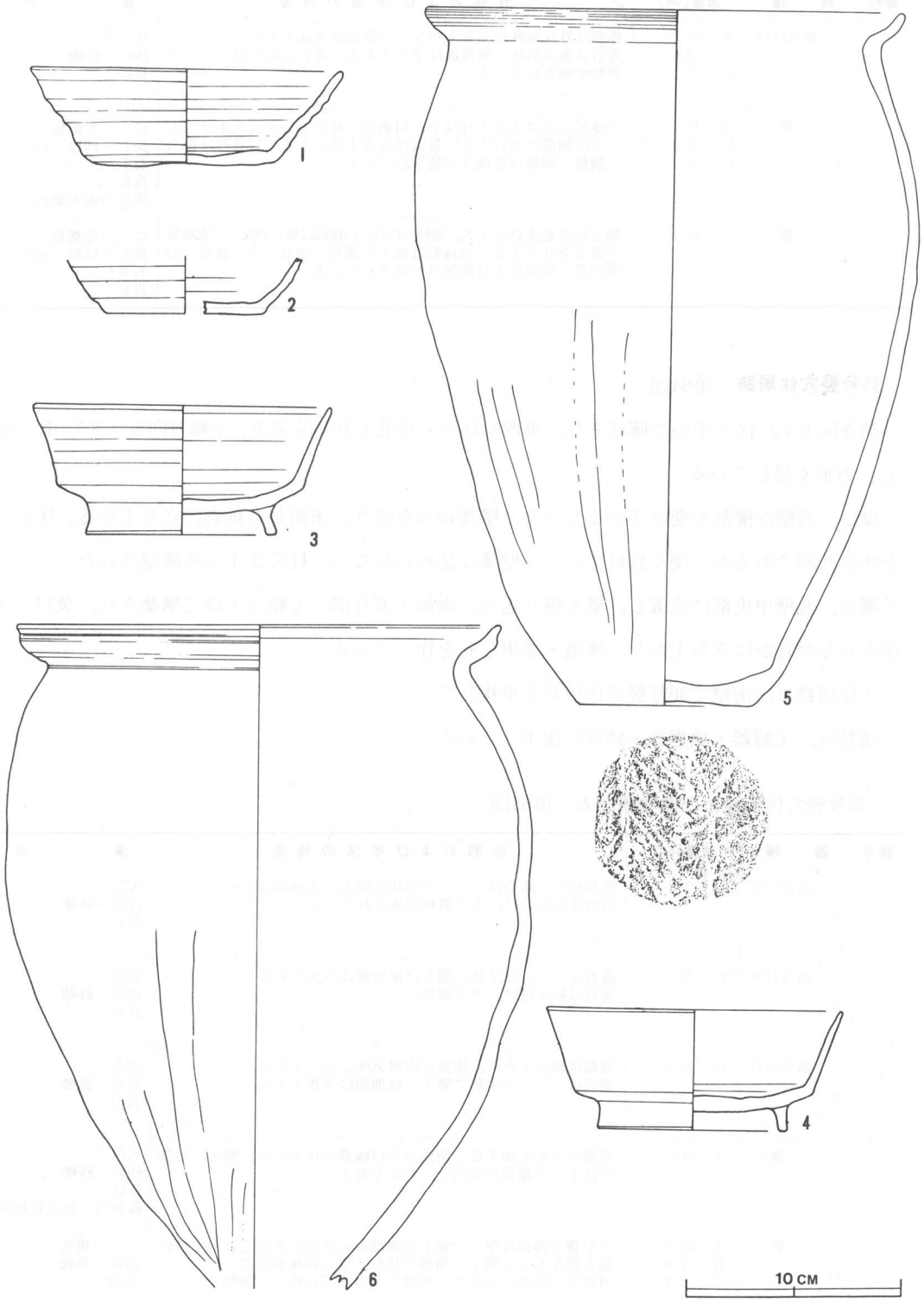
遺物は，土師器・須恵器・瓦・漆紙が出土している。

29号竪穴住居跡出土遺物観察表（第63図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 14.3 B 4.4 C 8.5	体部は外反気味に立ち上がり，口唇部は丸味をもつ。 底部は上げ底であり，器面外に水挽き痕が明瞭に残る。	灰色 砂粒・砂礫 良好
2	S	坏	C 7.2	底部破片である。 体部は内彎気味に立ち上がる。体部に水挽き痕が残る。	灰色 砂粒・砂礫 良好
3	S	高台付坏	A 13.8 B 6.0 D 8.7	体部は内彎気味に立ち上がる。体部に水挽き痕が残る。 高台は接地面が平坦であり，貼り付け，ナデ調整が施されている。	灰白色 砂粒・砂礫 良好



第62図　29号竪穴住居跡・竈実測図



第63図　29号竪穴住居跡出土遺物実測図

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
4	S	高台付坏	A 13.7 B 5.6 D 8.7	体部は外反気味に立ち上がり，口唇部は丸味をもつ。 高台は直立気味。接地面は平坦である。高台は貼り付け，ナデ調整が施されている。	灰白色 砂粒・砂礫 良好
5	H	甕	A 22.2 B 32.2 C 8.0	口縁部上半は大きく外反し，屈曲部に稜をもつが，下半はスムーズに胴部に移行する。最大径は胴上位にある。口縁部は横ナデ調整，胴部は箆削りが施されている。	にぶい赤褐色 長石・砂粒・砂礫・石英粒 良好 底部外面木葉痕
6	H	甕	A 22.3	胴上位に最大径をもち，頸部で括れ，口縁部は強く外反し，先端部が直立気味である。口縁部は横ナデ調整。頸部はナデ調整。器面内部・胴部以下は箆削りが施されている。	にぶい赤褐色 長石・砂粒・砂礫・石英粒 良好

35号竪穴住居跡（第64図）

調査区B4g5区を中心に確認され，東西3.16m・南北3.15mを測り，主軸方向N－8°－Eを指し，方形を呈している。

壁は，西壁が攪乱を受けているものの，壁高40cmを測り，床面から垂直に立ち上がる。床面は全体に凸凹であるが，硬く良好である。壁溝は認められない。柱穴は4か所確認された。

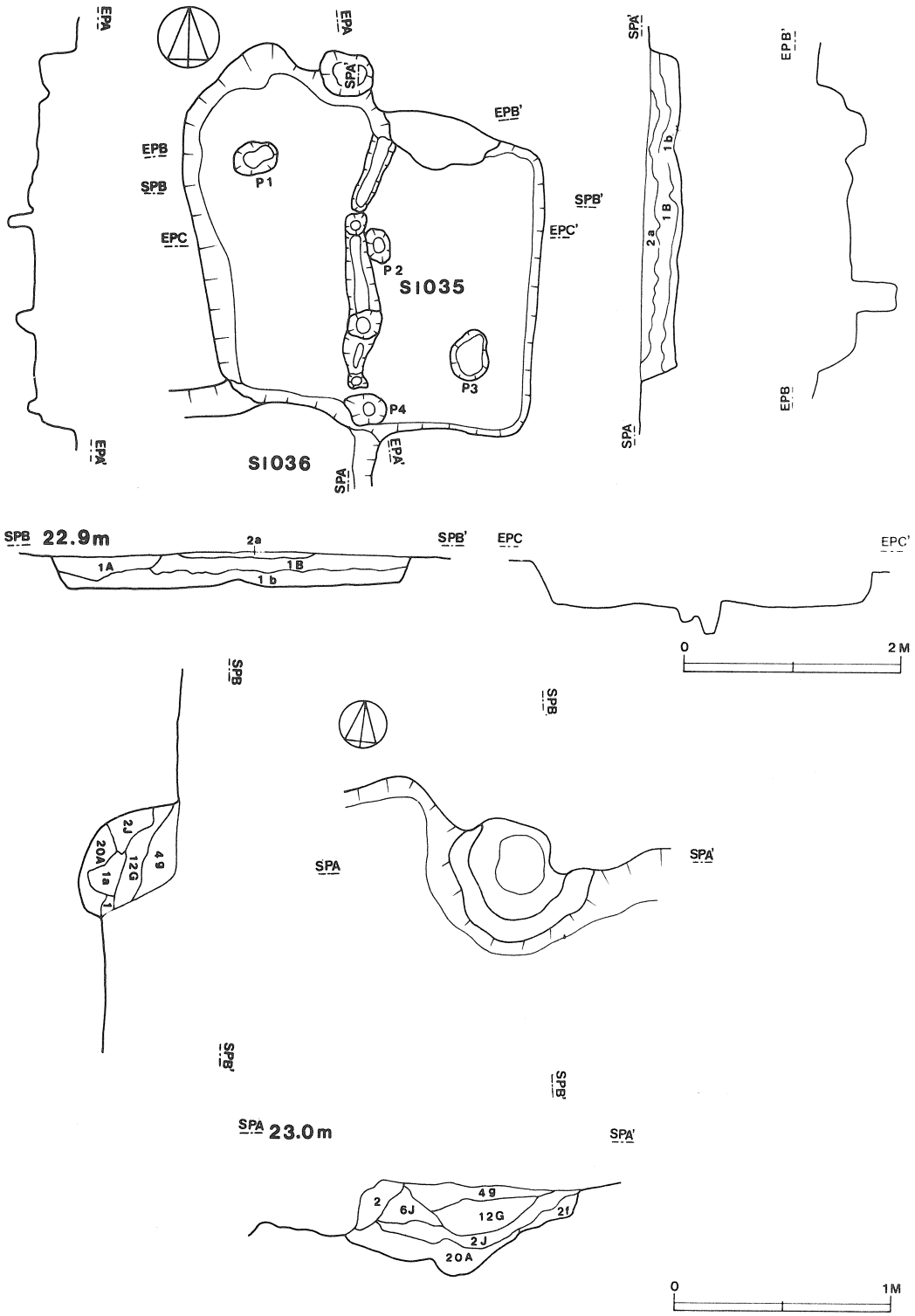
竈は，北壁中央部に位置し，壁を掘り込み，両袖・天井部とも粘土・砂で構築され，焚口・火床からなだらかに立ち上がり，煙道・煙出し孔を作っている。

本住居跡は，南壁で36号竪穴住居跡と重複している。

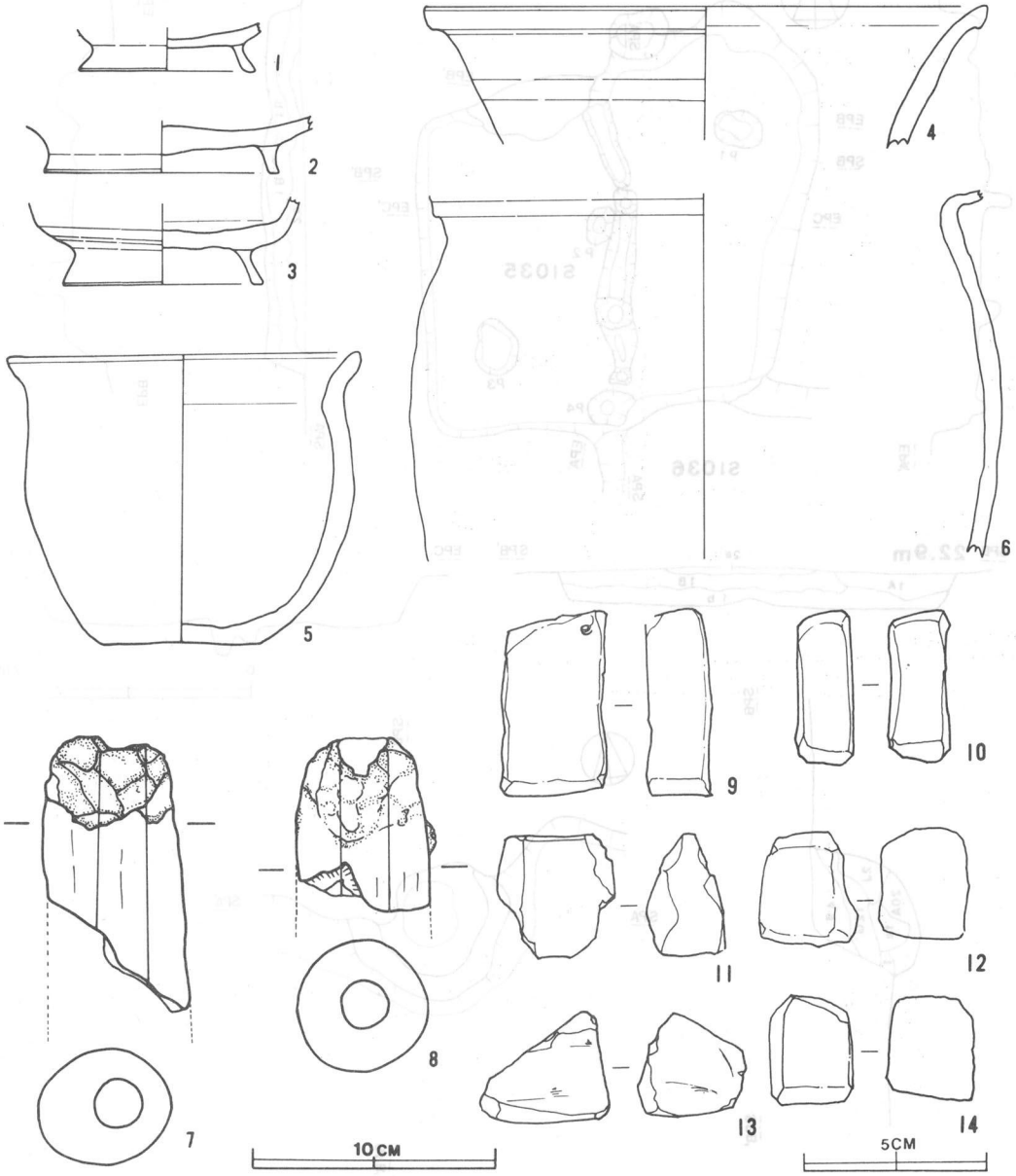
遺物は，土師器・須恵器・鉄滓が出土している。

35号竪穴住居跡出土遺物観察表（第65図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	高台付坏	D 7.2	底部破片。高台は「ハ」の字状に開き，先端部は尖る。 高台は貼り付け，ナデ調整が施されている。	灰色 砂粒・砂礫 良好
2	S	高台付坏	D< 9.5	高台は「ハ」の字状に開き，接地面は平坦である。 高台は貼り付け，ナデ調整。	灰色 砂粒・砂礫 良好
3	S	高台付坏	D 8.2	底部は破片であり，体部は内彎気味に立ち上がる。 高台は「ハ」の字状に開き，接地面は平坦である。	灰色 砂粒・砂礫 良好
4	S	甕	A 23.0	肩部以下を欠損する。頸部から口縁部がゆるやかに開き，端部では上・下端部が突出し，丸味を有す。	灰色 砂粒・砂礫 良好 器面内・外に自然釉
5	H	甕	A 14.3 B 11.8 C 6.4	小形甕で器肉は厚い。扁平な底部から体部にかけては胴中位に最大径をもって開く。頸部で括れ，短い口縁部は開く。 肩部から底部にかけては箆削り。口縁部は横ナデ調整。	にぶい橙色 砂粒・砂礫 良好



第64図　35号竪穴住居跡・竈実測図



第65図　35号竪穴住居跡出土遺物実測図

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
6	H	甕		胴部破片である。胴部は球形を呈す。器面内・外はナデ調整。頸部は横ナデ調整。	にぶい橙色 砂粒・砂礫 普通

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
7	羽口	全長(11.0) 外径5.7 孔径2.0		先端部に鉄が付着している。	11	砥石	3.3×3.2 2.0	三角形を呈す。 三面に使用痕が認められる。	凝灰岩
8	羽口	全長(7.2) 外径5.5 孔径2.0	小形の羽口。	先端部に鉄が付着している。	12	砥石	3.0×2.4 2.0	方形を呈す。 全体に滑らかで丸味を帯び，摩滅がみられる。	凝灰岩
9	砥石 (堤砥)	4.9×2.7 1.7	長方形を呈す。 五面に使用痕が認められ，研磨による摩滅がみられ，平坦部分も観察できる。 一端に2mmの孔がみられる。	凝灰岩	13	砥石	3.5×2.4 1.7	台形を呈す。 使用痕が全体に認められ，丸味を帯び稜も使用されている。	凝灰岩
10	砥石	4.2×1.6 1.5	長方形を呈す。 五面に使用痕が認められ，使用痕は滑らかである。	凝灰岩	14	砥石	3 0×2.3 1.8	方形を呈す。 使用痕が残り，丸味を帯びている。	凝灰岩

36号竪穴住居跡（第55図）

調査区B4h4区を中心に確認され，東西5.03m・南北6.2mを測り，主軸方向N－5°－Wを指し，隅丸長方形を呈している。

壁は，床面から垂直に立ち上がり，壁高54cmを測る。床面は全体に凹凸であるが，部分的に平坦面がみられ，その部分は固い。壁溝は幅18cm・深さ7cmを測り，ほぼ全周している。ピットは13か所確認され，深さは，40～60cmを測る。

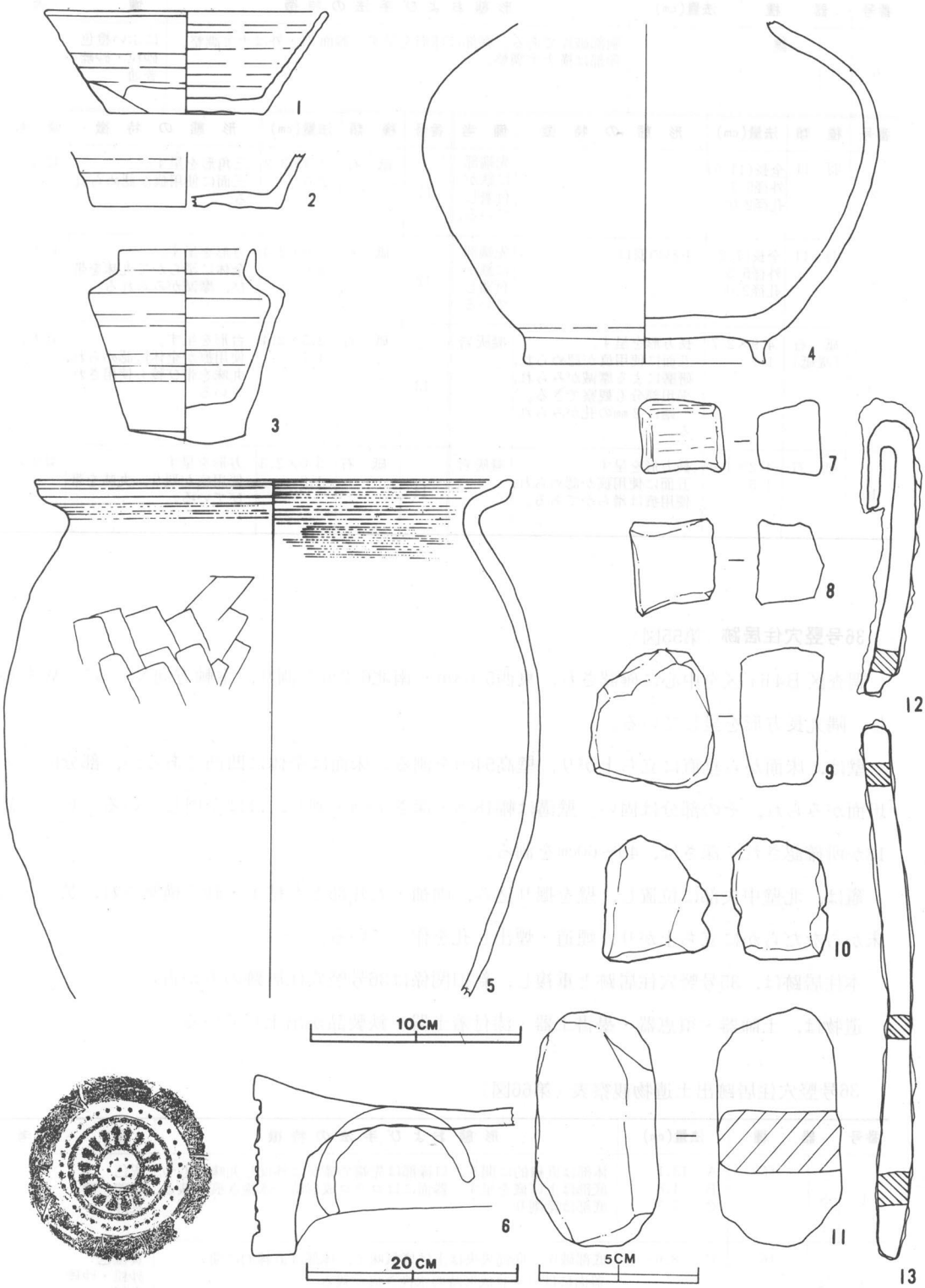
竈は，北壁中央部に位置し，壁を掘り込み，両袖・天井部とも粘土・砂で構築され，焚口・火床からなだらかに立ち上がり，煙道・煙出し孔を作っている。

本住居跡は，35号竪穴住居跡と重複し，新旧関係は36号竪穴住居跡の方が古い。

遺物は，土師器・須恵器・墨書土器・漆付着土器・鉄製品が出土している。

36号竪穴住居跡出土遺物観察表（第66図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 13.1 B 4.8 C 7.3	体部は直線的に開き，口縁部は先端で僅かに外反し丸味をもつ。底部は上げ底を呈す。器面にはロクロ成形時の水挽き痕が残る。底部は篦削り。	灰色 砂礫・礫 良好
2	S	坏	C 8.6	底部破片。底部央央は上げ底気味で，体部は直線的に開く。器面にはロクロ成形時の水挽き痕が残る。	黄橙色 砂粒・砂礫 良好



第66図　36号竪穴住居跡出土遺物実測図

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
3	S	小形短頸壺	A 6.3 B 9.0 C 5.5	体部上位に最大径をもち，肩部は張りをもつ。頸部は直立し，口縁部は肥厚しわずかに開く。 口縁外面に粘土紐巻き上げ痕。口縁部横ナデ。	暗灰色 砂粒 良好 体部内・外面，底部外面に自然釉
4	S	台付壺	C 11.5	口縁部。頸部を欠損する。肩部は丸味をもつ。高台は「ハ」の字状に開く。接地面は尖る。胴部と口頸部は別個に成形され，後に接合されている。内面の口頸部と胴部の間に指頭による整形が施されている。	暗灰色 砂粒 良好 体部内・外面に自然釉
5	H	甕	A (22.7) F 25.2	体部は内彎しつつ立ち上がり，「く」の字状に屈曲する口縁部が付き，端部は丸くおさめている。口縁部内・外面は横ナデ調整。体部内面は箆ナデ調整。体部外面は箆削り調整。体部内面に粘土紐痕を残す。全体に摩滅が進行。	にぶい橙色 砂粒・長石粒・石英粒少・雲母少 普通
6	軒丸瓦			中房に1+8の蓮子を配し，弁区に単弁18葉蓮華文，外区に33個の珠文をめぐらしている。瓦当部の外面を箆削りで整えており，内面を雑な指削りで整えている。	明褐灰色 砂粒・砂礫 良好

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
7	砥石	2.6×2.2 2.0	方形を呈する。 表・裏・側面に使用痕が認められる。 擦痕も数 所にみられる。	凝灰岩	11	砥石	7.5×3.8 2.0	長方形を呈するが，全体に使用痕が残り丸味を帯びている。	凝灰岩
8	砥石	2.6×2.6 2.1	方形を呈する。 表・裏・側面に使用痕が認められる。	凝灰岩	12	釘	現存長8.2	両端部欠損。頭部が折れまがっている。 銹化が進行している。	
9	砥石	4.4×3.7 2.5	長方形を呈する。 表・裏及び側面の一部に使用痕が認められ，滑らかで丸味を帯びている。	凝灰岩	13	棒状鉄製品	現存長16.7 幅 0.6 厚み0.7	両端部欠損。 銹化が進行している。	
10	砥石	4.0×3.3 2.9	方形を呈する。 側面に使用痕が認められ，全体に丸味を帯びている。	凝灰岩					

37号竪穴住居跡（第67・68図）

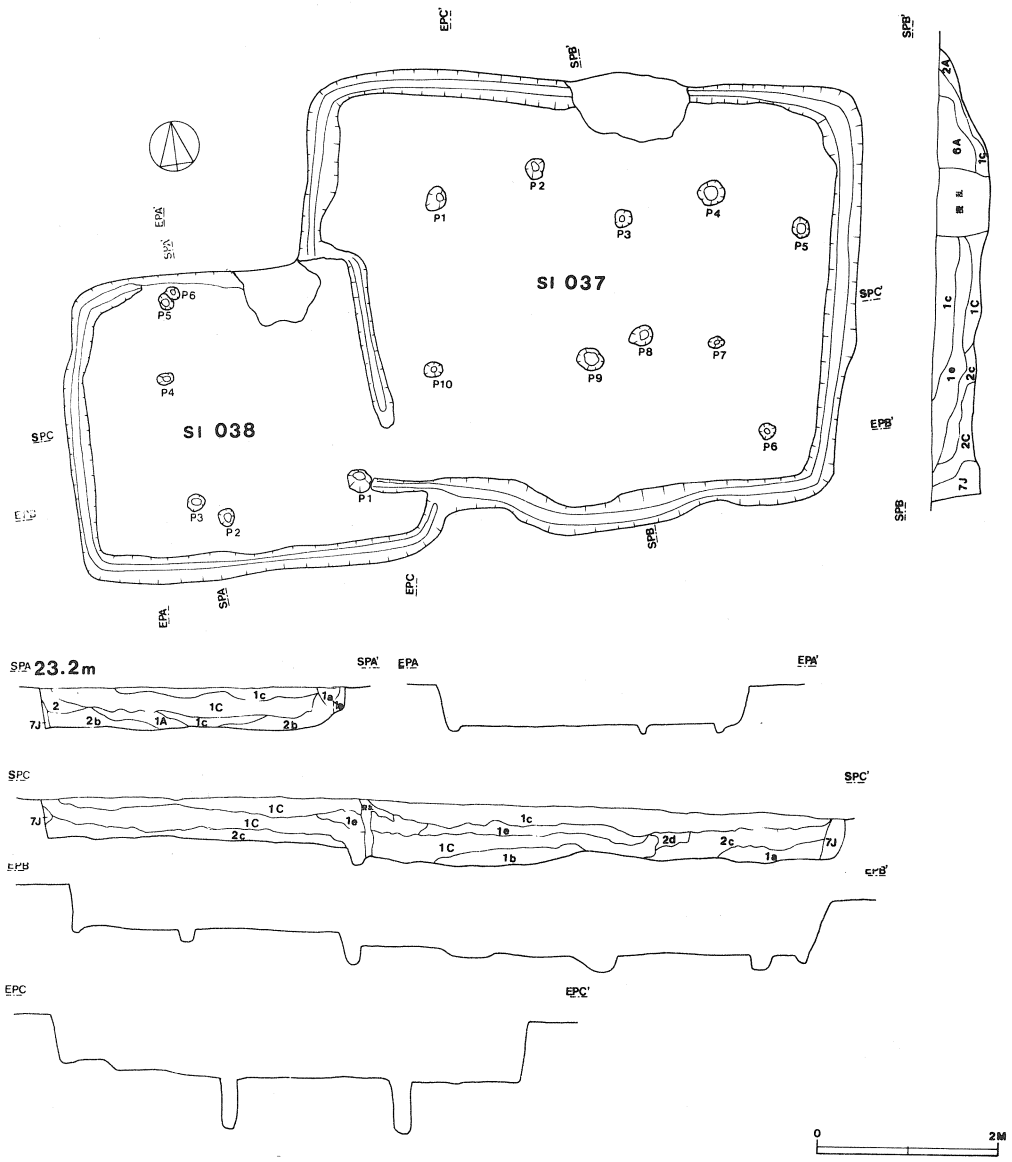
調査区B4j5区を中心に確認され，東西6.25m・南北5.1mを測り，主軸方向N－14°－Eを指し，隅丸長方形を呈している。

壁は，床面から垂直に立ち上がり，壁高60cmを測る。床面は全体に平坦であり，良く踏み固められている。壁溝は幅15cm・深さ10cmを測り，ほぼ全周している。ピットは10か所確認され，深さは15～60cmを測る。

竈は，北壁中央部に位置し，壁を掘り込んで構築されている。両袖・天井部とも粘土・砂を使用し，焚口・火床からなだらかに立ち上がり，煙道と煙出し孔を作っている。

壁に掘り込みがみられ，入口部と考えられる施設がある。西側は，38号竪穴住居跡と重複している。

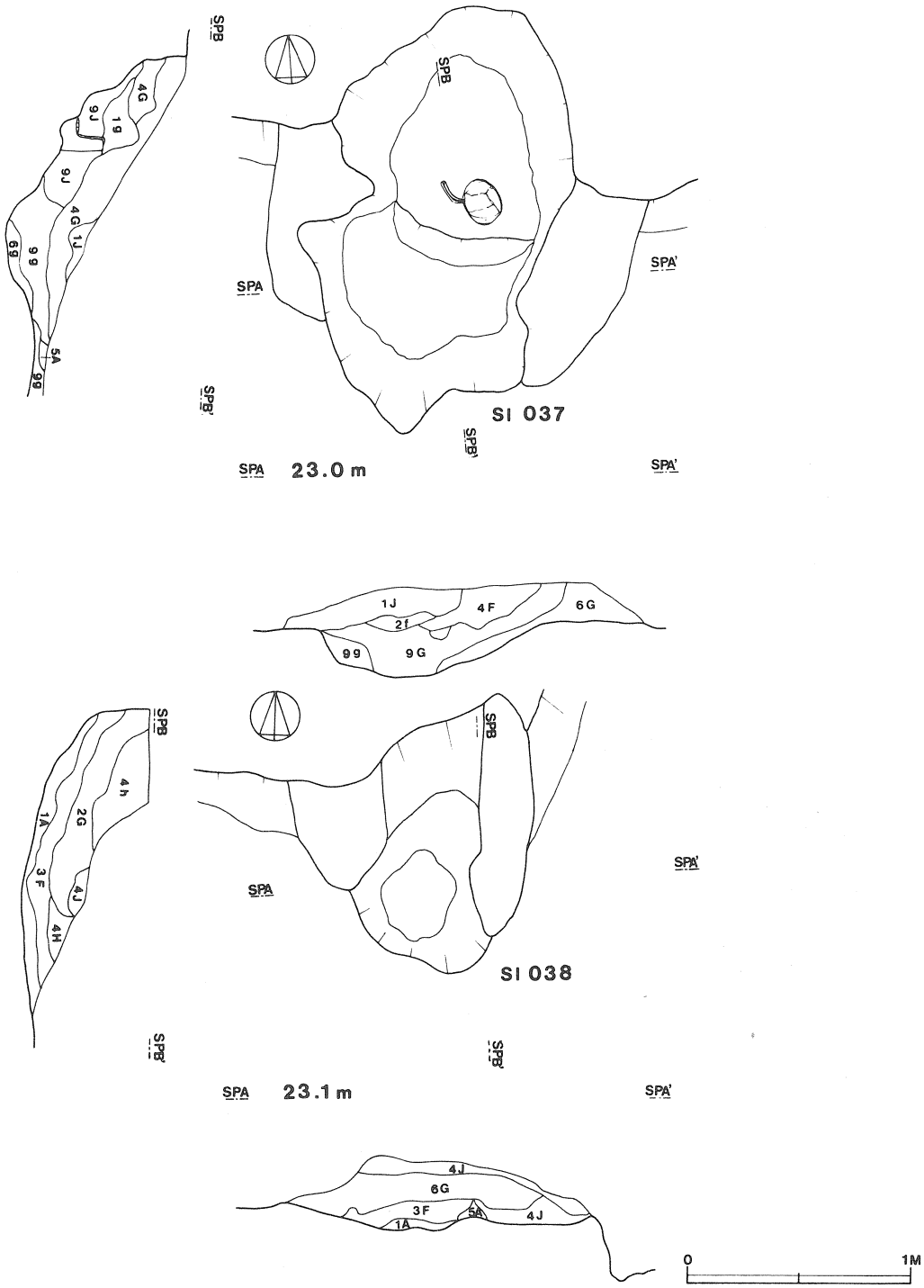
遺物は，土師器・須恵器・墨書土器・漆付着土器・瓦・鉄製品が出土している。



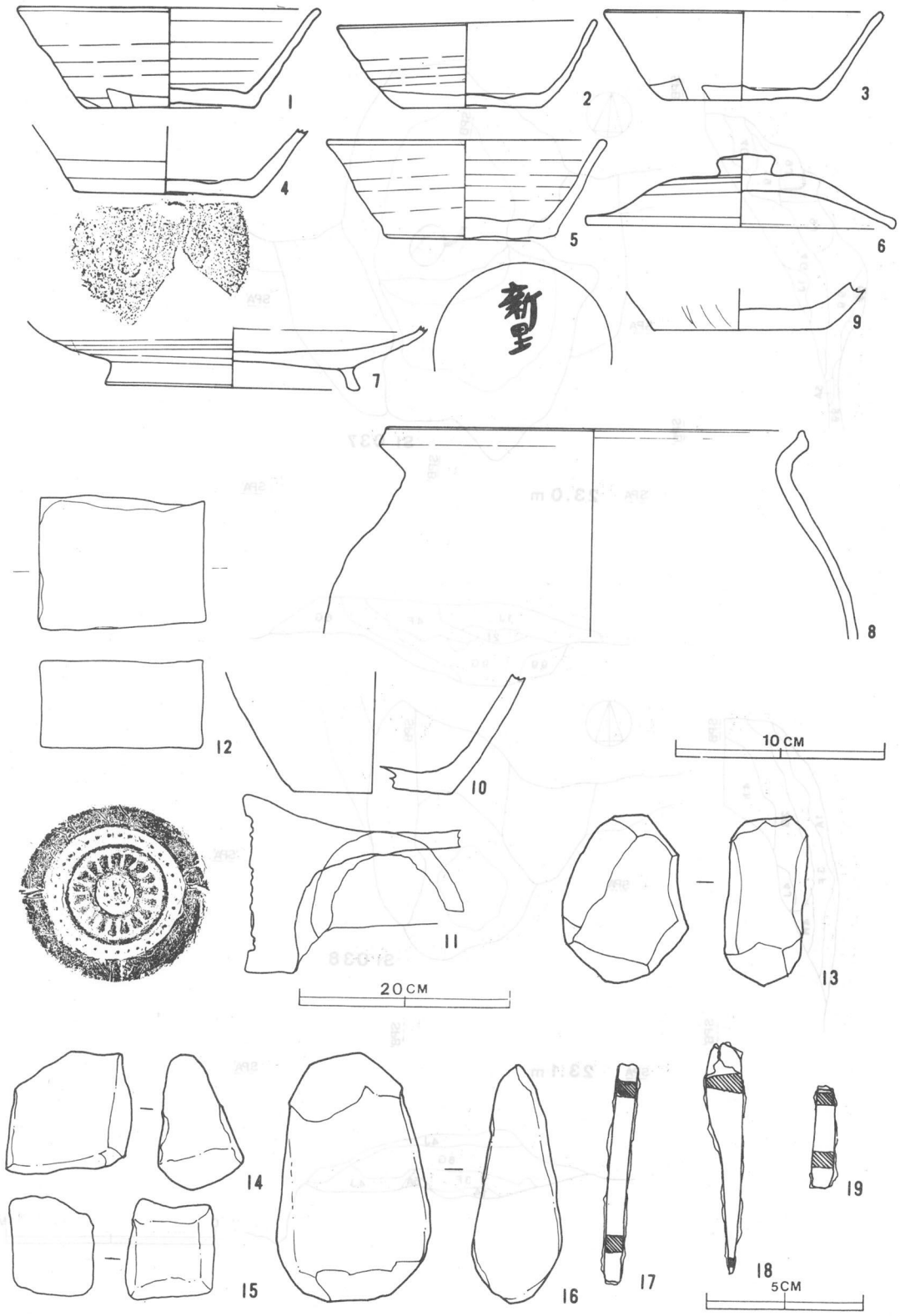
第67図　37・38号竪穴住居跡実測図

37号竪穴住居跡出土遺物観察表（第69図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 14.3 B 4.7 C 8.0	体部は外反気味に立ち上がり，口唇部は丸味をもつ。 器面にはロクロ成形時の水挽き痕が残る。底部は篦切り後篦削り。	灰色 砂粒・砂礫 良好
2	S	坏	A 12.2 B 4.0 C 6.5	底部がやや上げ底気味で，体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は先端で僅かに外反する。 器面にはロクロ成形時の水挽き痕が残る。	灰色 砂粒・砂礫 良好



第68図　37・38号竪穴住居跡竈実測図



第69図　37号竪穴住居跡出土遺物実測図

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
3	S	坏	A 13.2 B 4.0 C 7.5	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は先端で僅かに外反する。底部は箆切り後箆削り調整が施されている。	褐灰色 砂粒 良好
4	S	坏	C 8.5	底部は上げ底気味で，外反気味に立ち上がる体部を有す。器面にはロクロ成形時の水挽き痕が残る。	灰黄褐色 砂粒 良好 底部外面箆記号
5	S	坏	A 13.1 B 4.8 C 8.5	底部は平底で，体部は外傾気味に外上方にのび，口縁端部を丸くおさめている。水挽き成形。	灰色 砂粒・砂礫 良好 体部内面に漆付着 底部外面墨書
6	S	蓋	A 14.7 B 3.5	天井部につまみを有し，頂部はなだらかに張りを見せ，肩からは直線的に開きながら下がる。 受け部はあまり張らず，僅かにかかるものである。 天井部はロクロナデ調整。受け部は横ナデ調整が施されている。	黄灰色 砂粒・砂礫・雲母 良好
7	S	台付盤	D 12.0	浅い作りで，高台は小さく張り，体部は直線的に大きく開く。体部はナデ調整。高台は貼り付けで入念なナデ調整がみられる。	灰色 砂粒・砂礫 良好
8	H	甕	A 20.0	口縁部破片。 胴部は球形を呈し，口縁部は外反し「く」の字状を呈す。口縁部は横ナデ調整。器面内・外はナデ調整，箆削りが施されている。	明褐色 砂粒・長石粒・石英粒 良好
9	H	甕	C 7.5	底部は破片である。底部は平底を呈し，器肉は厚い。直線的に開く体部を有し，器面にはロクロ成形時の水挽き痕が残る。	灰褐色 砂粒 良好 底部木葉痕
10	H	甕	C 8.0	底部破片。平底を呈し，器面内はナデ調整，器面外は粗い箆削りが施されている。	橙色 砂粒・長石粒・石英粒 良好 底部木葉痕
11	軒丸瓦			中房に１＋８の蓮子を配し，弁区に単弁18葉蓮華文，外区に33個の珠文をめぐらしている。	褐灰色 細砂・長石粒 やや硬質
12	塼		全長15.5 厚さ 7.7	全体に箆ナデ調整。	にぶい褐色 砂粒・長石粒少・スコリア少 やや軟質

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
13	砥石	3.7×5.2 2.5	長方形を呈する。 表・裏・側面に使用痕が認められる。	凝灰岩	17	鏃	現存長7.1	両端部欠損。断面は方形を呈す。	
14	砥石	3.8×3.8 2.0	方形を呈する。 側面に使用痕が認められ，全体に丸味を帯びている。	凝灰岩	18	釘	現存長7.4	頭部欠損。断面は方形を呈す。	木質若干付着
15	砥石	3.0×2.8 2.5	方形を呈する。 表・裏・側面に使用痕が認められる。	凝灰岩	19	釘	現存長3.2	両端部欠損。	
16	砥石	8.0×4.5 2.5	長方形を呈する。 全面に研磨痕が認められ，丸味を帯びている。	凝灰岩					

38号竪穴住居跡（第67・68図）

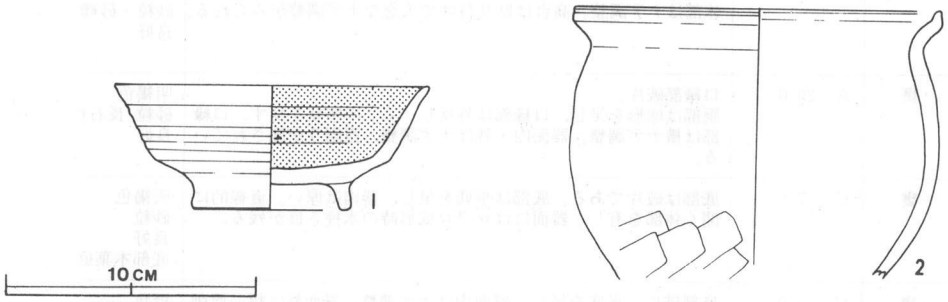
調査区B4j5区を中心に確認され，東西3.55m・南北3.45mを測り，主軸方向N－14°－Eを指し，隅丸方形を呈している。

壁は，床面から垂直に立ち上がり，壁高45cmを測る。床面は全体に平坦であり，良く踏み固められている。壁溝は幅16cm・深さ7cmを測り，東壁下には検出されない。ピットは6か所確認され，深さは15～35cmを測る。

竈は，北壁中央部よりやや東側に位置し，壁を掘り込み，粘土・砂によって構築されている。焚口・火床からなだらかに立ち上がり，煙道・煙出し孔を作っているが，燃焼度は低い。

本住居跡は37号竪穴住居跡と重複し，37号竪穴住居跡が破壊し，構築されている。

遺物は，土師器・須恵器が出土している。



第70図　38号竪穴住居跡出土遺物実測図

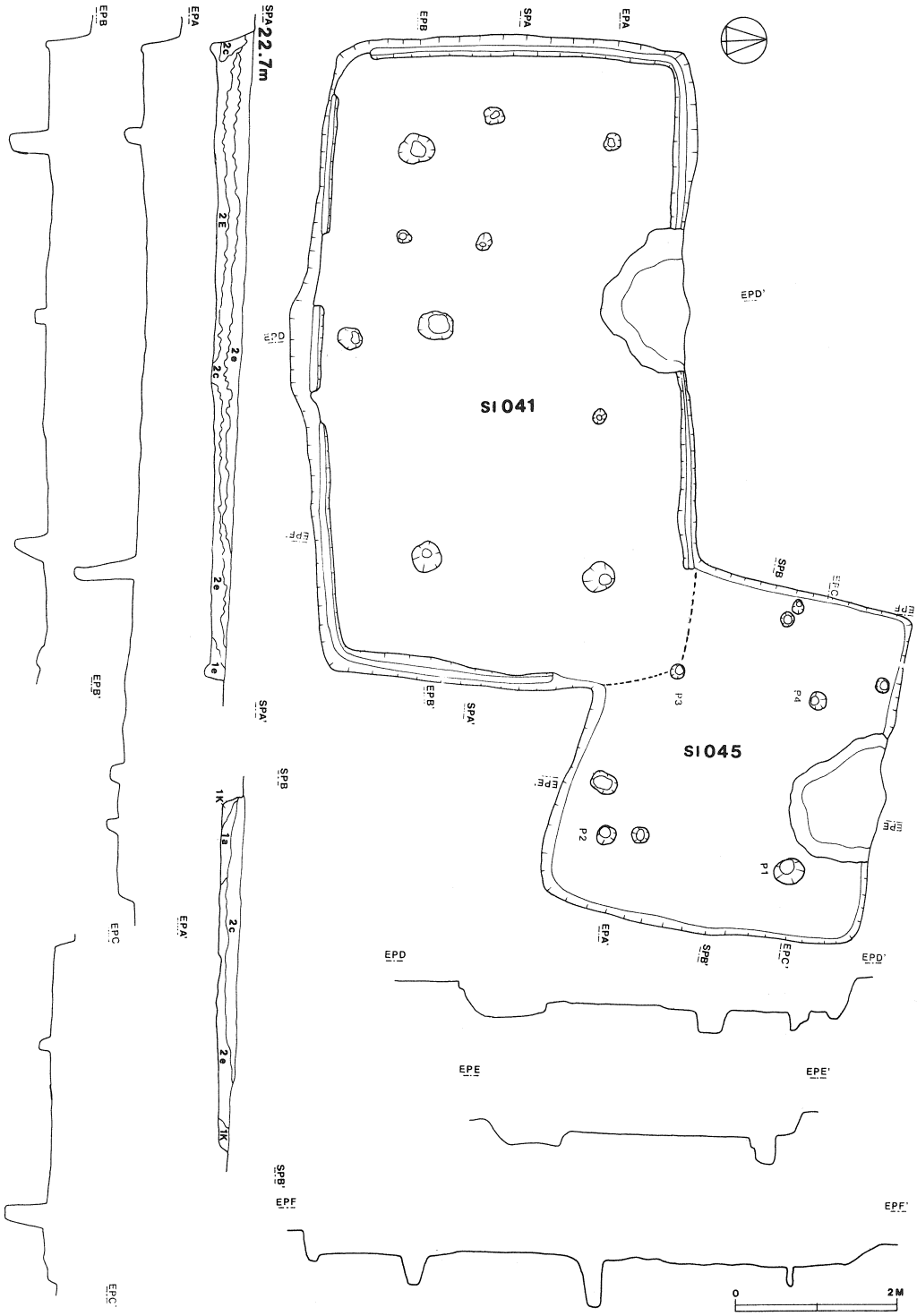
38号竪穴住居跡出土遺物観察表（第70図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	H	高台付坏	A 12.5 B 5.0 D 6.1	体部は内彎しながら大きく開く。口縁先端部は薄くなり，さらに折れる。高台は張らず，接地面は平坦である。器面にはロクロ成形時の凸凹が残る。高台は貼り付け，ナデ調整が施されている。内面は黒色処理。	灰色 砂粒・砂礫 良好
2	H	甕		口縁部は外反して「く」の字状を呈し，胴部は球形をなして最大径を測り，口唇部は丸味をもつ。 口縁部は横ナデ調整。胴部・底部には箆削り調整が施されている。	橙色 砂粒・長石粒・石英粒 良好

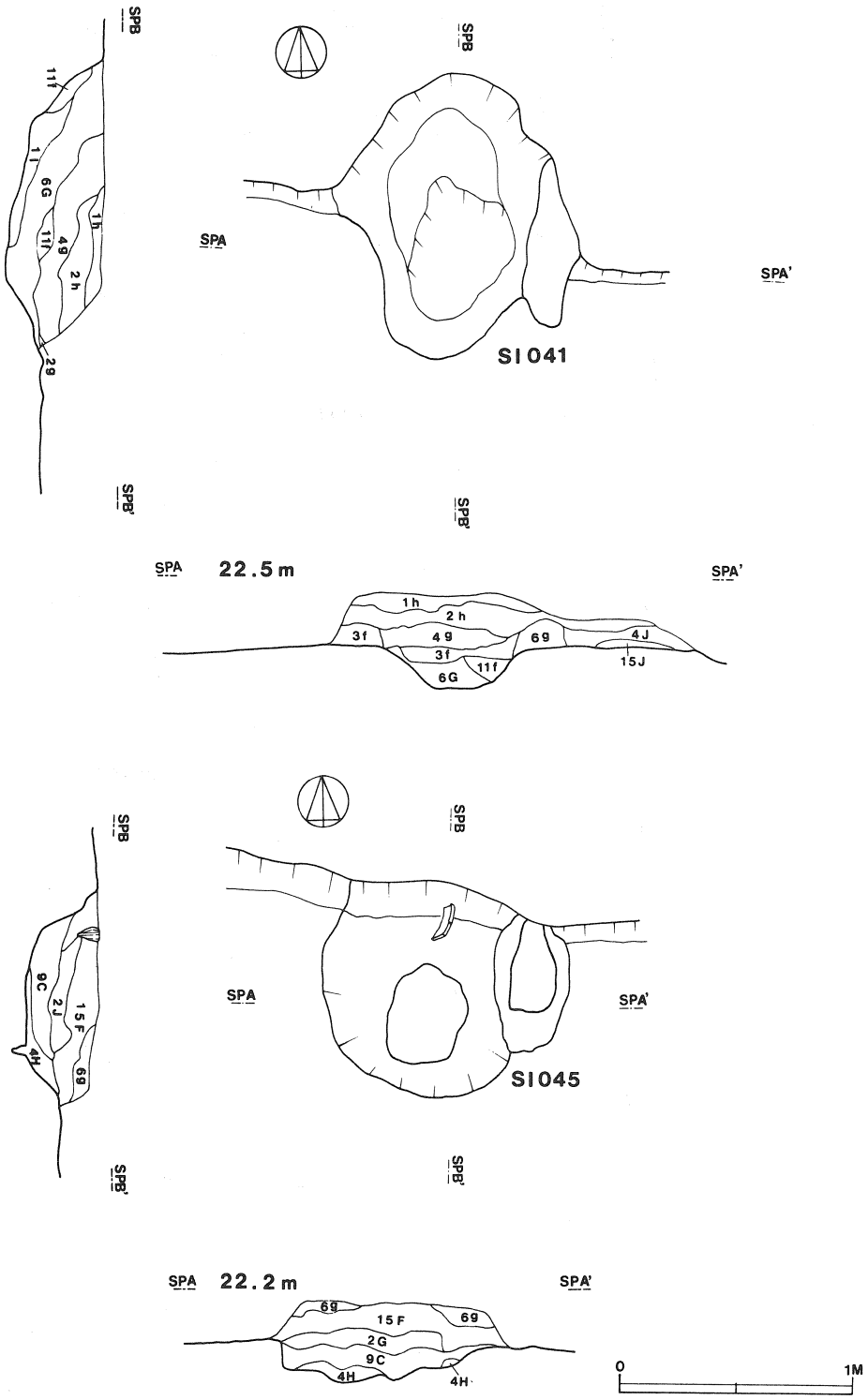
41号竪穴住居跡（第71・72図）

調査区B4f6区を中心に確認され，東西7.95m・南北4.9mを測り，主軸方向N－1°－Eを指し，隅丸長方形を呈している。

壁は，床面から垂直に立ち上がり，壁高40cmを測る。本住居跡北東コーナー部において，45号竪穴住居跡と重複している。床面は全体に平坦で良く踏み固められ，保存状態は良い。壁溝は北東コーナーの一部を除いて幅10cm・深さ5cmでほぼ全周している。ピットは10か所確認され，深さは20～70cmを測る。



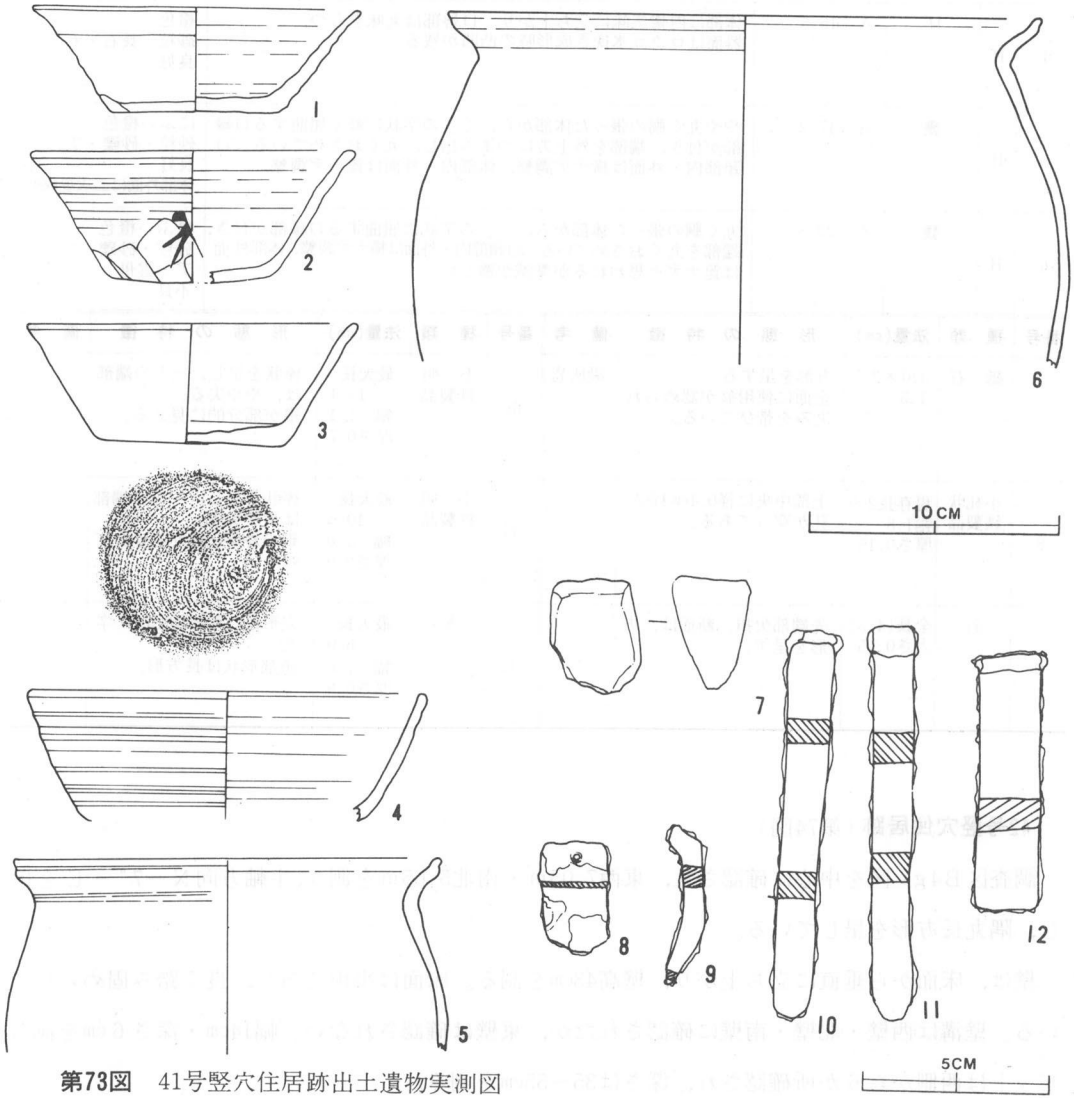
第71図　41・45号竪穴住居跡実測図



第72図　41・45号竪穴住居跡竈実測図

竈は，北壁中央部に位置し，壁を掘り込み，粘土・砂によって構築されている。焚口・火床からなだらかに立ち上がり，煙道・煙出し孔を作っている。保存状態は良好である。

遺物は，土師器・須恵器・鉄製品が出土している。



第73図　41号竪穴住居跡出土遺物実測図

41号竪穴住居跡出土遺物観察表（第73図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 12.7 B 4.2 C 8.0	体部が外反気味に立ち上がり，口唇部は丸味をもつ。底部は平底。 器面はロクロ成形時の凸凹が残る。 底部は篦切り後篦削りが施されている。	灰色 砂粒・砂礫 良好
2	S	坏	A 12.5 B 5.2 C 6.4	体部は外反気味に立ち上がり，口縁部は内彎気味に外反する。口唇部は丸味をもつ。器面にはロクロ成形時の凸凹が残る。底部は篦切り後，篦削りが施されている。	灰黄褐色 砂粒・砂礫・雲母 良好 体部外面に墨書

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
3	S	坏	A 13.0 B 4.7 C 7.2	体部は外反気味に立ち上がり，口縁部先端は更に折れる。口唇部は丸味をもつ。 底部は糸切り。	黄灰色 砂粒・砂礫 普通 内外共漆付着
4	H	坏	A 15.5	体部は内彎気味に立ち上がり，口唇部は丸味をもつ。 器面はロクロ水挽き成形時の凸凹が残る。	橙色 砂粒・長石・石英 良好
5	H	甕	A (17.2)	やや丸く胴の張った体部から,「く」の字状に軽く屈曲する口縁部が付き，端部を外上方につまみ出し，丸くおさめている。口頸部内・外面は横ナデ調整，体部内・外面は箆ナデ調整。	にぶい橙色 砂粒・砂礫・雲母 良好 体部外面に二次焼成痕
6	H	甕	A (23.8)	丸く胴の張った体部から,「く」の字状に屈曲する口縁部が付き，端部を丸くおさめている。口頸部内・外面は横ナデ調整，体部外面は箆ナデと思われるが摩滅が激しい。	にぶい橙色 砂粒・砂礫・スコリア・雲母 不良

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
7	砥石	3.0×2.5 1.5	方形を呈する。 全面に使用痕が認められ丸みを帯びている。	凝灰岩	10	不明 鉄製品	最大長 10.4 幅 1.1 厚さ0.7	棒状を呈し，一方の端部は，やや尖る。 銀が部分的に見える。	
8	小札状 鉄製品	現存長2.9 幅1.8 厚さ0.15	上部中央に径0.1cm程の孔が穿ってある。		11	不明 鉄製品	最大長 10.6 幅 1.0 厚さ0.9	棒状を呈し，一方の端部はやや尖る。 銀の外側に鉄が巻かれている。	
9	釘	全長(4.3) 太さ0.55	先端部欠損。断面は，方形を呈す。		12	鏨	最大長 6.0 幅 1.6 厚さ0.9	完形品。刃部断面はV字形。 頭部形状は長方形。	

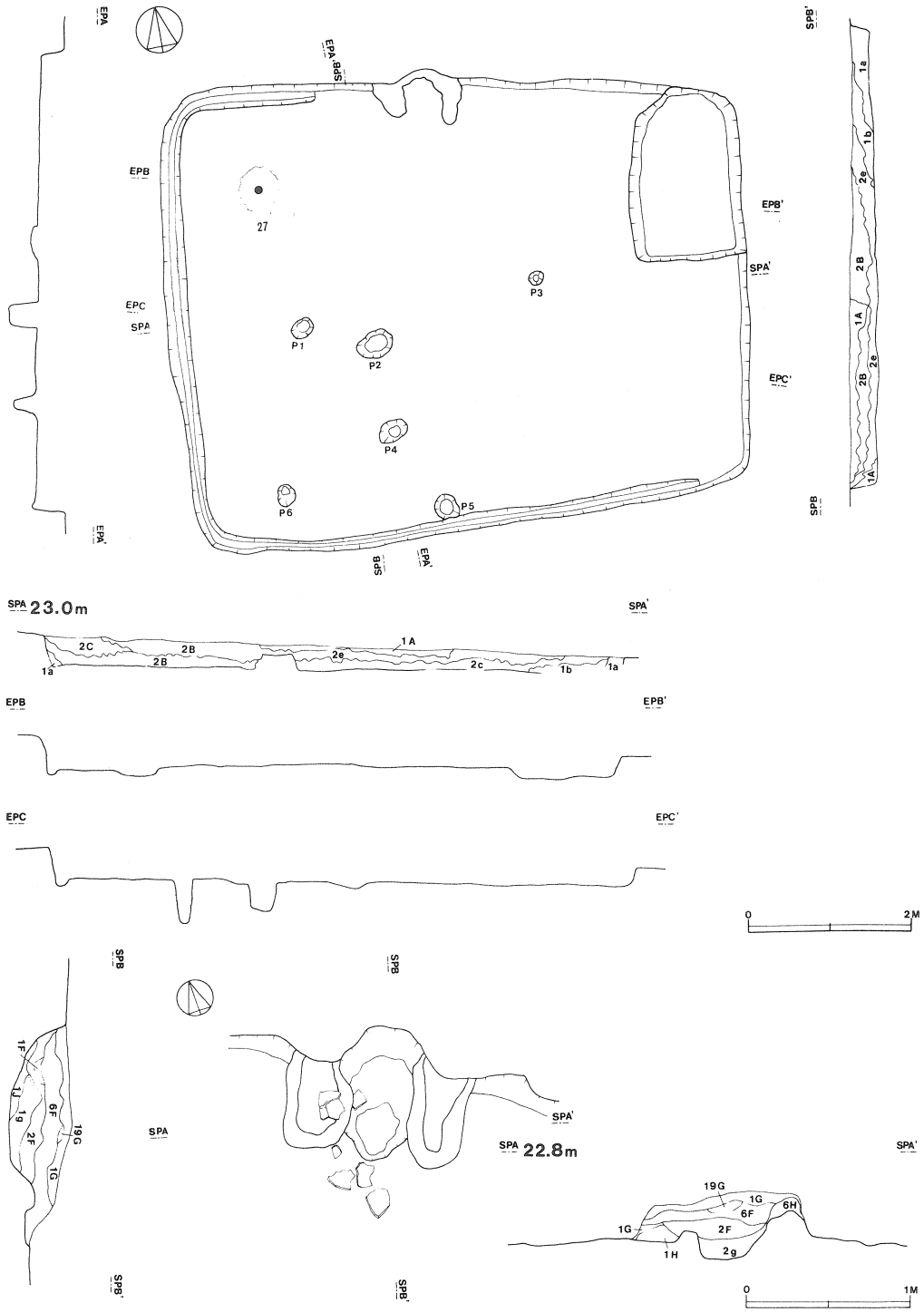
42号竪穴住居跡（第74図）

調査区B4g6 区を中心に確認され，東西7.05m・南北5.65mを測り,主軸方向N－7°－Eを指し，隅丸長方形を呈している。

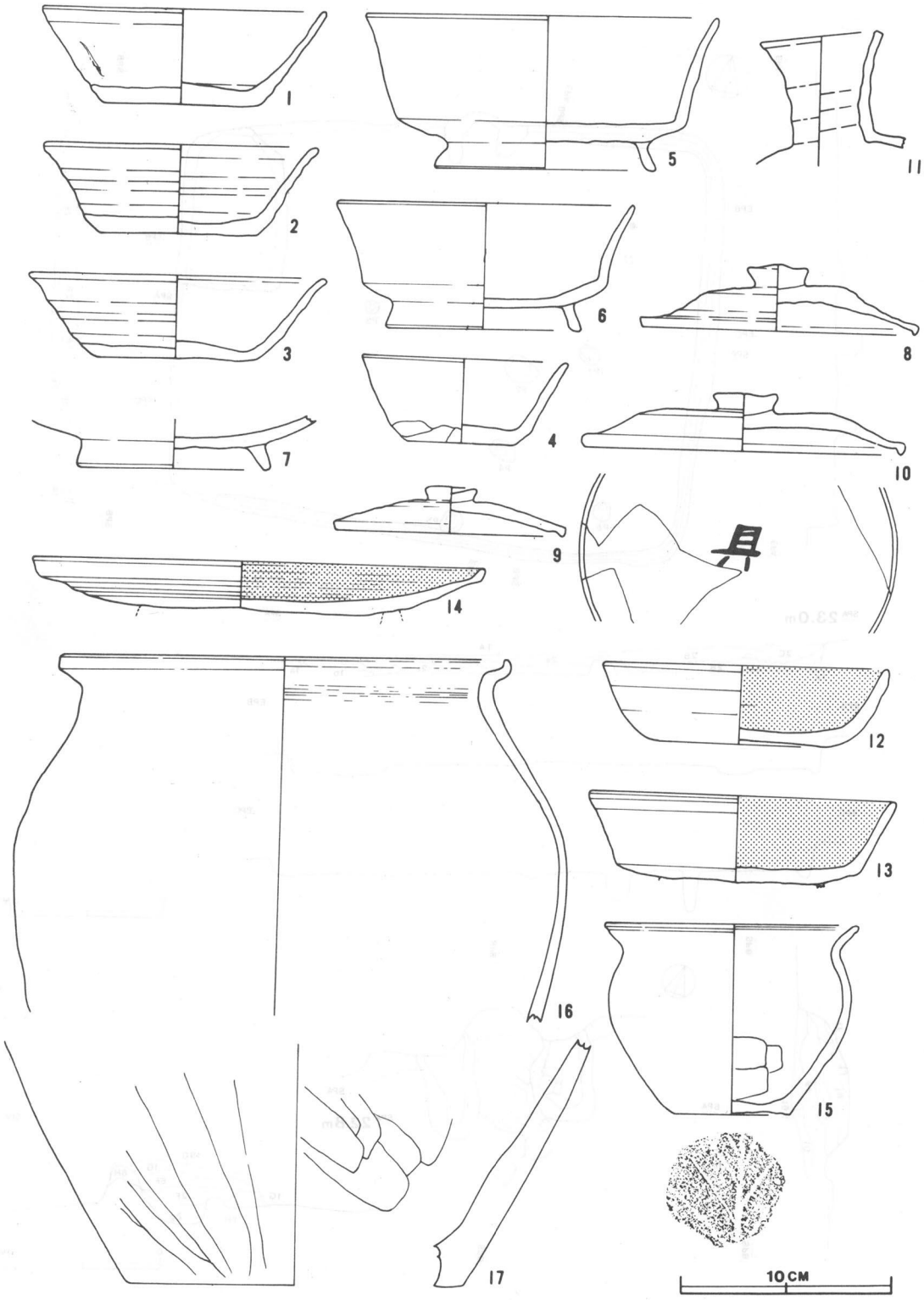
壁は，床面から垂直に立ち上がり，壁高43cmを測る。床面は平坦であり，良く踏み固められている。壁溝は西壁・北壁・南壁に確認されたが，東壁は確認されない。幅14cm・深さ6cmを測る。ピットは西側から6か所確認され，深さは35～55cmを測る。

竈は，北壁中央部よりやや西側に位置し，壁を掘り込み，粘土・砂によって袖部が構築されている。焚口・火床からなだらかに立ち上がり，煙道・煙出し孔を作っている。

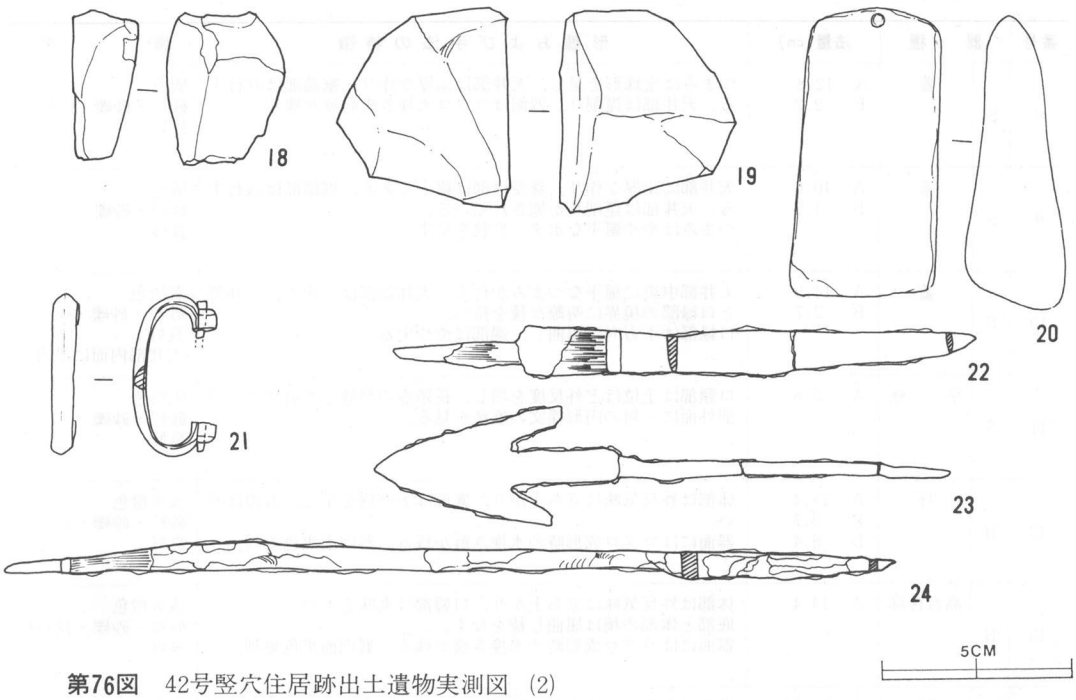
遺物は，土師器・須恵器・墨書土器・漆付着土器・鉄製品・漆紙が出土している。漆紙（27 30）は，北西コーナーのピット上面から出土している。



第74図　42号竪穴住居跡・竈実測図



第75図　42号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1)



第76図　42号竪穴住居跡出土遺物実測図 (2)

42号竪穴住居跡出土遺物観察表（第75・76図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 13.2 B 4.5 C 7.3	体部は内彎気味に立ち上がり，口唇部は丸味をもつ。底部は上げ底気味。 器面に若干ロクロ成形時の水挽き痕が残る。	灰白色 砂粒・砂礫・礫 良好
2	S	坏	A 12.6 B 4.2 C 7.3	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反し，口唇部は丸みをもつ。器壁は厚い。 器面にロクロ成形時の水挽き痕が残る。	灰色 砂粒・砂礫・礫 良好
3	S	坏	A 13.6 B 3.9 C 7.5	体部は外反気味に立ち上がり，口縁部は外に折れ，丸味をもつ。 底部は上げ底を呈し，器面にはロクロ成形時の水挽き痕が残る。	灰白色 砂粒・砂礫・礫 良好
4	S	坏	A 9.5 B 4.0 C 5.1	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反し，口唇部は丸味をもつ。 底部は箆切り後周辺に箆削りが施されている。	灰色 砂粒・砂礫・礫 良好
5	S	高台付坏	A 16.5 B 7.2 D 10.3	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は丸味をもつ。 底部と体部の境は屈曲し，稜は明瞭に残る。 高台は「ハ」の字状に開き，接地面は丸味をもつ。 高台は貼り付け・ナデ調整が施されている。	灰色 砂粒・砂礫・礫 良好
6	S	高台付坏	A 13.8 B 5.9 D 9.0	体部は内彎気味に立ち上がり，口唇部は丸味をもつ。 底部と体部の境は屈曲するが，稜はにぶい。 高台は「ハ」の字状に開き，接地面は尖る。器面はロクロ成形時の水挽き痕が残る。	灰色 砂粒・砂礫・礫 良好
7	S	高台付坏	D 8.6	底部破片。 高台は「ハ」の字状に開き，接地面は丸味をもつ。 高台は貼り付け・ナデ調整が施されている。	黄灰色 砂粒・砂礫・礫 良好

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
8	S	蓋	A 12.8 B 2.2	つまみは宝珠形を呈し，天井部はぶ厚な作り。裾端部は直行する。天井部は箆削り，器面はロクロ水挽き成形痕が残る。	灰色 砂粒・砂礫・長石粒 良好
9	S	蓋	A 10.6 B 1.9	天井部はぶ厚な作り。身受け部は扁平である。裾端部は直行する。天井部は箆削りが施されている。 つまみはやや扁平なボタン形状を呈す。	灰色 砂粒・砂礫 良好
10	S	蓋	A 14.9 B 2.7	天井部中央に扁平なつまみが付く。天井頂部は平坦で，天井部と口縁部の境界に明瞭な稜を持つ。 口縁部は下方向に屈曲し，端部はやや尖る。	黄灰色 砂粒・砂礫・礫 良好 天井部内面に墨書
11	S	平瓶	A 5.8	口頸部は上位ほど外反度を増し，長頸壺の形態と共通する。肩部外面に一対の円形浮文の痕跡を見る。	灰白色 砂粒・砂礫 良好
12	H	坏	A 13.4 B 3.7 D 8.4	体部は外反気味に立ち上がり，底部は上げ底を呈し，器肉は厚い。 器面にはロクロ成形時の水挽き痕が残る。器内面黒色処理。	浅黄橙色 砂粒・砂礫・長石粒 良好
13	H	高台付坏	A 14.4	体部は外反気味に立ち上がり，口唇部は丸味をもつ。 底部と体部の境は屈曲し稜をなす。 器面にはロクロ成形時の水挽き痕が残る。器内面黒色処理。	浅黄橙色 砂粒・砂礫・長石粒 良好
14	H	盤	A (21.5) B (2.2) C (12.4)	破片である。口縁上部は外反し，口唇部は肥厚して丸味をもつ。 器面はロクロ成形時の水挽き痕が残る。器内面黒色処理。	橙色 砂粒・砂礫・長石粒 良好
15	H	甕	A 11.1 B 9.0 C 5.5	小形甕である。底部は上げ底を呈し，体部は中位に最大径をもって開く。 頸部で括れて短い口縁部は開き，「く」の字状を呈す。 底部は箆削り，口縁部横ナデ調整。	にぶい橙色 砂粒・長石粒・石英粒 良好 底部外面木葉痕
16	H	甕	A 21.0	胴部に最大径を測り，頸部で括れ，短い口縁部は開き立ち上がる。 口縁部は横ナデ調整。胴部はナデ調整が施されている。	にぶい橙色 砂粒・長石粒・石英粒 良好
17	H	甕		底部破片。 器面は箆削り・ナデ調整が施されている。	橙色 砂粒・長石・石英粒 普通 底部外面木葉痕

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
18	砥石	4.0×3.0 1.5	方形を呈する。 研磨痕が認められ，滑らかで丸味を帯びている。	凝灰岩	22	刀子	全長15.5 身幅1.2 茎幅0.6	完形品。木製の柄が一部残存。0.5×1.1cmの銅製縁金具が柄の上部につけられている。	茎に木質付着
19	砥石	5.0×4.5 3.5	台形を呈する。 側面に数か所使用痕が認められる。滑らかに丸みを帯びている。	凝灰岩	23	鏃	全長15.2 鏃幅2.6 茎幅0.3	完形品。基部の断面は長方形，茎の断面は方形を呈す。	
20	砥石	7.7×3.7 2.0	長方形を呈する。 全体に使用痕が認められ，丸みを帯びている。一端に3mmの孔があけられている。	凝灰岩	24	鏃	全長23.4 身幅0.7 茎幅0.45	完形品。先端部は尖る。茎部は断面長方形。	茎に木質付着
21	銙帯具 (鉸具)	最大長4.3 幅2.2	C字形の枠の一端に鉄製の軸棒が通っている。 断面は三角状を呈する。	銅製					

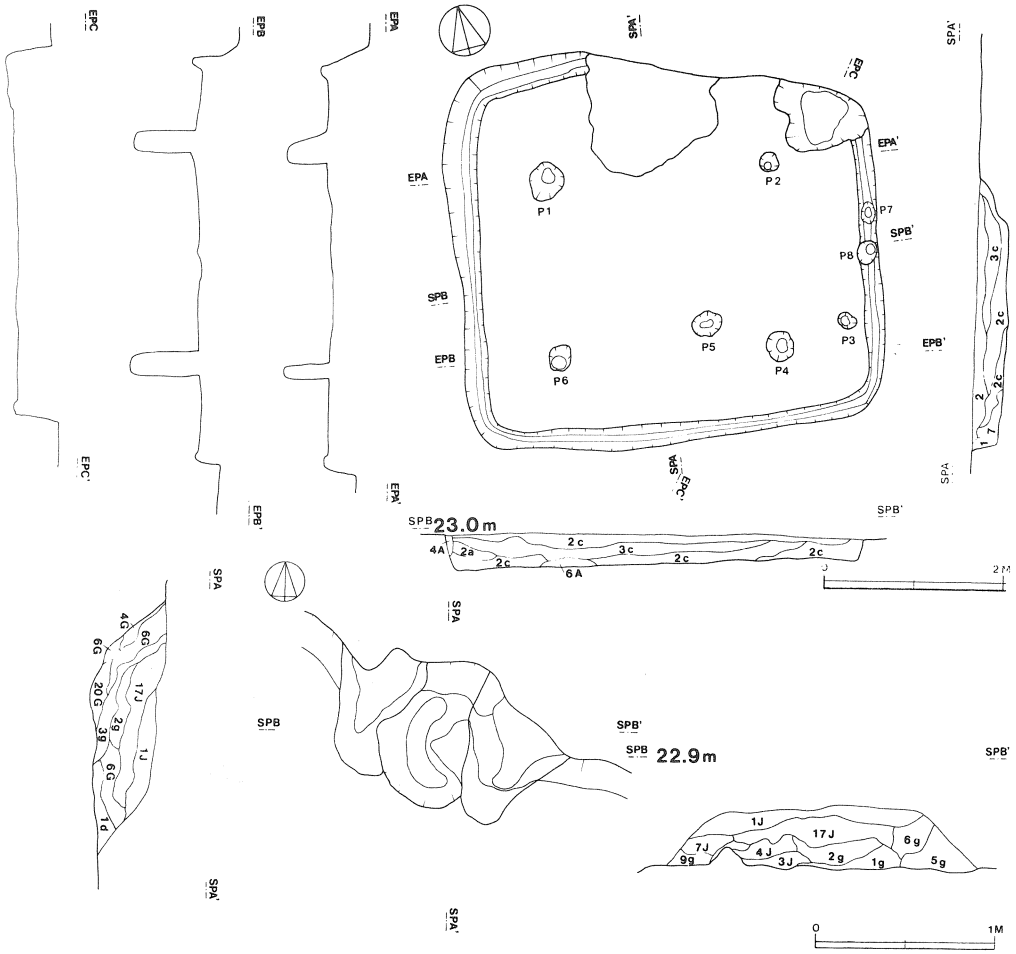
43号竪穴住居跡（第77図）

調査区B4 i6 区を中心に確認され，東西4.63m・南北4.17mを測り，主軸方向N－13°－Eを指し，隅丸方形を呈している。

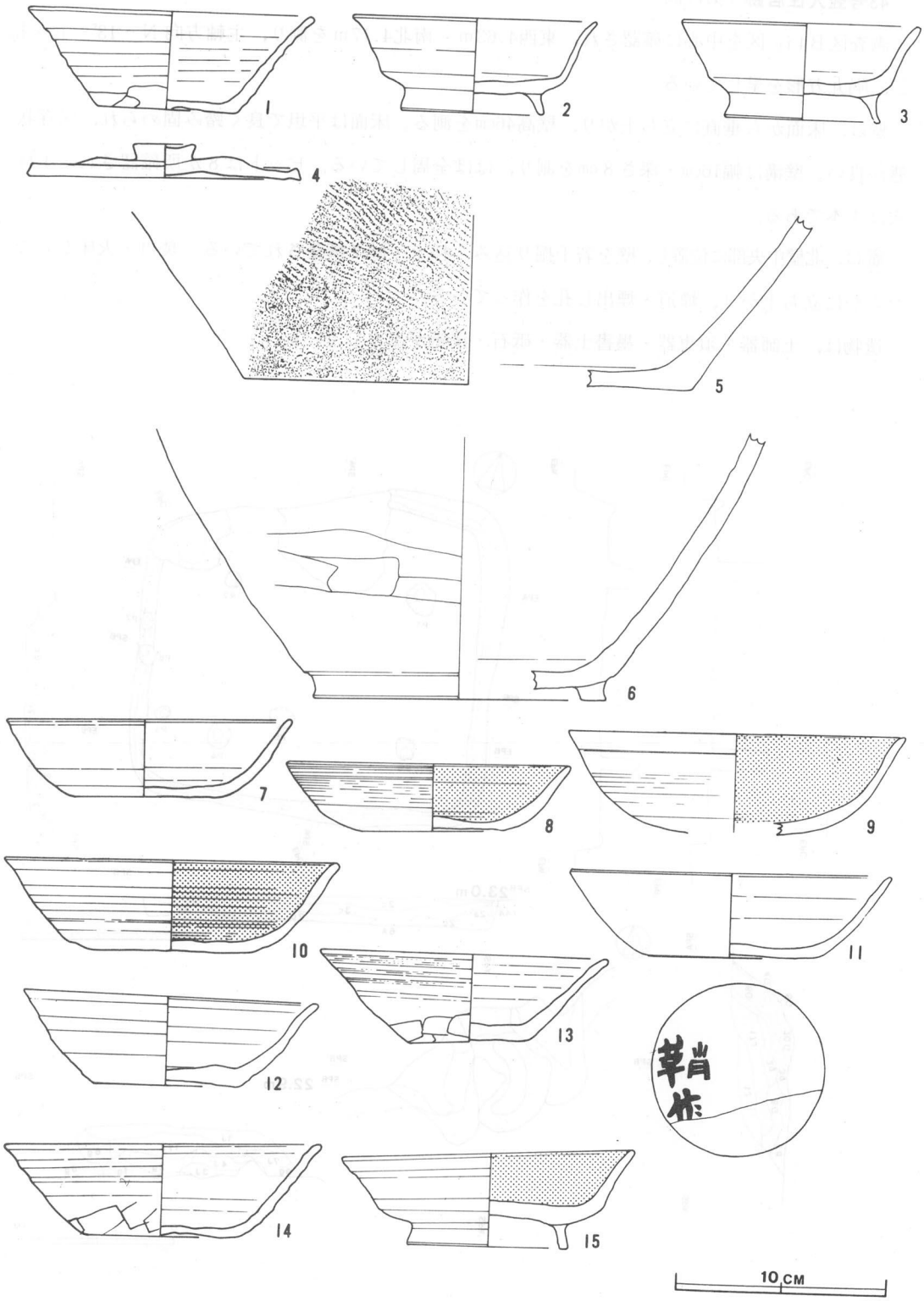
壁は，床面から垂直に立ち上がり，壁高46cmを測る。床面は平坦で良く踏み固められ，保存状態が良い。壁溝は幅16cm・深さ8cmを測り，ほぼ全周している。ピットは8か所確認され，主柱穴は4本である。

竈は，北壁中央部に位置し，壁を若干掘り込み，粘土・砂で構築されている。焚口・火床からなだらかに立ち上がり，煙道・煙出し孔を作っている。

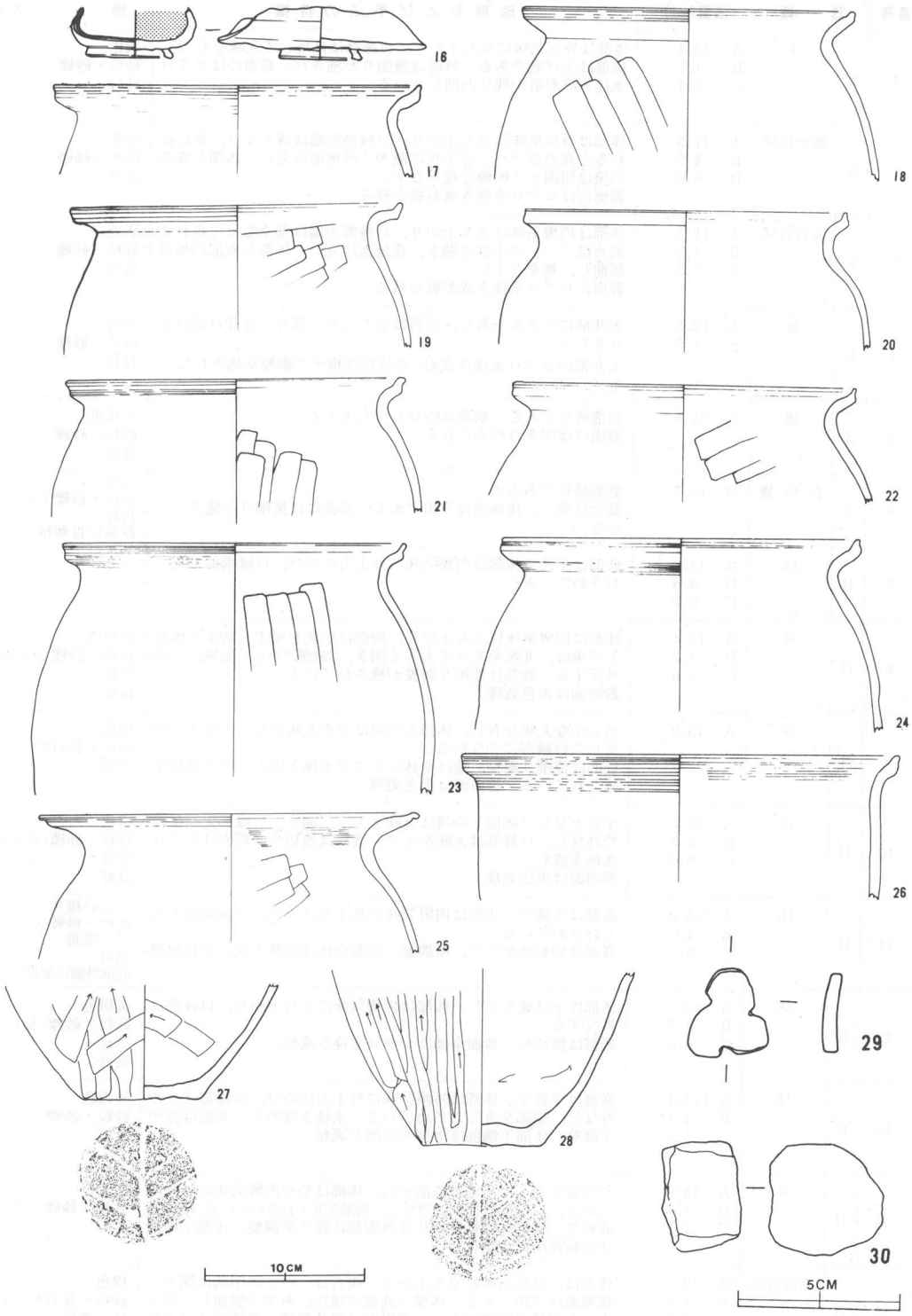
遺物は，土師器・須恵器・墨書土器・砥石・漆紙が出土している。



第77図　43号竪穴住居跡・竈実測図



第78図　43号竪穴住居跡出土遺物実測図(1)



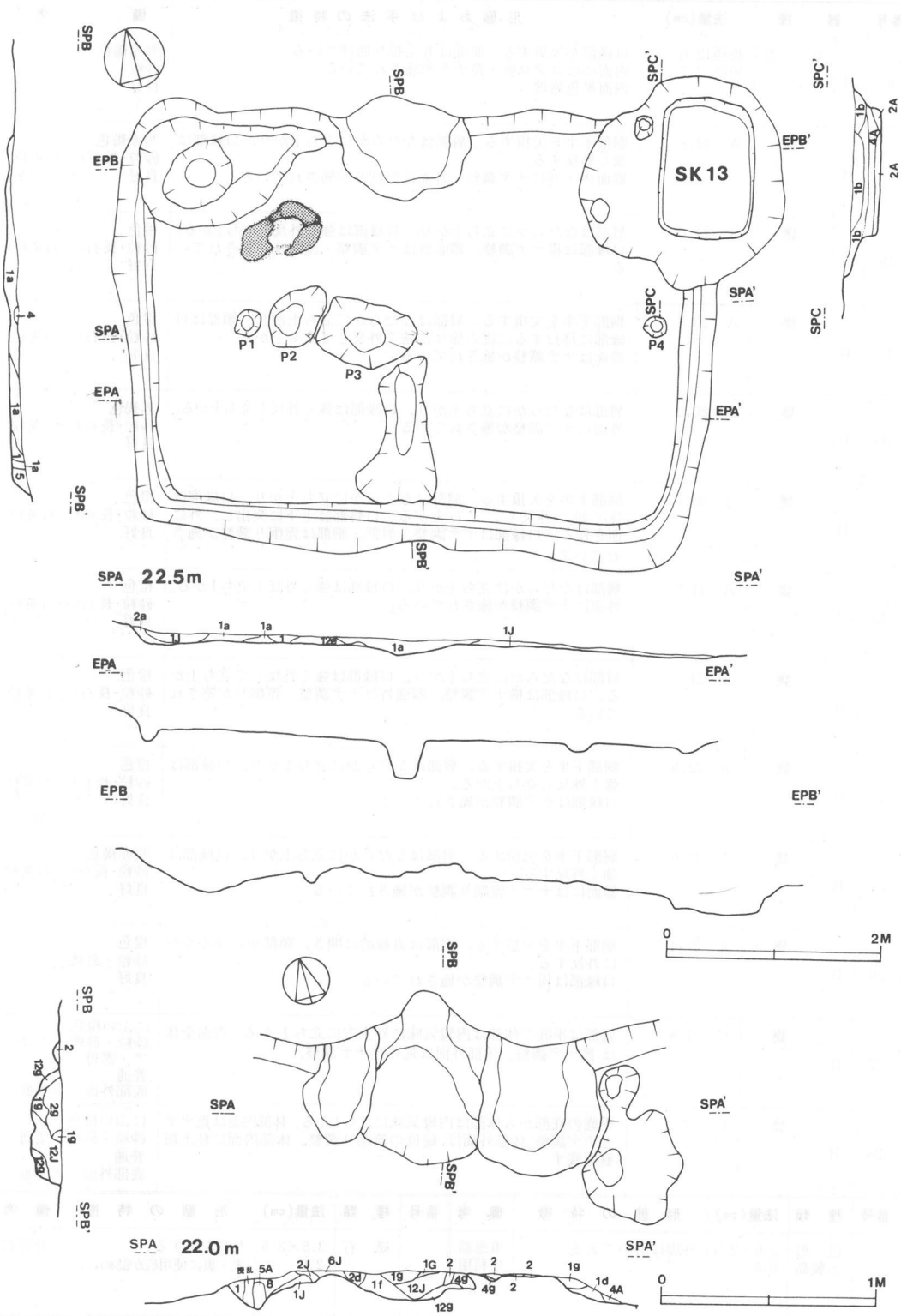
第79図　43号竪穴住居跡出土遺物実測実 (2)

43号竪穴住居跡出土遺物観察表（第78・79図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 13.4 B 4.7 C 6.4	体部は外反気味に立ち上がり，口縁部は外反して丸味をもつ。底部は上げ底である。外周は篦削りが施され，器面にはロクロ水挽き成形痕が残り凸凹している。	灰色 砂粒・砂礫 良好
2	S	高台付坏	A 11.5 B 4.5 D 6.6	体部は外反気味に立ち上がり，口縁部先端は薄くなり，更に折れる。高台は「ハ」の字状に開き，接地面は丸い。体部と底部の境は屈曲して明瞭な稜をなす。 器面にはロクロ水挽き成形痕が残る。	灰色 砂粒・砂礫 良好
3	S	高台付坏	A 11.3 B 4.5 D 7.3	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部先端は薄くなって折れる。高台は「ハ」の字状に開き，接地面は丸い。体部と底部の境は屈曲し，稜をなす。 器面にロクロ水挽き成形痕が残る。	灰色 砂粒・砂礫 良好
4	S	蓋	A 12.5 B 1.5	天井部につまみを有し，頂部はなだらかに張り，身受け部は張りをもつ。 天井部にロクロ水挽き成形。受け部は横ナデ調整が施されている。	灰色 砂粒・砂礫 良好
5	S	甕	C 21.0	底部破片である。胴部は外反し立ち上がる。 器面には叩き目がみられる。	灰褐色 砂粒・砂礫 良好
6	S	台付甕	D 13.7	底部破片である。 高台は低く，接地面は平坦である。器面には篦削りが施されている。	灰色 砂粒・砂礫・礫 良好 器面に自然釉
7	H	坏	A 13.2 B 3.6 C 6.7	底部は平底で体部は内彎気味に外上方にのび，口縁端部を丸くおさめている。	
8	H	坏	A 13.4 B 3.2 C 6.6	体部は内彎気味に立ち上がり，底部は平底を呈す。底部と体部との境は，丸味をもって大きく開き，口縁部に至る。先端はやや外反する。底部は篦削り調整が施されている。 器内面は黒色処理。	黄橙色 砂粒・砂礫・長石粒 雲母 良好
9	H	坏	A 15.9	滑らかな丸味を有し，体部との境はやや丸味をもって張り，外反して口縁部につながる。 底部は篦削り調整，他は全体にロクロ水挽き成形・ナデ調整が施されている。器内面は黒色処理。	橙色 砂粒・長石粒・雲母 良好
10	H	坏	A 15.7 B 4.3 C 8.0	平底を呈し，体部との境は丸味をもって開く。口縁部先端はやや外反し，口唇部は丸味をもつ。底部は篦切り，器面はロクロ水挽き成形。 器内面は黒色処理。	橙色 砂粒・砂礫・長石粒・雲母 良好
11	H	坏	A（15.2） B 4.0 C 8.2	底部は平底で，体部は内彎気味に外上方にのび，口縁端部を丸くおさめている。 底部は回転篦切りで，無調整。内面全体は篦磨き後，黒色処理。	にぶい橙色 砂粒・砂礫・スコリア・雲母 良好 底部外面に墨書
12	H	坏	A 13.9 B 4.2 C 6.8	底部は上げ底を呈し，体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反する。 底部は篦切り。器面全体はロクロ水挽き成形。	黄橙色 砂粒・砂礫・長石粒・雲母 良好
13	H	坏	A（13.4） B 4.1 C 5.6	底部は平底で，体部は外傾気味に外上方にのび，口縁部はやや外反し，端部を丸くおさめている。水挽き成形で，底部は篦ナデ調整。体部下端部は手持ち篦削り調整。	灰白色 砂粒・砂礫 良好
14	H	坏	A（14.8） B 4.4 C 7.2	やや盛り上った平底の底部から，体部はやや内彎気味に外上方にのび，口縁部は僅かに外反し，端部を丸くおさめている。水挽き成形で，底部は回転篦切り後外周部は篦ナデ調整。体部下端部は回転篦削り調整。	灰黄色 砂粒・砂礫・雲母 良好
15	H	高台付坏	A 13.7 B 4.4 D 7.5	体部は，外反気味に立ち上がる。高台は「ハ」の字状に開き，接地面は平坦である。体部と底部の境は，あまり屈曲して立ち上がらず稜も明確でない。器内面は黒色処理。器外面はロクロ水挽き成形で凸凹が残る。	橙色 砂粒・長石粒・石英粒・雲母 良好

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
16	H	耳皿	長径13.0 短径 7.7	口縁部を欠損する。皿部は丸く折り曲げている。 内面にはロクロ痕・篦ナデが施されている。 内面黒色処理。	明赤褐色 砂粒 良好
17	H	甕	A 22.8	胴部下半を欠損する。肩部はなだらかに立ち上がり，口縁部は強く外反する。 器面内・外にナデ調整・外面に篦削りが施されている。	明赤褐色 砂粒・長石粒・石英粒 良好
18	H	甕	A 21.0	肩部はなだらかに立ち上がり，口縁部は強く外反し立ち上がる。口縁部は横ナデ調整。器面外はナデ調整・篦削りが施されている。	橙色 砂粒・長石粒・石英粒 良好
19	H	甕	A 20.8	胴部下半を欠損する。肩部はなだらかに立ち上がり，頸部は口縁部に移行するに従い徐々に強く外反して立ち上がる。 器面はナデ調整が施されている。	橙色 砂粒・長石粒・石英粒 良好
20	H	甕	A 20.2	肩部はなだらかに立ち上がり，口縁部は強く外反し立ち上がる。外面にナデ調整が施されている。	赤褐色 砂粒・長石粒・石英粒 良好
21	H	甕	A 20.7	胴部下半を欠損する。肩部はなだらかに立ち上がり，口縁部は強く短く外反し，立ち上がる。口唇部は上下に突出し，外に面を作る。口縁部はナデ調整，肩部・胴部は篦削り調整が施されている。	橙色 砂粒・長石粒・石英粒 良好
22	H	甕	A 21.5	肩部はなだらかに立ち上がり，口縁部は強く外反し立ち上がる。外面にナデ調整が施されている。	橙色 砂粒・長石粒・石英粒 良好
23	H	甕	A 21.3	肩部はなだらかに立ち上がり，口縁部は強く外反して立ち上がる。口縁部は横ナデ調整，器面外はナデ調整・篦削りが施されている。	橙色 砂粒・長石粒・石英粒 良好
24	H	甕	A 22.5	胴部下半を欠損する。肩部はなだらかに立ち上がり，口縁部は強く外反し立ち上がる。 口縁部はナデ調整が施されている。	橙色 砂粒・長石粒・石英粒 良好
25	H	甕	A 23.6	胴部下半を欠損する。肩部はなだらかに立ち上がり，口縁部は強く外反する。 器面にはナデ・篦削り調整が施されている。	明赤褐色 砂粒・長石粒・石英粒 良好
26	H	甕	A 27.4	胴部下半を欠損する。胴部は直線的に開き，頸部からゆるやかに外反する。 口縁部は横ナデ調整が施されている。	橙色 砂粒・砂礫 良好
27	H	甕	C 7.8	底部は平底で体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。内面全体は篦ナデ調整。体部外面は荒い篦ナデ調整。	にぶい橙色 砂粒・砂礫・スコリア・雲母 普通 底部外面に木葉痕
28	H	甕	C 7.2	平底の底部から体部は内彎気味に立ち上がる。体部内面は篦ナデとナデ調整。体部外面は，縦位の篦削り調整，体部内面に粘土紐痕を残す。	にぶい橙色 砂粒・砂礫・雲母 普通 底部外面に木葉痕

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
29	巴形土製品	2.6×2.5 0.4	外周は磨いてある。	須恵器片利用 3 g	30	砥石	3.5×3.5 2.0	方形を呈する。 表・裏に使用痕が認められる。	凝灰岩



第80図　44号竪穴住居跡・竈実測図

44号竪穴住居跡（第80図）

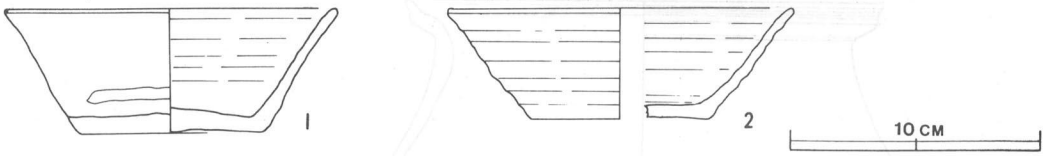
調査区B4 c_7 区を中心に確認され，東西4.4m・南北3.85mを測り，主軸方向N－12°－Eを指し，隅丸長方形を呈している。

壁は，床面から垂直に立ち上がり，壁高15cmを測る。床面は，部分的に踏み固められた状態である。壁溝は北壁を除いて確認され，幅18cm・深さ12cmを測る。

竈は，北壁中央部に位置し，壁を掘り込み，袖部は粘土・砂で構築されているが，遺存状態は良くない。

本住居跡内から鍛冶炉跡が検出され，炉跡は床面を円形に掘り凹めて構築されており，鉄滓・木炭が多量に出土している。

遺物は，土師器・須恵器・瓦が出土している。



第81図　44号竪穴住居跡出土遺物実測図

44号竪穴住居跡出土遺物観察表（第81図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 13.0 B 4.9 C 7.3	体部は外反して立ち上がり，口縁部先端は丸味をもつ。 底部は上げ底気味である。 器面は，ロクロ水挽き成形。底部は箆切り・横ナデ調整がみられる。	オリーブ灰色 砂粒・砂礫・礫 良好 器面に煤付着
2	S	坏	A 13.5 B 7.4 C 7.0	体部は外反して立ち上がり，口唇部は丸味をもって折れる。 底部は上げ底気味である。 器面は，ロクロ水挽き成形で凸凹を残す。	灰白色 砂粒・砂礫・礫 良好

45号竪穴住居跡（第71・72図）

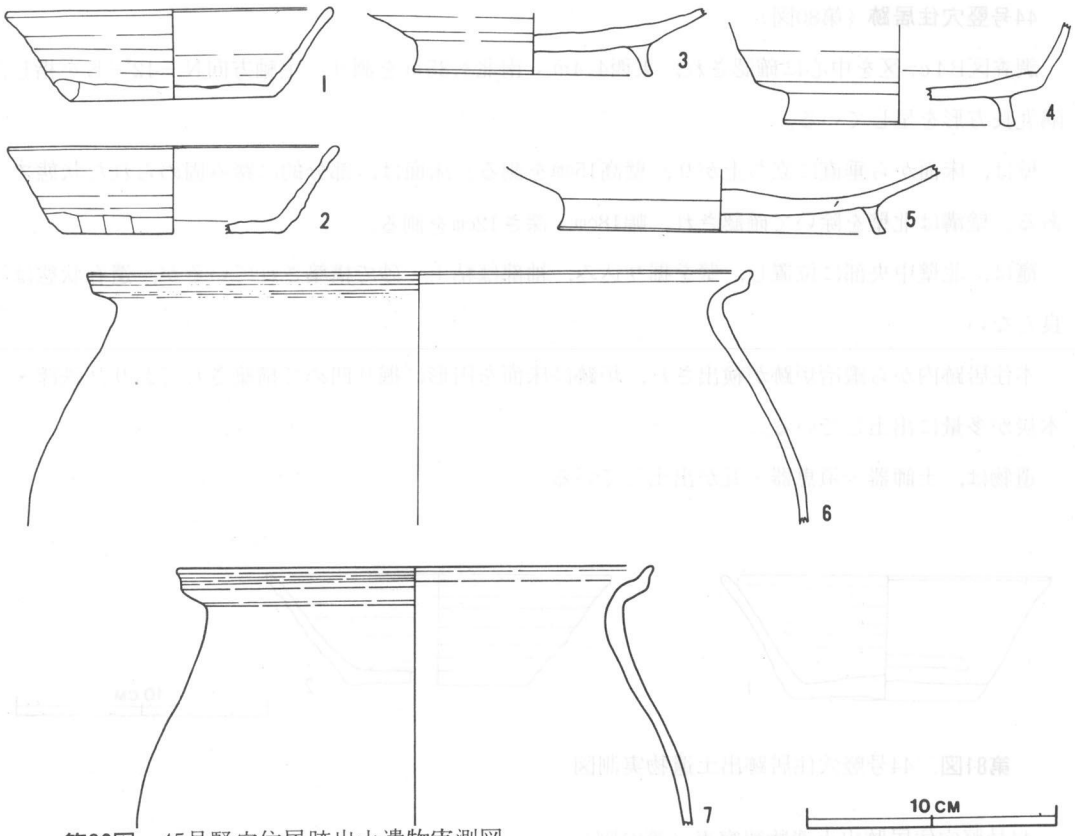
調査区B4 e_8 区を中心に確認され，東西4.4m・南北3.85mを測り，主軸方向N－11°－Eを指し，隅丸方形を呈している。

壁は，床面から垂直に立ち上がり，壁高15cmを測り，南西壁は41号竪穴住居跡と重複している。壁溝は確認されない。ピットは9か所確認され，主柱穴は P_1 ～ P_4 である。

竈は，北壁中央部に位置し，袖部は粘土・砂で構築され，焚口からゆるやかに立ち上がっている。

41号竪穴住居跡との新旧関係は，本竪穴住居跡が古い。

遺物は，土師器・須恵器・漆付着土器・羽口・鉄製品・漆紙が出土している。



第82図　45号竪穴住居跡出土遺物実測図

45号竪穴住居跡出土遺物観察表（第82図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 13.0 B 3.5 C 8.0	体部は外反して立ち上がり，口唇部は丸味をもって折れる。底部は上げ底気味である。器面はロクロ水挽き成形により凸凹している。底部外周は篦削りが施されている。	褐灰色 砂粒・砂礫 良好
2	S	坏	A 13.0 B 3.5 C 8.5	体部は外反して立ち上がる。器肉は厚い。器面はロクロ水挽き成形により凸凹している。底部外周に篦削りが施されている。	褐灰色 砂粒・砂礫 良好
3	S	高台付坏	D 9.4	底部破片である。 高台は「ハ」の字状に開き，接地面は尖る。ロクロ水挽き成形痕が残る。	灰色 砂粒・砂礫 良好
4	S	高台付坏	D 8.8	底部破片である。 高台は「ハ」の字状に開き，接地面は尖る。ロクロ水挽き成形痕が残る。体部と底部の境は屈曲し，稜をなす。	灰色 砂粒・砂礫 良好
5	S	台付盤	D 12.6	高台は「ハ」の字状に開き，接地面は平坦である。体部はやや斜めに立ち上がる。 高台は貼り付け・ナデ整形。	灰色 砂粒・砂礫 良好
6	H	甕	A 26.5	胴の張った体部から,「く」の字状に屈曲する口縁部が付き，端部を外上方につまみ出して丸くおさめている。口頸部内・外面は，横ナデ調整。体部内・外面は，篦ナデ調整。	

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
7	H	甕	A (19.2)	強く胴の張った体部から,「く」の字状に屈曲する口縁部が付き,端部を外上方につまみ出して丸くおさめている。口頸部内・外面は横ナデ調整。体部内・外面は箆ナデ調整。体部はやや薄く作る。全体に摩滅が進行。	にぶい橙色 砂粒・砂礫・スコリア・雲母 普通

46号竪穴住居跡（第83図）

調査区C4g6区を中心に確認され，東西4.4m・南北4.5mを測り，主軸方向N－17°－Eを指し，隅丸方形を呈している。

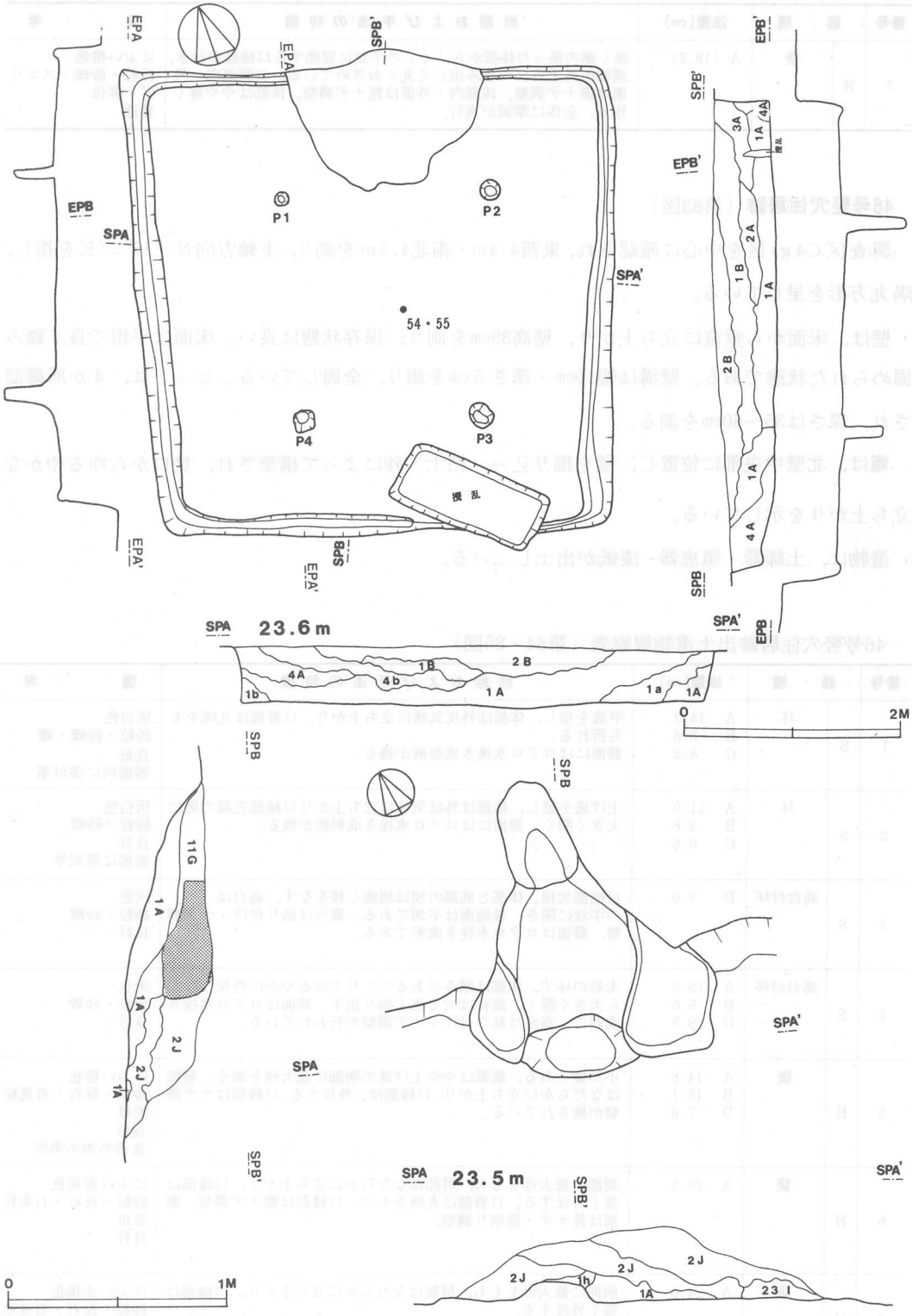
壁は，床面から垂直に立ち上がり，壁高39cmを測り，保存状態は良い。床面は平坦で良く踏み固められた状態である。壁溝は幅10cm・深さ5cmを測り，全周している。ピットは，4か所確認され，深さは35～60cmを測る。

竈は，北壁中央部に位置し，壁を掘り込み，粘土・砂によって構築され，焚口からゆるやかな立ち上がりを示している。

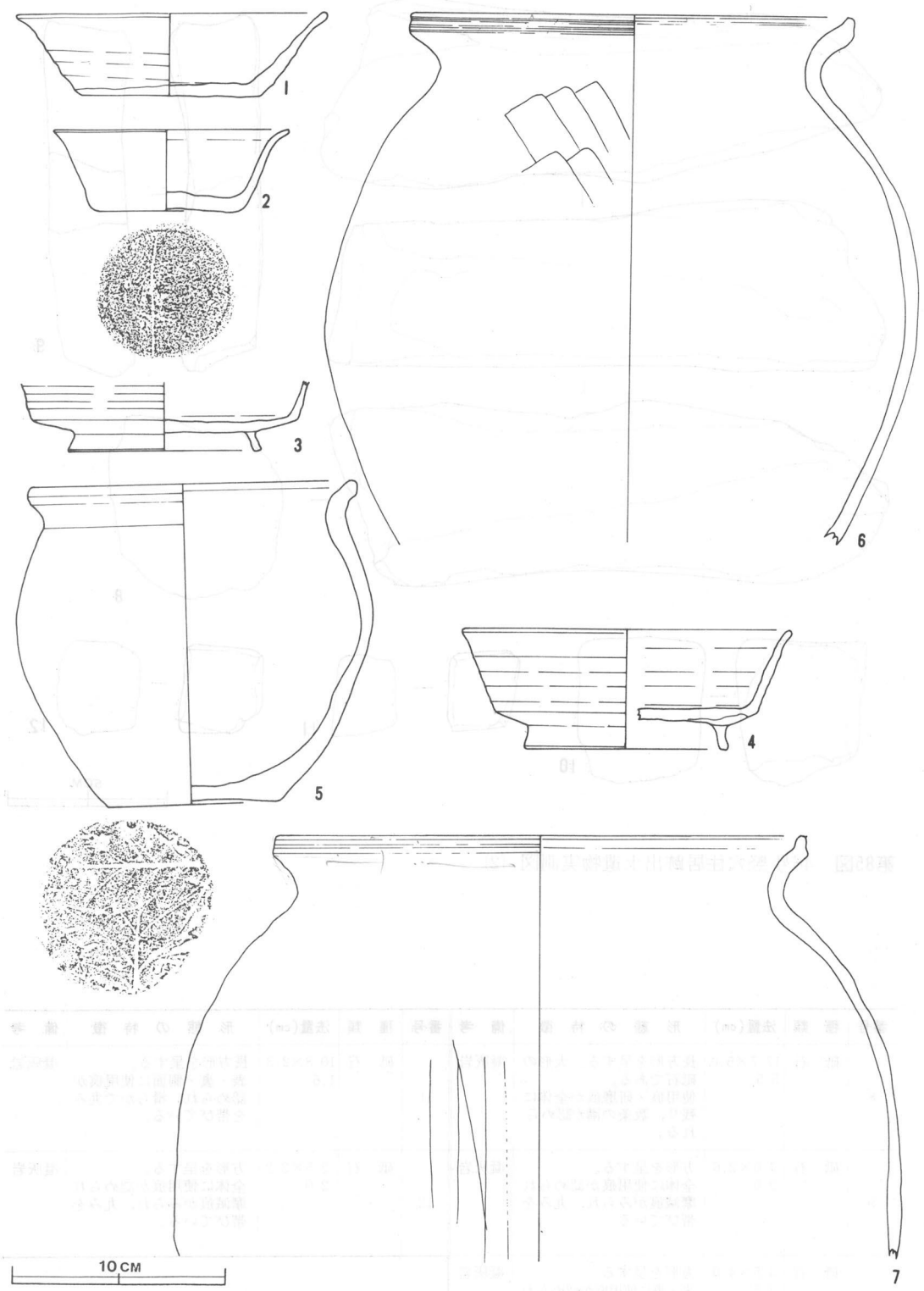
遺物は，土師器・須恵器・漆紙が出土している。

46号竪穴住居跡出土遺物観察表（第84・85図）

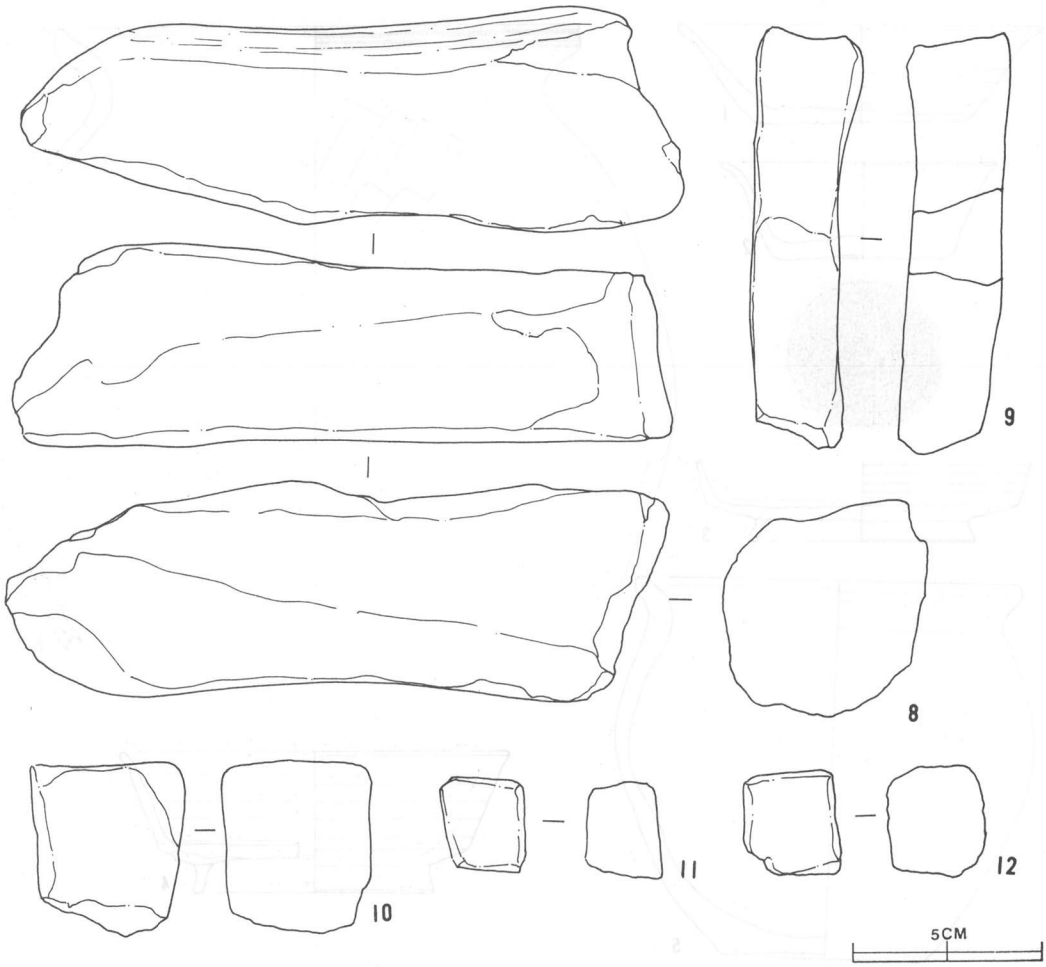
番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 14.3 B 3.8 C 8.2	平底を呈し，体部は外反気味に立ち上がり，口唇部は丸味をもち折れる。 器面にはロクロ水挽き成形痕が残る。	灰白色 砂粒・砂礫・礫 良好 器面内に漆付着
2	S	坏	A 11.0 B 3.8 C 6.6	上げ底を呈し，体部は外反気味に立ち上がり口縁部先端で更に大きく開く。器面にはロクロ水挽き成形痕が残る。	灰白色 砂粒・砂礫 良好 底部に箆記号
3	S	高台付坏	D 9.0	口縁部欠損。体部と底部の境は屈曲し稜をなす。高台は「ハ」の字状に開き，接地面は平坦である。高台は貼り付け・ナデ調整，器面はロクロ水挽き成形である。	灰色 砂粒・砂礫 良好
4	S	高台付坏	A 15.5 B 5.6 D 9.5	大形の坏で，体部は厚みのあるつくりでゆるやかに外反しながら大きく開く。高台は太く強く張り出す。器面はロクロ水挽き成形で，高台は貼り付け・ナデ調整が行われている。	灰色 砂粒・砂礫 良好
5	H	甕	A 14.8 B 15.1 D 7.8	小形甕である。底部はやや上げ底で胴部に最大径を測る。肩部はなだらかに立ち上がり，口縁部は，外反する。口縁部はナデ調整が施されている。	にぶい橙色 砂粒・長石・石英粒・雲母 良好 底部外面木葉痕
6	H	甕	A 20.5	胴部に最大径をもち，肩部はなだらかに立ち上がり，口縁部は強く外反する。口唇部は丸味をもつ。口縁部は横ナデ調整，胴部は箆ナデ・箆削り調整。	にぶい赤褐色 砂粒・長石・石英粒・雲母 良好
7	H	甕	A 24.6	胴部に最大径をもち，肩部はなだらかに立ち上がり，口縁部は強く外反する。 口唇部は立ち上がり丸味をもつ。口縁部横ナデ調整。胴部は箆ナデ調整。	にぶい赤褐色 砂粒・長石・石英粒・雲母 良好



第83図　46号竪穴住居跡・竈実測図

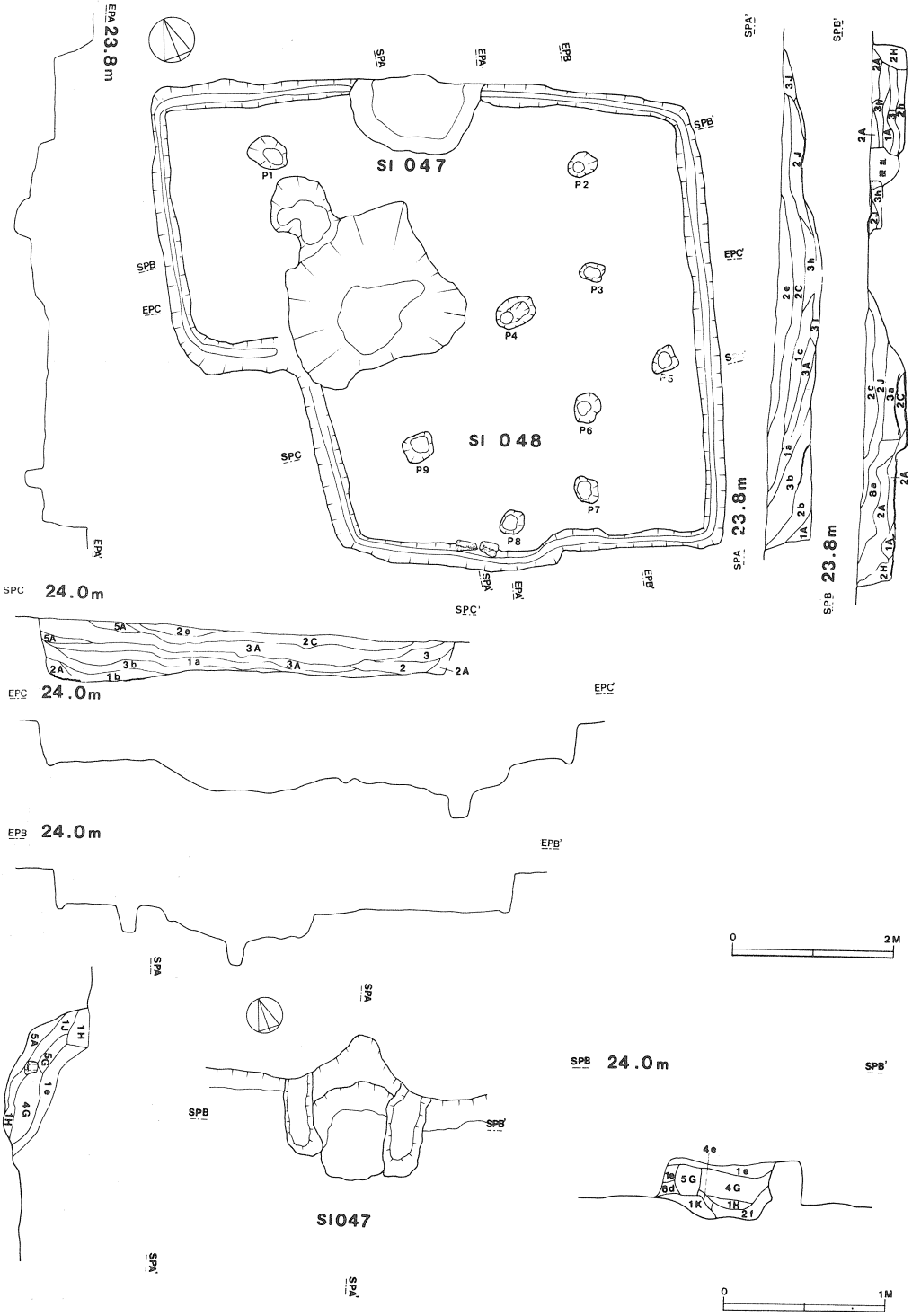


第84図　46号竪穴住居跡出土遺物実測図　(1)



第85図　46号 竪穴住居跡出土遺物実測図 (2)

番号	種　類	法量(cm)	形　態　の　特　徴	備　考	番号	種　類	法量(cm)	形　態　の　特　徴	備　考
8	砥　石	17.7×5.0 5.5	長方形を呈する。大形の砥石である。 使用痕・研磨痕が全体に残り，数条の溝が認められる。	凝灰岩	11	砥　石	10.8×2.3 1.6	長方形を呈する。 表・裏・側面に使用痕が認められ，滑らかで丸みを帯びている。	凝灰岩
9	砥　石	3.0×2.6 2.0	方形を呈する。 全体に使用痕が認められ摩滅痕がみられ，丸みを帯びている。	凝灰岩	12	砥　石	2.5×2.2 2.0	方形を呈する。 全体に使用痕が認められ摩滅痕がみられ，丸みを帯びている。	凝灰岩
10	砥　石	4.5×4.0 3.5	方形を呈する。 表・裏に使用痕が認められる。	凝灰岩					



第86図　47・48号竪穴住居跡・47号竪穴住居跡竈実測図

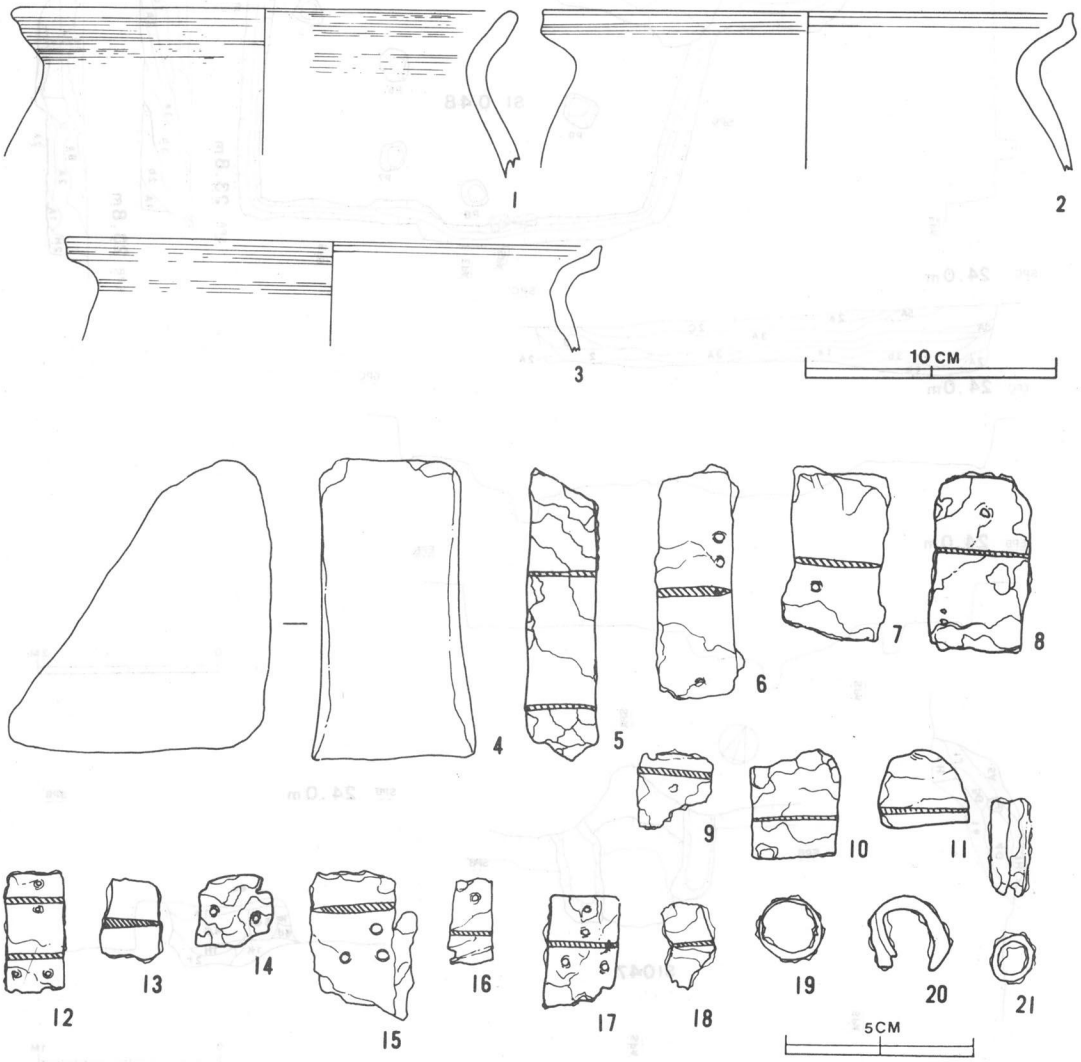
47号竪穴住居跡（第86図）

調査区C4h3区を中心に確認され，東西6.75m・南北4.0mを測り，主軸方向N－11°－Eを指し，隅丸長方形を呈している。本住居跡は，南側で48号竪穴住居跡と重複している。

壁は，床面から垂直に立ち上がり，壁高42cmを測る。床面は平坦で，良く踏み固められている。壁溝は幅13cm・深さ8cmを測り，南壁は重複により確認はできなかった。ピットは，4本確認された。

竈は，北壁中央部に位置し，壁を掘り込み，袖部は粘土・砂で構築され，焚口からゆるやかに立ち上がり，煙道・煙出し孔を作っている。

遺物は，土師器・須恵器・漆付着土器・鉄製品が出土している。



第87図　47号竪穴住居跡出土遺物実測図

47号竪穴住居跡出土遺物観察表（第87図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	H	甕	A 19.7	口縁部破片である。 肩部からゆるやかに外反し立ち上がる。口唇部は丸味をもつ。 口縁部は横ナデ調整。	にぶい橙色 砂粒・砂礫・長石・石英粒 良好
2	H	甕	A (21.4)	胴の張った体部から,「く」の字状に屈曲する口縁部が付き，外端部にやや凹んだ面をなす。口頸部内・外面は，横ナデ調整。体部内・外面は，箆ナデ調整。体部はやや薄く作る。	にぶい橙色 砂粒・砂礫・スコリア・雲母 良好
3	H	甕	A (21.6)	胴の張った体部から丸く屈曲する口縁部が付き，端部を外上方につまみ出している。口頸部内・外面は，横ナデ調整。体部内・外面は箆ナデ調整。	にぶい赤褐色 砂粒・砂礫・スコリア・雲母 良好

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
4	砥石	6.6×4.3 3.6	長方形を呈する。 表・裏・側面に使用痕が認められる。	凝灰岩	19 ・ 20	リング	19直径 1.3 20直径 1.5	銹化が激しい。	
5 〜 18	小札		長方形・方形を呈する破片である。断面の厚さは，1〜3㎜を測り，端部は丸味を持ち一〜四か所に孔がもうけられ，孔は1〜3㎜を測る。全体に銹化が進んでいる。		21	筒状鉄製品	直径1.2 高さ2.5	厚さ1.5㎜の鉄を筒状に巻いている。	

48号竪穴住居跡（第86図）

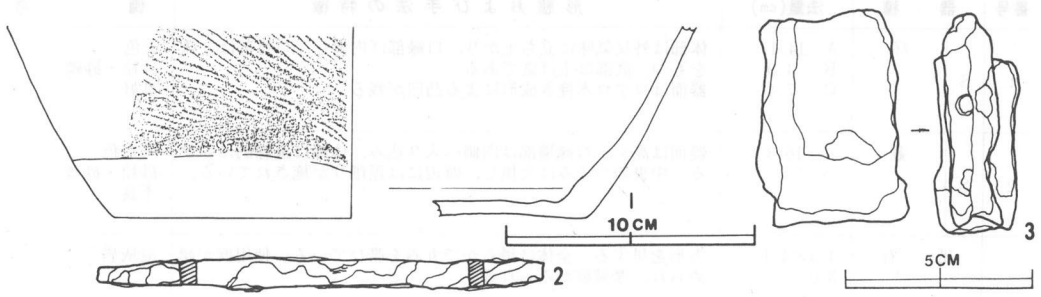
調査区C4i3区を中心に確認され，東西5.5m・南北5.0mを測り，主軸方向N－15°－Eを指し，隅丸方形を呈している。

壁は，床面より垂直に立ち上がり，壁高48cmを測る。床面は比較的良く踏み固められているが，重複している北側は，黒色土・ロームブロック混じりで軟弱である。ピットは5か所確認され，深さは25cm〜30cmを測る。

遺物は，土師器・須恵器・鉄製品が出土している。

竈は，北壁中央部に位置し，粘土・砂・黒色土混じりローム土で構築され，焚口からゆるやかに立ち上がりを示すが，煙道・煙出し孔は確認されない。保存状態は悪い。

本住居跡と重複する47号竪穴住居跡との新旧関係は，47号竪穴住居跡が古い。



第88図　48号竪穴住居跡出土遺物実測図

48号竪穴住居跡出土遺物観察表（第88図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
11	S	甕		底部破片である。平底から直線的に立ち上がる体部を有す。内面にロクロによるナデ調整，外面に平行叩き目がみられる。	灰色 砂粒・砂礫 良好

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
2	棒状 鉄製品	現存長 11.7 径 0.8	断面は方形を呈す。 両端部が欠けており，銹化が著しい。		3	不明 鉄製品		鉄片を3つに折り重ねたものである。	

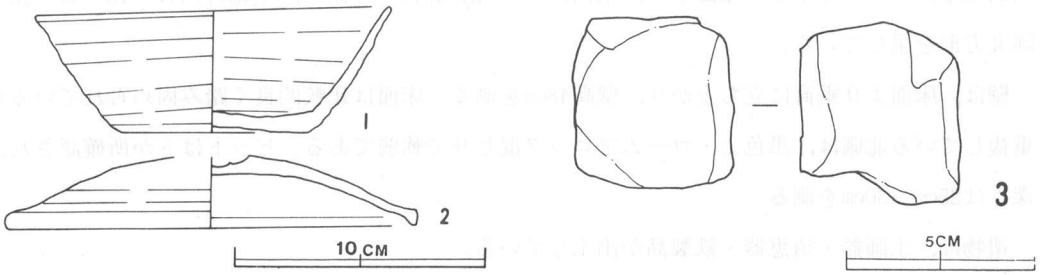
49号竪穴住居跡（第90図）

調査区C4f5区を中心に確認され，東西4.5m・南北4.0mを測り，主軸方向N－6°－Eを指し，隅丸方形を呈している。

壁は床面から垂直に立ち上がり，壁高13cmを測る。床面は全体に平坦であり，良く踏み固められている。壁溝は確認されない。ピットは7か所確認され，深さは40～50cmを測る。

竈は，北壁中央部に位置し，壁を掘り込み，粘土・砂によって構築され，焚口からゆるやかに立ち上がり，煙道・煙出し孔を作っている。本住居跡は，掘り込みが比較的浅いものである。

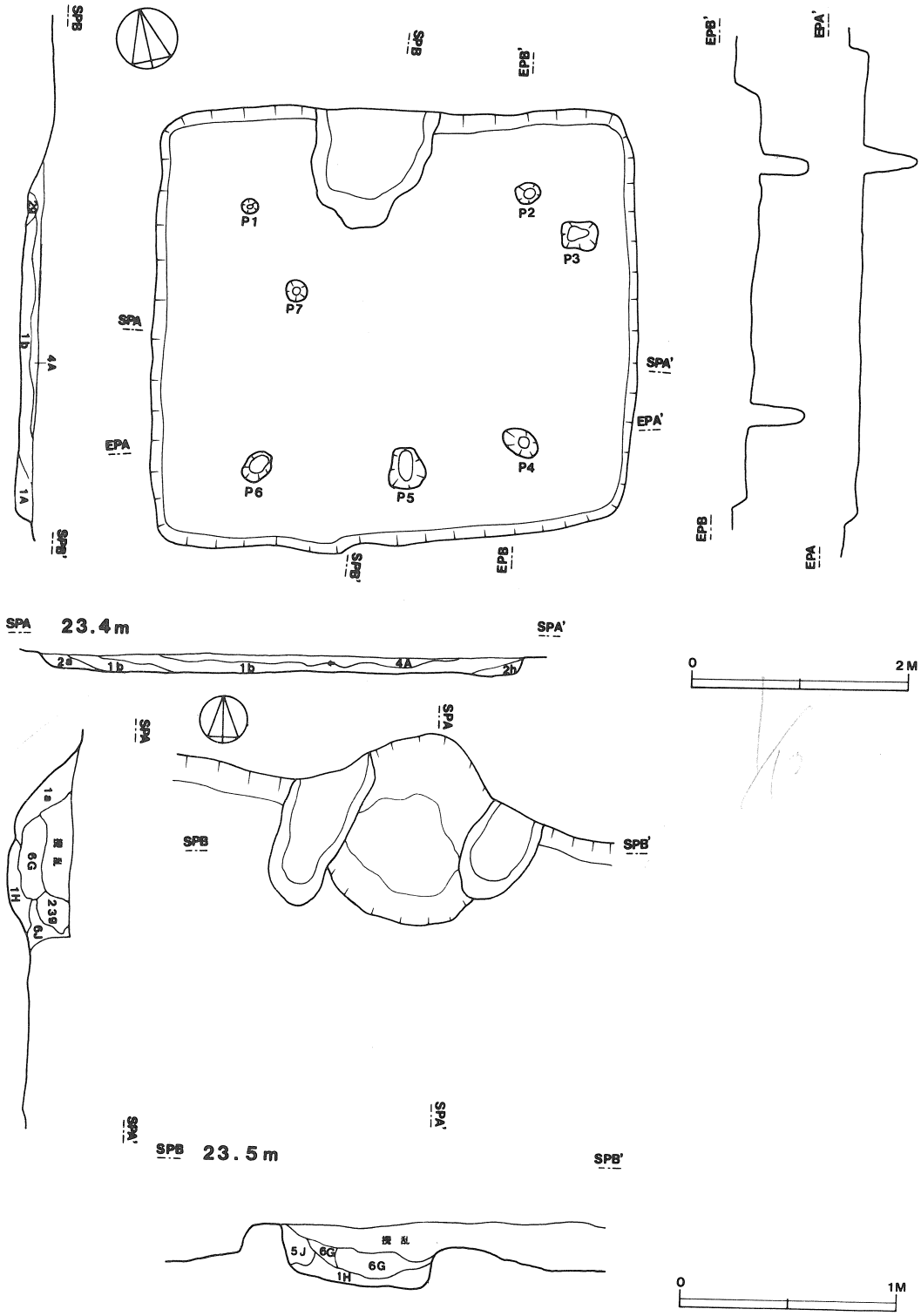
遺物は，土師器・須恵器・瓦・鉄滓が出土している。



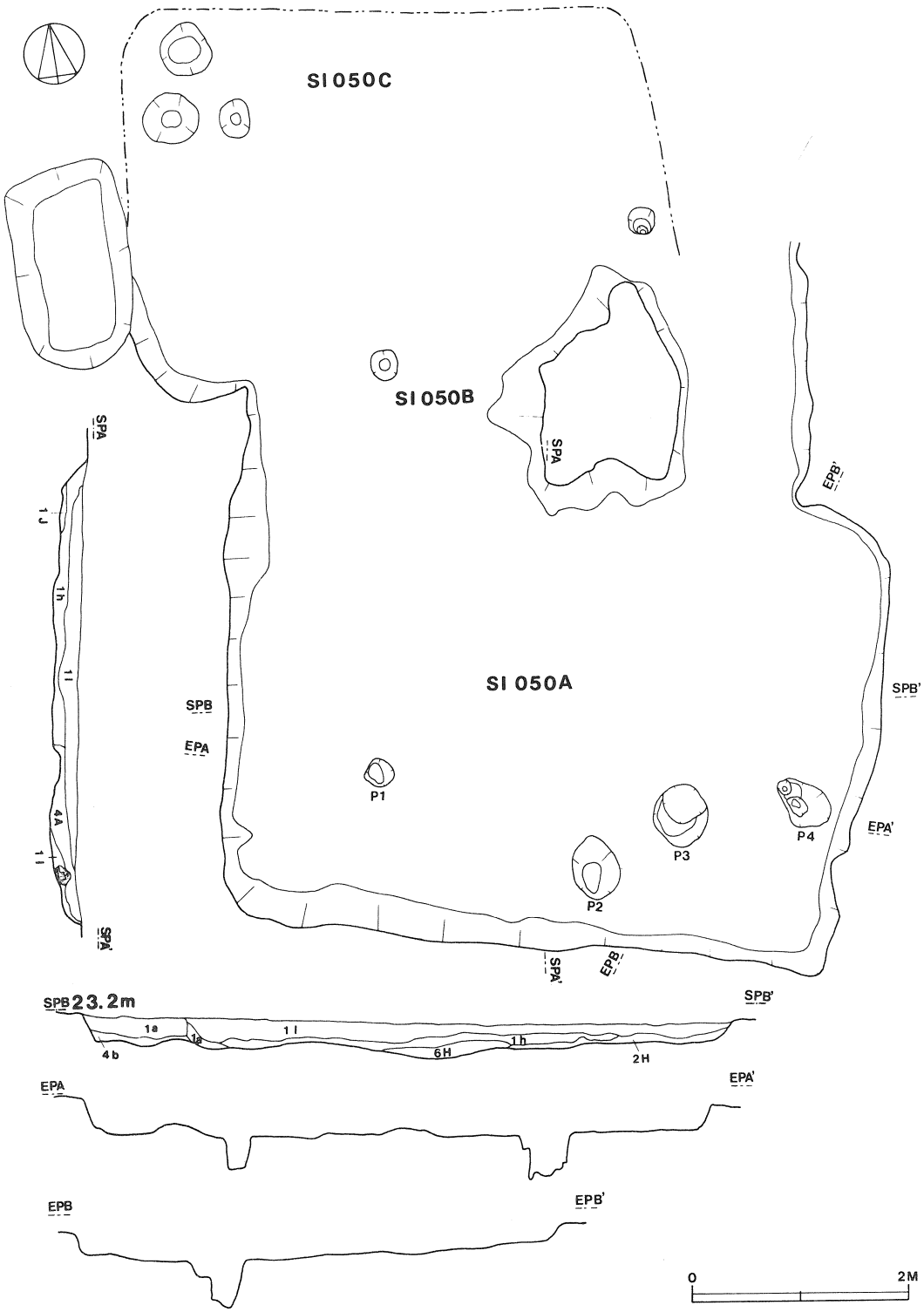
第89図　49号竪穴住居跡出土遺物実測図

49号竪穴住居跡出土遺物観察表（第89図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 14.1 B 4.9 C 7.4	体部は外反気味に立ち上がり，口縁部は内彎し，口唇部は丸味をもつ。底部は上げ底である。 器面はロクロ水挽き成形による凸凹が残る。	灰色 砂粒・砂礫 良好
2	S	蓋	A 16.3	器面は高く，口縁端部は内側へ入り込み，体部は直線的にのびる。中央のつまみは欠損し，周辺には箆削りが施されている。	灰白色 砂粒・砂礫 不良
3	砥石		4.5×4.1 3.0	方形を呈する。全体に滑らかで丸みを帯びている。使用痕が認められ，摩滅痕がみられる。	凝灰岩



第90図　49号竪穴住居跡・竈実測図



第91図　50－A・B・C号竪穴住居跡実測図

50－A・B・C号竪穴住居跡（第91図）

調査区C4f7 区を中心に確認され，A号跡は東西6.5m・南北4.5mを測り，主軸方向N－12°－Eを指し，隅丸長方形を呈している。

壁は，床面より垂直に立ち上がり，壁高35cmを測る。床面はほぼ平坦で，全体に良く踏み固められている。壁溝は確認されない。

竈は，住居跡北側中央部に位置するが，保存状態は悪く，若干袖部が残存しているにすぎない。

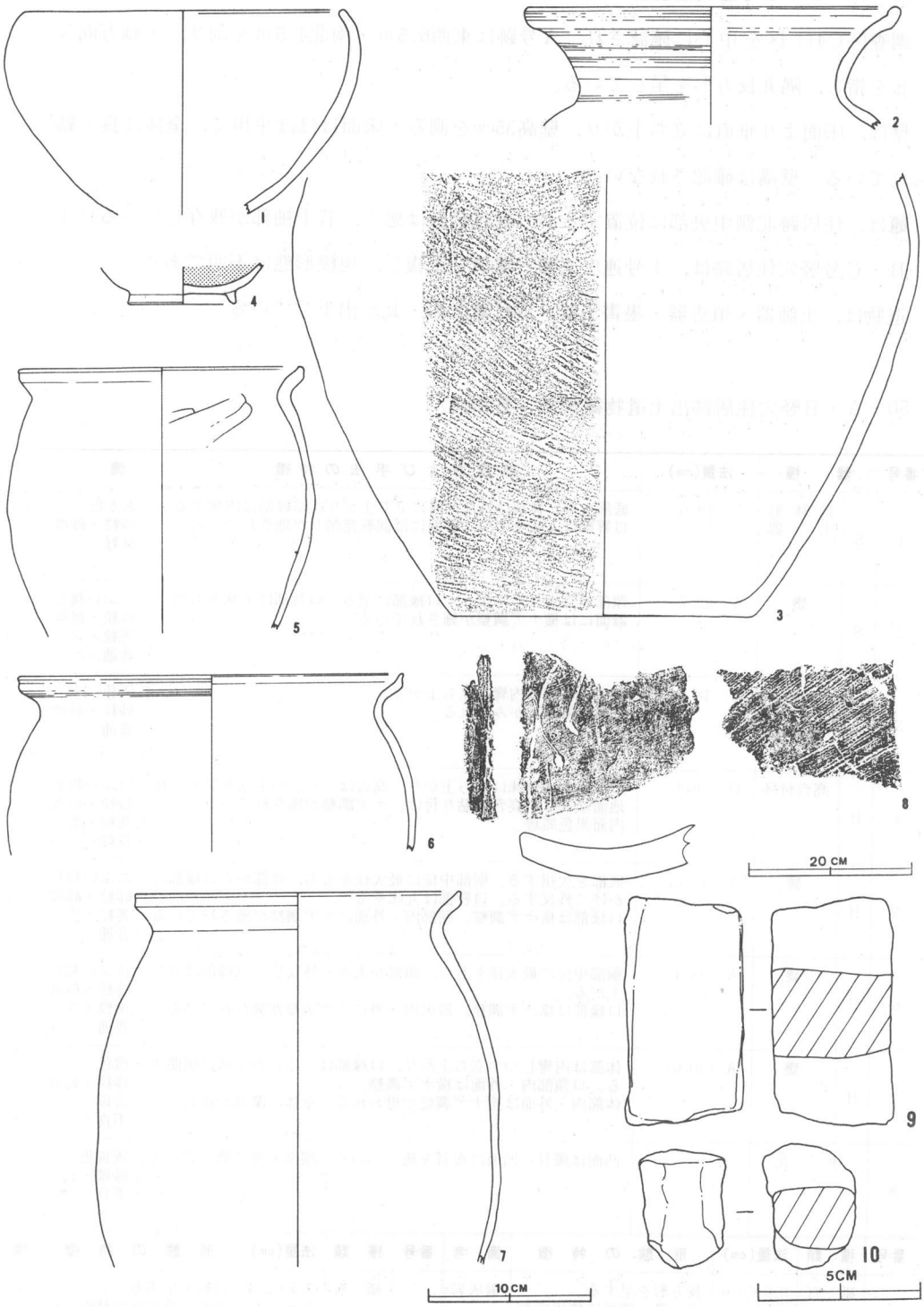
B・C号竪穴住居跡は，1号連房式竪穴遺構と重複し，規模形態は不明である。

遺物は，土師器・須恵器・墨書土器・漆付着土器・瓦が出土している。

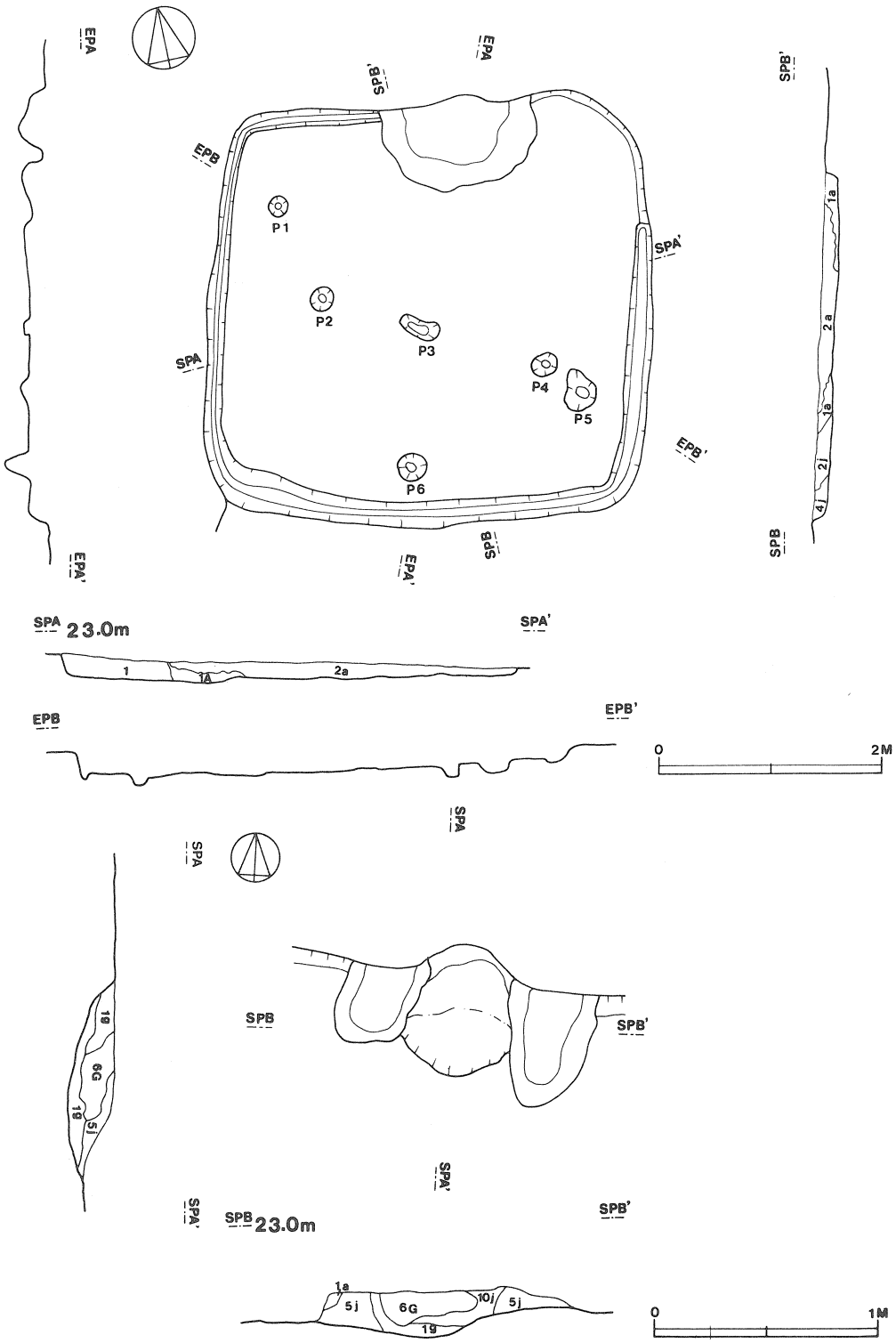
50－A・B竪穴住居跡出土遺物観察表（第92図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	鉢形土器	A 19.6	底部欠損。体部は外反気味に立ち上がり，口縁部は内彎する。口唇部は丸味をもつ。器面には回転箆削りが施されている。	灰赤色 砂粒・砂礫 良好
2	S	甕	A 22.7	頸部から大きく外反し，口縁部に至る。口唇部は丸味をもつ。器面には横ナデ調整が施されている。	にぶい褐色 砂粒・砂礫・長石・石英粒・スコリア・雲母 普通
3	S	甕	C 18.4	平底で体部は内彎し立ち上がる。 外面に叩き目がみられる。	灰色 砂粒・砂礫・雲母 普通
4	H	高台付坏	D 6.4	体部は外反気味に立ち上がり，高台は「ハ」の字状を呈す。接地面は尖る。高台は貼り付け。ナデ調整が施されている。 内面黒色処理。	にぶい橙色 砂粒・砂礫・長石・石英粒・雲母 良好
5	H	甕	A 17.3	底部を欠損する。胴部中位に最大径をもち，頸部から口縁部にかけて外反する。口唇部は丸味をもつ。 口縁部は横ナデ調整。胴部内・外面にナデ調整が施されている。	にぶい橙色 砂粒・砂礫・長石・石英粒・雲母 普通
6	H	甕	A 23.4	胴部中位に最大径をもち，頸部が大きく外反し，口縁部は立ち上がる。 口縁部は横ナデ調整。器面内・外にナデ調整が施されている。	にぶい褐色 砂粒・砂礫・長石・石英粒・スコリア・雲母 普通
7	H	甕	A (20.0)	体部は内彎しつつ立ち上がり，口縁部は「く」の字状に屈曲する。口頸部内・外面は横ナデ調整。 体部内・外面は箆ナデ調整と思われる。全体に摩滅が進行。	橙色 砂粒・砂礫・スコリア・雲母 不良
8	平瓦			凸面は縄目，凹面に布目を施している。端部を箆で磨いている。	灰黄色 砂礫・長石・雲母 不良

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
9	砥石	6.6×3.6 2.6	長方形を呈する。 表・裏・側面に使用痕が認められ，滑らかである。	凝灰岩	10	砥石	3.5×2.4 1.8	台形を呈する。 側面に使用痕が認められる。	凝灰岩



第92図　50－A・B号竪穴住居跡出土遺物実測図



第93図　51号竪穴住居跡・竈実測図

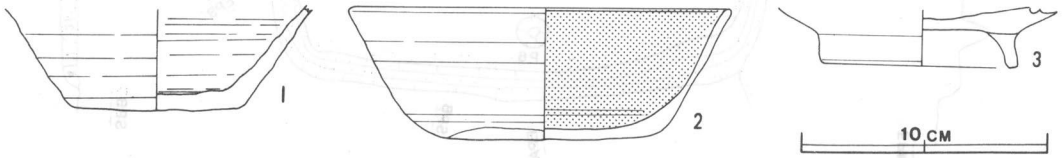
51号竪穴住居跡（第93図）

調査区C4b0区を中心に確認され，東西4.0m・南北3.8mを測り，主軸方向N－11°－Eを指し，隅丸方形を呈している。

壁は，床面から垂直に立ち上がり，壁高18cmを測る。床面はほぼ平坦で，良く踏み固められている。壁溝は北東コーナー部を除き全周し，幅9cm・深さ6cmを測る。ピットは6か所確認され，深さは10～20cmを測る。

竈は，北壁中央部に位置し，壁を若干掘り込み，粘土・砂によって構築され，焚口・火床からなだらかに立ち上がり，煙道・煙出し孔を作っている。

遺物は，土師器・須恵器が出土している。



第94図　51号竪穴住居跡出土遺物実測図

51号竪穴住居跡出土遺物観察表（第94図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	C 6.6	口縁部欠損。体部は外反気味に立ち上がる。底部は丸底気味である。 器面に横ナデ調整が施されている。	灰黄色 砂粒 普通
2	H	坏	A 15.0 B 5.3 C 8.6	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反し，先端は丸味をもつ。 器面はロクロ水挽き成形で，底部は篦削り。 器内面は黒色処理。	にぶい黄橙色 砂粒・砂礫・長石粒 良好
3	H	高台付坏	D 7.8	底部破片。 高台は「ハ」の字状に開き，接地面は丸い。高台は貼り付け，ナデ調整が施されている。	にぶい黄橙色 砂粒・砂礫・長石粒 良好

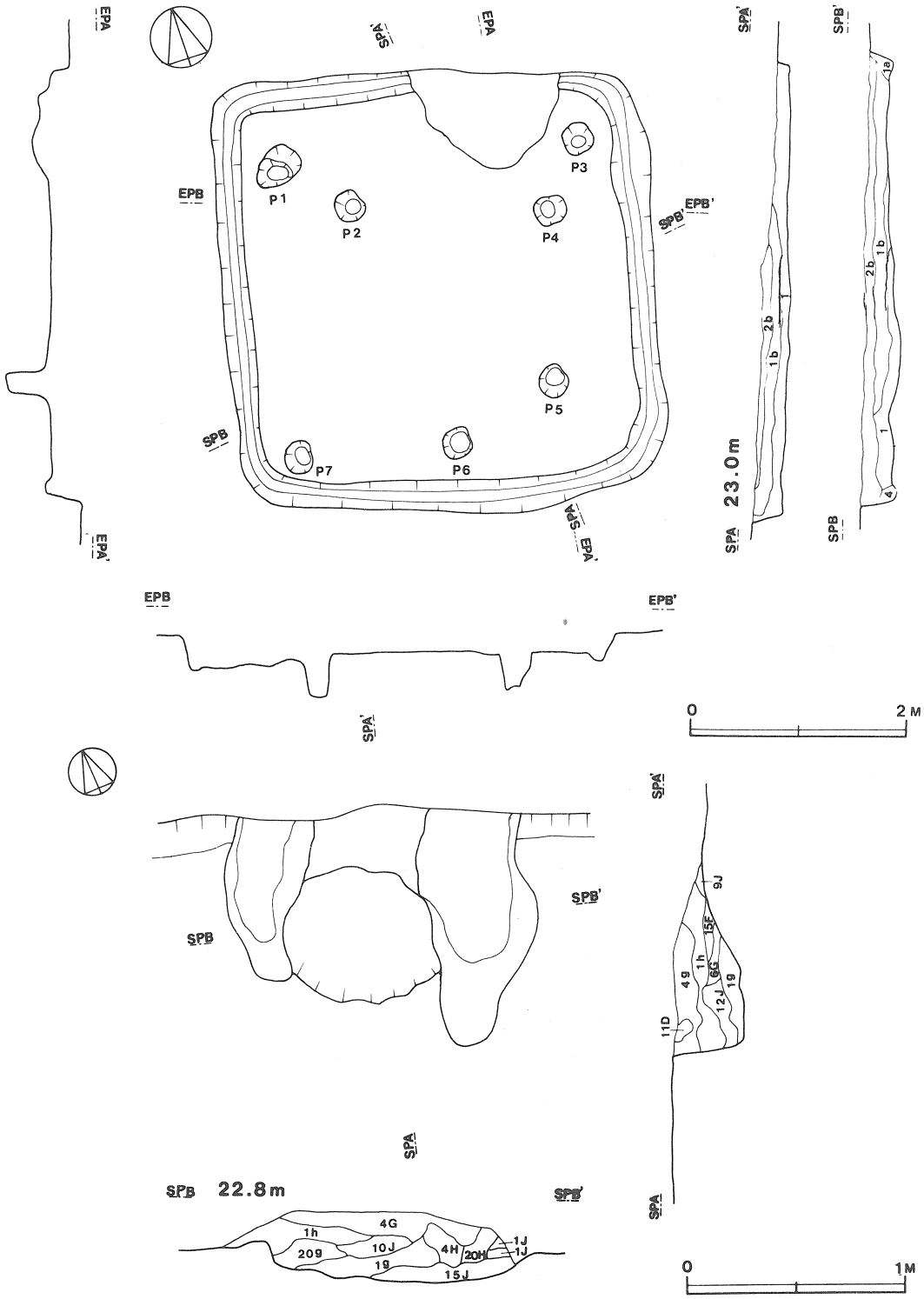
52号竪穴住居跡（第95図）

調査区B4j8区を中心に確認され，東西3.95m・南北4.05mを測り，主軸方向N－16°－を指し，隅丸方形を呈している。

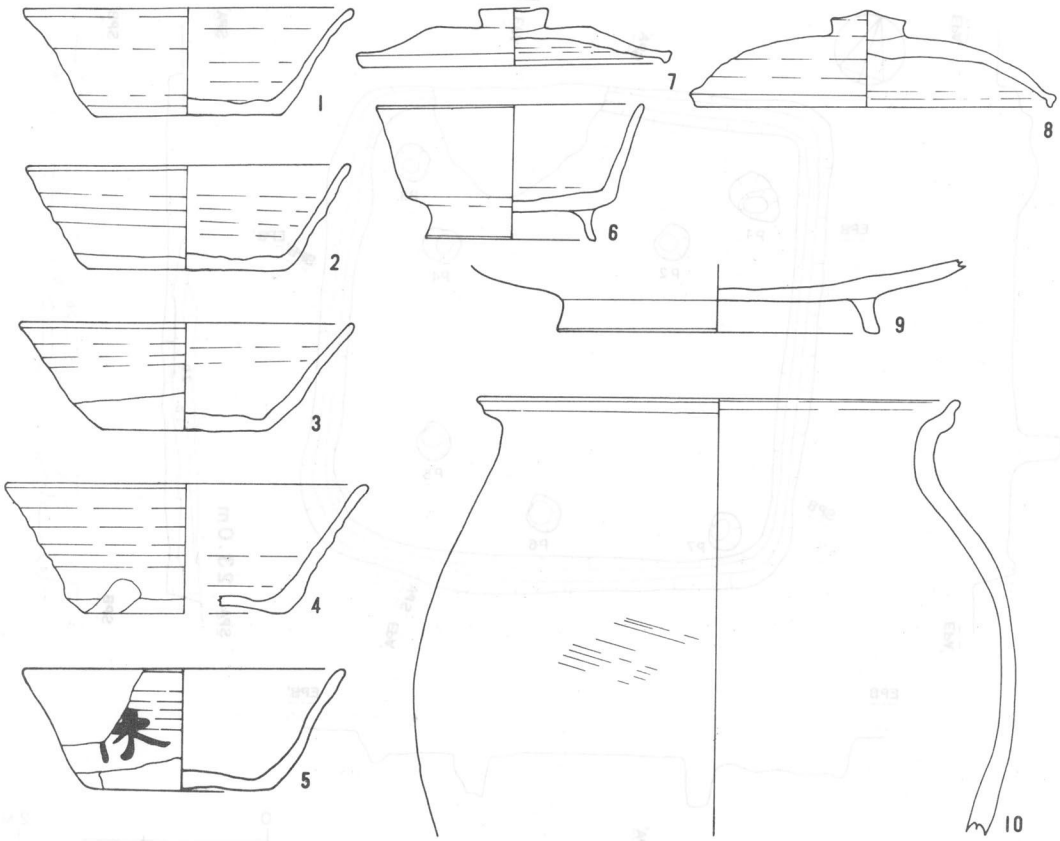
壁は，床面から垂直に立ち上がり，壁高30cmを測る。床面はほぼ平坦で，良く踏み固められている。壁溝は幅10cm・深さ4cmを測り，全周している。ピットは7か所確認され，深さは30～40cmを測る。

竈は，北壁中央部に位置し，粘土・砂で構築されており，保存状態は悪い。

遺物は，土師器・須恵器・墨書土器・漆付着土器が出土している。



第95図　52号竪穴住居跡・竈実測図



第96図　52号竪穴住居跡出土遺物実測図

10CM

52号竪穴住居跡出土遺物観察表（第96図）

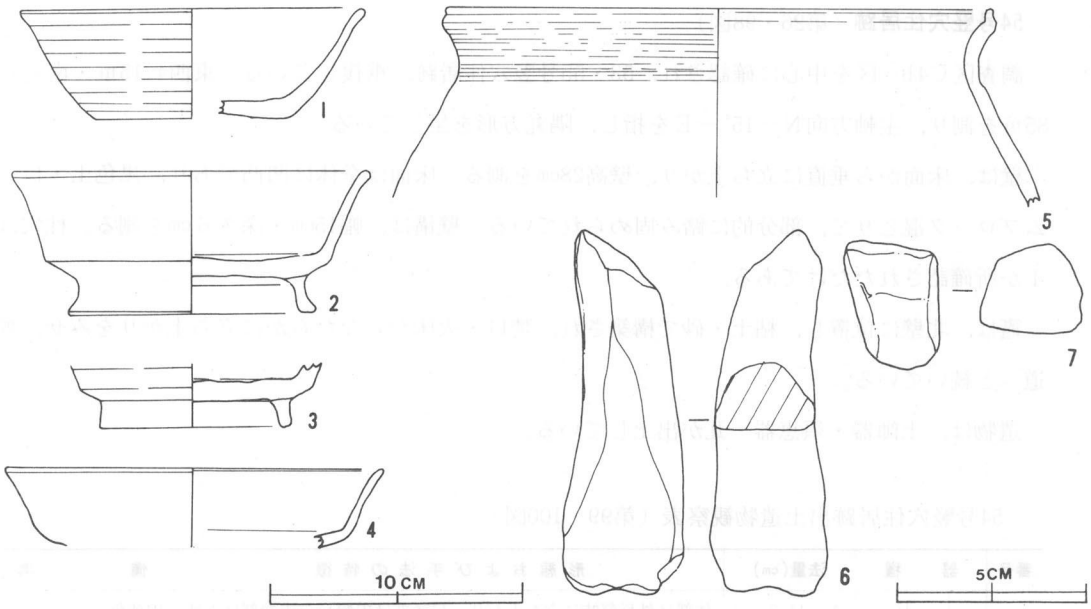
番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 13.2 B 4.3 C 7.5	体部は外反気味に立ち上がり，底部との境は僅かに突出し，ふくらみをもって立ち上がる。口縁部で内彎し，口唇部は外反して丸味をもつ。底部は上げ底となる。器面には水挽きによる凸凹が残る。体部はナデ調整が施されている。	灰色 砂粒・砂礫 良好
2	S	坏	A 13.0 B 4.1 C 8.0	体部は僅かに外反気味に立ち上がり，口唇部は丸味をもつ。底部中央部は僅かに凹む。器面に水挽きによる凸凹が残る。体部はロクロ使用のナデ調整である。	灰色 砂粒・砂礫 良好
3	S	坏	A 13.3 B 4.4 C 6.6	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反し，先端部は丸味をもつ。底部中央部は僅かに盛り上がる。器面に水挽きによる凸凹が残る。体部はロクロ使用のナデ調整である。	灰色 砂粒・砂礫 良好
4	S	坏	A 14.4 B 5.2 C 8.0	体部は外反気味に立ち上がる。底部は上げ底である。体部と底部の境は突出し，ふくらみをもつ。器面に水挽きによる凸凹が残る。体部下端には箆削りが施されている。	灰色 砂粒・砂礫 良好
5	S	坏	A (12.7) B 5.0 C 7.4	底部は平底で，体部と底部はやや明瞭な角度で分かれる。体部はやや内彎気味に外上方にのび，口縁端部を丸くおさめている。ロクロ水挽き成形で，内面全体は横ナデ調整か。	灰白色 砂粒・砂礫・雲母 普通 体部外面に墨書

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
6	S	高台付坏	A 10.7 B 5.4 D 6.8	体部の立ち上がりは直線的となり，口唇部が外反し丸味をもつ。高台は先端が尖る。高台は貼り付け。接合部は入念なナデ調整が施されている。	灰色 砂粒・砂礫 良好
7	S	蓋	A 12.0 B 2.2	つまみの中央部が外縁部よりやや凹んでいるものであり，つまみはボタン状を呈する。口縁部から天井部へ移行する部分は稜を有する。受け部内面はロクロナデ調整である。	灰白色 砂粒・砂礫・雲母 普通
8	S	蓋	A 14.2 B 3.9	宝珠状のつまみを有し中央部が外縁部より出ているものである。受け部内面はロクロナデ調整である。	灰色 砂粒・砂礫 良好
9	H	台付盤	D 12.8	高台は「ハ」の字状に開き，接地面は平坦である。 底部と体部との境は器肉が厚い。高台は貼り付け，ナデ調整が施されている。	橙色 砂粒・砂礫・長石・石英粒 良好
10	H	甕	A 19.0	底部欠損である。胴部は張り，最大径を測る。頸部は括れ，口縁部にいたる。 口縁部は外反し，先端部は丸味をもつ。口縁部は横ナデ調整，胴部はナデ調整と篦削りが施されている。	にぶい橙色 砂粒・砂礫・長石・石英粒 良好

53号竪穴住居跡（第26図）

調査区C4b5区を中心に確認され，13・54号竪穴住居跡と重複し，遺構形態は不明である。若干床面の段差が確認される程度である。

遺物は，土師器・須恵器・墨書土器が出土している。



第97図　53号竪穴住居跡出土遺物実測図

53号竪穴住居跡出土遺物観察表（第97図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 13.5	体部は外反気味に立ち上がり，底部は上げ底気味であり，口唇部は丸味をもち折れる。 器面には，水挽き成形痕が残り凸凹している。	灰黄色 砂粒・砂礫 良好
2	S	高台付坏	A 14.0 B 5.7 D 9.4	底部破片。高台は「ハ」の字状を呈し，接地面は平坦である。体部と底部の境は突き出し，稜をなす。器面にはロクロ水挽き成形痕が残り，高台は貼り付け・ナデ調整が施されている。	灰色 砂粒・砂礫 良好
3	S	高台付坏	D 7.3	底部破片。高台は「ハ」の字状を呈し，接地面は丸味をもつ。高台は貼り付け・ナデ調整が施されている。	黄灰色 砂粒 良好
4	H	高台付坏	A 14.8	体部は外反気味に立ち上がり，口唇部は丸味をもち，さらに折れる。 器面にロクロ水挽き成形痕が残る。	灰色 砂粒・砂礫 良好
5	H	甕	A 21.7	胴部から頸部にかけて内彎気味に立ち上がり，頸部はゆるやかに括れ，口唇部は立ち上がり丸味をもつ。口縁部には横ナデ調整が施されている。	にぶい橙色 砂粒・砂礫・長石・石英粒・雲母 良好

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
6	砥石	9.6×2.5 1.7	長方形を呈する。 側面を使用し研磨痕が認められ，研磨により凹むように摩滅が確認できる。	凝灰岩	7	砥石	3.3×2.7 1.7	方形を呈する。 全面に使用痕が認められ丸味を帯びている。	凝灰岩

54号竪穴住居跡（第26・98図）

調査区C4b5区を中心に確認され，53・55号竪穴住居跡と重複している。東西4.15m・南北4.85mを測り，主軸方向N－15°－Eを指し，隅丸方形を呈している。

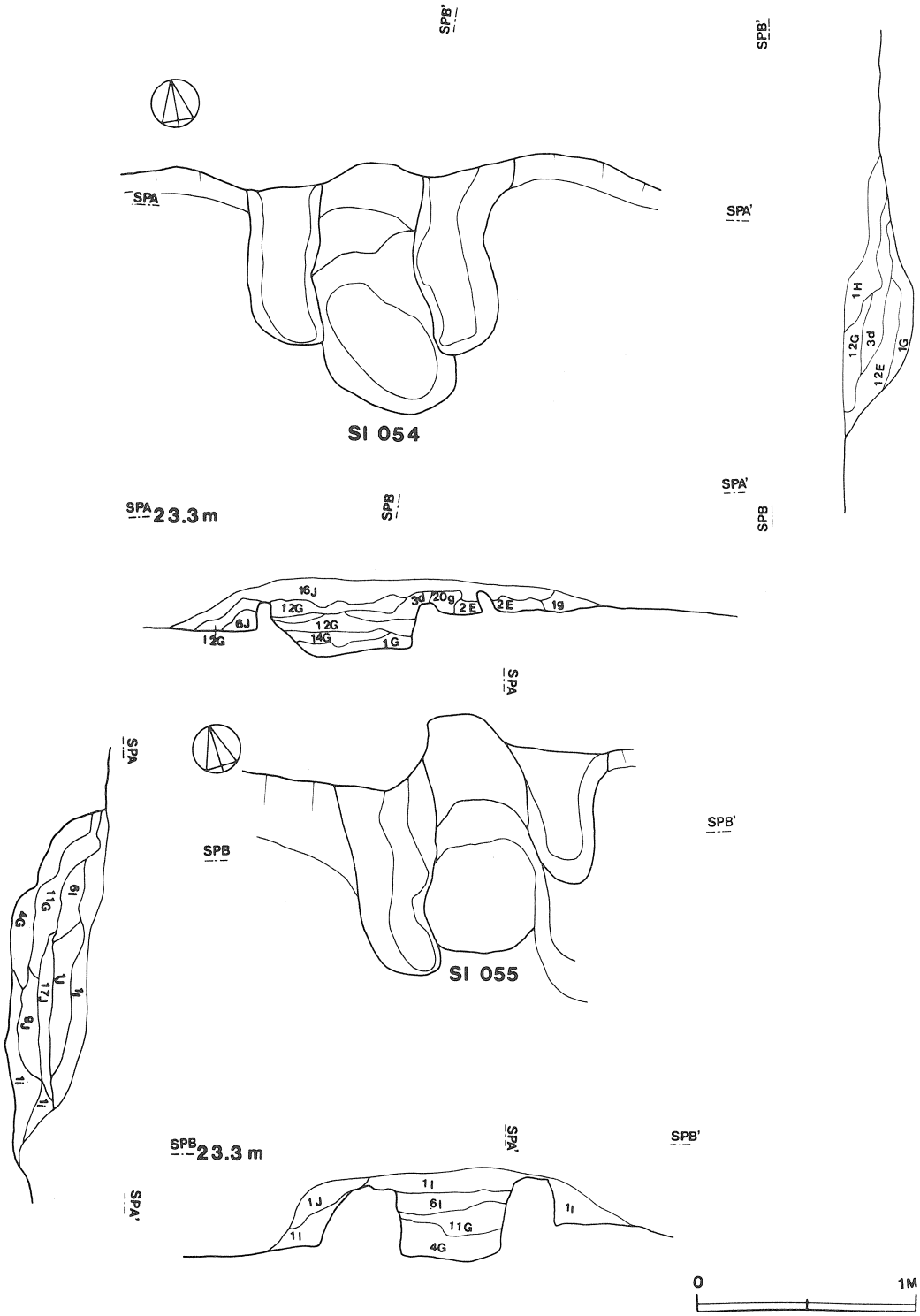
壁は，床面から垂直に立ち上がり，壁高28cmを測る。床面は全体に凹凸であり，黒色土・ローム ブロック混じりで，部分的に踏み固められている。壁溝は，幅15cm・深さ6cmを測る。柱穴は，1か所確認されただけである。

竈は，北壁に位置し，粘土・砂で構築され，焚口・火床からなだらかに立ち上がりをみせ，煙道へと続いている。

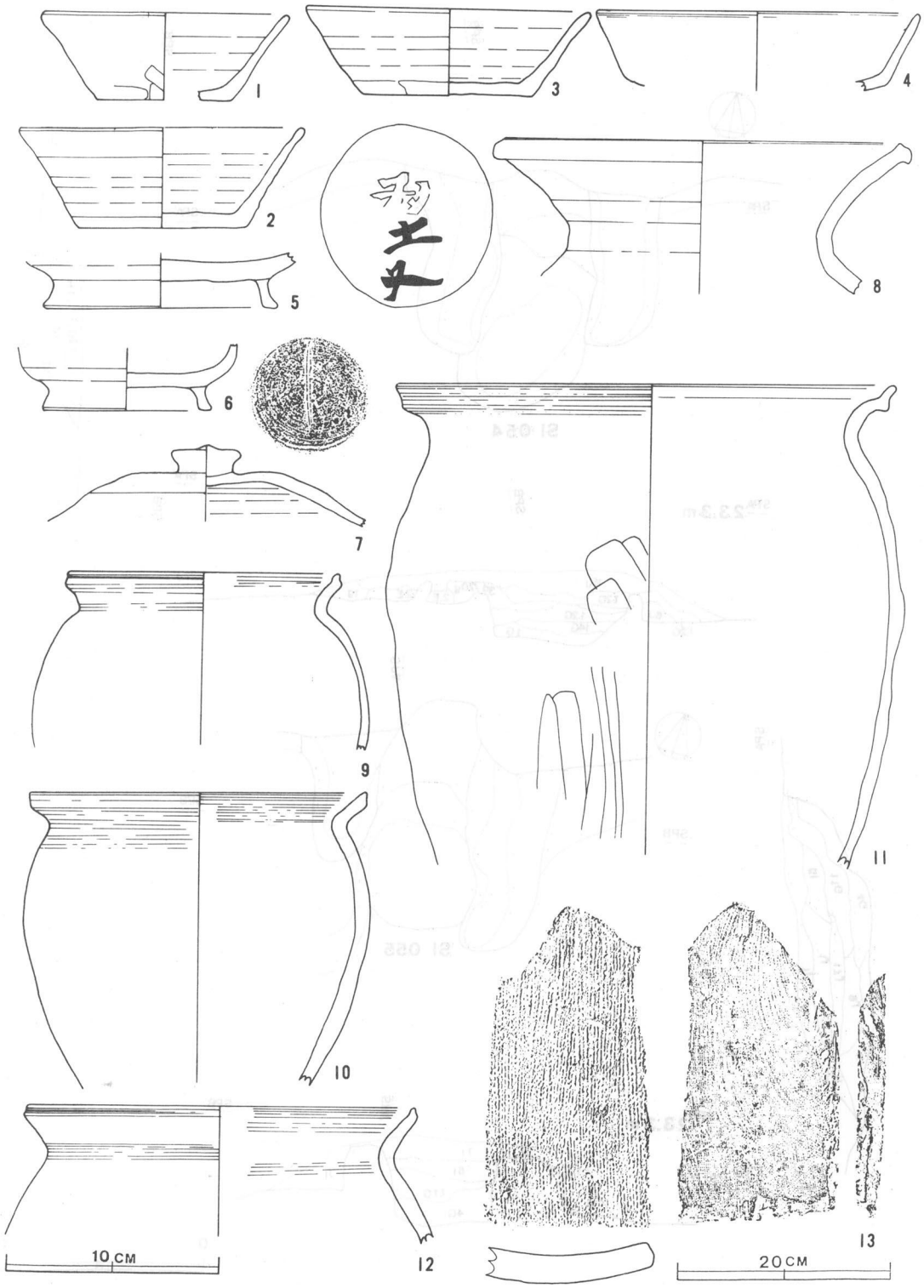
遺物は，土師器・須恵器・瓦が出土している。

54号竪穴住居跡出土遺物観察表（第99・100図）

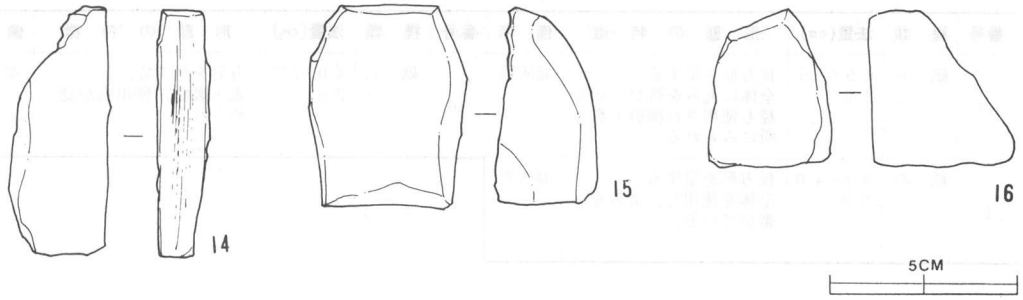
番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 11.3 B 4.1 C 6.1	体部は外反気味に立ち上がり，口縁部は内彎し，先端部は丸味をもつ。底部と体部の境は厚い。器面にはロクロ水挽き成形痕が残り，底部は箆切り後箆削りが施されている。	灰黄色 砂粒 良好



第98図　54・55号竪穴住居跡竈実測図



第99図　54号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1)



第100図　54号竪穴住居跡出土遺物実測図 (2)

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
2	S	坏	A 13.3 B 4.7 C 7.8	体部は外反して立ち上がり，先端部は丸味をもつ。 底部と体部の境は厚く突き出し気味である。器面にロクロ水挽き成形痕が残り凸凹している。底部は篦切り。	黄灰色 砂粒 良好
3	S	坏	A 13.3 B 4.2 C 7.8	底部は平底で，体部と底部は篦削りにより鋭く明瞭な角度で分かれる。体部は外傾気味に外上方にのび，口縁部は僅かに外反し，端部を丸くおさめている。　右ロクロ水挽き成形で，底部は一方向の静止篦削り調整。口縁部内・外面と体部内面は横ナデ調整。体部下端部は手持ち篦削り調整。	灰色 砂粒・長石粒多・雲母 普通 底部外面に墨書
4	S	高台付坏	A 15.0	底部欠損。体部は外反気味に立ち上がり，口唇部は丸味をもつ。器面にはロクロ水挽き成形痕が残る。	灰色 砂粒・砂礫 良好
5	S	高台付坏	D 10.8	底部残存。高台は「ハ」の字状に開き，接地面は平坦である。高台は貼り付け，ナデ調整が施されている。	灰色 砂粒・砂礫 良好
6	S	高台付坏	D 7.8	底部残存。体部は外反気味に立ち上がり，口唇部は丸味をもつ。器面にはロクロ水挽き成形痕が残されている。	灰色 砂粒・砂礫 良好 底部外面篦記号
7	S	蓋		宝珠状のつまみの中央部が，外縁部より出ているものである。口縁部から天井部へ移行する部分は，稜を有する。天井部は回転篦削り。身受け部内面にはロクロナデ調整が施されている。	灰色 砂粒・砂礫 良好
8	S	甕	A 18.5	底部以下を欠損する。外反気味に立ち上がる口縁部は，口唇部で肥厚となり，僅かに下端にふくらみをみせる。口唇部突帯は口縁部を折り曲げて肥厚させ，内・外面は横位のロクロナデ調整が施されている。	灰色 砂粒 良好
9	H	甕	A 12.6	胴部下半を欠損。 肩部はなだらかに立ち上がり，口縁部は強く，短く外反し，口唇部は丸みをもち立ち上がる。口縁部には横ナデ調整が施されている。	赤褐色 砂粒・砂礫・長石・石英粒 良好
10	H	甕	A 23.4	底部を欠損。 胴部中位に最大径をもち，肩部はなだらかに立ち上がり，口縁部は強く短く外反し，口唇部は丸味をもつ。口縁部は横ナデ調整胴部には篦削りが施されている。	にぶい赤褐色 砂粒・砂礫・長石・石英粒 良好
11	H	甕	A 15.7	胴部下半を欠損。 胴部中位に最大径をもち，肩部はなだらかに立ち上がり，口縁部は強く短く外反する。 口縁部は横ナデ調整が施されている。	橙色 砂粒・砂礫・長石・石英粒 良好
12	H	甕	A 18.0	胴部以下を欠損。 肩部はなだらかに立ち上がり，口縁部は強く短く外反し，口唇先端部は丸味をもち立ち上がる。口縁部は横ナデ調整が施されている。	にぶい黄橙色 砂粒・砂礫・長石・石英粒 良好
13	平瓦			凸面に縄目叩きを施しており，凹面に布目痕を有している。縄目は短い。	灰黄色 砂礫・長石・雲母 硬質

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
14	砥石	6.5×2.5 1.3	長方形を呈する。 全体に丸みを帯びている。 稜も使用され擦痕も数か所にみられる。	凝灰岩	16	砥石	4.0×3.7 2.6	方形を呈する。 表・裏面に使用痕が認められる。	凝灰岩
15	砥石	5.3×4.0 2.0	長方形を呈する。 全体を使用し，丸みを帯びている。	凝灰岩					

55号竪穴住居跡（第26・98図）

調査区C3i7 区を中心に確認され，54・60・63号竪穴住居跡と重複している。東西6.05m・南北4.85mを測り，主軸方向N－18°－Eを指し，隅丸長方形を呈している。

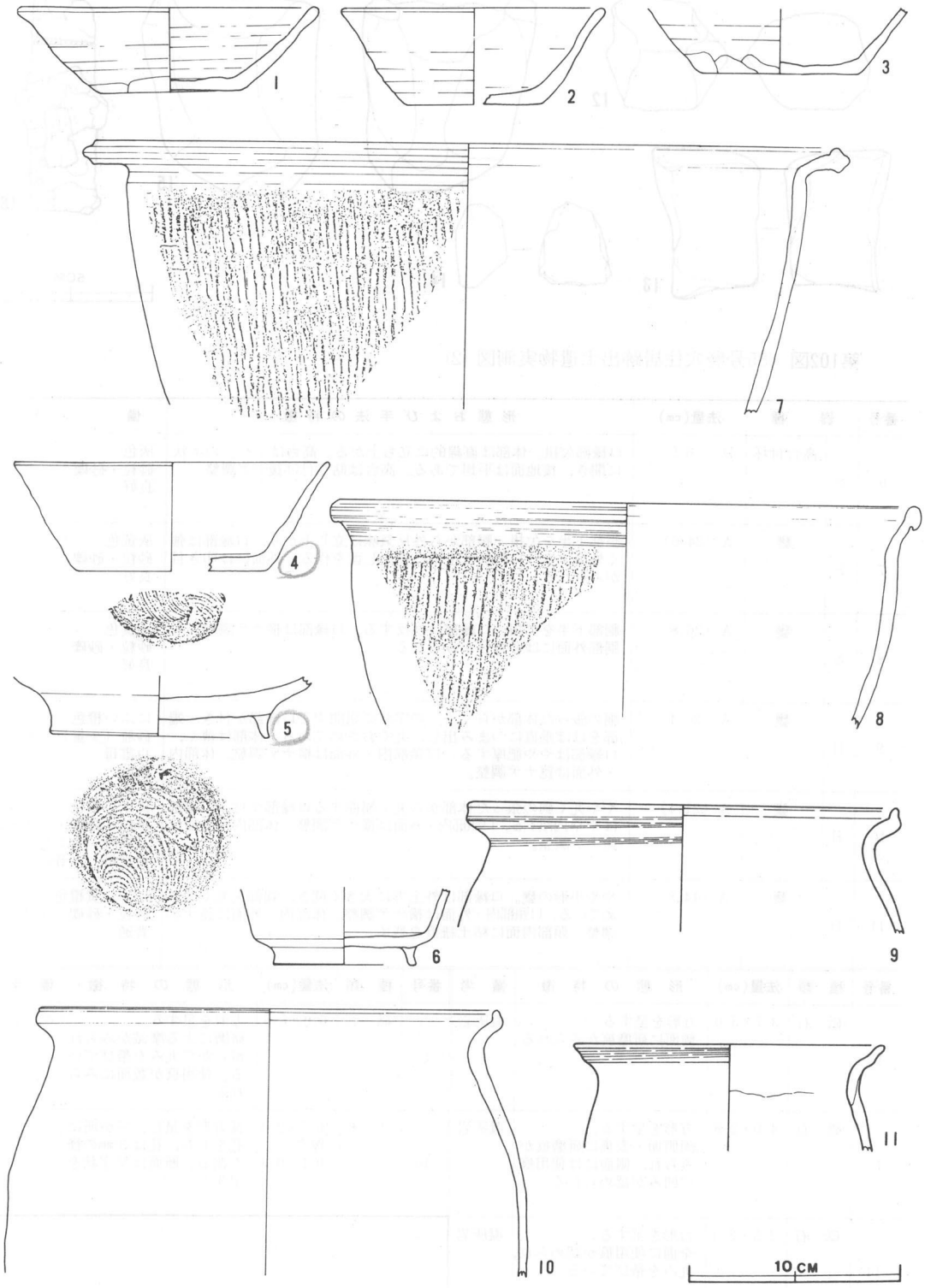
壁は，床面より垂直に立ち上がり，壁高45cmを測る。床面はほぼ平坦で，黒色土・ローム混じりであり，全体に踏み固められている。壁溝は，確認されない。ピットは8か所検出され，深さは30～50cmを測る。

竈は，北壁中央部よりやや西側に位置し，粘土・砂で構築され，焚口・火床からゆるやかに立ち上がり，煙道・煙出し孔を作っている。竈の位置，堆積状況（竈付近に多量の焼土・粘土・砂がブロック状にみられる点）から竈が再構築されたものと考えられる。54・60・63号竪穴住居跡の前後関係は，54・63号が本住居跡より古いが，60号との関係は明らかでない。

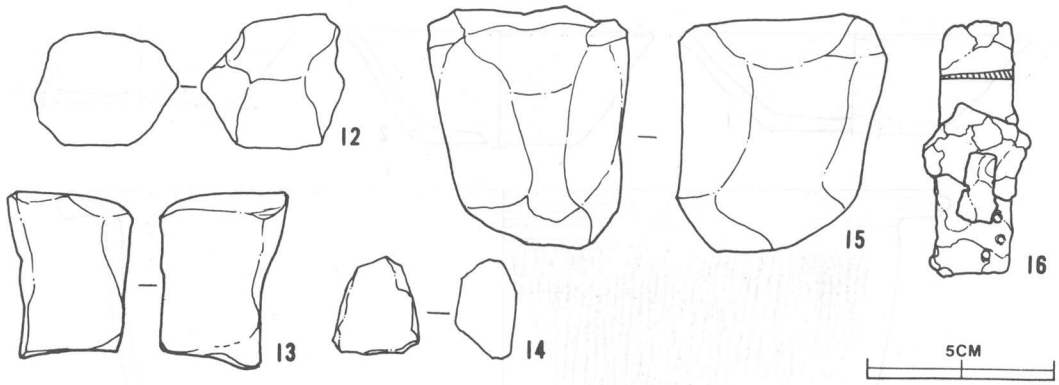
遺物は，土師器・須恵器・瓦・鉄製品・漆紙が出土している。

55号竪穴住居跡出土遺物観察表（第101・102図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 13.6 B 4.0 C 6.4	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反し丸味を持つ。体部と底部の境は僅かにふくらみを持って立ち上がる。器面はロクロ水挽き成形で，凸凹している。底部は篦切り後篦削り。	灰黄褐色 砂粒・砂礫 不良
2	S	坏	A（1.2） B 4.5 C（4.5）	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反し丸味を持つ。器面は，ロクロ水挽き成形で凸凹が残る。	灰色 砂粒・砂礫 良好 器内面に漆付着
3	S	坏	C 7.6	口縁部欠損。体部は内彎気味に立ち上がる。器面にロクロ成形時の水挽き痕が残る。底部は篦切り後，篦削りが施されている。	灰色 砂粒・砂礫 不良
4	S	坏	A 14.5 B 5.0 C 8.0	体部は直線的に開き，口縁部は外反気味である。底部は糸切り後，篦削りが施されている。	にぶい橙色 砂粒・砂礫 良好
5	S	高台付坏	D 10.0	底部破片である。高台は「ハ」の字状に開き，接地面は丸い。高台は貼り付け，ナデ調整，底部は回転糸切り。	黄灰色 砂粒・砂礫 不良



第101図　55号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1)



第102図　55号竪穴住居跡出土遺物実測図 (2)

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
6	S	高台付坏	D　6.5	口縁部欠損。体部は直線的に立ち上がる。高台は「ハ」の字状に開き，接地面は平坦である。高台は貼り付け後ナデ調整。	灰色 砂粒・砂礫 良好
7	S	甕	A (34.6)	胴部下半を欠損。胴部から外反気味に立ち上がり，口縁部は強く外反する。口唇部は上下に突出し面を作る。外面には叩き目がみられる。	灰黄色 砂粒・砂礫 良好
8	S	甕	A (26.8)	胴部下半を欠損。口縁部は外反する。口縁部は横ナデ調整。胴部外面には叩き目がみられる。	灰黄色 砂粒・砂礫・雲母 良好
9	H	甕	A (20.4)	胴の張った体部から「く」の字状に屈曲する口縁部が付き，端部をほぼ垂直につまみ出し，丸くおさめている。体部は薄く，口縁部はやや肥厚する。口頸部内・外面は横ナデ調整。体部内・外面は箆ナデ調整。	にぶい橙色 砂粒（少量）・砂礫・白雲母 良好
10	H	甕	A (21.4)	やや丸く胴の張った体部から丸く屈曲する口縁部が付き，端部はやや内傾する。口頸部内・外面は横ナデ調整。体部内・外面は箆ナデ調整。	にぶい橙色 砂粒・砂礫・長石・石英粒・スコリア・白雲母　普通
11	H	甕	A (14.8)	やや小形の甕。口縁部は外上方に大きく開き，端部を丸くおさめている。口頸部内・外面は横ナデ調整。体部内・外面は箆ナデ調整。頸部内面に粘土紐痕を残す。	にぶい黄橙色 砂粒・砂礫・白雲母 普通

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
12	砥石	3.7×3.0	方形を呈する。 側面に研磨痕がみられる。	凝灰岩
13	砥石	4.0×2.8	方形を呈する。 両側面・表裏に研磨痕がみられ，側面には使用痕の凹みが認められる。	凝灰岩
14	砥石	2.5×2.0	台形を呈する。 全面に使用痕が認められ，丸みを帯びている。	凝灰岩
15	砥石	6.0×5.6	方形を呈する。 研磨による摩滅がみられ滑らかで丸みを帯びている。使用痕が数面にみられる。	凝灰岩
16	小札	6.7×2.0 厚さ 0.1～0.3	長方形を呈し，三か所に孔をもち，孔は3mmの径を測る。断面はV字状を呈す。	

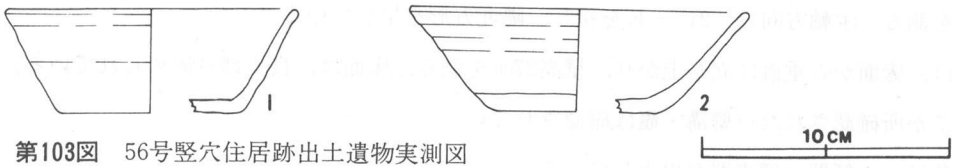
56号竪穴住居跡（第26図）

調査区C4b2区を中心に確認され，東西3.45m・南北3.5mを測り，主軸方向N－6°－Wを指し，隅丸方形を呈している。本住居跡は63号竪穴住居跡と重複している。

壁は，垂直に立ち上がり，壁高47cmを測る。床面はほぼ平坦で，良く踏み固められている。壁溝は，確認されない。ピットは4か所検出された。

竈は，北壁中央部に位置し，粘土・砂で構築され，火床から煙道・煙出し孔を作っているが，袖部の残存状態は悪い。

遺物は，土師器・須恵器・墨書土器が出土している。



第103図　56号竪穴住居跡出土遺物実測図

56号竪穴住居跡出土遺物観察表（第103図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 11.5 B 4.1	体部は直線的に立ち上がり，口縁部は外反し，先端は丸味を持つ。器面内・外にロクロ成形時の水挽き痕が残る。	灰白色 砂粒・砂礫 良好
2	S	坏	A 13.4 B 4.1	体部は外反して立ち上がる。口唇部は丸味を持つ。器面内・外にロクロ成形時の水挽き痕が残る。	灰黄色 砂粒・砂礫 普通

57号竪穴住居跡（第55図）

調査区B4i3区を中心に確認され，27・36号竪穴住居跡と重複し，遺構の形態は不明である。残存部は東西2.3m・南北4.8mを測り，主軸方向N－6°－Wである。

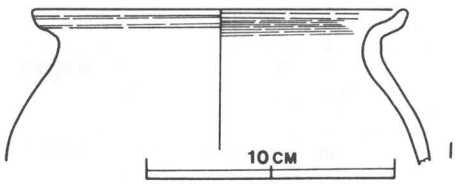
壁は，やや斜めに立ち上がり，壁高36cmを測る。床面は36号竪穴住居跡より25cm高く，若干黒色土を含む貼床で，良く踏み固められている。ピットは6か所確認された。壁溝・竈は確認されない。

遺物は，土師器・須恵器が出土している。

58号竪穴住居跡（付図－2）

調査区C4c4区を中心に確認され，1号連房式竪穴遺構と重複し，確認されたのは，東西3.2m・南北1.6mを測る遺構の北側部分だけである。

遺物は，土師器・須恵器が出土している。



第104図　58号竪穴住居跡出土遺物実測図

58号竪穴住居跡出土遺物観察表（第104図）

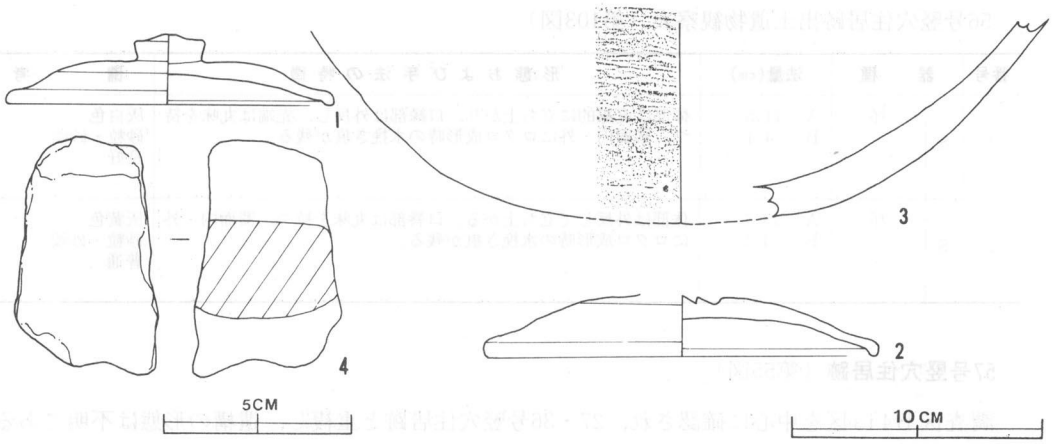
番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	H	甕	A（14.8）	丸く張った体部から，やや「く」の字状に屈曲する口縁部が付き，端部を丸くおさめている。 口頸部内・外面は横ナデ調整，体部内・外面は箆ナデ調整。	灰褐色 砂粒・砂礫・長石・石英粒・白雲母・スコリア普通 体部外面に二次焼成痕

60号竪穴住居跡（第26図）

調査区C4c2区を中心に確認され，55・63号竪穴住居跡と重複し，残存部は東西2.9m・南北2.92mを測る。主軸方向N－21°－Eを指し，隅丸方形を呈している。

壁は，床面から垂直に立ち上がり，壁高27cmを測る。床面は，良く踏み固められている。ピットは7か所確認された。壁溝・竈は確認されない。

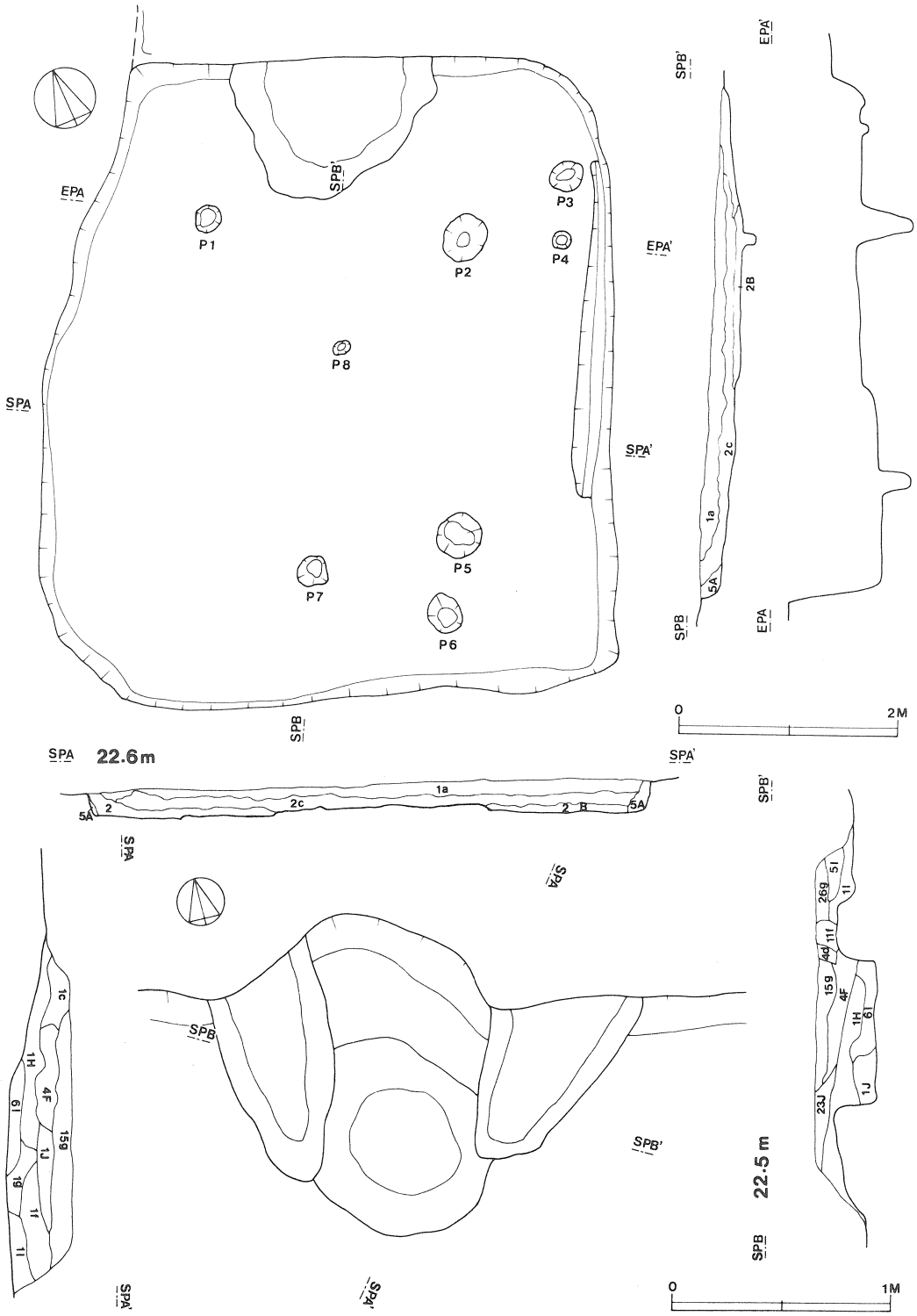
遺物は，土師器・須恵器が出土している。



第105図　60号竪穴住居跡出土遺物実測図

60号竪穴住居跡出土遺物観察表（第105図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	蓋	A 13.0 B 2.8	宝珠状のつまみを有し，身受け部の器肉は厚い。天井部に回転箆削りが施されている。	黄灰色 砂粒・砂礫・雲母不良
2	S	蓋	A 15.5	つまみ部欠損。身受け部が弱く屈曲する。天井部は回転箆削りが施されている。	灰黄褐色 砂粒・砂礫・雲母不良 器面内・外に煤付着
3	S	甕		底部破片。底部は丸底である。胴部には平行叩き目がみられる。	灰黄色 砂粒・砂礫・雲母不良
4	砥石		6.0×3.5	長方形を呈する。表・裏に使用痕が認められ，丸みを帯びている。	凝灰岩



第106図　61号竪穴住居跡・竈実測図

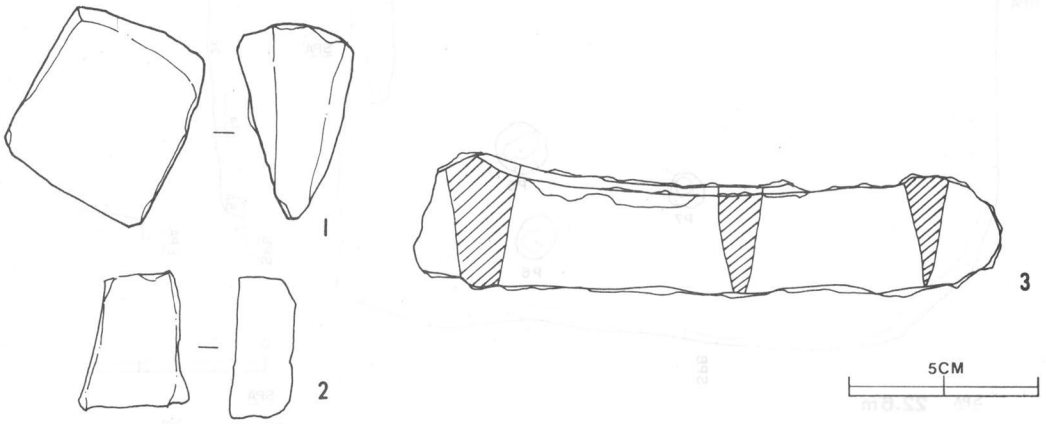
61号竪穴住居跡（第106図）

調査区B4h9区を中心に確認され，東西5.2m・南北5.9mを測り，主軸方向N－21°－Eを指し，隅丸方形を呈している。北側部において，62号竪穴住居跡と重複している。

壁は，床面から垂直に立ち上がり，壁高35cmを測り，北側では地形等から若干低くなる。床面は，ほぼ平坦である。壁溝は東壁下の一部で確認され，幅30cm・深さ5cmを測る。ピットは8か所で確認され，深さは30～50cmを測る。

竈は，北壁中央部よりやや西側に位置し，粘土・砂によって構築され，焚口からゆるやかに立ち上がりを示し，煙道へと続いている。

遺物は，土師器・須恵器・墨書土器・漆付着土器・羽口・鉄滓が出土している。



第107図　61号竪穴住居跡出土遺物実測図

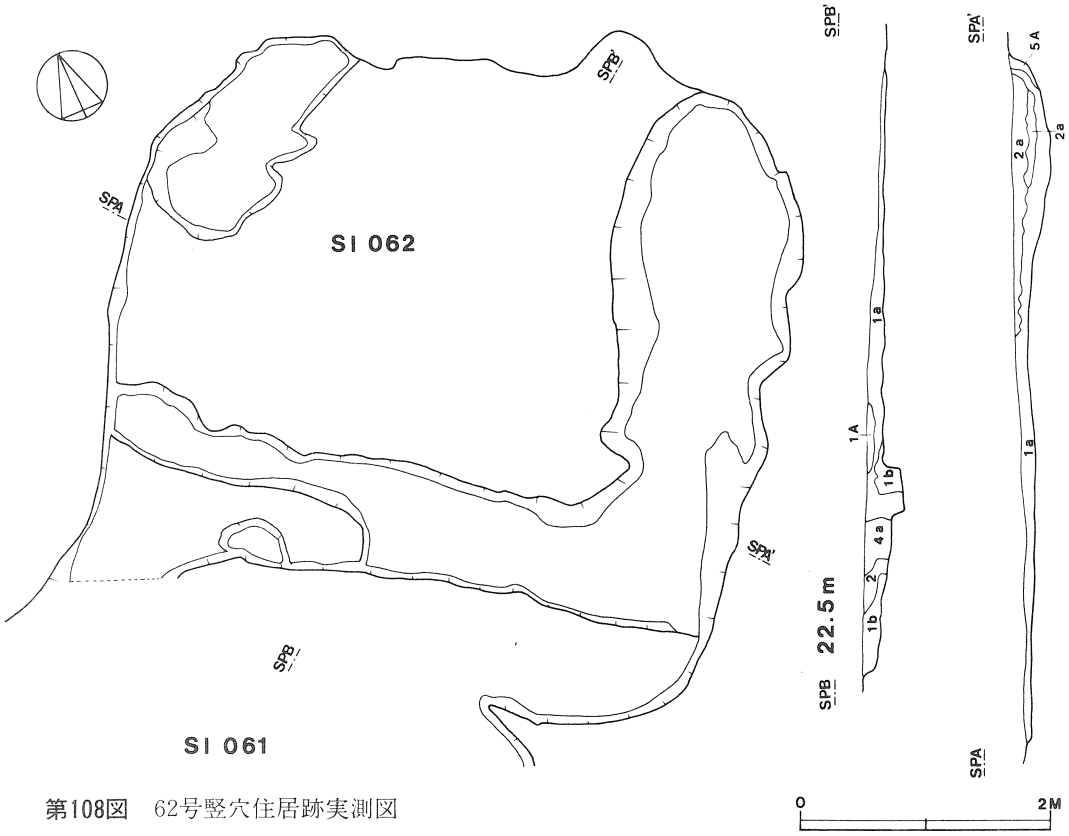
61号竪穴住居跡出土遺物観察表（第107図）

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
1	砥石	5.0×4.4	方形を呈する。表・裏面に使用痕が認められ，稜も使用され，丸みを帯びている。	凝灰岩	3	鋤先	残存長15.4	断面V字をし，字形を呈する。	
2	砥石	3.5×2.2	長方形を呈する。表・裏・側面に使用痕が認められる。	凝灰岩					

62号竪穴住居跡（第108図）

調査区B4g9区を中心に確認され，東西5.2m・南北5.15mを測り，主軸方向N－22°－Eを指すが，攪乱により形態は不明である。

遺物は，土師器・須恵器・墨書土器・漆付着土器が出土している。



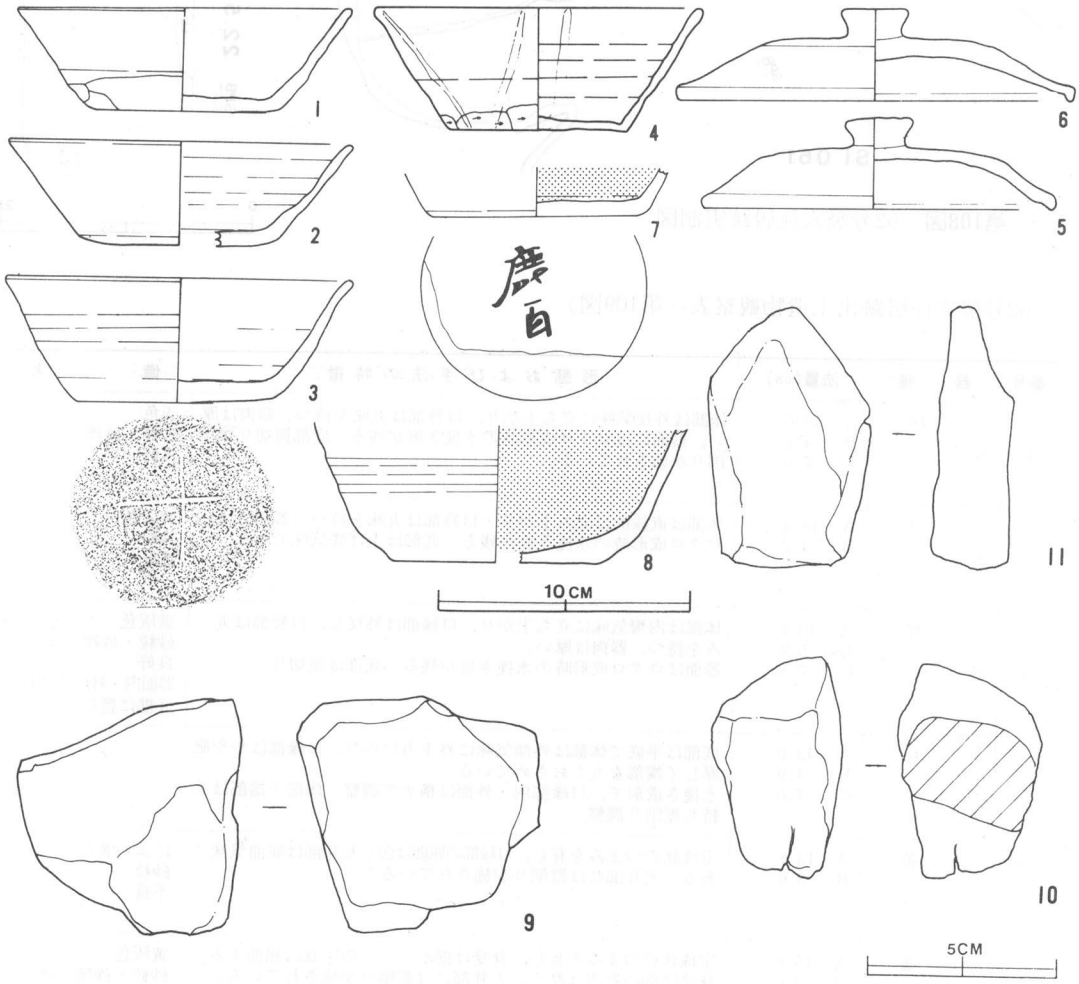
第108図　62号竪穴住居跡実測図

62号竪穴住居跡出土遺物観察表（第109図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 13.0 B 4.1 C 7.6	体部は外反気味に立ち上がり，口唇部は丸味を持つ。器肉は厚い。器面にはロクロ成形時の水挽き痕が残る。底部篦切り後篦削りが施されている。	灰色 砂粒・砂礫 良好
2	S	坏	A 13.4 B 4.2	体部は直線的に立ち上がり，口唇部は丸味を持つ。器面には，ロクロ成形時の水挽き痕が残る。底部は上げ底気味である。	黄灰色 砂粒 良好
3	S	坏	A 13.6 B 5.0 C 7.8	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反し，口唇部は丸みを持つ。器肉は厚い。 器面はロクロ成形時の水挽き痕が残る。底部は篦切り。	黄灰色 砂粒・砂礫・礫 良好 器面内・外に漆付着 底部に篦記号
4	S	坏	A 13.0 B 4.9 C 7.0	底部は平底で体部は外傾気味に外上方にのび，口縁部はやや肥厚して端部を丸くおさめている。 水挽き成形で，口縁部内・外面は横ナデ調整。体部下端部は手持ち篦削り調整。	
5	S	蓋	A 13.8 B 3.6	宝珠状のつまみを有し，口縁部の屈曲は弱く天井部は屈曲気味である。天井部には篦削りが施されている。	にぶい黄色 砂粒 不良
6	S	蓋	A 15.6 B 3.6	宝珠状のつまみを有し，身受け部が「く」の字状に屈曲する。身受け部の器肉は厚く，天井部には篦削りが施されている。	黄灰色 砂粒・砂礫・礫 良好

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
7	H	坏	C 8.5	平底の底部。体部は外傾気味に外上方にのびると思われる。内面は黒色処理。	にぶい橙色 良好 底部外面「鹿百」墨書
8	H	埦	C (8.2)	底部破片である。底部は平底で，体部の立ち上がりは内彎気味である。器面内・外にロクロ成形時の水挽き痕が残り，体部下端には篦削りが施され，器内面は黒色処理。	にぶい橙色 砂粒・砂礫・長石・石英粒 良好

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
9	砥石	7.0×4.1	長方形を呈する。 表・裏面に使用痕が認められ，稜も使用されている。	凝灰岩	11	砥石	6.0×3.2	長方形を呈する。 表・裏・側面を使用し，研磨痕が認められ，丸みを帯びている。	凝灰岩
10	砥石	6.1×6.0	方形を呈する。 表・裏・側面の一部に使用痕が認められる。	凝灰岩					



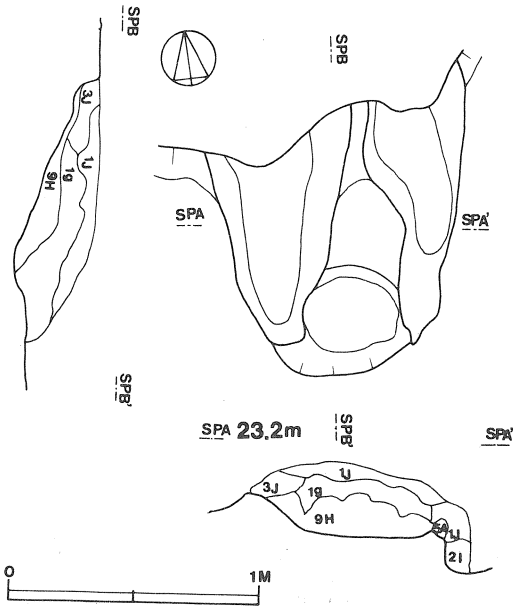
第109図　62号竪穴住居跡出土遺物実測図

63号竪穴住居跡（第26・110図）

調査区C4b2区を中心に確認され，55・56・60号竪穴住居跡と重複している。東西3.0m・南北3.7mを測り，主軸方向N－9°－Eを指し，隅丸方形を呈している。

壁は，北壁と東壁の一部で確認されただけで，壁高40cmを測る。床面全体が平坦であり，良く踏み固められている。壁溝は確認されない。ピットは4か所検出され，深さ15～30cmを測る。

竈は北壁に位置し，保存状態は良くないが，粘土・砂で構築され，竈内から土師器・須恵器・瓦が出土し，支脚として使用されたものと考えられる。

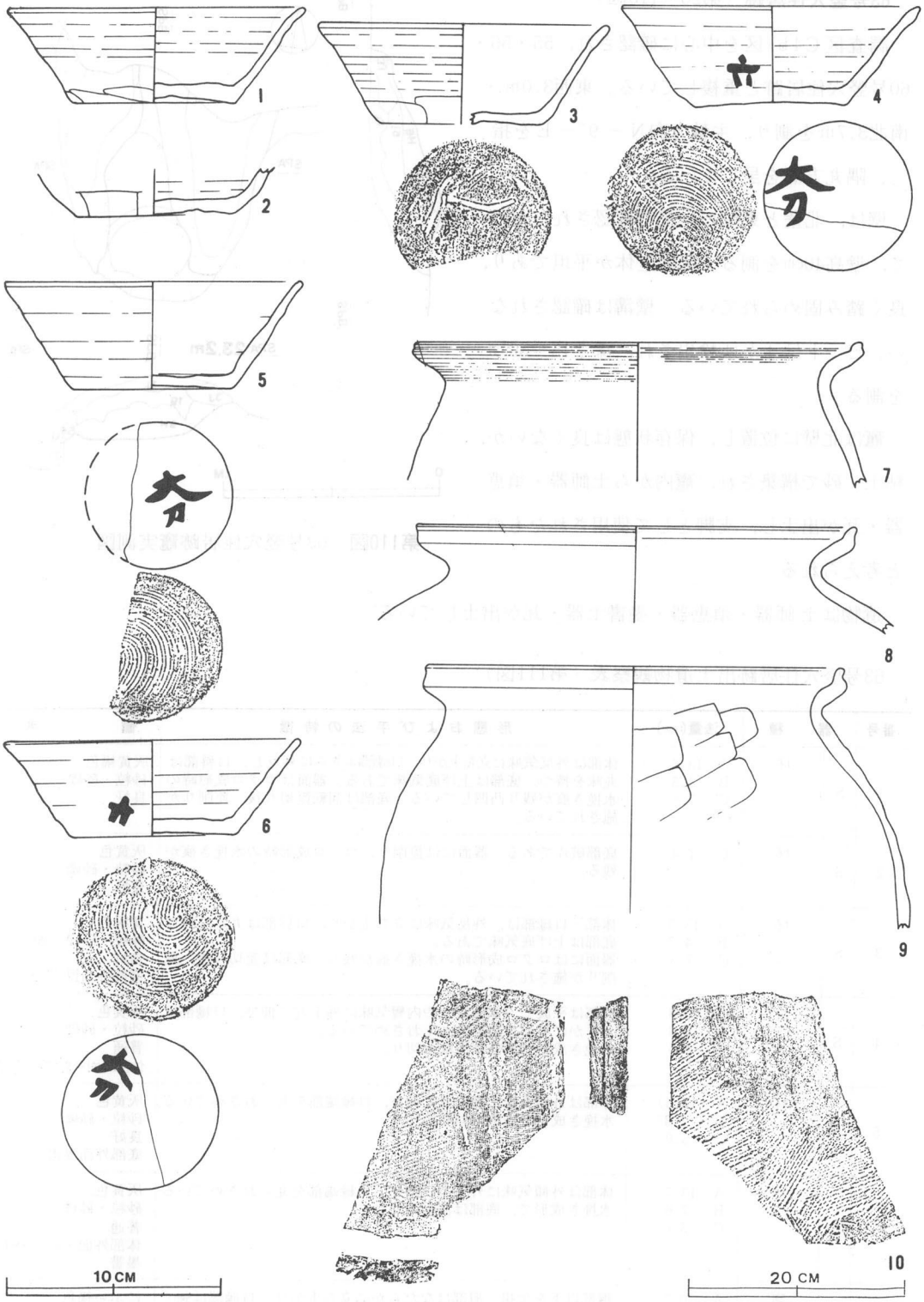


第110図　63号竪穴住居跡竈実測図

遺物は土師器・須恵器・墨書土器・瓦が出土している。

63号竪穴住居跡出土遺物観察表（第111図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 13.6 B 4.5 C 7.6	体部は外反気味に立ち上がり，口縁部はさらに外反し，口唇部は丸味を持つ。底部は上げ底気味である。器面はロクロ成形時の水挽き痕が残り凸凹している。底部は回転篦切り後，篦削りが施されている。	灰黄褐色 砂粒・砂礫 良好
2	S	坏	C 7.4	底部破片である。器面には篦削り，ロクロ成形時の水挽き痕が残る。	灰黄色 砂粒・砂礫 良好
3	S	坏	A 13.3 B 4.7 C 7.5	体部・口縁部は，外反気味に立ち上がり，口唇部は丸みを持つ。底部は上げ底気味である。 器面にはロクロ成形時の水挽き痕が残り，底部は篦切り後，篦削りが施されている。	黄灰色 砂粒・砂礫・礫 良好 底部外面篦書き
4	S	坏	A 13.8 B 7.0 C 4.6	底部は平底で，体部はやや内彎気味に外上方に伸び，口縁部はわずかに外反し端部を丸くおさめている。 水挽き成形で底部は回転糸切り。	灰黄色 砂粒・砂礫 普通 体部外面・底部外面墨書
5	S	坏	A (13.6) B (7.3) C 5.0	体部は外傾気味に外上方に伸び，口縁端部を丸くおさめている。水挽き成形で底部は回転糸切り。	灰黄色 砂粒・砂礫 良好 底部外面墨書
6	S	坏	A 13.7 B 7.6 C 5.0	体部は外傾気味に外上方に伸び，口縁端部を丸くおさめている。水挽き成形で，底部は回転糸切り。	灰黄色 砂粒・砂礫 普通 体部外面・底部外面墨書
7	H	甕	A 20.7	胴部以下を欠損。肩部はなだらかに立ち上がり，口縁部は強く外反する。口唇部は丸味を持って立ち上がる。口縁部には横ナデ調整が施されている。	にぶい褐色 砂粒・砂礫・長石・石英粒 良好



第111図　63号竪穴住居跡出土遺物実測図

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
8	H	甕	A 20.4	肩部は強く立ち上がり，口縁部にかけて強く屈曲し立ち上がる。口縁部は横ナデ調整が施されている。	にぶい橙色 砂粒・砂礫・長石・石英粒 良好
9	H	甕	A 19.4	胴部下半を欠損。胴部は球形を呈し，最大径を測る。肩部はなだらかに立ち上がり，口縁部は強く外反し，口唇部は立ち上がり，先端部は丸味を持つ。口縁部横ナデ調整，胴部内・外面ともナデ調整。	にぶい橙色 砂粒・砂礫・長石・石英粒 良好
10	平瓦			凸面に縄目，凹面に布目痕が施されている。縄目が粗く，布の縫い目が認められる。	黒色 砂礫 やや硬質

64号竪穴住居跡（第112図）

調査区C4b9区を中心に確認され，東西7.0m・南北5.0mを測り，主軸方向N－19°－Eを指し，隅丸長方形を呈している。西南壁下・南壁には土壙が重複しているが，いずれの土壙も本住居跡廃棄後に構築されている。時期等は不明である。床面は全体に平坦であり良く踏み固められ，特に竈付近は硬い。

壁は，床面からやや斜めに立ち上がり，壁高45～50cmを測る。壁溝は確認されない。ピットは6か所検出され，いずれも50～60cmの深さを測る。

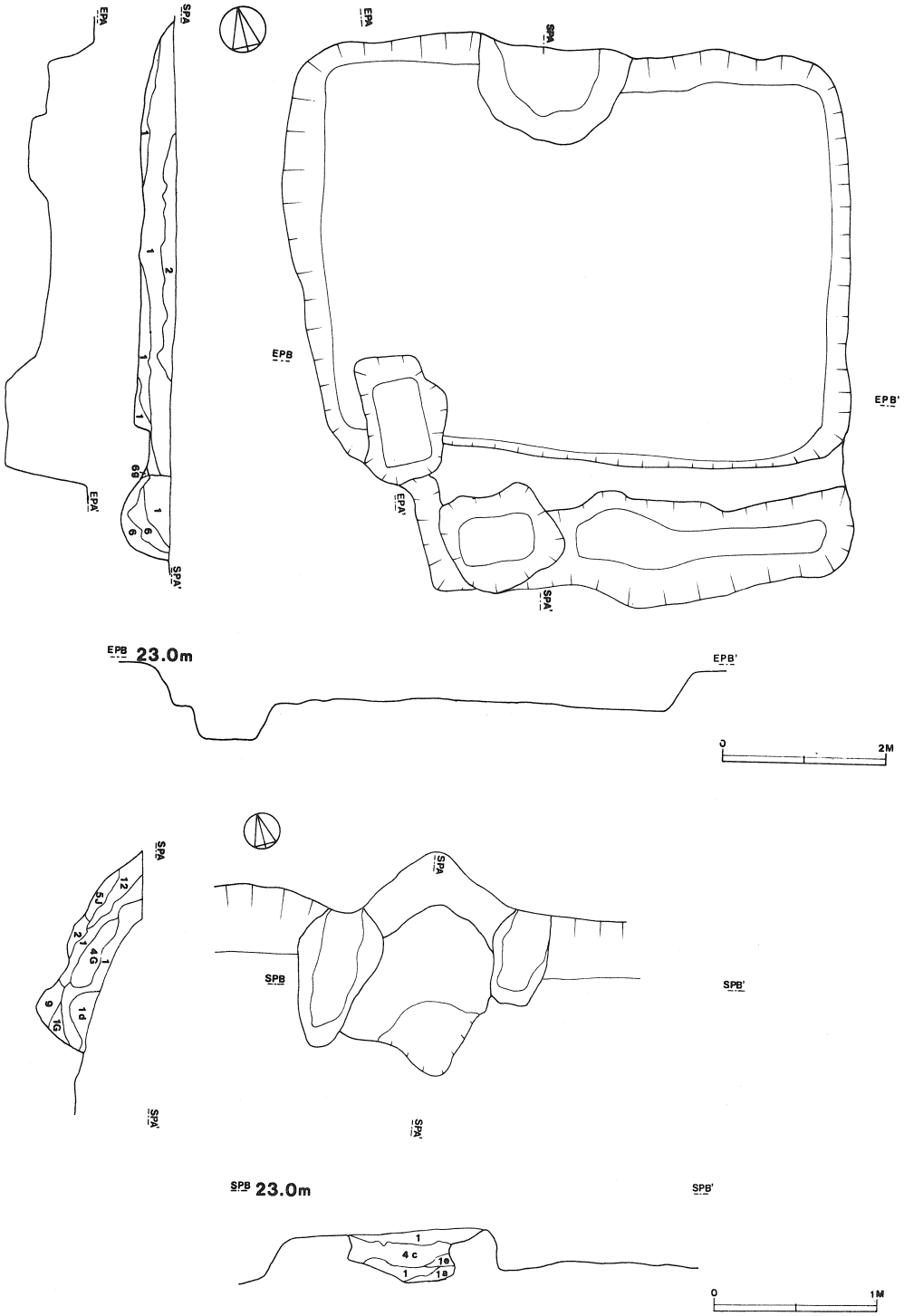
竈は，北壁中央部に位置し，両袖が残り，砂・粘土によって構築されている。燃焼部が明確に認められ，焚口・火床からゆるやかに立ち上がり，煙道・煙出し孔を作り，保存状態は良い。

本住居跡は，西壁を1号連房式竪穴遺構に破壊されている。

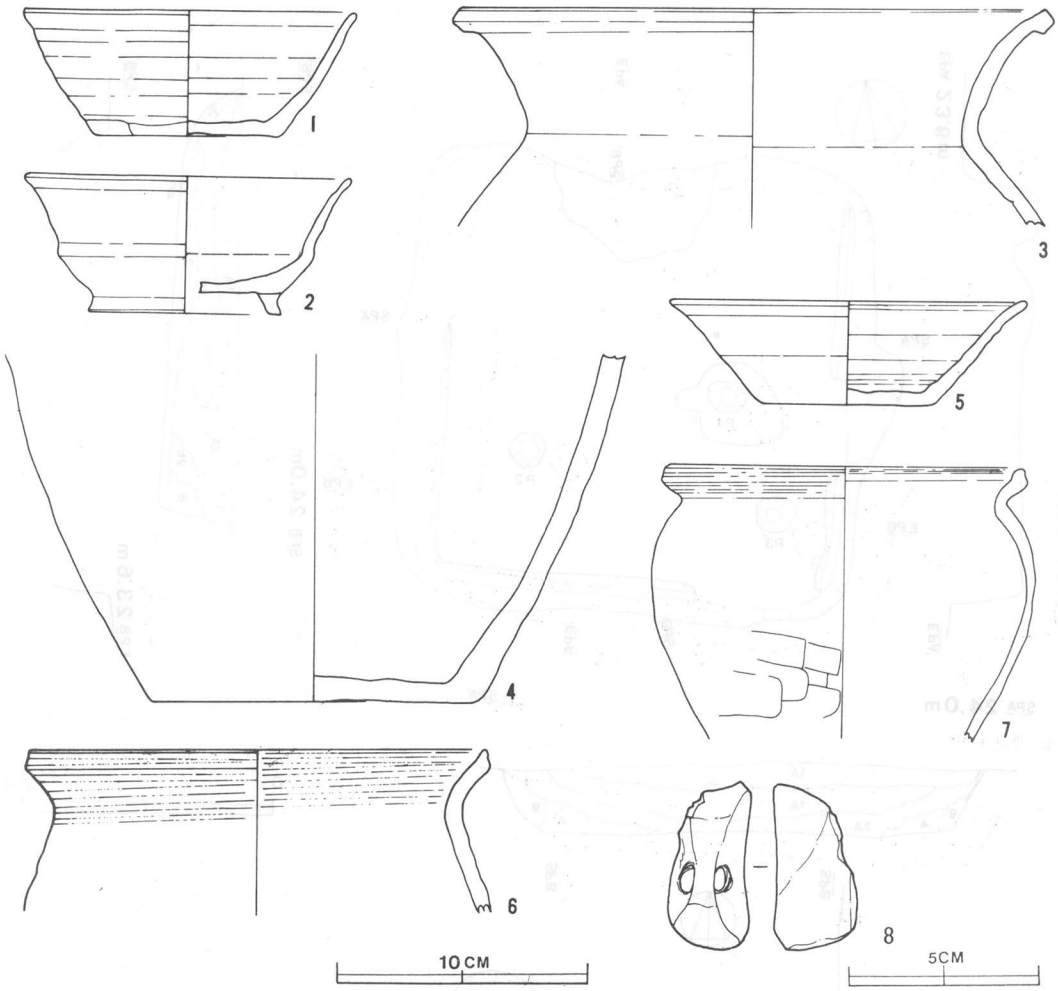
遺物は，土師器・須恵器・瓦・砥石が出土している。

64号竪穴住居跡出土遺物観察表（第113図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 12.9 B 5.0 C 7.0	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反し，口唇部は丸味を持つ。底部は中央部がやや上げ底気味である。器面はロクロ成形時の水挽き痕が残り凸凹している。底部には篦削りが施されている。	灰色 砂粒・砂礫 良好 器面内・外に漆付着
2	S	高台付坏	A 12.7 B 5.5	体部は外反気味に立ち上がり，体部と底部の境は稜をなす。高台は「ハ」の字状に開き，接地面は平坦である。器面にロクロ成形時の水挽き痕が残る。高台は貼り付け，ナデ調整。	灰色 砂粒・砂礫 良好
3	S	甕	A 23.3	頸部から強く外反し，口縁部は先端部で肥厚となり，上下端でふくらみをみせる。 口縁部は横ナデ調整が施されている。	灰色 砂粒・砂礫・雲母 良好
4	S	甕	C 12.2	底部破片であり，内彎気味に立ち上がる。	灰色 砂粒・砂礫 良好

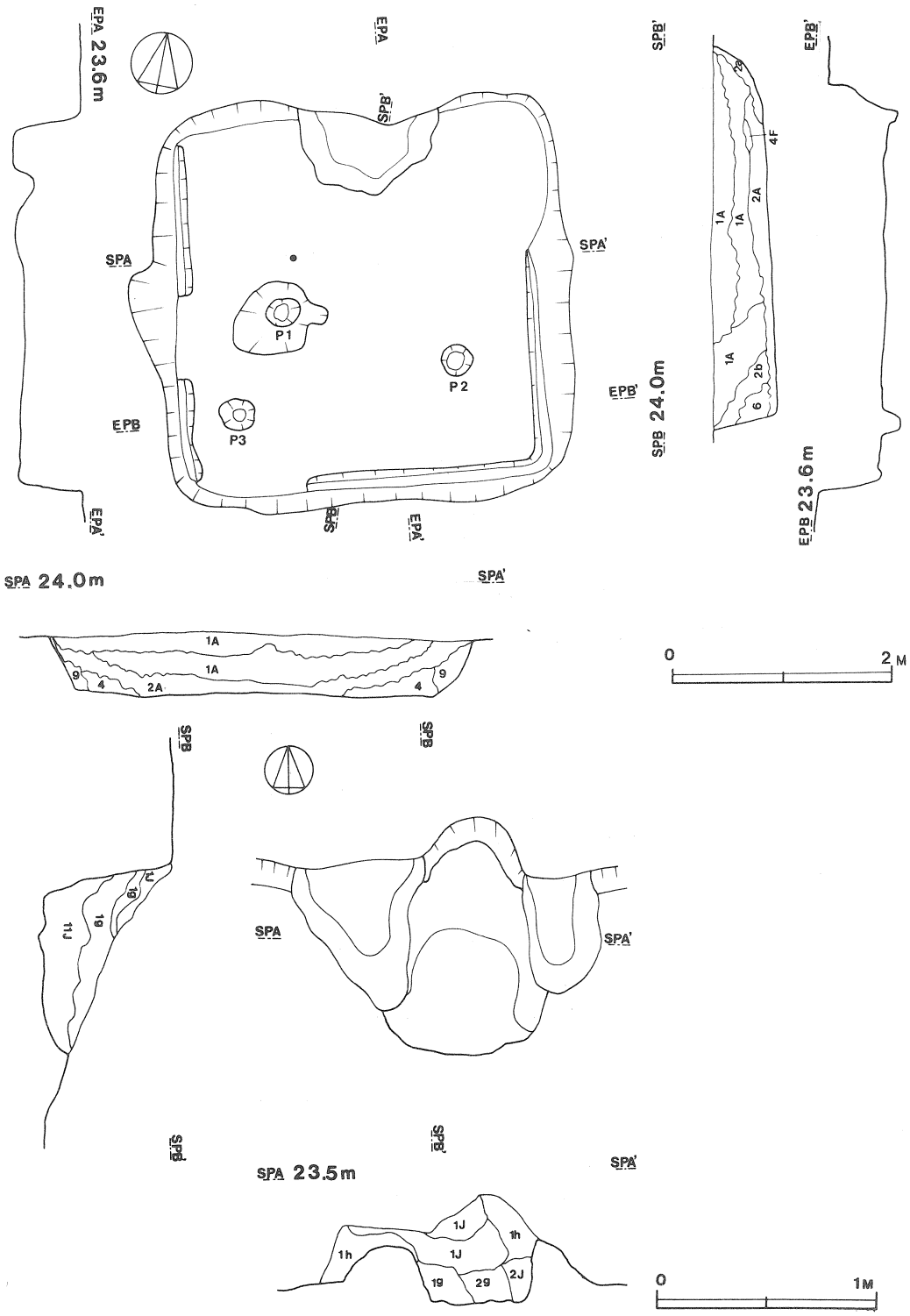


第112図　64号竪穴住居跡・竈実測図



第113図　64号竪穴住居跡出土遺物実測図

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
5	H	坏	A 14.2 B 4.1 C 6.6	体部，口縁部は外反気味に立ち上がり，先端部はさらに外反し，口唇部は丸みを持つ。底部は平底で器肉は厚い。器面はロクロ成形時の水挽き痕が残る。底部は篦切り後，篦削りが施されている。	にぶい褐色 砂粒・砂礫・長石・石英粒 良好
6	H	甕	A 18.0	頸部から外反し「く」の字状を呈し，口唇部は立ち上がる。口縁部には横ナデ調整が施されている。	にぶい橙色 砂粒・砂礫・長石・石英粒 良好
7	H	甕	A 14.2	底部欠損。胴部に最大径をもち，球形を呈す。頸部は強く外反し，「く」の字状を呈し，口唇部は立ち上がる。口縁部には横ナデ，胴部は篦削り・ナデ調整が施されている。	にぶい橙色 砂粒・石礫・長石・石英粒 良好
8	砥石		4.5×1.7	長方形を呈する。全体に研磨による摩滅がみられ，滑らかで丸みを帯びている。一端に5㎜の孔があけられている。	凝灰岩



第114図　65号竪穴住居跡・竈実測図

65号竪穴住居跡（第114図）

調査区C4h6区を中心に確認され，東西4.1m・南北3.5mを測り，主軸方向N－5°－Wを指し，隅丸方形を呈している。

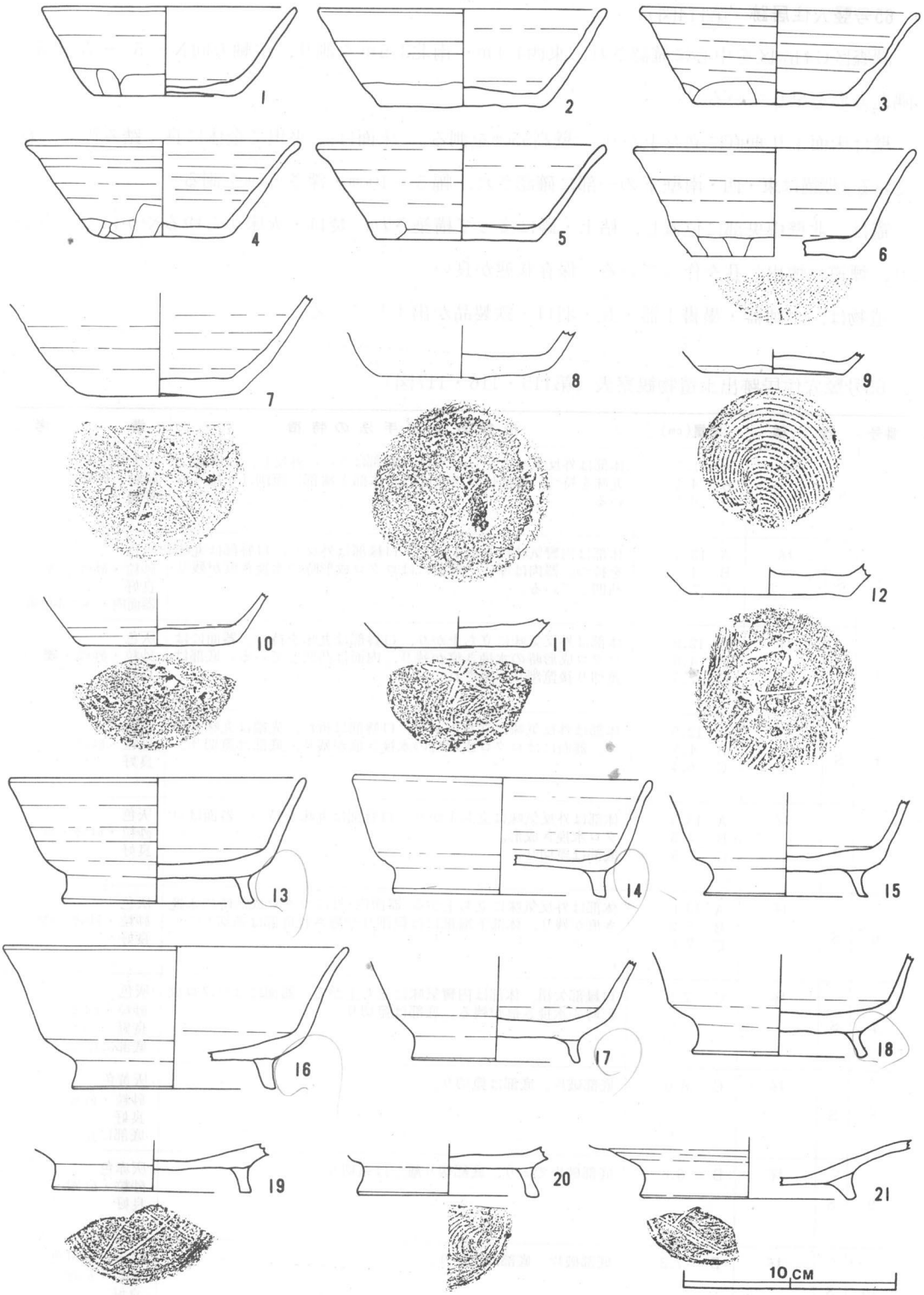
壁は床面より垂直に立ち上がり，壁高55cmを測る。床面は，平坦で全体に良く踏み固められている。壁溝は東・西・南壁下の一部に確認され，幅5～10cm・深さ5cmを測る。

竈は，北壁中央部に位置し，粘土・砂によって構築され，焚口・火床からゆるやかに立ち上がり，煙道・煙出し孔を作っている。保存状態が良い。

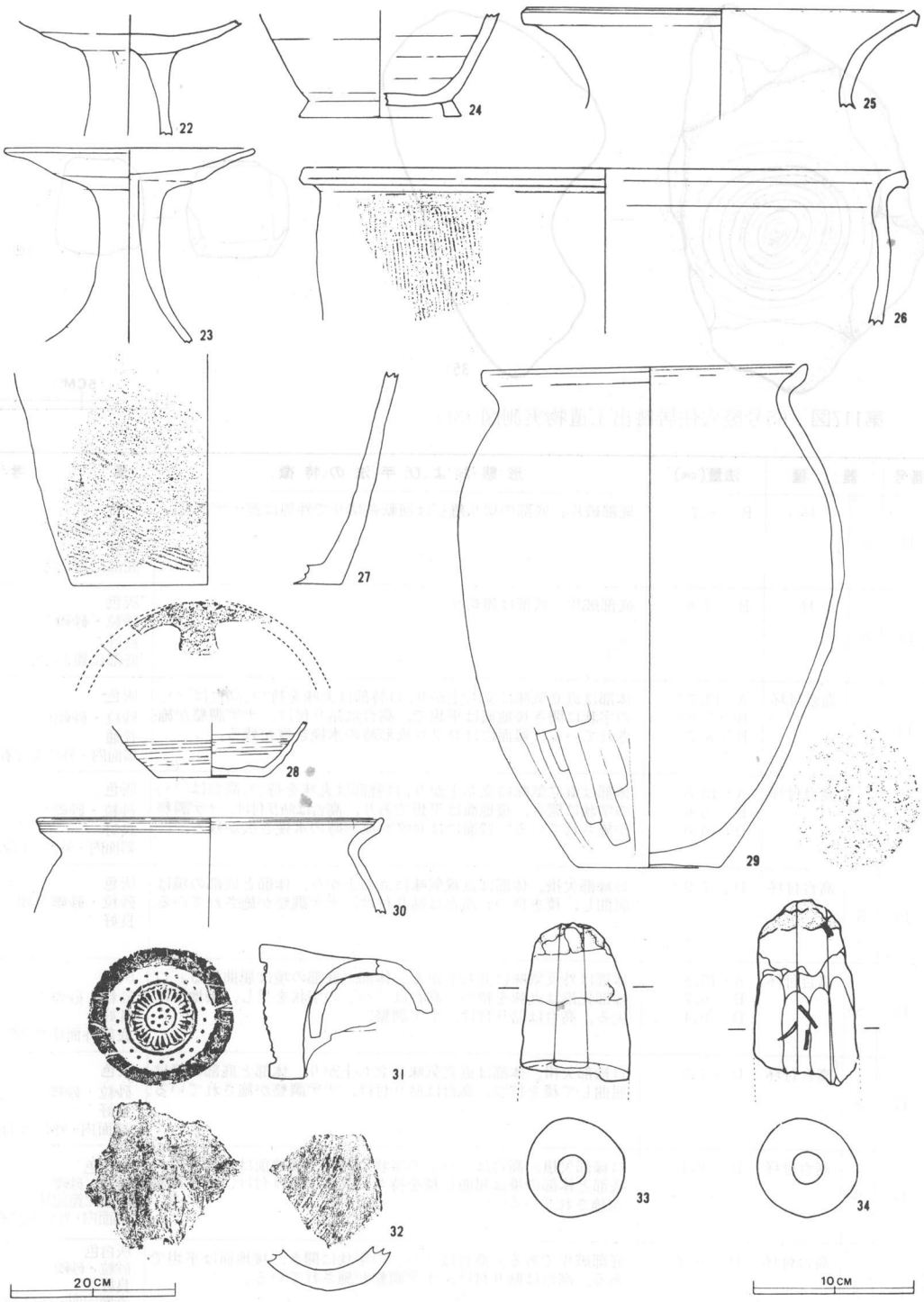
遺物は，土師器・墨書土器・瓦・羽口・鉄製品が出土している。

65号竪穴住居跡出土遺物観察表（第115・116・117図）

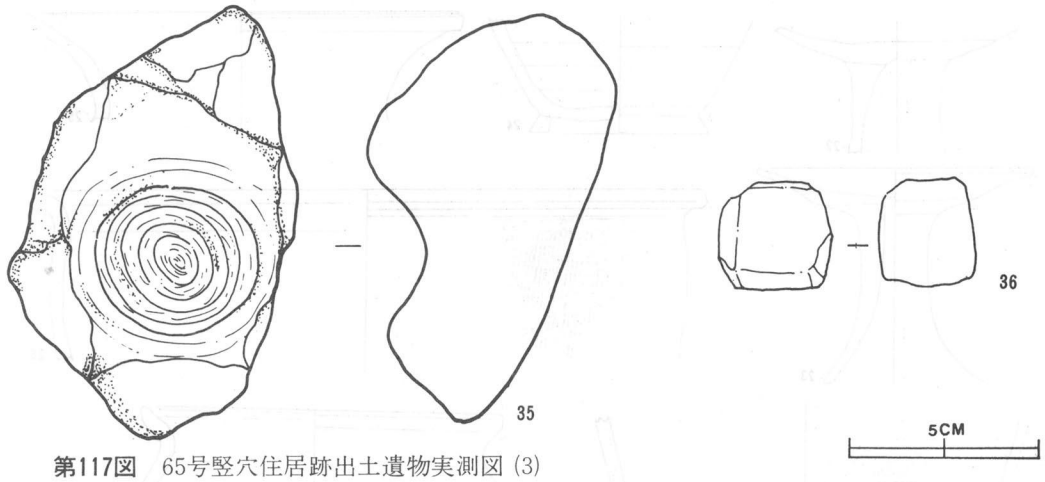
番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 11.7 B 4.1 C 6.5	体部は外反気味に立ち上がり，口縁部はさらに外反し，口唇部は丸味を持つ。器面はロクロ成形。体部下端部に篦削りが施されいる。	灰オリーブ色 砂粒・砂礫 普通
2	S	坏	A 13.3 B 4.7 C 7.5	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反し，口唇部は丸味を持つ。器肉は厚い。器面にはロクロ成形時の水挽き痕が残り凸凹している。	灰色 砂粒・砂礫・礫 良好 器面内・外に漆付着
3	S	坏	A 12.9 B 4.6 C 7.5	体部は外反気味に立ち上がり，口唇部は丸味を持つ。器面にはロクロ成形時の水挽き痕が残り，内面は凸凹している。底部は篦切り後篦削りが施されている。	灰色 砂粒・砂礫・礫 良好
4	S	坏	A 12.5 B 4.5 C 6.4	体部は外反気味に立ち上がり，口唇部は折れ，先端は丸味を持つ。器面にはロクロ成形時の水挽き痕が残り，底部は篦切り。	灰色 砂粒・砂礫 良好
5	S	坏	A 13.3 B 4.5 C 7.5	体部は外反気味に立ち上がり，口唇部は丸味を持つ。器面はロクロ水挽き成形。 底部は篦切り。	灰色 砂粒・砂礫・礫 良好
6	S	坏	A 13.0 B 5.2 C 7.6	体部は外反気味に立ち上がる。器面内・外にロクロ成形時の水挽き痕が残り，体部下端部には篦削りが施され底部は糸切り。	灰色 砂粒・砂礫・礫 良好
7	S	坏	C 7.5	口縁部欠損。体部は内彎気味に立ち上がる。器面にはロクロ成形時の水挽き痕が残る。底部は篦切り。	灰色 砂粒・砂礫 良好 底部に篦記号
8	S	坏	C 8.0	底部破片。底部は篦切り。	灰黄色 砂粒・砂礫 良好 底部に篦記号
9	S	坏	B 6.6	底部破片であり，底部切り離しは糸切り。	灰赤色 砂粒・砂礫 良好
10	S	坏	B 7.3	底部破片。底部は篦切り。	にぶい黄橙色 砂粒・砂礫 良好 底部に篦記号



第115図　65号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1)



第116図　65号竪穴住居跡出土遺物実測図 (2)

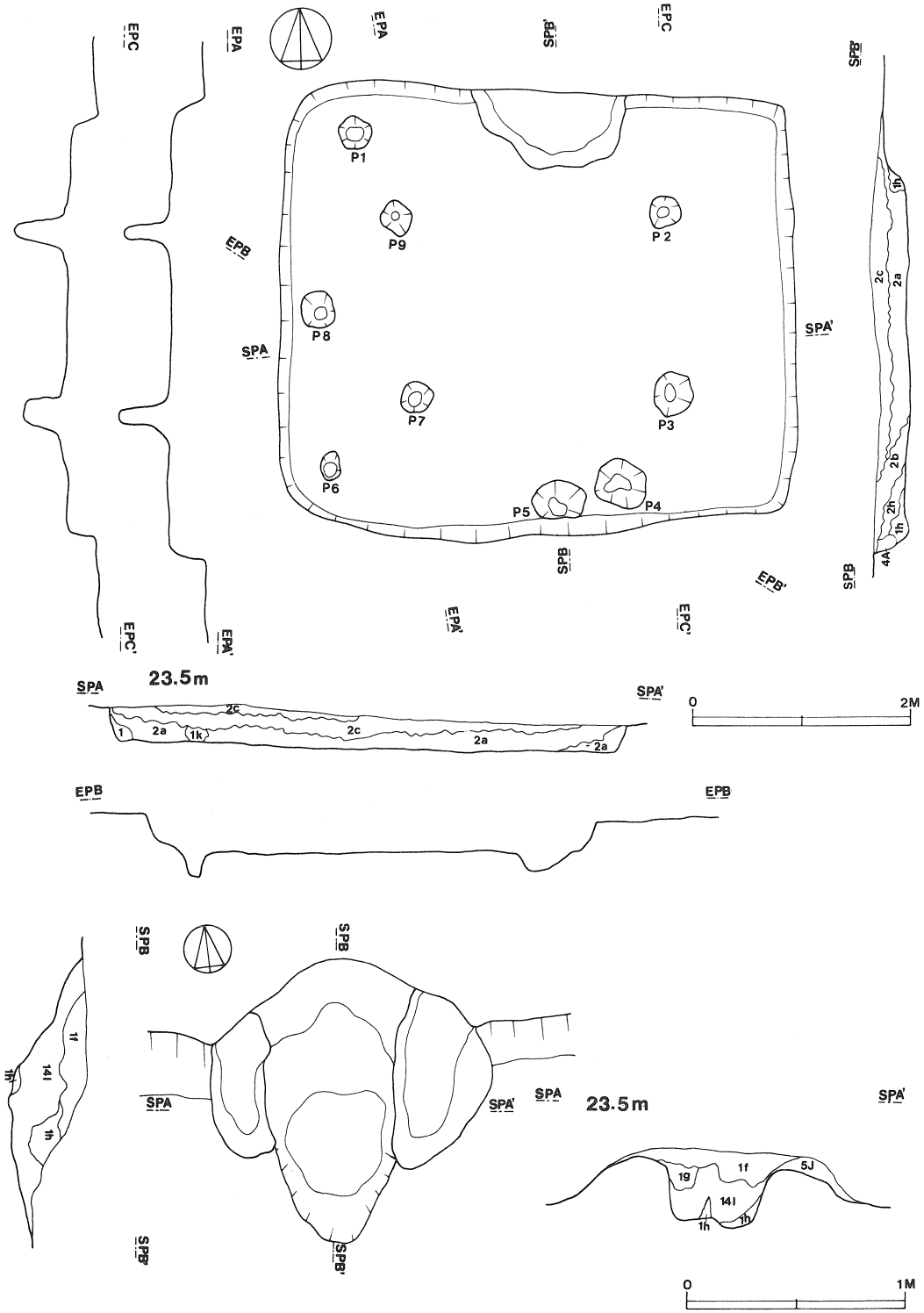


第117図　65号竪穴住居跡出土遺物実測図 (3)

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
11	S	坏	B　6.7	底部破片。底部の切り離しは回転糸切りで外周は篦ナデ調整。	灰色 砂粒・砂礫 良好 底部に篦記号
12	S	坏	B　7.6	底部破片。底部は篦切り。	灰色 砂粒・砂礫 良好 底部に篦記号
13	S	高台付坏	A　13.7 B　5.9 D　8.7	体部は直立気味に立ち上がり，口唇部は丸味を持つ。高台は「ハ」の字状に開き接地面は平坦で，高台は貼り付け，ナデ調整が施されている。器面にはロクロ成形時の水挽き痕が残る。	灰色 砂粒・砂礫 普通 器面内・外に漆付着
14	S	高台付坏	A　13.8 B　5.6 D　10.0	体部は直立気味に立ち上がり，口唇部は丸味を持つ。高台は「ハ」の字状に開き，接地面は平坦であり，高台は貼り付け，ナデ調整が施されている。器面にはロクロ成形時の水挽き痕が残る。	灰色 砂粒・砂礫 良好 器面内・外に漆付着
15	S	高台付坏	D　7.9	口縁部欠損。体部は直線気味に立ち上がり，体部と底部の境は屈曲し，稜を持つ。高台は貼り付け，ナデ調整が施されている。	灰色 砂粒・砂礫・礫 良好
16	S	高台付坏	A　15.8 B　6.7 D　9.4	体部は外反気味に立ち上がる。体部と底部の境は屈曲する。口縁部先端は丸味を持つ。高台は「ハ」の字状を呈し，接地面は尖る。高台は貼り付け，ナデ調整。	灰色 砂粒・砂礫 良好 底部外面漆付着
17	S	高台付坏	D　7.9	口縁部欠損。体部は直立気味に立ち上がり，体部と底部の境は屈曲して稜を持つ。高台は貼り付け，ナデ調整が施されている。	灰色 砂粒・砂礫 良好 器面内・外に漆付着
18	S	高台付坏	D　8.1	口縁部欠損。高台は「ハ」の字状に開き，接地面は丸味を持つ。底部と体部の境は屈曲し稜を持ち，高台は貼り付け，ナデ調整が施されている。	灰白色 砂粒・砂礫 底部に篦記号 器面内・外に漆付着
19	S	高台付坏	D　9.2	底部破片である。高台は「ハ」の字状に開き，接地面は平坦である。高台は貼り付け，ナデ調整が施されている。	灰白色 砂粒・砂礫 良好 器面内面に漆付着 底部に篦記号
20	S	高台付坏	D　8.4	底部破片である。高台は貼り付け，ナデが施され，底部切離しは糸切りである。	灰色 砂粒・砂礫 普通

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
21	S	台付盤	D 10.2	底部破片である。高台は「ハ」の字状に開き，接地面は丸味を持つ。ロクロ水挽き成形で高台にはナデ調整が施されている。	灰色 砂粒・砂礫 良好 底部に箆記号
22	S	高盤		坏部及び脚基部欠損。脚部はやや外反気味に外下方へ下がる。器肉はやや厚い。	灰色 砂粒・砂礫・礫 良好
23	S	高盤		脚基部欠損。脚部はやや外反気味に外下方へ下がる。坏部は外反気味にのびた後に内彎して端部に至る。	灰色 砂粒・砂礫・礫 普通
24	S	台付壺	D 10.0	底部破片である。体部立ち上がりは直線的である。高台は「ハ」の字状に開き接地面は平坦である。高台は貼り付け，ナデ調整。	オリーブ黒色 砂粒・砂礫・礫 良好 自然釉付着
25	S	甕	A 24.2	口縁部破片である。頸部から外反気味に立ち上がり，口縁部は折り曲げて肥厚させている。内・外面には横位のナデ調整が施されている。	灰色 砂粒・砂礫 良好
26	S	甕	A 37.4	胴部以下を欠損。口縁部で外反し，口唇部は折り曲げて肥厚させ，上・下に膨らみをみせる。口縁部には横ナデ調整，胴部には平行叩き目が施されている。	にぶい赤褐色 砂粒・砂礫 良好
27	S	甑		底部破片である。「五孔式」。直線的に立ち上がる体部に叩き目が施されている。	灰白色 砂粒・砂礫 良好
28	H	坏	C 6.6	口縁部欠損。平底の底部。体部は内彎気味に立ち上がる。器面内・外にロクロ成形時の水挽き痕が残り，ナデ調整が施されている。	にぶい黄橙色 砂粒・砂礫・長石・石英粒 良好
29	H	甕		すぼまった底部より体部は中位に張りを持ち最大径を持つ。頸部は屈曲して立ち上がり「く」の字状を呈す。口縁部は「ハ」の字に開く。口縁部には横ナデ調整，胴部・底部には箆削りが施されている。	にぶい赤褐色 砂粒・砂礫・長石・石英粒　良好 底部外面木葉痕
30	H	甕		口縁部破片。肩上部から「く」の字状を呈し，口縁部上半が外反し立ち上がる。口縁部は横ナデ調整。	にぶい黄橙色 砂粒・砂礫・長石・石英粒 良好
31	軒丸瓦			中房に1＋7の蓮子を配し弁区に複弁10葉蓮華文。外区に25個の珠文をめぐらしている。周縁は幅が狭く低くなっている。瓦当部のまわりは内・外面とも箆削りによって面が整えられている。	灰色 やや硬質
32	丸瓦			凸面は横ナデされており，凹面には布目圧痕が施されている。端面は箆削りがなされている。	灰黄色 砂礫 やや硬質

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
33	羽口	全長(9.5) 外径 4.5～6.8 孔径1.5	太さは，先端部で4.5cm，末端部で6.8 cmと先端に行くに従い細くなる。	先端部に鉄が付着。	35	石製品	現在長 11.6 厚み 6.0	三角形を呈し，中央部に凹みがみられる。	砂岩
34	羽口	全長(11.0) 外径6.3 孔径2.0	先端に行くに従い細くなる。	先端部に鉄が付着。	36	砥石	3.0×2.8	方形を呈する。 全体に使用痕が認められ丸みを帯びている。	凝灰岩



第118図　66号竪穴住居跡・竈実測図

66号竪穴住居跡（第118図）

調査区C4h7区に位置し，東西5.72m・南北4.05mを測り，主軸方向N－8°－Wを指し，隅丸長方形を呈している。

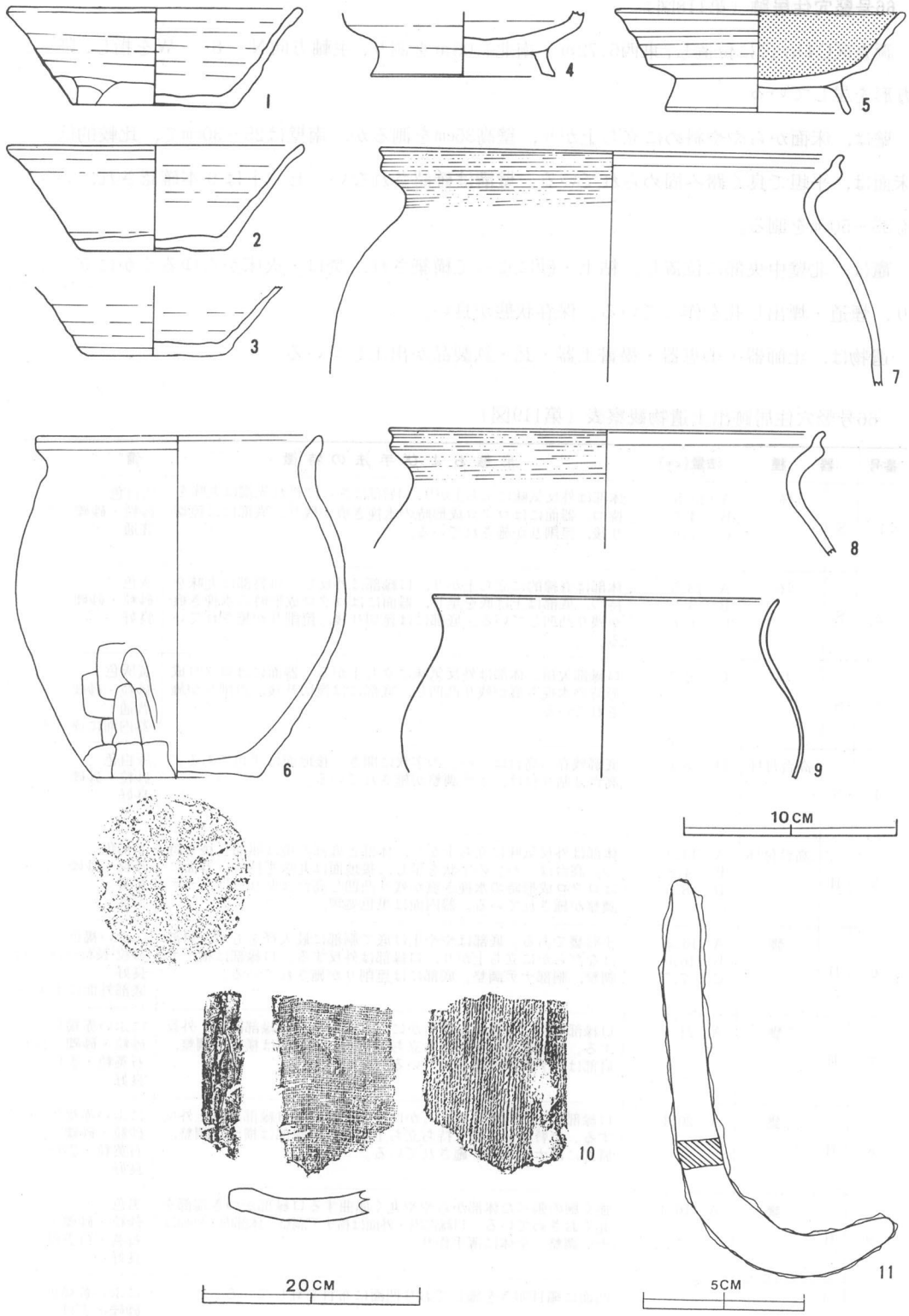
壁は，床面からやや斜めに立ち上がり，壁高35cmを測るが，南壁は25～30cmで，比較的低い。床面は，平坦で良く踏み固められている。壁溝は確認されない。ピットは9本確認され，いずれも35～50cmを測る。

竈は，北壁中央部に位置し，粘土・砂によって構築され，焚口・火床からゆるやかに立ち上がり，煙道・煙出し孔を作っている。保存状態が良い。

遺物は，土師器・須恵器・墨書土器・瓦・鉄製品が出土している。

66号竪穴住居跡出土遺物観察表（第119図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 13.5 B 4.5 C 7.6	体部は外反気味に立ち上がり，口唇部はさらに折れ先端は丸味を持つ。器面にはロクロ成形時の水挽き痕が残り，底部には篦切り後，篦削りが施されている。	灰白色 砂粒・砂礫・雲母 普通
2	S	坏	A 13.5 B 4.9 C 6.8	体部は直線的に立ち上がり，口縁部は外反し，口唇部は丸味を持つ。底部は上げ底を呈し，器面にはロクロ成形時の水挽き痕が残り凸凹している。底部には篦切り後，篦削りが施されている。	灰色 砂粒・砂礫 良好
3	S	坏	C 6.3	口縁部欠損。体部は外反気味に立ち上がる。器面にはロクロ成形時の水挽き痕が残り凸凹し，底部には篦切り後，篦削りが施されている。	黄灰色 砂粒・砂礫・雲母 普通 器内面に漆付着
4	S	高台付坏	D 8.6	底部残存。高台は「ハ」の字状に開き，接地面は平坦である。高台は貼り付け，ナデ調整が施されている。	灰白色 砂粒・砂礫・雲母 良好
5	H	高台付坏	A 13.3 B 4.8 D 8.5	体部は外反気味に立ち上がり，体部と底部の境は屈曲し稜を持つ。高台は「ハ」の字状を呈し，接地面は丸味を持つ。器面にはロクロ成形時の水挽き痕が残り凸凹し高台は貼り付け，ナデ調整が施されている。器内面は黒色処理。	赤褐色 砂粒・砂礫・長石・石英 不良
6	H	甕	A 13.2 B 16.0 C 7.7	小形甕である。底部はやや上げ底で胴部に最大径をもつ。肩部はなだらかに立ち上がり，口縁部は外反する。口縁部は横ナデ調整，胴部ナデ調整。底部には篦削りが施されている。	にぶい褐色 砂粒・長石・石英粒・雲母 良好 底部外面に木葉痕
7	H	甕	A 21.5	口縁部破片。肩部はなだらかに立ち上がり，口縁部は強く外反する。口唇部は丸味を持ち立ち上がる。口縁部は横ナデ調整，肩部はナデ調整が施されている。	にぶい赤褐色 砂粒・砂礫・長石・石英粒・雲母 良好
8	H	甕	A 20.1	口縁部破片。肩部はなだらかに立ち上がり，口縁部は強く外反する。口唇部は丸味を持ち立ち上がる。口縁部は横ナデ調整，肩部にはナデ調整が施されている。	にぶい赤褐色 砂粒・砂礫・長石・石英粒・雲母 良好
9	H	甕	A 16.4	強く胴の張った体部からやや丸く屈曲する口縁部がつき端部を丸くおさめている。口縁部内・外面は横ナデ調整。体部内・外面はナデ調整。全体に薄手作り。	黒色 砂粒・砂礫・長石・石英・白雲母 良好
10	平瓦			凸面に縄目叩きを施しており凹面に布目を有している。	にぶい黄褐色 砂礫・雲母 良好



第119図　66号竪穴住居跡出土遺物実測図

番号	種　類	法量(cm)	形態および手法の特徴	備　考
11	釘	残存長12.6	釘頭部を折り曲げ断面方形を呈し，先端部は丸味をもつ。	

67号竪穴住居跡（第120図）

調査区C4f9区を中心に確認され，東西5.3m・南北4.45mを測り，主軸方向N－12°－Eを指し，隅丸方形を呈している。

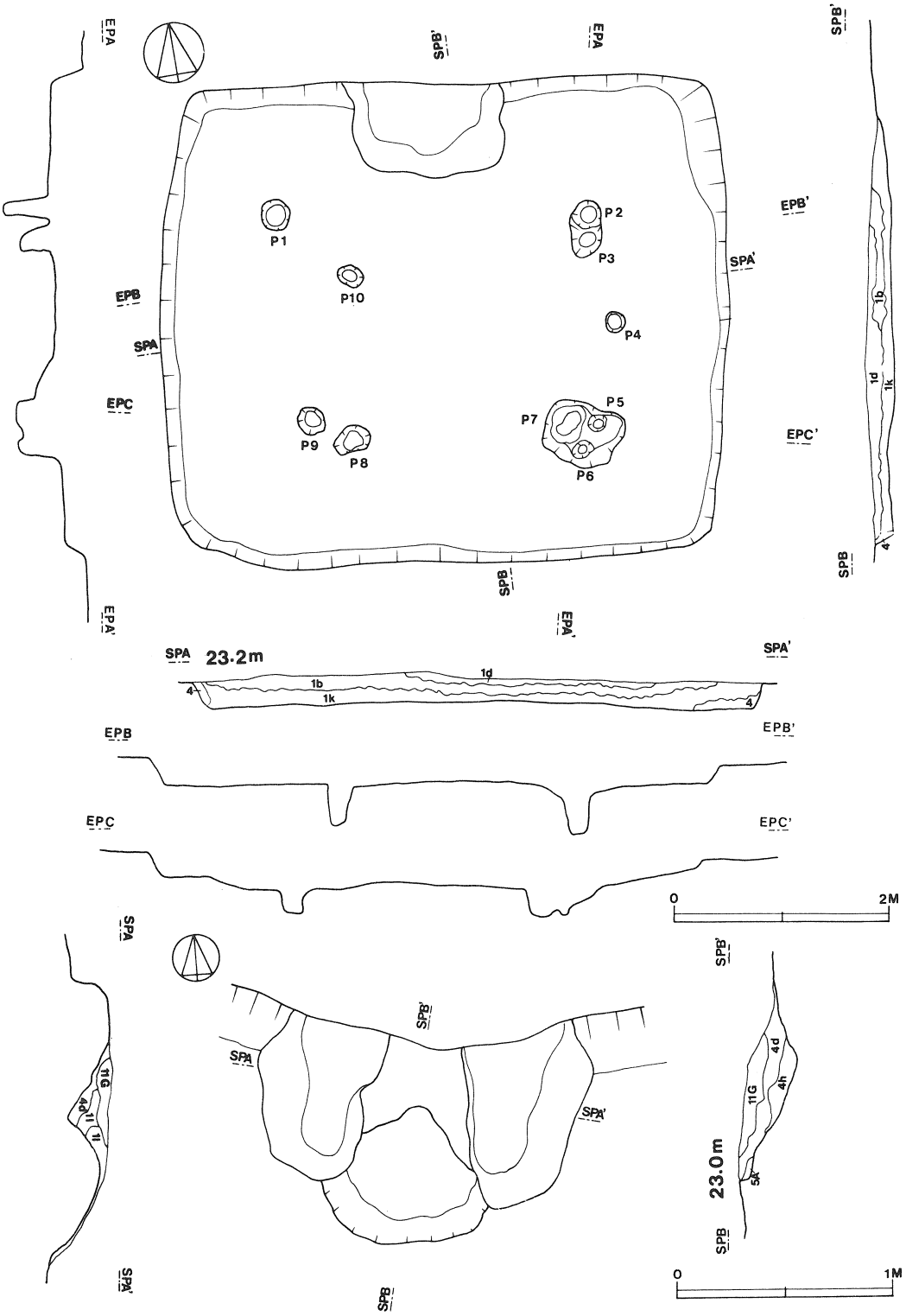
壁は，床面からやや斜めに立ち上がり，東壁は10cmと低いが，他は25cmを測る。床面は平坦で，良く踏み固められている。壁溝は確認されない。ピットは10か所確認され，深さは20～45cmを測る。

竈は，北壁中央部に位置し，粘土・砂で構築され，焚口・火床からゆるやかに立ち上がり，煙道・煙出し孔を作っている。保存状態は良い。

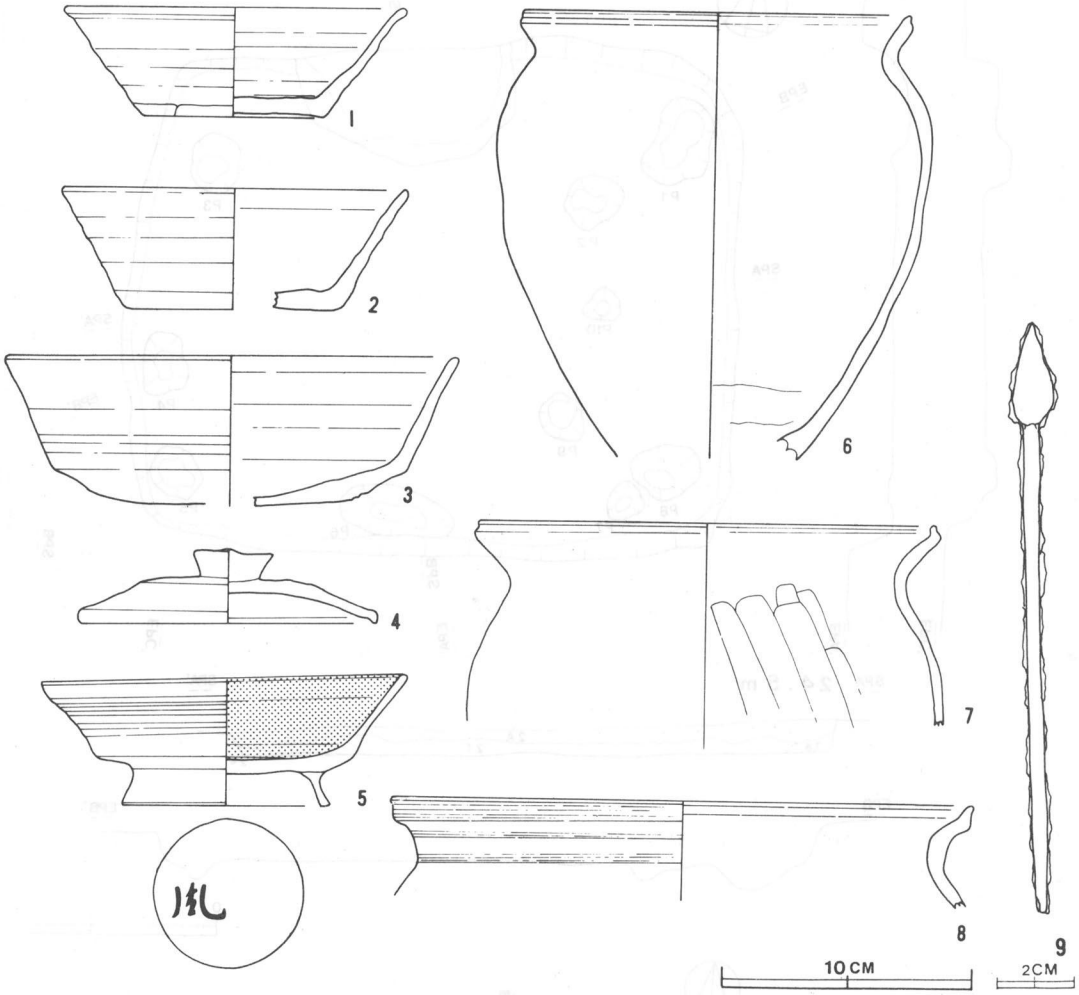
遺物は，土師器・須恵器・墨書土器・漆付着土器・鉄製品が出土している。

67号竪穴住居跡出土遺物観察表（第121図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備　考
1	S	坏	A 13.4 B 4.4 C 7.2	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反する。底部は上げ底である。器面にはロクロ成形時の水挽き痕が残り凸凹が見られる。底部には篦切り後，篦削りが施されている。	灰白色 砂粒・砂礫 良好
2	S	坏	A 13.5 B 4.9 C 8.5	体部は直立気味に立ち上がり，器肉は厚い。口縁部は外反する。器面にはロクロ成形時の水挽き痕が残り凸凹が見られる。底部には篦切り後，篦削りが施されている。	灰白色 砂粒・砂礫・雲母 良好
3	S	高台付坏	A 7.8	体部は外反気味に立ち上がり，口縁部は丸味を持ち外反する。体部と底部の境は強く屈曲し，外に突き出る。体部にロクロ成形時の水挽き痕が残る。	灰色 砂粒・砂礫 良好
4	S	蓋	A 11.6 B 3.0	宝珠状のつまみを有し，口縁部から天井部へ移行する部分は稜を有する。天井部にはロクロ成形時の水挽き痕が残る。	褐灰色 砂粒 良好
5	H	高台付坏	A 14.4 B 5.1 D 8.3	底部と体部の境界にやや明瞭な稜を持つ。体部はやや外反気味に外上方にのび，口縁端部を丸くおさめる。高台は貼り付けで「ハ」の字状に外下方にのびる。右ロクロ水挽き成形で底部は回転篦切り。高台内・外面は横ナデ調整。内面全体は篦磨き後黒色処理。	にぶい橙色 砂粒・砂礫・長石・雲母 良好 底部外面墨書
6	H	甕	A (15.4) F 17.4	体部は内彎しつつ立ち上がり「く」の字状に屈曲する口縁部が付き外端部はやや凹む。口頸部内・外面は横ナデ調整。体部内・外面は篦ナデ調整，体部内面に粘土紐痕を残す。	にぶい赤褐色 砂粒・砂礫・長石・石英・白雲母・スコリア 不良
7	H	甕	A 18.2	胴部下半を欠損。胴部は張り，最大径をもつ。頸部はくびれ口縁部に至る。口縁部は外反し，先端部は丸味を持ち立ち上がる。口縁部は横ナデ調整，胴部は篦ナデ調整が施されている。	灰黄褐色 砂粒・砂礫・長石・石英粒 良好



第120図　67号竪穴住居跡・竈実測図



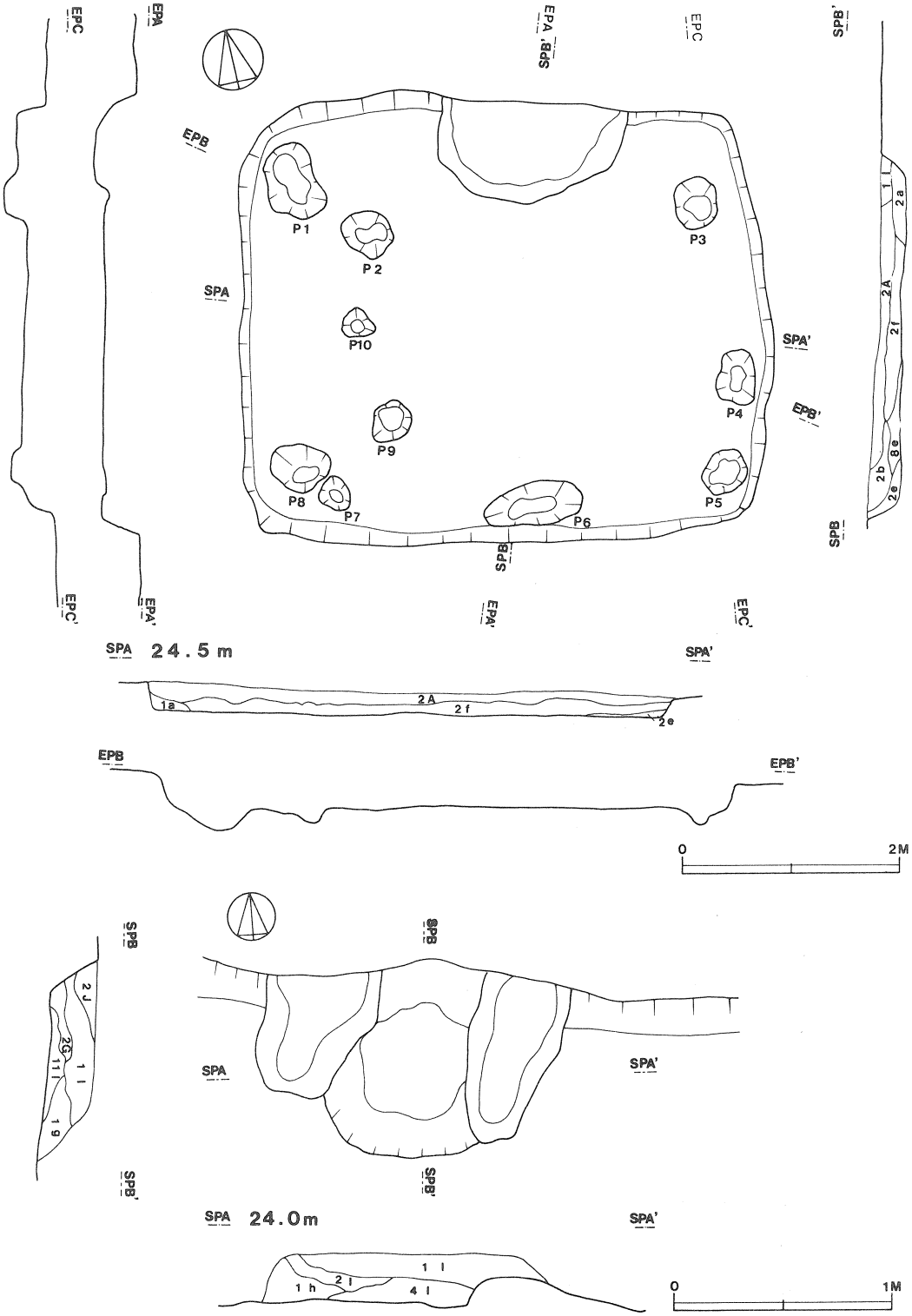
第121図　67号竪穴住居跡出土遺物実測図

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
8	H	甕	A 23.1	口縁部破片であり，口縁部は外反し，先端部は丸味を持ち立ち上がる。口縁部には横ナデ調整が施されている。	橙色 砂粒・砂礫・長石・石英粒 不良
9	槍鉋		残存長15.7	断面三角形を呈し，柄部分が残る。	

68号竪穴住居跡（第122図）

調査区 D4c3区を中心に確認され，東西4.9m・南北4.0mを測り，主軸方向N－8°－Eを指し，隅丸方形を呈している。

壁は，床面からやや斜めに立ち上がり，壁高25cmを測る。床面は全体に平坦で，良く踏み固め



第122図　68号竪穴住居跡・竈実測図

めれ，特に竈付近と中央部は硬い。壁溝は確認されない。ピットは10か所確認され，いずれも深さ10～20cmを測る。

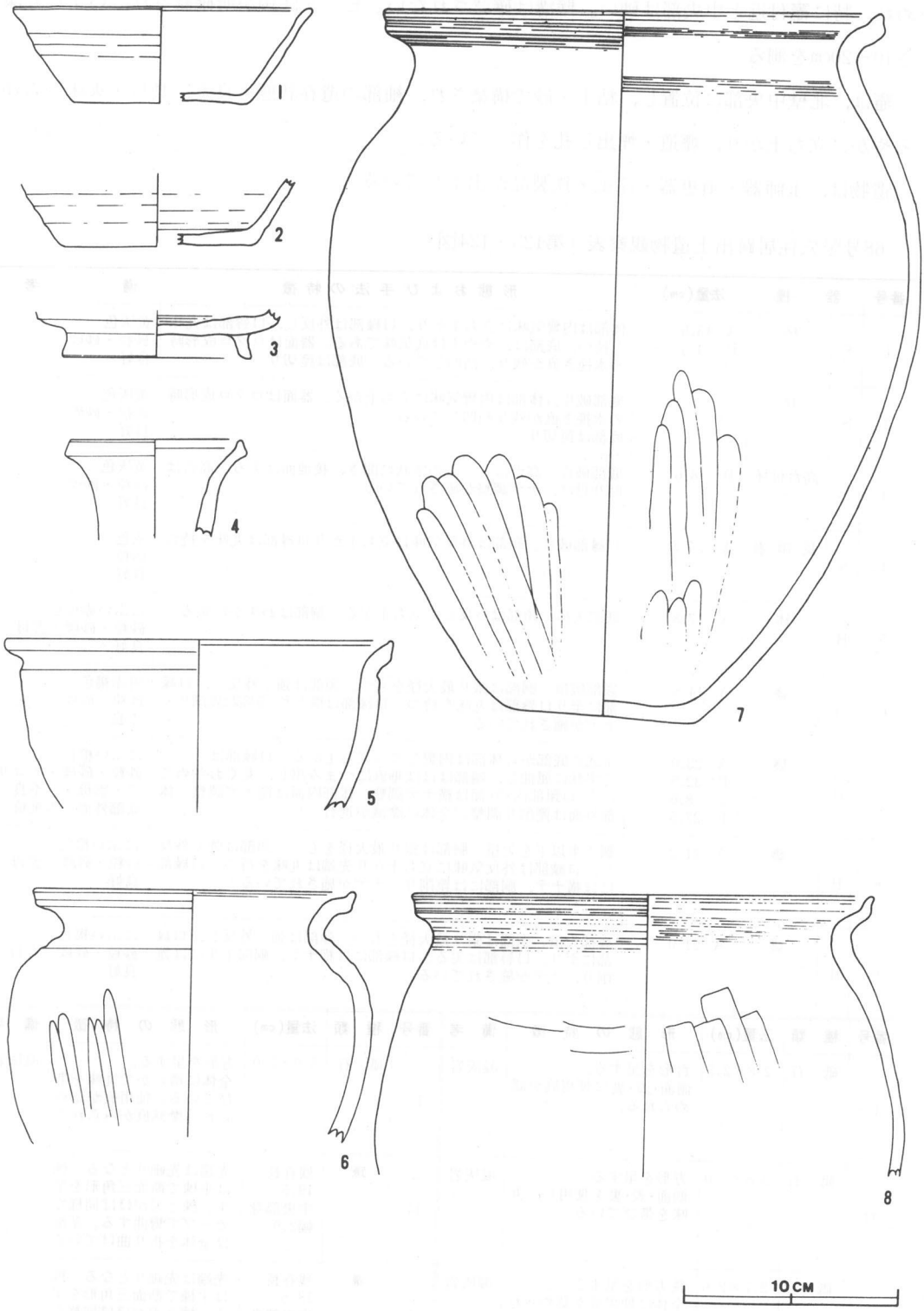
竈は，北壁中央部に位置し，粘土・砂で構築され，袖部の遺存状態も良く，焚口・火床からゆるやかに立ち上がり，煙道・煙出し孔を作っている。

遺物は，土師器・須恵器・漆紙・鉄製品が出土している。

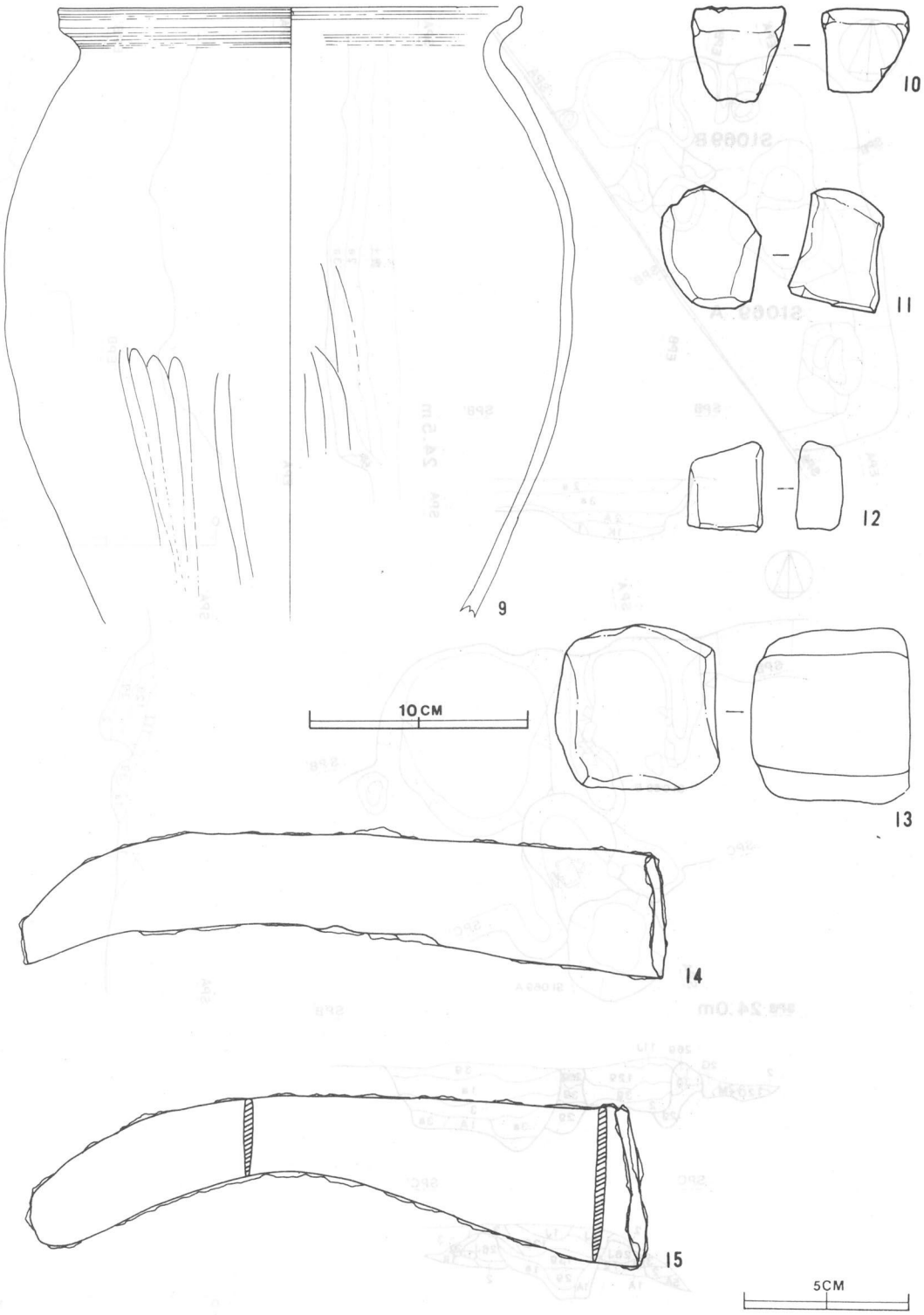
68号竪穴住居跡出土遺物観察表（第123・124図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 13.6 B 4.5	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反し，口唇部は丸味を持つ。底部は，やや上げ底気味である。器面はロクロ成形時の水挽き痕が残り，凸凹している。底部は篦切り。	黄灰色 砂粒・砂礫 良好
2	S	坏		底部破片。体部は内彎気味に立ち上がる。器面はロクロ成形時の水挽き痕が残り凸凹している。 底部は篦切り。	黄灰色 砂粒・砂礫 良好
3	S	高台付坏	D 8.6	底部破片。高台は「ハ」の字状に開き，接地面は尖る。高台は貼り付け，ナデ調整が施されている。	黄灰色 砂粒・砂礫 良好
4	S	長頸壺	A 7.8	口縁部破片。頸部は外反気味に立ち上がり口縁部は丸味を持つ。	灰色 砂粒 良好
5	H	鉢	A 17.8	底部欠損。頸部は外反し，立ち上がる。胴部はわずかに張る。	にぶい赤橙色 砂粒・砂礫・雲母 良好
6	H	甕	A 14.8	底部破損。胴部は張り最大径をもつ。頸部は強く外反し，口縁部に至り口唇部は丸味を持つ。口縁部は横ナデ，胴部は篦削り・ナデが施されている。	明赤褐色 砂粒・砂礫 不良
7	H	甕	A 23.0 B 32.5 C 8.6 F 27.5	平底の底部から体部は内彎しつつ立ち上がる。口縁部は「く」の字状に屈曲し，端部はほぼ垂直につまみ出し，丸くおさめている。口頸部内・外面は横ナデ調整，体部内面は篦ナデ調整。体部外面は篦削り調整。全体に摩滅が進行。	にぶい橙色 砂粒・砂礫・スコリア・雲母・ 不良 底部外面に木葉痕
8	H	甕	A 21.2	胴下半以下を欠損。胴部は張り最大径をもつ。頸部は強く外反し，口縁部は外反気味に立ち上がり先端は丸味を持つ。口縁部には横ナデ，胴部には篦削り・ナデが施されている。	にぶい橙色 砂粒・砂礫・雲母 良好
9	H	甕	A 21.0	底部欠損。胴部は張り最大径をもつ。頸部は強く外反し，口縁部に至り，口唇部は尖る。口縁部には横ナデ，胴部下半には篦削り，ナデが施されている。	にぶい褐色 砂粒・砂礫・雲母 良好

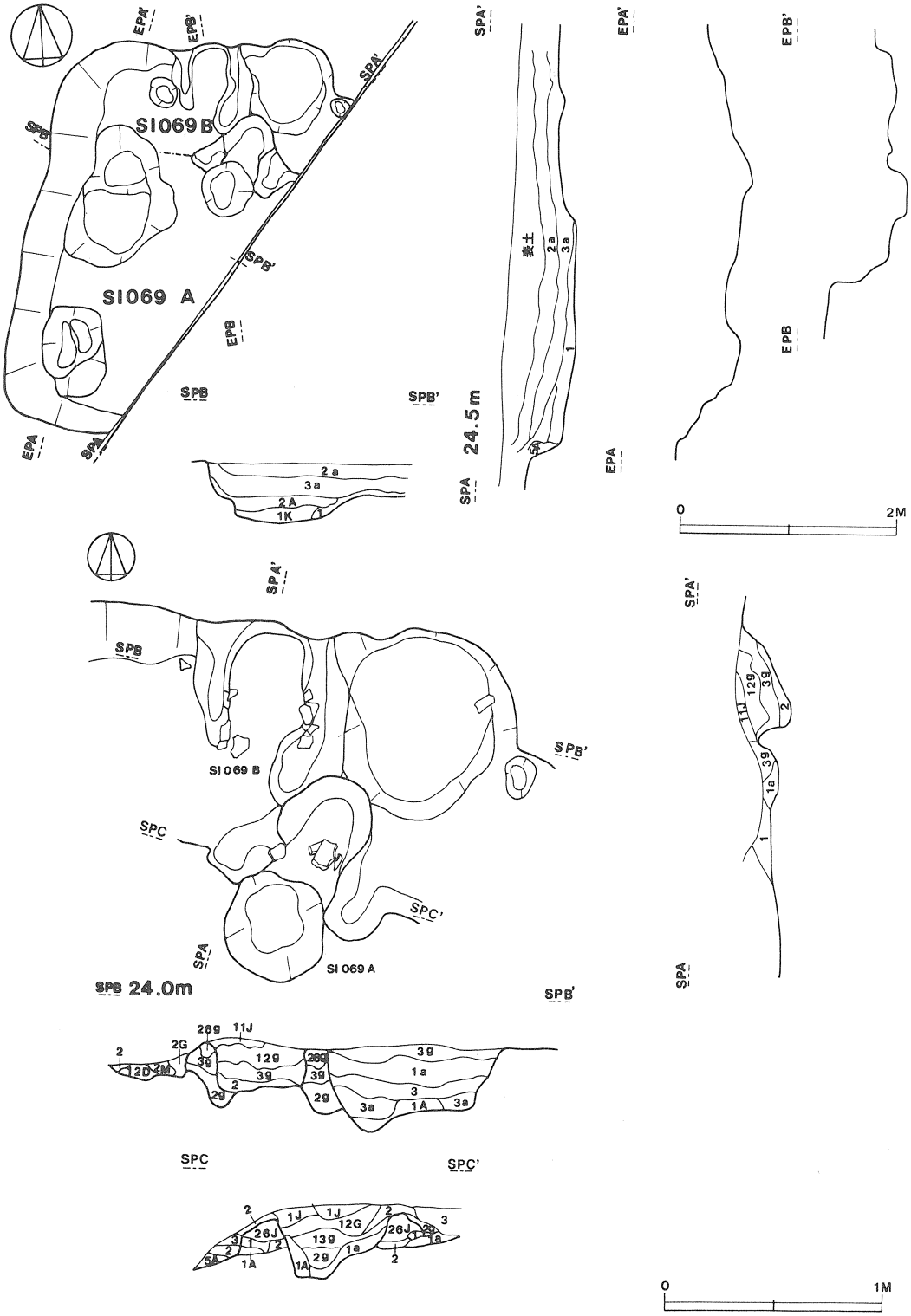
番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
10	砥石	2.8×2.5	台形を呈する。 側面・表・裏に使用痕が認められる。	凝灰岩	13	砥石	5.0×5.0	方形を呈する。 全体に滑らかで丸味を帯びている。使用痕が認められ，摩滅痕がみられる。	凝灰岩
11	砥石	3.8×3.0	方形を呈する。 側面・表・裏を使用し，丸味を帯びている。	凝灰岩	14	鎌	残存長 19.5 中央部身幅2.9	先端は先細りとなる。棟は平棟で断面三角形を呈す。棟と刃がほぼ同様なカーブで彎曲する。茎部は全体を折り曲げている。	
12	砥石	2.7×2.6	長方形を呈する。 全体に使用痕が認められる。	凝灰岩	15	鎌	残存長 18.6 中央部身幅2.4	先端は先細りとなる。棟は平棟で断面三角形を呈す。棟と刃がほぼ同様なカーブで彎曲する。茎部は全体を折り曲げている。	



第123図　68号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1)



第124図　68号竪穴住居跡出土遺物実測図 (2)



第125図　69－A・B号竪穴住居跡・竈実測図

69－A・B号竪穴住居跡（第125図）

調査区 D4e5区を中心に確認されたが，東半部は調査区域外にある。南北 3.6m・東西は確認された部分で2.6mを測り，主軸方向N－15°－Eを指し，隅丸長方形を呈するものとみられる。ただ竈が2基あって，新旧関係があることから2軒の竪穴住居跡の重複とみられるが，部分的な調査であるため詳細は明らかでない。

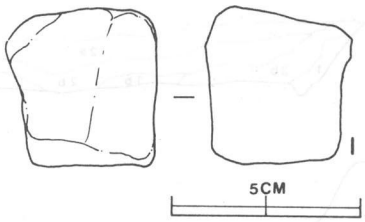
覆土は，暗褐色土の自然堆積である。壁は床面から垂直に立ち上がり，壁高65cmを測る。ピットは4か所確認されたが，主柱穴は明らかでない。

竈は，北壁にあり，ローム壁より内側にある新しいものをA号竈，ローム壁に設けられているものをB号竈とする。A号竈は，長さ1.0m・幅0.85m，焚口部幅0.4mを測る。袖部は，山砂を主体として築かれている。焼成部から土師器甕大破片を出土している。B号竈は，長さ0.85m・幅0.75m・焚口部幅0.3mを測る。壁外へは掘り込んでいない。袖部は，山砂で構築されている。

遺物は，土師器・須恵器・瓦が出土している。

69号竪穴住居跡出土遺物観察表（第126図）

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
1	砥石	4.1×3.6	方形を呈する。全体を使用し，摩滅がみられ滑らかで丸味を帯びている。	凝灰岩



第126図　69号竪穴住居跡出土遺物実測図

70号竪穴住居跡（第127図）

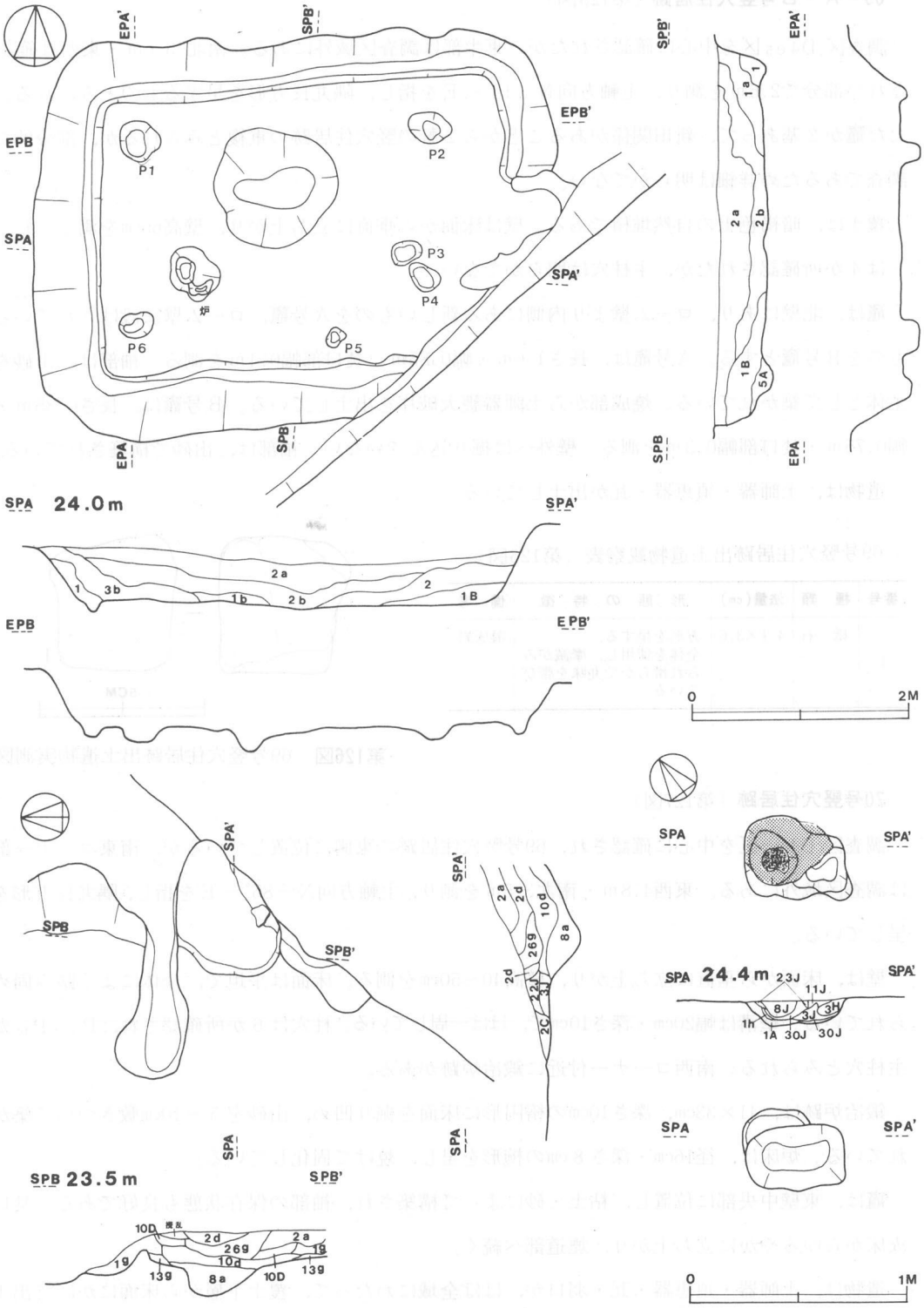
調査区 D4b7区を中心に確認され，69号竪穴住居跡の東側に位置しているが，南東コーナー部は調査区域外にある。東西4.8m・南北3.5mを測り，主軸方向N－85°－Eを指し，隅丸長方形を呈している。

壁は，床面から垂直に立ち上がり，壁高40～50cmを測る。床面は平坦で，全体によく踏み固められている。壁溝は幅20cm・深さ10cmで，ほぼ一周している。柱穴は6か所確認され，P_1～P_6が主柱穴とみられる。南西コーナー付近に鍛冶炉跡がある。

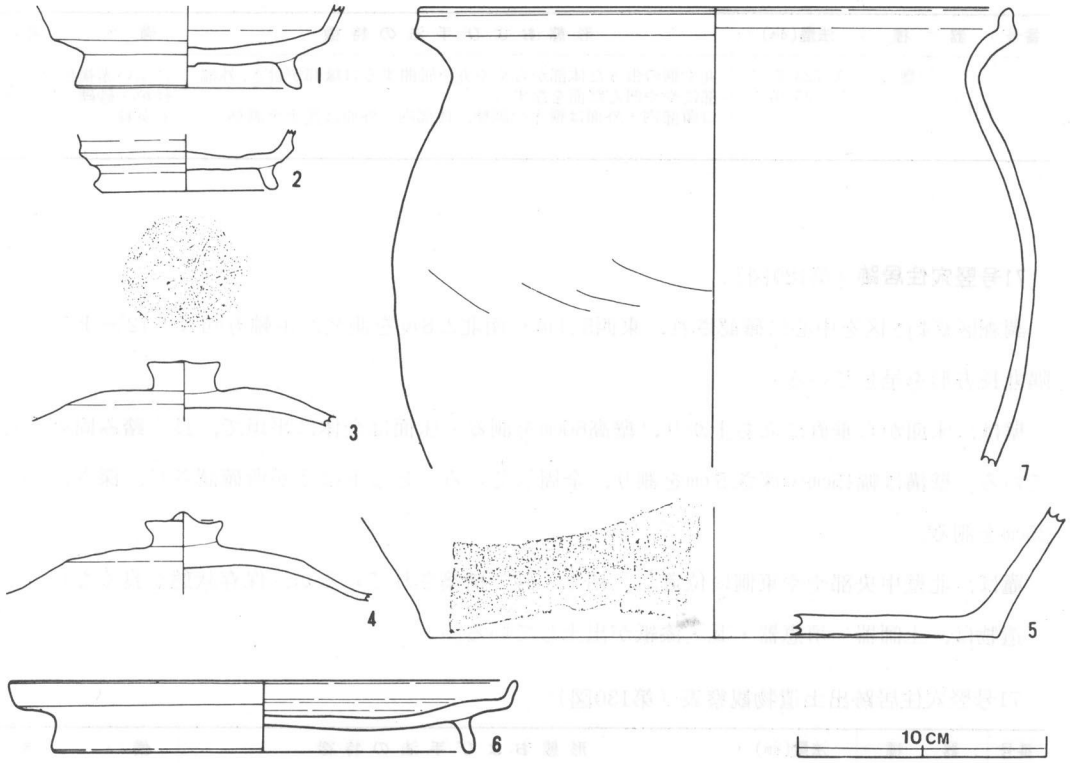
鍛冶炉跡は，41×33cm，深さ10cmの楕円形に床面を掘り凹め，山砂を5～10cm敷きつめて築かれている。炉床は，径16cm・深さ8cmの椀形を呈し，焼けて固化している。

竈は，東壁中央部に位置し，粘土・砂によって構築され，袖部の保存状態も良好である。焚口・火床からゆるやかに立ち上がり，煙道部へ続く。

遺物は，土師器・須恵器・瓦・羽口が，ほぼ全域にわたって，覆土下層から床面にかけて出土している。



第127図　70号竪穴住居跡・竈・炉跡実測図



第128図　70号竪穴住居跡出土遺物実測図

70号竪穴住居跡出土遺物観察表（第128図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	高台付坏	D　8.7	口縁部欠損。体部と底部の境は屈曲して立ち上がる。高台は「ハ」の字状を呈し，接地面は尖る。高台は貼り付け，ナデ調整が施されている。	灰褐色 砂粒・砂礫 良好
2	S	高台付坏	D　6.8	底部破片。高台は「ハ」の字状を呈し，接地面は平坦である。高台は貼り付け・ナデ調整が施されている。	黄灰色 砂粒・砂礫 良好 内・外面に煤付着 底部外面に箆記号
3	S	蓋		つまみは宝珠状を呈し，天井部はなだらかな張りを見せる。肩部からは直線的に開きながら下がる。天井部には箆削りが施されている。	砂粒・砂礫・雲母 良好 内面に炭化物付着
4	S	蓋		つまみは宝珠状を呈す。肩部からは直線的に開きながら下がる。天井部には箆削り・ナデ調整が施されている。	褐灰色 砂粒・砂礫・雲母 良好 内面に炭化物付着
5	S	甕		底部破片。体部は直立気味に立ち上がる。器面に叩き目が施されている。	灰白色 砂粒・砂礫・雲母 良好
6	H	台付盤	A (20.2) B　2.9	体部は短く外上方に大きく開く。口縁部は外傾気味に立ち上がり，端部を丸くおさめている。高台は貼り付けで「ハ」の字状に外上方へのび端部に面をなす。水挽き成形で底部は回転箆切り。高台内・外面は横ナデ調整，内面全体は箆磨き後，黒色処理。	にぶい赤褐色 砂粒・砂礫・長石・石英粒・雲母・スコリア 普通

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
7	H	甕	A (23.7) F 25.9	丸く胴の張った体部からやや丸く屈曲する口縁部が付き，外端部にやや凹んだ面をなす。 口頸部内・外面は横ナデ調整，体部内・外面は篦ナデ調整。	にぶい赤褐色 砂粒・砂礫・長石・石英粒

71号竪穴住居跡（第129図）

調査区C4 j_2 区を中心に確認され，東西5.1m・南北2.8mを測り，主軸方向N－12°－Eを指し，隅丸長方形を呈している。

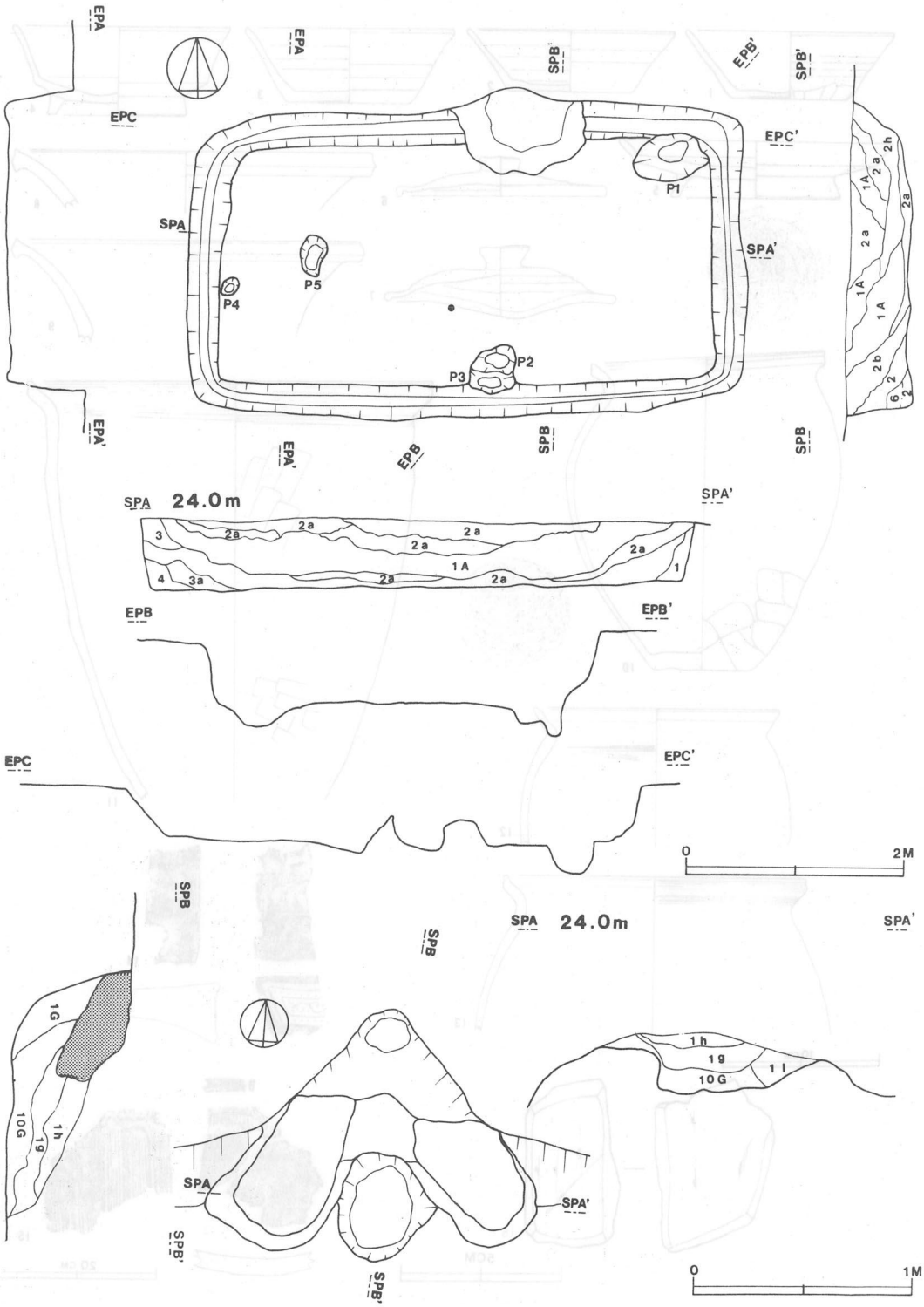
壁は，床面から垂直に立ち上がり，壁高60cmを測る。床面は全体に平坦で，良く踏み固められている。壁溝は幅15cm・深さ5cmを測り，全周している。ピットは5か所確認され，深さは20～25cmを測る。

竈は，北壁中央部やや東側に位置し，粘土・砂で構築されているが，保存状態が良くない。

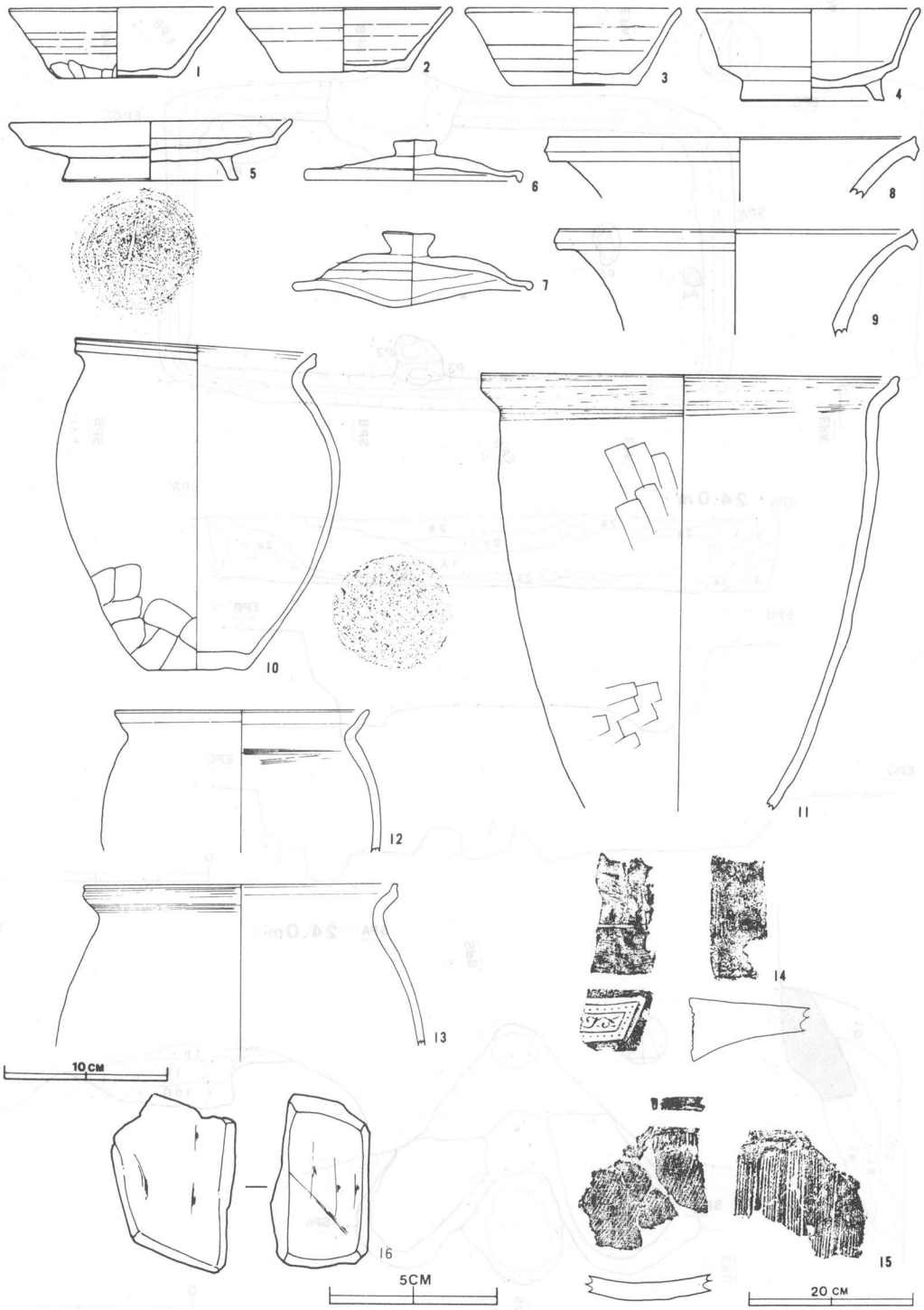
遺物は，土師器・須恵器・瓦・漆紙が出土している。

71号竪穴住居跡出土遺物観察表（第130図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 13.0 B 4.3 C 7.3	体部は外反気味に立ち上がり，口縁部は丸味を持つ。器面はロクロ成形時の水挽き痕が残り，底部には篦切り後，篦削りが施されている。	灰色 砂粒・砂礫 良好
2	S	坏	A 13.0 B 4.0 C 7.4	体部は外反気味に立ち上がり，口縁部先端は丸味を持つ。体部内・外面はロクロ成形時の水挽き痕が残り，凸凹している。	赤灰色 砂粒・砂礫 良好 器面内に漆付着
3	S	坏	A 13.0 B 4.7 C 7.8	体部は外反気味に立ち上がり，口縁部はさらに外反し，先端部は丸味を持つ。底部は上げ底である。器内・外面にはロクロ成形時の水挽き痕が残る。底部は篦切り。	灰色 砂粒・砂礫・礫 良好
4	S	高台付坏	A 13.6 B 5.7 D 8.7	体部は外反して立ち上がり，口縁部はさらに折れ，先端部は丸味を持つ。体部と底部の境は屈曲し稜をなす。高台は「ハ」の字状に開き，接地面は平坦である。高台は貼り付け・ナデ整形が施されている。	灰白色 砂粒・砂礫・雲母 普通 器面内・外に煤付着
5	S	台付盤	A 17.2 B 3.6 D 10.6	平坦な底部から外彎気味に外方に開き，さらに口縁部で屈曲して内傾し，先端部は外反する。口縁端部は丸味を持っている。口縁部外面は横ナデ調整，高台は「ハ」の字状に開き接地面は平坦である。	褐灰色 砂粒・砂礫・礫 良好 器面内・外に自然釉 底部に篦記号
6	S	蓋	A 13.1 B 2.6	つまみは宝珠形を呈す。天井部より丸味をもって開き，身受け部が「く」の字状に屈曲する。ロクロ水挽き成形。天井部外面は回転篦削り・ナデ調整が施されている。	緑灰色 砂粒・砂礫 良好
7	S	蓋	A 14.4 B 3.6	つまみを有し，天井部より丸味を持って開く。天井部外面には篦ナデが施されている。器形は変形している。	灰白色 砂粒・砂礫・礫 良好 器面に自然釉
8	S	甕	A 21.7	口縁部破片である。頸部は外反して立ち上がり，口唇部は上下に突き出す。口縁部は横位のナデ調整が施されている。	青灰色 砂粒・砂礫 良好



第129図　71号竪穴住居跡・竈実測図



第130図　71号竪穴住居跡出土遺物実測図

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
9	S	甕	A 22.5	口縁部破片である。頸部は強く外反し，口唇部は下端にするどく突出する。口縁部には横位のナデ調整が施されている。	褐白色 砂粒・砂礫 良好
10	H	甕	A 14.7 B 20.0 C 6.0	小形甕である。器肉は薄く，体部は胴部中位に最大径をもって開く。頸部で括れ短い口縁部は開き，口唇部は丸味を持つ。胴部以下底部は篦削り。口縁部横ナデ調整。	にぶい赤褐色 砂粒・長石粒・雲母 不良 底部外面に木葉痕
11	H	甕	A 22.5	底部欠損。口縁部に最大径をもつ。頸部は外反して立ち上がり口唇部は丸味を持つ。口縁部には横ナデ調整。胴部には篦削り・篦ナデが施されている。	にぶい橙色 砂粒・長石粒・砂礫 良好
12	H	甕	A 15.5	底部欠損。胴部は球形を呈し，最大径をもつ。頸部から口縁部にかけて強く外反する。口縁部には横ナデ調整，胴部にはナデ調整が施されている。	にぶい赤褐色 砂粒・長石粒・砂礫 良好
13	H	甕	A 19.0	底部欠損。胴部は球形を呈し，最大径をもつ。頸部から強く外反し，口縁部先端は立ち上がる。口縁部は横ナデ調整，胴部はナデ調整が施されている。	にぶい橙色 砂粒・長石粒・砂礫 良好
14	軒平瓦			凸面は縄目叩き。凹面は布目痕を残す。両面とも横の篦削りを施している。 顎はゆるい立ち上がりをもつ曲線顎である。均整唐草文。	黄灰色 砂礫・長石粒 硬質
15	平瓦			凸面に縄目，凹面には布目痕を有している。	にぶい褐色 砂礫・長石粒・雲母 硬質

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
16	砥石	4.6×3.6	長方形を呈する。 表・裏及び側面に使用痕が認められる。	凝灰岩

72－A号竪穴住居跡（第131図）

調査区D4a3区を中心に確認され，72－B号竪穴住居跡と重複している。規模は東西4.3m・南北2.7mを測り，主軸方向N－2°－Eを指し，隅丸長方形を呈している。

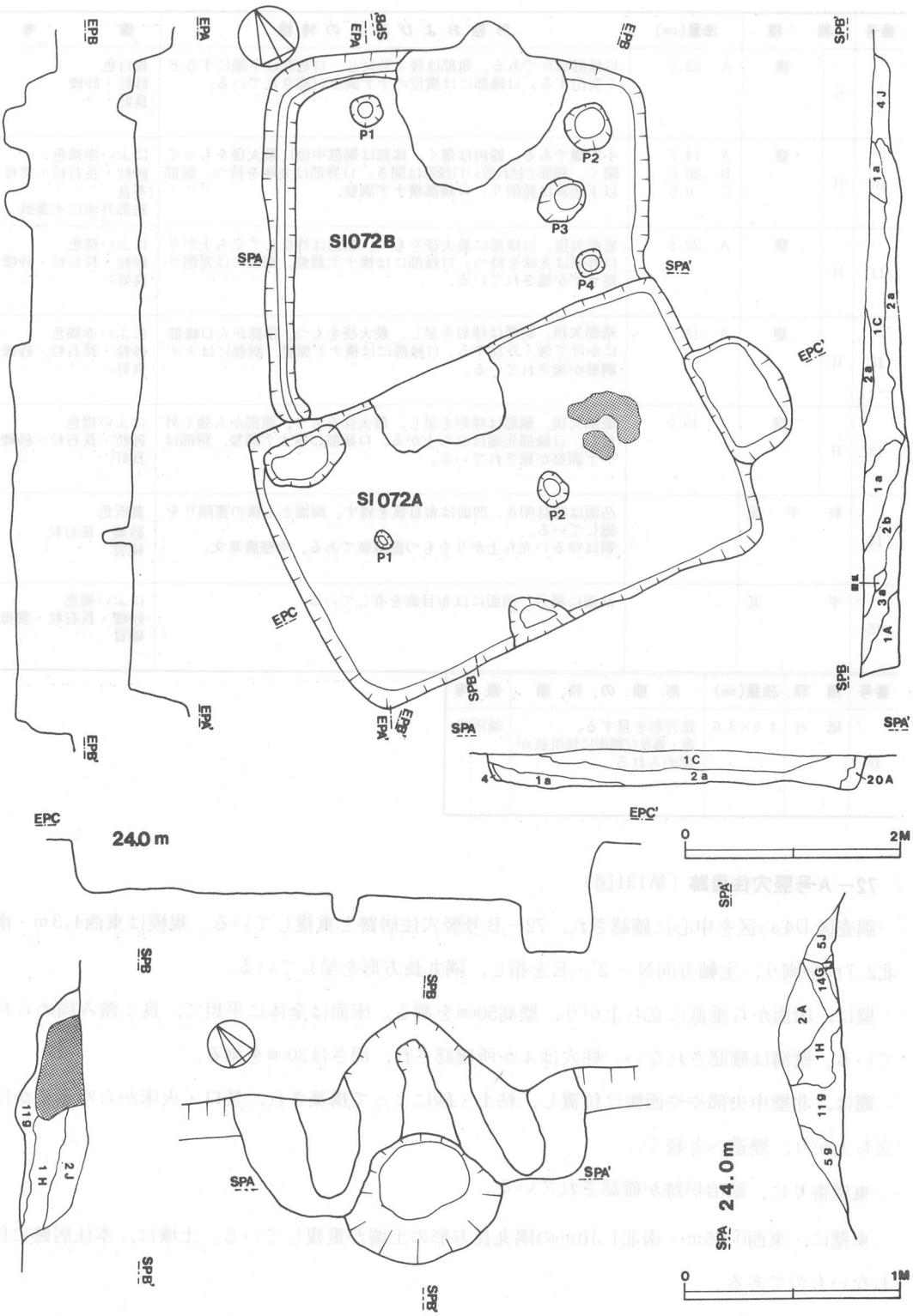
壁は，床面から垂直に立ち上がり，壁高50cmを測る。床面は全体に平坦で，良く踏み固められている。壁溝は確認されない。柱穴は4か所確認され，深さは20cmを測る。

竈は，北壁中央部やや西側に位置し，粘土・砂によって構築され，焚口・火床からゆるやかに立ち上がり，煙道へと続く。

東壁寄りに，鍛冶炉跡が確認されている。

東壁に，東西0.75m・南北1.10mの隅丸長方形の土壙が重複している。土壙は，本住居跡に伴わないものである。

遺物は，土師器・須恵器が出土している。



第131図　72－A号竪穴住居跡，72－B号竪穴住居跡・竈実測図

72－B号竪穴住居跡（第131図）

調査区C4j_3区を中心に確認され，南壁は72－A号竪穴住居跡と重複している。規模は東西3.6m・南北3.35mを測り，主軸方向N－43°－Eを指し，隅丸方形を呈している。

壁は，床面から斜めに立ち上がり，壁高35cmを測る。床面は全体に平坦で，良く踏み固められている。壁溝は西壁・北壁下に確認され，幅5cm・深さ5cmを測り，柱穴は4か所確認され，深さは15～20cmを測る。

竈は，北壁中央部に位置し，粘土・砂によって構築され，焚口・火床からゆるやかに立ち上がり，煙道・煙出し孔を作っている。保存状態は良好である。

本住居跡と72－A号竪穴住居跡との新旧関係は，本住居跡が新しい。

遺物は，土師器・須恵器が出土している。

73号竪穴住居跡（第132図）

調査区B3d_9区を中心に確認され，東西6.2m・南北5.2mを測り，主軸方向N－24°－Eを指し，隅丸長方形を呈している。

壁は，床面から垂直に立ち上がり，壁高85cmを測り，掘り込みの深い住居跡である。壁溝は，確認されない。ピットは6か所確認され，掘り込みは50～60cmを測る。

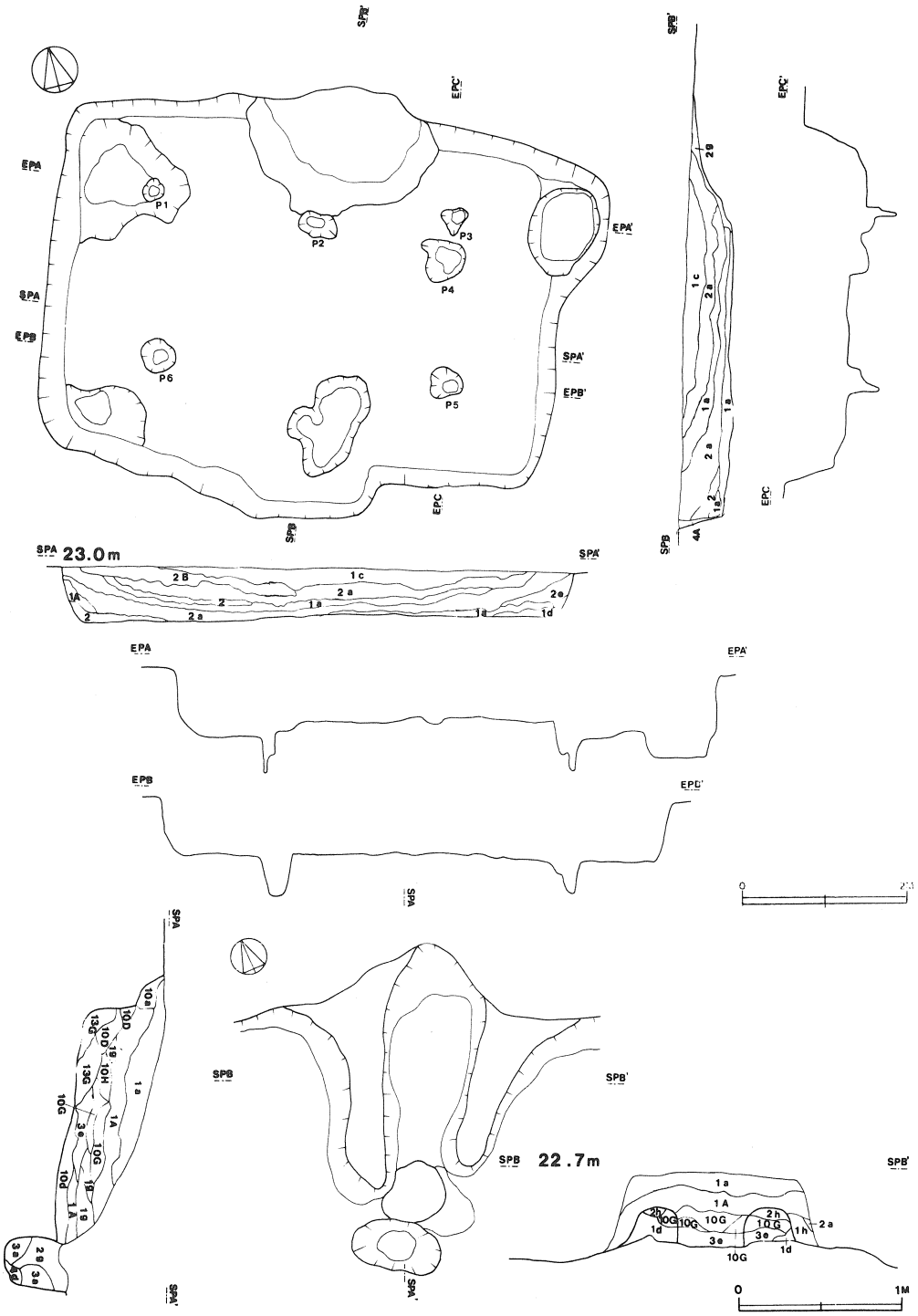
竈は，北壁中央部に位置し，粘土・砂によって構築され，焚口・火床からゆるやかに立ち上がり，煙道・煙出し孔を作っている。

本住居跡北東コーナー部に，東西1m・南北0.85mを測る土壙が検出されたが，土層堆積状況，掘り込み状況から近世のものとみられる。

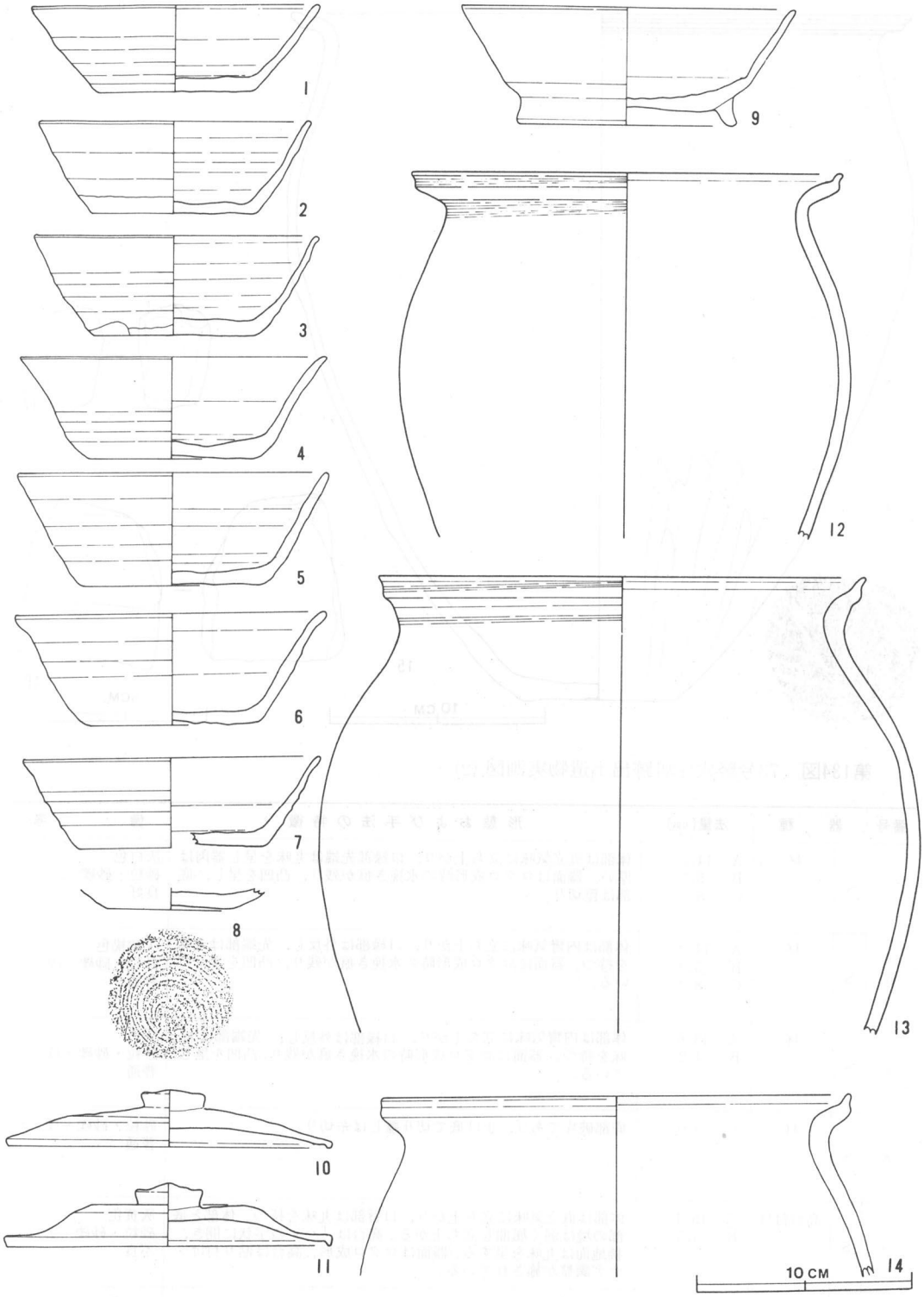
遺物は，土師器・須恵器・墨書土器・漆付着土器・漆紙が出土している。

73号竪穴住居跡出土遺物観察表（第133・134図）

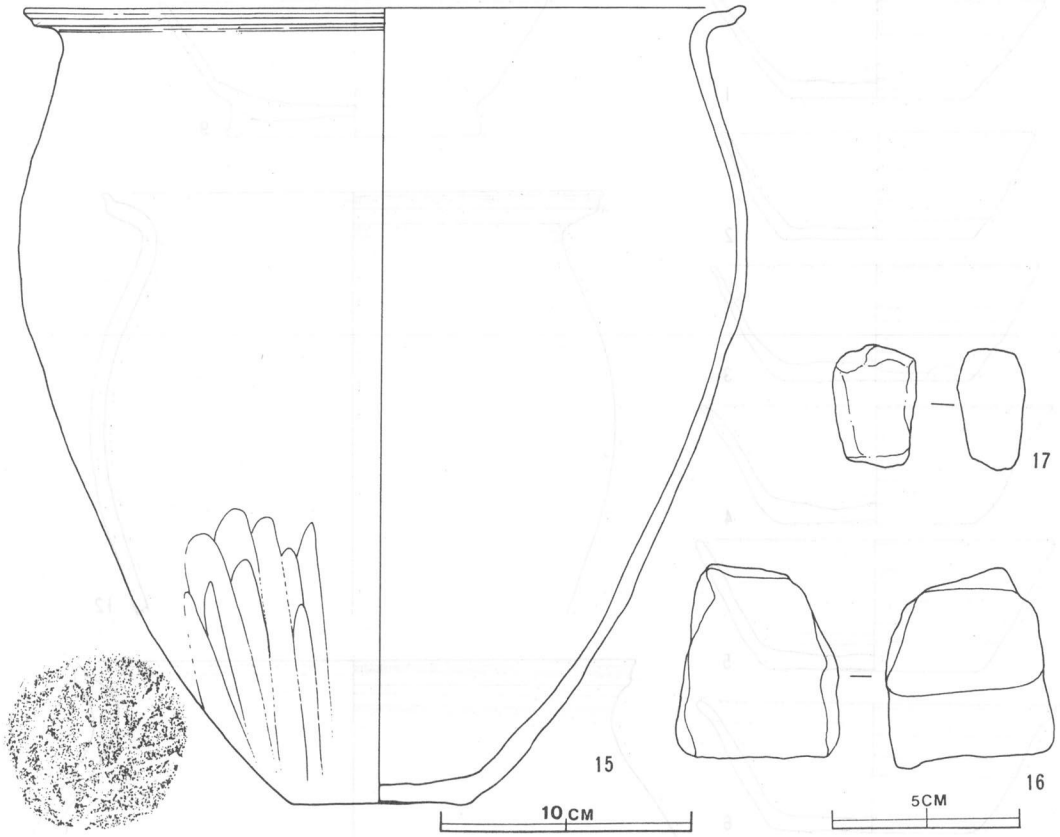
番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 13.2 B 4.0 C 7.2	底部は平底で，体部は内彎気味に立ち上がり口唇部は丸味を持つ。器面にはロクロ成形時の水挽き痕が残り，凸凹を呈している。	黄灰色 砂粒・砂礫 良好
2	S	坏	A 12.4 B 4.3 C 7.6	体部は直立気味に立ち上がり，口唇部は丸味を持つ。器面にはロクロ成形時の水挽き痕が残り，凸凹を呈している。	灰色 砂粒・砂礫 良好
3	S	坏	A 13.0 B 4.7 C 7.5	体部は内彎気味に立ち上がり器肉は厚い。口縁部は外反し，先端は丸味を持つ。器面はロクロ成形時の水挽き痕が残り，凸凹を呈している。	灰白色 砂粒・砂礫 良好
4	S	坏	A 14.1 B 4.7 C 7.8	体部は外反気味に立ち上がり，口縁部は外に折れる。底部は上げ底で器肉は厚い。 器面にはロクロ成形時の水挽き痕が残り，凸凹を呈している。	灰白色 砂粒・砂礫 良好



第132図　73号竪穴住居跡・竈実測図



第133図　73号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1)



第134図　73号竪穴住居跡出土遺物実測図 (2)

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
5	S	坏	A 14.4 B 5.3 C 8.5	体部は直立気味に立ち上がり，口縁部先端は丸味を呈し器肉は厚い。器面はロクロ成形時の水挽き痕が残り，凸凹を呈し，底部は篦切り。	灰白色 砂粒・砂礫 良好
6	S	坏	A 14.2 B 5.2 C 8.2	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反し，先端部は丸味を持つ。器面にロクロ成形時の水挽き痕が残り，凸凹を呈している。	灰黄褐色 砂粒・砂礫・礫 普通
7	S	坏	A 13.6 B 4.2	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反し，先端部は丸味を持つ。器面にロクロ成形時の水挽き痕が残り，凸凹を呈している。	灰色 砂粒・砂礫・礫 普通
8	S	坏	C 5.9	底部破片であり，上げ底で切り離しは糸切り。	砂粒・砂礫・礫 普通
9	S	高台付坏	A 15.4 B 5.5	体部は直立気味に立ち上がり，口唇部は丸味を持つ。体部と底部の境は弱く屈曲し立ち上がる。高台は「ハ」の字状に開き，接地面は丸味を呈する。器面はロクロ成形，高台は貼り付け・ナデ調整が施されている。	灰黄色 砂粒・砂礫・雲母 不良
10	S	蓋	A 15.0 B 2.6	天井部につまみを有し，頂部はなだらかな張りを見せ，肩からは直線的に開きながら下がる。身受け部が「く」の字状に屈曲する。天井部は，横ナデ調整。	灰白色 砂粒・砂礫・雲母 普通

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
11	S	蓋	A 15.0 B 2.9	天井部に宝珠状のつまみを有する。頂部は張りを見せ，肩から段を有して下がる。身受け部が「く」の字状に屈曲する。天井部はナデ調整。	灰色 砂粒・砂礫・雲母 普通
12	H	甕	A (20.2) F 21.0	丸く張った体部から「く」の字状に屈曲する口縁部が付き，端部を外上方につまみ出す。口頸部内・外面は横ナデ調整。体部内・外面は篦ナデ調整。全体に摩滅が進行。	にぶい橙色 砂粒・砂礫・スコリア・雲母 普通
13	H	甕	A (22.8) F 28.1	強く胴の張った体部から口縁部は外反し，端部を外上方につま出し，やや尖る。口頸部内・外面は，横ナデ調整。体部内面はナデ調整か。体部外面は篦削り調整。	にぶい橙色 砂粒・砂礫・スコリア・雲母 普通
14	H	甕	A (21.8)	胴の張った体部からやや「く」の字状に屈曲する口縁部が付き，端部をほぼ垂直につまみ出す。口頸部内・外面は横ナデ調整。体部内・外面は篦ナデ調整。	橙色 砂粒・砂礫・長石粒・石英粒少 不良
15	H	甕	A (28.5) B 31.8 C 7.0 F 29.0	平底の底部から体部は内彎しつつ立ち上がり，口縁部は鋭く屈曲し，端部を丸くおさめる。口頸部内・外面は，横ナデ調整。体部内面と体部外面中位は篦ナデ調整。体部外面下位は篦削り調整。全体に摩滅が進行。	にぶい橙色 砂粒・砂礫・長石粒・石英粒少・雲母・スコリア 普通 底部外面に木葉痕

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
16	砥石	5.0×4.1	方形を呈する。 全体に滑らかで摩滅痕がみられ，稜も使われ丸みを帯びている。	凝灰岩	17	砥石	3.0×2.0	長方形を呈する。 全体を使用し，丸みを帯びている。	凝灰岩

74号竪穴住居跡（第135・136図）

調査区C3b9区を中心に確認され，東西5.8m・南北4.9mを測り，主軸方向N－8°－Eを指す。本住居跡は，3軒の住居が重複しているものとみられる。

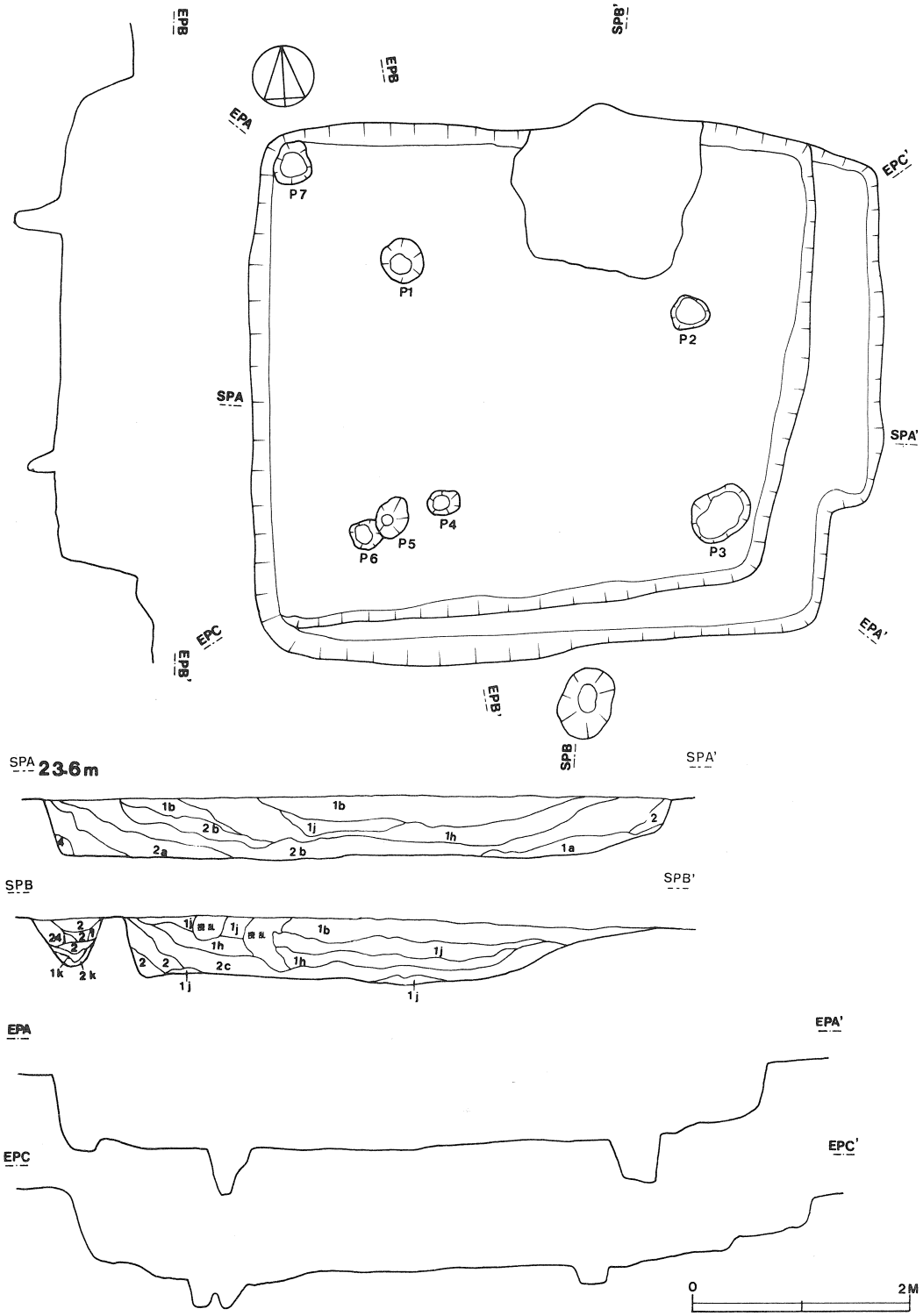
壁は床面から垂直に立ち上がり，壁高60～70cmを測る。床面は凹凸を呈しているが，全体に良く踏み固められている。壁溝は確認されない。ピットは7か所確認され，25～45cmの深さを測る。

竈は，北壁中央部からやや東側に位置し，粘土・砂で構築されているが，調査の結果，焚口部，煙道部が2か所確認され，竈の造り替えがおこなわれたものとみられる。

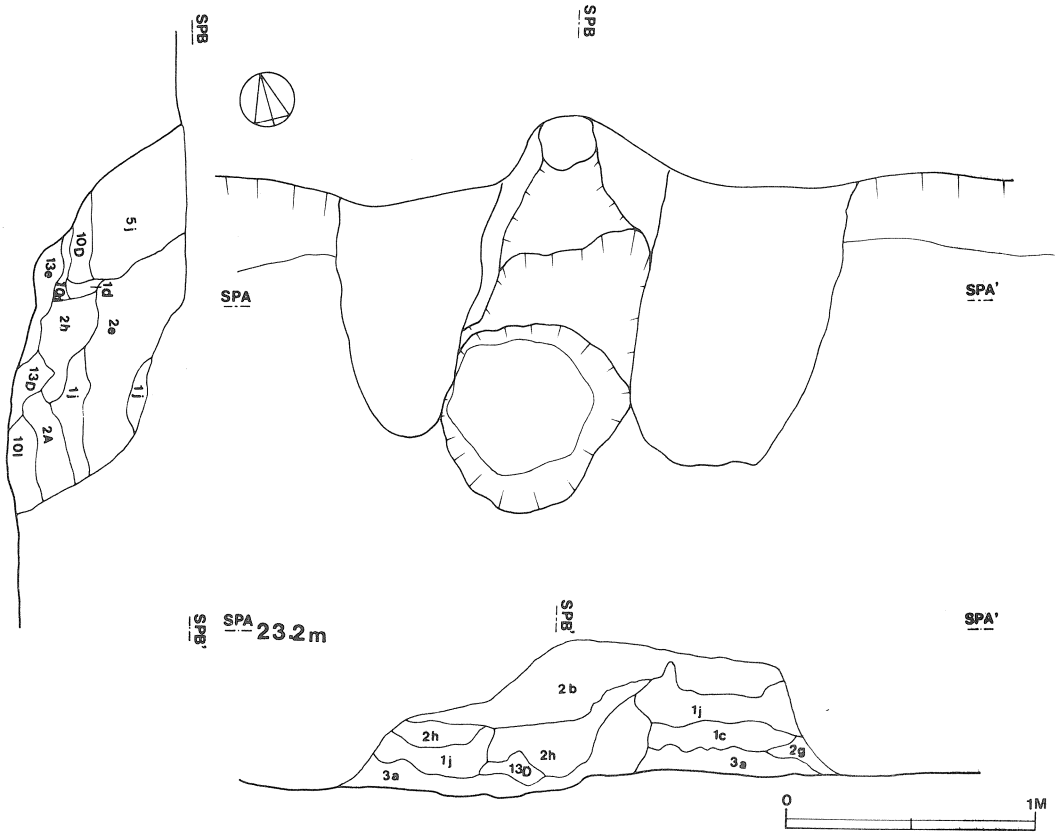
遺物は土師器・須恵器・瓦が出土している。

74号竪穴住居跡出土遺物観察表（第137図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 14.3 B 4.8 C 8.5	体部は直立気味に立ち上がり，口縁部は丸味を持つ。器面はロクロ成形時の水挽き痕が残り，凸凹している。底部は篦切り後，篦削りが施されている。	灰色 砂粒・砂礫 良好
2	S	坏	C 7.9	口縁部欠損。体部は外反気味に立ち上がる。器面はロクロ成形時の水挽き痕が残り，凸凹している。	灰白色 砂粒・砂礫 普通

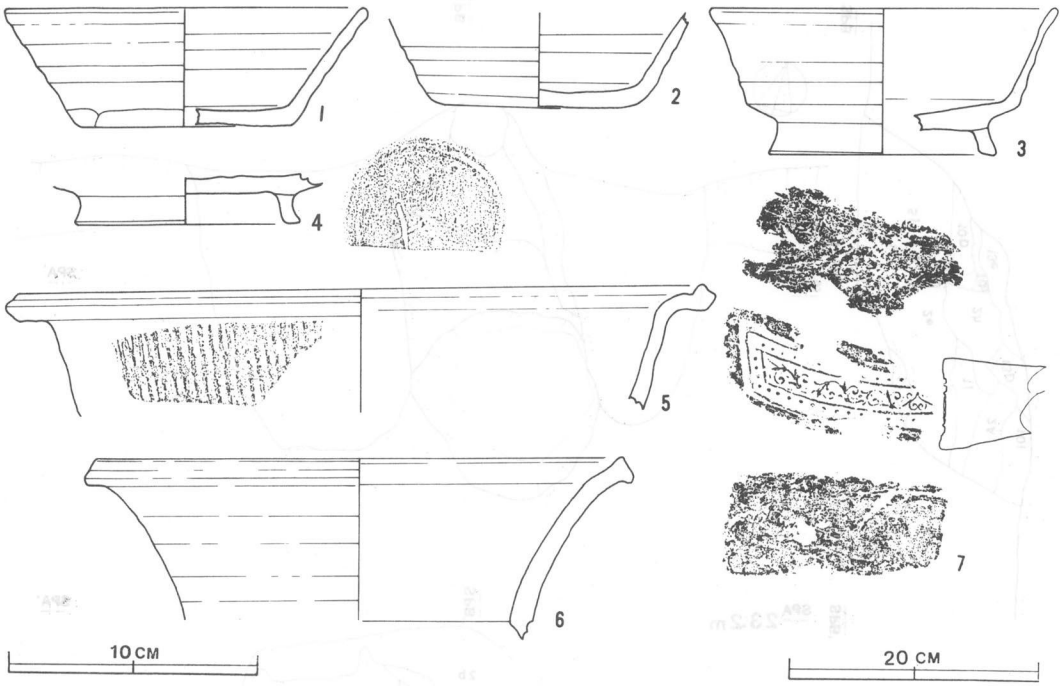


第135図　74号竪穴住居跡実測図



第136図　74号竪穴住居跡竈実測図

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
3	S	高台付坏	A 13.8 D 9.1	体部は外反気味に立ち上がり，口縁部は折れ，外反する。口唇部先端は丸味を持つ。体部と底部の境は屈曲し稜を持つ。高台は貼り付け・ナデ調整。	灰色 砂粒・砂礫 良好
4	S	高台付坏	D 9.0	底部破片。高台は「ハ」の字状に開き，接地面は平坦。高台は貼り付け，ナデ調整。	灰色 砂粒・砂礫 良好 底部外面に箆記号
5	S	甕	A 21.1	口縁部は，強く外反する。口縁部は横ナデ調整。頸部はロクロ成形時の水挽き痕が残る。	青灰色 砂粒・砂礫 良好
6	S	甕	A 27.4	口縁部破片。口縁部は強く外反し屈曲する。口唇部は立ち上がる。器面には平行叩き目が施されている。	褐灰色 砂粒・砂礫・雲母 普通 器内・外面に漆付着
7	軒平瓦			凸面・凹面とも箆削りが施されている。顎はゆるい立ち上がりをもつ曲線顎である。均整唐草文。	褐灰色 砂礫・長石粒 硬質



第137図　74号竪穴住居跡出土遺物実測図

75－A号竪穴住居跡（第138図）

調査区B3f₀区を中心に確認され，75－B号竪穴住居跡と重複している。確認できる規模は，東西3.0m・南北6.0mを測り，主軸方向N－10°－Eを指す。

壁は，床面からやや斜めに立ち上がり，壁高50cmを測る。床面は，全体に凹凸して軟弱である。壁溝は確認されない。柱穴は5か所確認され，深さは50～55cmを測る。

竈は確認されない。

遺物は，土師器・須恵器・墨書土器・漆付着土器・漆しぼり料・漆紙が出土している。

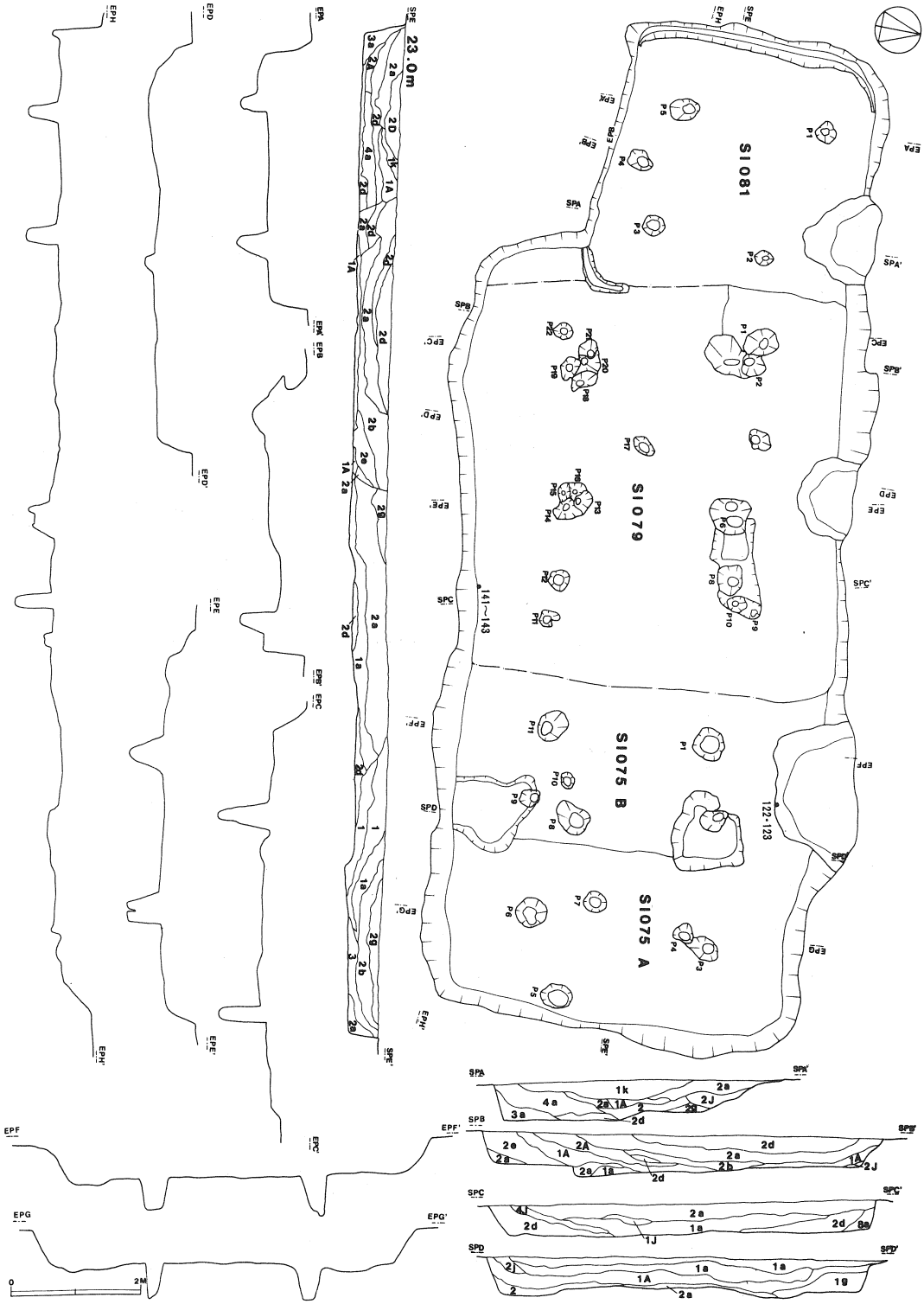
75－B号竪穴住居跡（第138・139図）

調査区B3f₉区を中心に確認され，75－A・79号竪穴住居跡と重複している。確認できる規模は，東西4.0m・南北6.0mを測り，主軸方向N－10°－Eを指し，遺構形体は不明である。

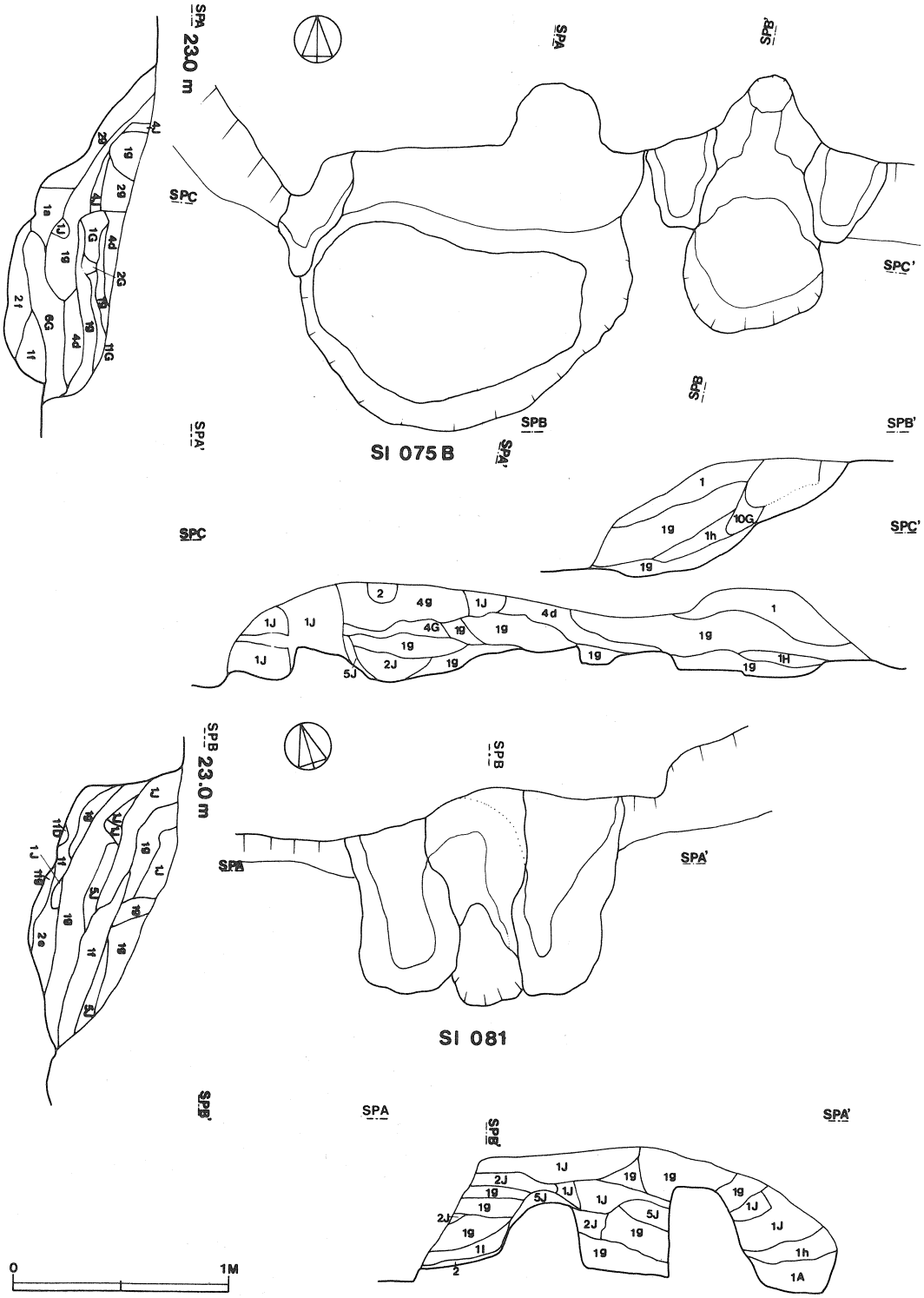
壁は，床面からやや斜めに立ち上がり，壁高54cmを測る。床面は全体に凸凹して軟弱であり，75－A号竪穴住居跡より底い。壁溝は確認されない。ピットは5か所確認され，深さは50～60cmを測る。

竈は，北壁に確認され，粘土・砂によって構築され，焚口・火床からなだらかに立ち上がり，煙道・煙出し孔を作っている。

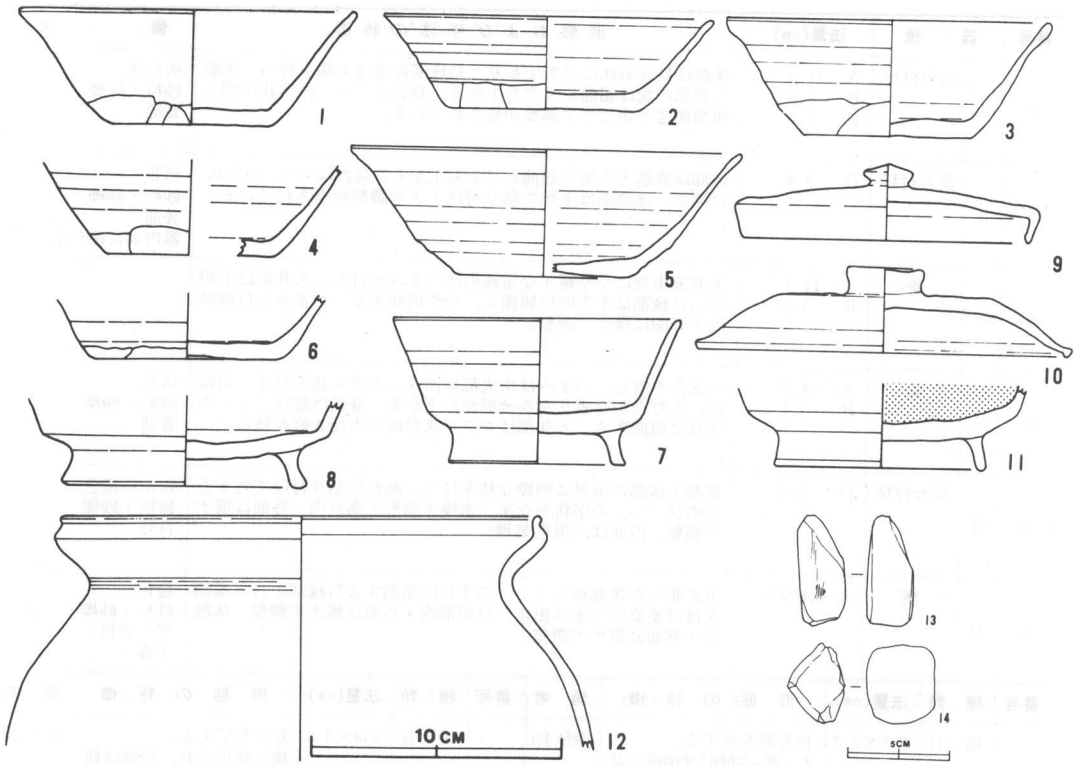
遺物は，土師器・須恵器・漆紙が出土している。



第138図　75－A・B・79・81号竪穴住居跡実測図



第139図　75－B・81号竪穴住居跡竈実測図



第140図　75－A・B号竪穴住居跡出土遺物実測図

75－A・B号竪穴住居跡出土遺物観察表（第140図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 13.2 B 4.6 C 6.3	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反し，口唇部は丸味を持つ。器面はロクロ水挽き成形で，底部は篦切り後，篦削りが施されている。	青灰色 砂粒・砂礫・礫 良好
2	S	坏	A 13.0 B 3.7 C 7.6	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反し，先端部は丸味を持つ。器面はロクロ成形時の水挽き痕が残り，凸凹している。底部は篦切り後，篦削りが施されている。	灰色 砂粒・砂礫・礫 良好
3	S	坏	A 12.8 B 4.6 C 6.7	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反し，先端部は丸味を持つ。器面はロクロ成形時の水挽き痕が残り，凸凹している。底部は篦切り後，篦削りが施されている。	灰色 砂粒・砂礫・礫 良好
4	S	坏		口縁部欠損。器面はロクロ水挽き成形。底部は篦切り後，篦削りが施されている。	灰色 砂粒・砂礫・礫 普通
5	S	坏	A 15.3	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反し，丸味を持つ。底部は上げ底気味である。器面はロクロ水挽き成形で，凸凹している。底部は篦切り。	灰白色 砂粒・砂礫 良好
6	S	坏	C 7.5	底部破片である。底部は上げ底を呈す。器面はロクロ水挽き成形。底部には篦切り後，篦削りが施されている。	灰白色 砂粒・砂礫 普通

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
7	S	高台付坏	A 11.3 B 5.8 D 7.0	体部は外反気味に立ち上がり，口縁部先端は丸味を持つ。体部と底部の境は屈曲して立ち上がる。高台は「ハ」の字状に開き接地面は平坦でナデ調整が施されている。	灰白色 砂粒・砂礫 普通
8	S	高台付坏	D 9.4	体部は底部との境で屈曲して立ち上がる。高台は「ハ」の字状に開き，接地面は平坦で貼り付け・ナデ調整が施されている。	灰色 砂粒・砂礫 普通 器内面に漆付着
9	S	蓋	A 11.4 B 3.0	天井部中央にやや扁平な宝珠形のつまみが付く。天井部は平坦で，口縁部は下方向に屈曲し，やや内傾する。つまみと口縁部内・外面は横ナデ調整。	
10	S	蓋	A 14.7 B 3.4	つまみを有し，つまみは中央部が凹み，ボタン状を呈す。頂部は，なだらかな張りをみせ肩から下がる。身受け部は「く」の字状に屈曲する。天井部はロクロ成形時の水挽き痕が残る。	灰色 砂粒・砂礫 普通
11	H	高台付坏	D 8.6	底部と体部の境界に明瞭な稜を持つ。高台は貼り付けで外下方にのび「ハ」の字状をなす。水挽き成形で高台内・外面は横ナデ調整。内面は，黒色処理。	にぶい橙色 砂粒・砂礫 良好
12	H	甕	A (18.9)	丸く張った体部から「く」の字状に屈曲する口縁部が付き端部をほぼ垂直につまみ出す。口頸部内・外面は横ナデ調整。体部内・外面は篦ナデ調整。	橙色 砂粒・砂礫・スコリア・雲母 不良

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
13	砥石	5.5×2.2	長方形を呈する。 表・裏・側面に使用痕が認められ，数条の溝がみられる。	凝灰岩	14	砥石	3.8×3.3	方形を呈する。 稜も使用され，側面は研摩により凹み摩滅し滑らかである。	凝灰岩

76号竪穴住居跡（第141図）

調査区B3$_{i0}$区を中心に位置し，東西6.0m・南北5.0mを測り，主軸方向N－4°－Eを指し，隅丸方形を呈している。南側で，18号竪穴住居跡と重複している。

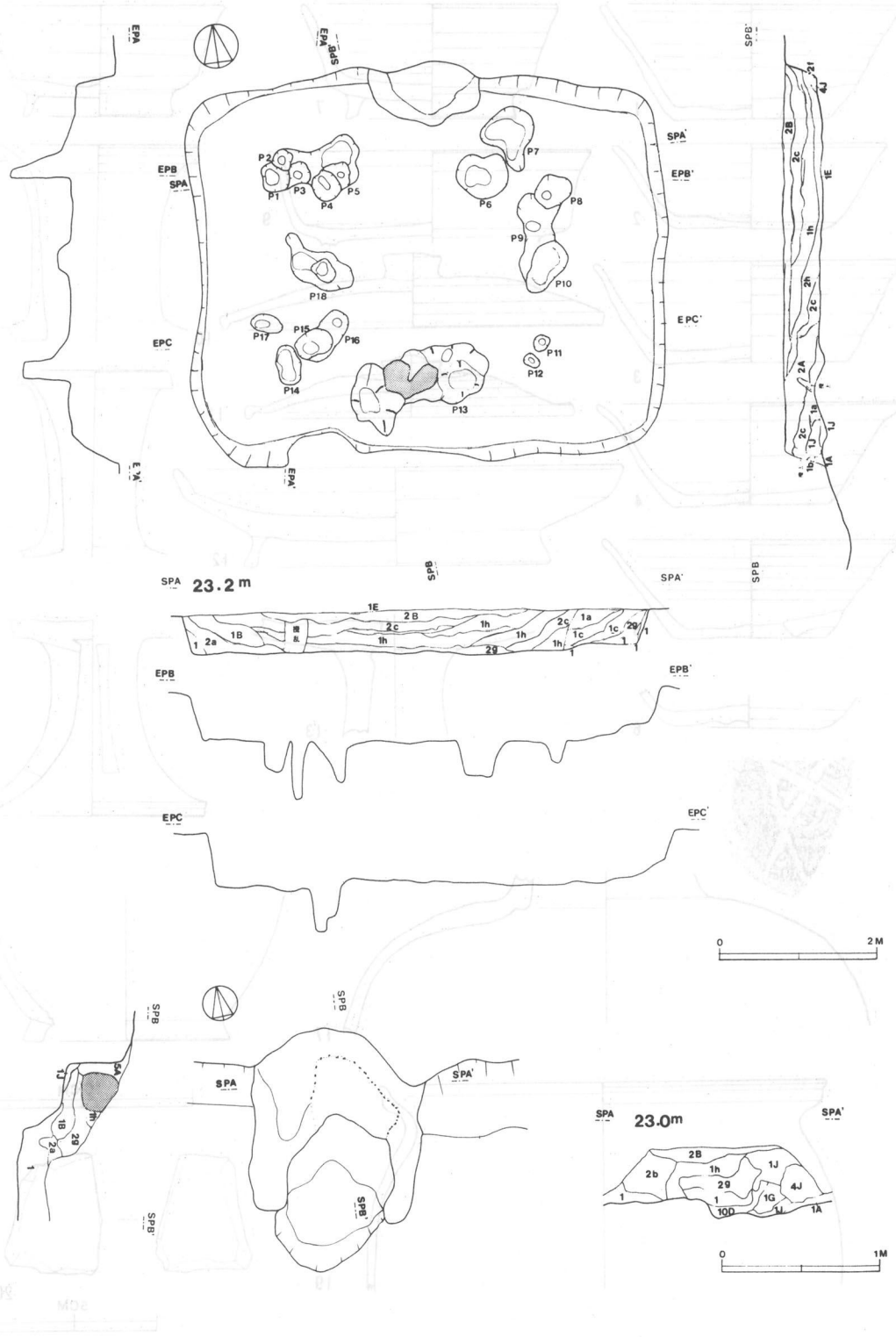
壁は，床面からやや斜めに立ち上がり，壁高は50cmを測る。床面は全体に凹凸しているが，竈周辺を中心に踏み固められている。壁溝は，確認されない。ピットは18か所確認され，深さは25～70cmを測る。

竈は，北壁中央部より西側に位置し，粘土・砂により構築され，焚口からゆるやかに立ち上がり，煙道・煙出し孔を作っている。

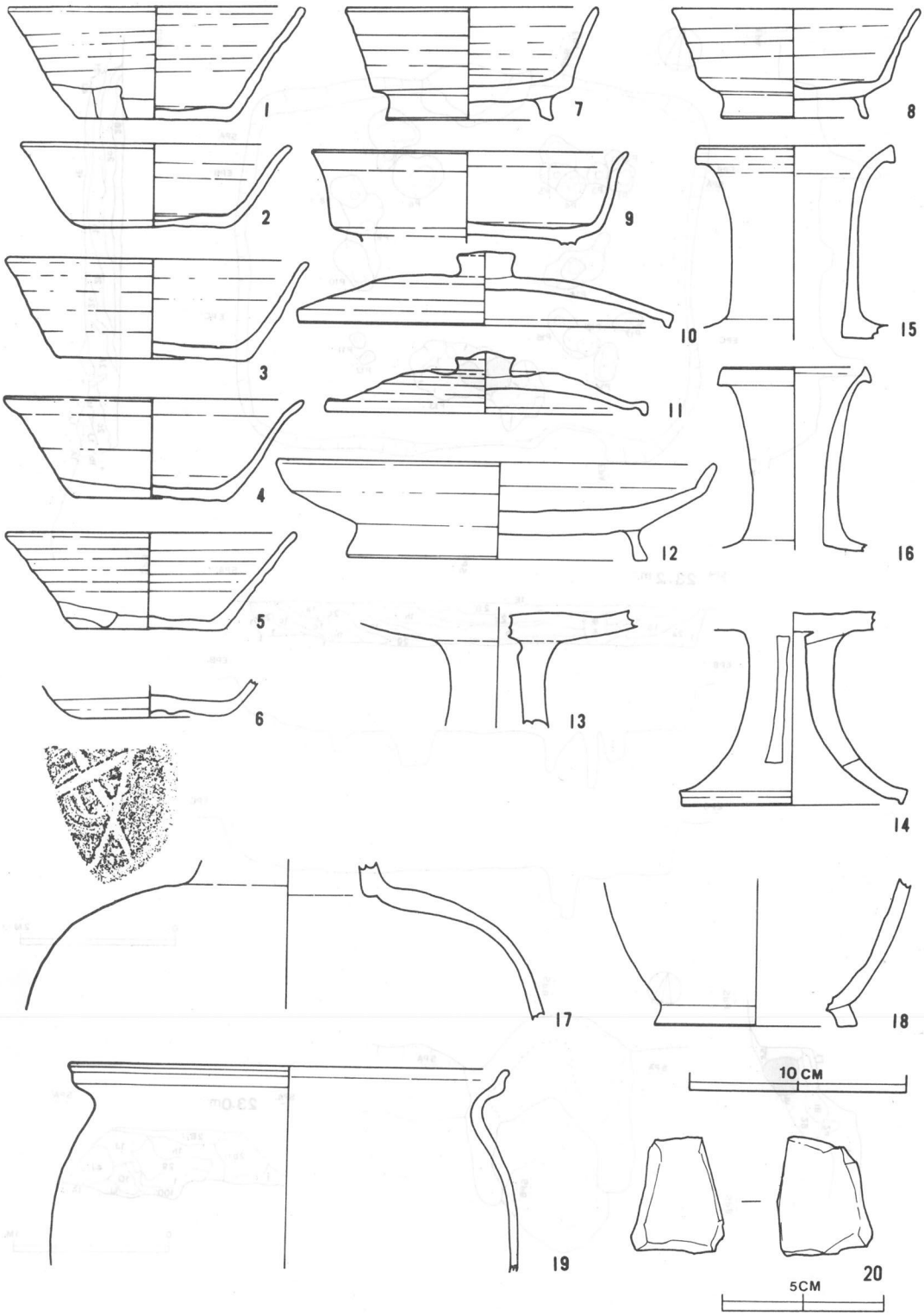
遺物は，土師器・須恵器・漆付着土器が出土している。

76号竪穴住居跡出土遺物観察表（第142図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 13.5 B 5.1 C 7.0	体部は外反気味に立ち上がり，口縁部は内彎気味に立ち，先端部は丸味を持つ。器面はロクロ成形時の水挽き痕が残り，底部は篦切り後篦削りが施されている。	灰色 砂粒・砂礫・礫 良好



第141図　76号竪穴住居跡・竈実測図



第142図　76号竪穴住居跡出土遺物実測図

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
2	S	坏	A 12.3 B 4.0 C 6.7	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反する。口唇部は丸味を呈す。器肉は厚い。器面内部にはロクロ成形時の水挽き痕を残す。	灰白色 砂粒・砂礫 普通
3	S	坏	A 13.8 B 4.6 C 8.5	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反し，口唇部は丸味を呈す。底部は上げ底気味である。器面にはロクロ成形時の水挽き痕が残り，底部は篦切り後，篦削りが施されている。	灰色 砂粒・砂礫・礫 良好
4	S	坏	A 13.7 B 4.6 C 7.0	体部は外反気味に立ち上がり，口縁部はさらに折れ，口唇部は丸味を呈す。底部は上げ底を呈し，器面には水挽き痕が残り，底部は篦切り後，篦削りが施されている。	灰色 砂粒・砂礫・礫 良好
5	S	坏	A 13.3 B 4.6 C 6.8	体部は外反気味に立ち上がり，口唇部は丸みを呈す。底部は上げ底を呈し，器面には水挽き痕が残り，凸凹している。底部は篦切り後，篦削りが施されている。	灰白色 砂粒・砂礫・雲母 普通
6	S	坏	C 6.8	底部破片。底部は上げ底を呈し体部には水挽き痕が残る。	灰白色 砂粒・砂礫・雲母 普通 底部外面に篦記号
7	S	高台付坏	A 11.5 B 5.2 D 7.7	体部は外反気味に立ち上がり，口縁部先端は折れ，丸味を持つ。体部と底部の境は屈曲して立ち上がり突き出る。高台は「ハ」の字状に開き，接地面は尖る。高台は貼り付け，ナデ調整。器面に水挽き痕が残されている。	灰白色 砂粒・砂礫・雲母 良好
8	S	高台付坏	A 11.4 B 5.0 D 6.7	体部は外反気味に立ち上がり，口唇部は折れ，丸味を持つ。体部と底部の境は屈曲して立ち上がり突き出て稜を持つ。高台は「ハ」の字状に開き接地面は丸みを持つ。器面は水挽きにより凸凹を呈し，高台は貼り付け，ナデ調整が施されている。	暗灰色 砂粒・砂礫 良好
9	S	高台付坏	A 14.4	底部欠損。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反し，口唇部は丸味を持つ。器面には水挽き痕が残る。	灰色 砂粒・砂礫・礫 良好 自然釉 器内面に漆付着
10	S	蓋	A 17.0 B 3.4	天井部につまみを有す。頂部はなだらかに張りを見せ肩部から直線的に開きながら下がる。受け部はあまり張らず，僅かにかかるものである。	灰色 砂粒・砂礫・礫 良好
11	S	蓋	A 14.8 B 2.8	天井部につまみを有しつまみは宝珠状をなす。頂部は張りをみせ肩から直線的に開きながら下がる。身受け部が「く」の字状に屈曲する。	灰色 砂粒・砂礫・礫 良好
12	S	台付盤	A 20.1 B 4.5 D 13.9	底部はやや丸味を持ち高台は張り，接地面は平坦である。体部は屈曲して外反気味に立ち上がる。高台は貼り付け・ナデ調整が施されている。体部には水挽き痕が残る。	灰白色 砂粒・砂礫・雲母 普通
13	S	高坏		坏底部・脚部破片。脚部に二か所の透しがある。	灰色 砂粒・砂礫 良好
14	S	高坏		脚部破片。脚裾部は若干反る。透し三か所。	灰色 砂粒・砂礫 良好
15	S	長頸壺	A 9.0	頸部は開き気味に立ち上がる。頸部は肩部端上にのってひき上げられている。口縁部は外反する。	灰白色 砂粒・砂礫 良好 自然釉
16	S	長頸壺	A 6.7	頸部は開き気味に立ち上がる。肩部は大きく張る形を呈す。口縁部は外反する。	灰色 砂粒・砂礫 良好 自然釉

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
17	S	短頸壺		肩部・胴部破片である。頸部は肩部端上にのってひき上げられている。頸部下側がややぶ厚で，肩部から胴部にかけては薄く仕上げられている。	灰色 砂粒・砂礫 良好 自然釉
18	S	台付壺		底部破片。高台は低く接地面が広い。	灰色 砂粒・砂礫 良好
19	H	甕	A（20.3）	丸く胴の張った体部から「く」の字状に屈曲する口縁部が付き，端部を外上方につまみ出し丸くおさめる。口頸部内・外面は，横ナデ調整。体部内・外面は箆ナデ調整。	にぶい橙色 砂粒・砂礫・長石・石英粒・雲母・スコリア 普通
20	砥石		4.1×4.0	方形を呈する。表・裏・側面に使用痕が認められ，全体に滑らかである。	凝灰岩

77号竪穴住居跡（第143・144図）

調査区B3h$_0$区を中心に位置し，78号竪穴住居跡と重複している。東西8.0m・南北5.5mを測り，主軸方向N－10°－Eを指し，隅丸長方形である。

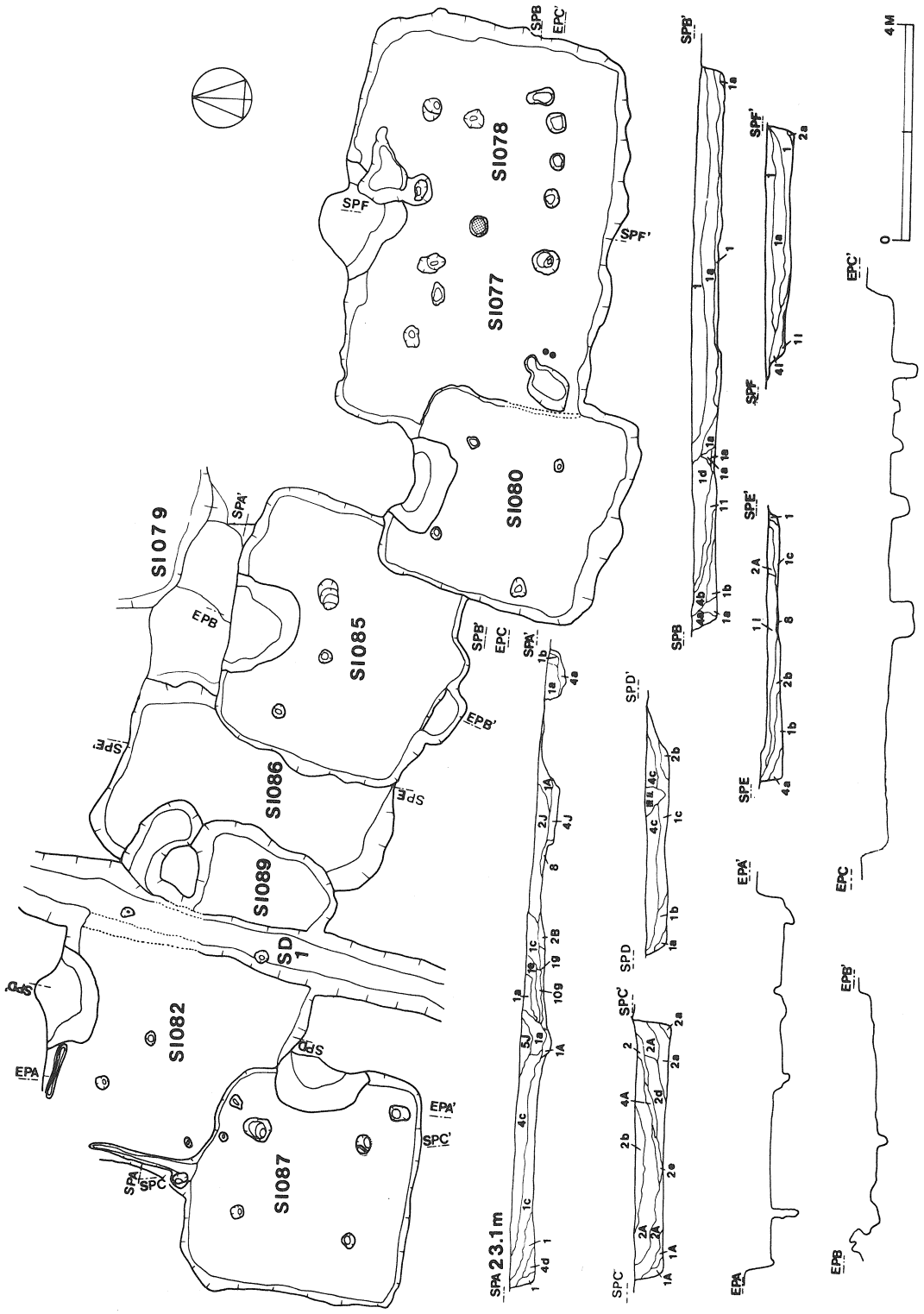
壁は，床面からやや斜めに立ち上がり，壁高は55cmを測る。床面は全体に平坦であるが，部分的に凹凸しており，黒色土・ロームブロック混じりで軟弱である。壁溝は確認されない。ピットは12か所確認され，深さは20～30cmを測る。

竈は，北壁中央部より西側に位置し，再構築している。粘土・砂によって構築され，保存状態が良い。

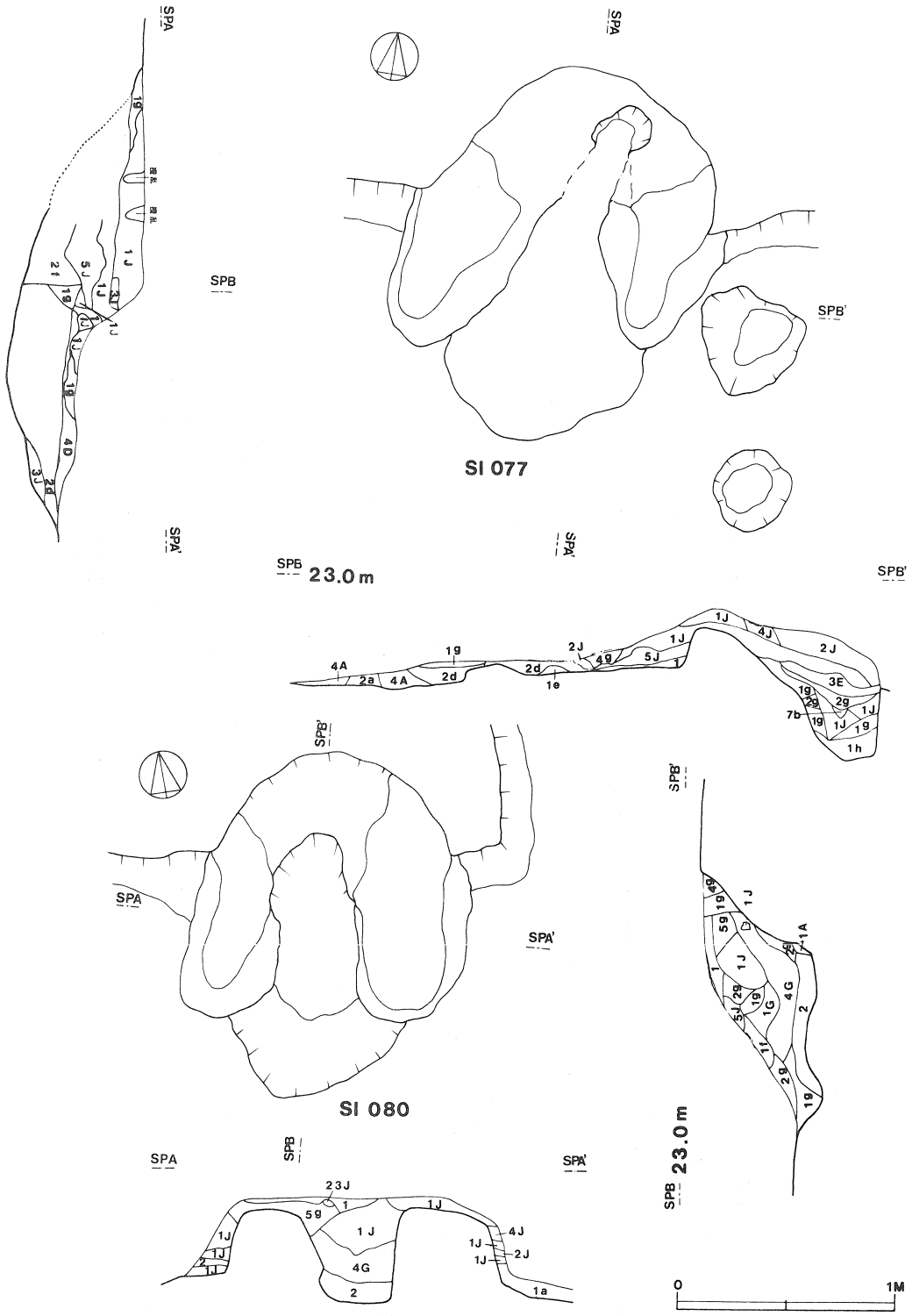
遺物は，土師器・須恵器・漆付着土器・漆紙が出土している。

77号竪穴住居跡出土遺物観察表（第145図）

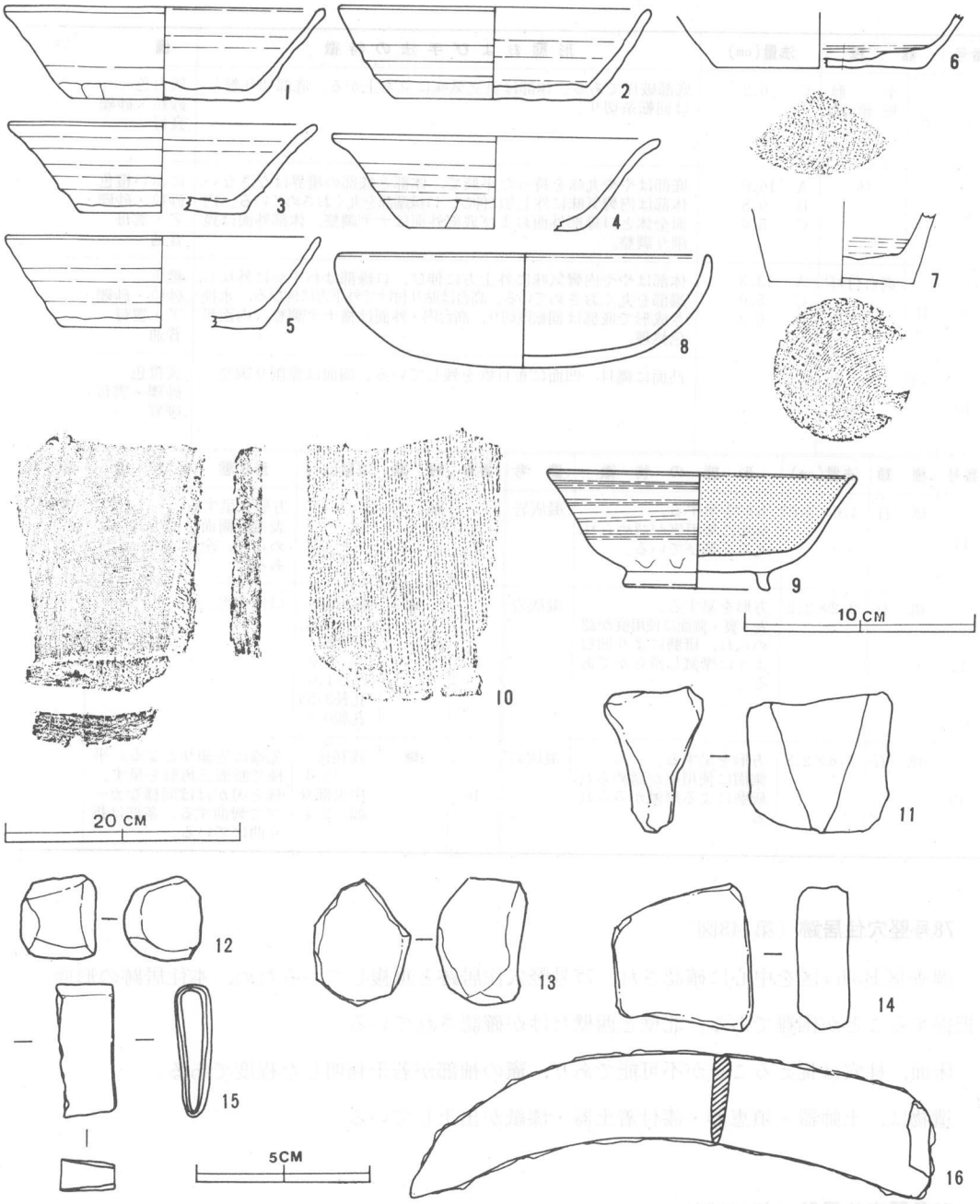
番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 13.8 B 4.0 C 8.0	体部は外反気味に立ち上がる。口唇部先端は丸味を持つ。底部は上げ底を呈す。器内・外面に水挽き痕が残り，凸凹している。底部は箆切り後箆削りが施されている。	褐灰色 砂粒・砂礫 良好
2	S	坏	A 13.2 B 4.0 C 8.4	体部は内彎気味に立ち上がり，口唇部は丸味を持つ。器面は厚い。器面には水挽き痕が残り，凸凹している。底部は箆切り後，箆削りが施されている。	黄灰色 砂粒・砂礫 普通
3	S	坏	A 13.1 B 3.9 C 7.0	体部は外反気味に立ち上がり，口唇部は丸みを持つ。底部は上げ底を呈す。器面は水挽き痕が残り，凸凹している。底部は箆切り後，箆削りが施されている。	灰白色 砂粒・砂礫・礫 普通
4	S	坏	A 14.1 B 4.0 C 7.4	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反し，口唇部は丸味を持つ。器面は水挽き痕が残り，凸凹している。底部は箆切り後，箆削りが施されている。	灰白色 砂粒・砂礫・礫 良好



第143図　77・78・80・82・85・86・87・89号竪穴住居跡実測図



第144図　77・80号竪穴住居跡竈実測図



第145図　77号竪穴住居跡出土遺物実測図

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
5	S	坏	A 13.4 B 3.9 C 8.6	体部は直立する。口縁部は丸味を持つ。器面には水挽き痕が残り，凸凹している。底部は篦切り後，篦削りが施されている。	灰白色 砂粒・砂礫・雲母 普通
6	S	坏		底部破片である。器内面に水挽き痕が残る。底部切り離しは回転糸切り。	灰白色 砂粒・砂礫 良好 器面に自然釉

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
7	S	小形短頸壺	C 6.2	底部破片である。体部は直立気味に立ち上がる。底部切り離しは回転糸切り。	灰白色 砂粒・砂礫 良好
8	H	坏	A 16.0 B 9.8 C 5.0	底部はやや丸味を持った平底で，体部と底部の境界はなさない。体部は内彎気味に外上方に伸び，口縁端部を丸くおさめている。内面全体と口縁部外面および底部外面はナデ調整。体部外面は篦削り調整。	にぶい橙色 砂粒・砂礫・スコリア・雲母 普通
9	H	高台付坏	A 13.3 C 5.0 D 6.3	体部はやや内彎気味に外上方に伸び，口縁部はわずかに外反し，端部を丸くおさめている。高台は貼り付けで外下方に伸びる，水挽き成形で底部は回転篦切り，高台内・外面は横ナデ調整。内面黒色処理。	橙色 砂粒・砂礫・スコリア・雲母 普通
10	平瓦			凸面に縄目，凹面に布目痕を残している。端面は篦削り調整。	黄橙色 砂礫・雲母 硬質

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
11	砥石	4.0×3.8	方形を呈する。 全面に使用痕が認められ，丸みを帯びている。	凝灰岩	14	砥石	4.1×4.0	方形を呈する。 表・裏・側面に使用痕が認められ，全体に滑らかである。	凝灰岩
12	砥石	2.2×2.2	方形を呈する。 表・裏・側面に使用痕が認められ，研磨により凹むように摩滅し滑らかである。	凝灰岩	15	鏃	最大長 3.8 最大幅 1.0 厚さ1.6 孔長3.55 孔幅0.5	ほぼ完形。	銅製
13	砥石	3.6×2.8	方形を呈する。 側面に使用痕が認められ，研磨による摩滅がみられる。	凝灰岩	16	鎌	残存長 15.3 中央部身幅 2.4	先端は先細りとなる。平棟で断面三角形を呈す。棟と刃がほぼ同様なカーブで彎曲する。茎部は折り曲げている。	

78号竪穴住居跡（第143図）

調査区B3h_9区を中心に確認され，77号竪穴住居跡と重複しているため，本住居跡の形態は，把握することが困難である。北壁と西壁だけが確認されている。

床面，柱穴は捉えることが不可能であり，竈の袖部が若干判明した程度である。

遺物は，土師器・須恵器・漆付着土器・漆紙が出土している。

79号竪穴住居跡（第138図）

調査区B3f_8区を中心に確認され，75・81号竪穴住居跡と重複している。本住居跡の規模等については，正確に把握できないが，東西6.8m・南北6.0mを測り，主軸方向N－2°－Eを指し，隅丸方形を呈していたものとみられる。

壁は，床面よりやや斜めに立ち上がり，壁高50cmを測る。床面は75号竪穴住居跡と同様に黒色土・ロームブロック混じりであり，全体に軟弱である。壁溝は確認されない。ピットは75・79号竪穴住居跡と合わせて33か所確認されたが，当住居跡に伴う主柱穴は，P_1・P_{10}・P_{12}・P_{22}とみら

れる。

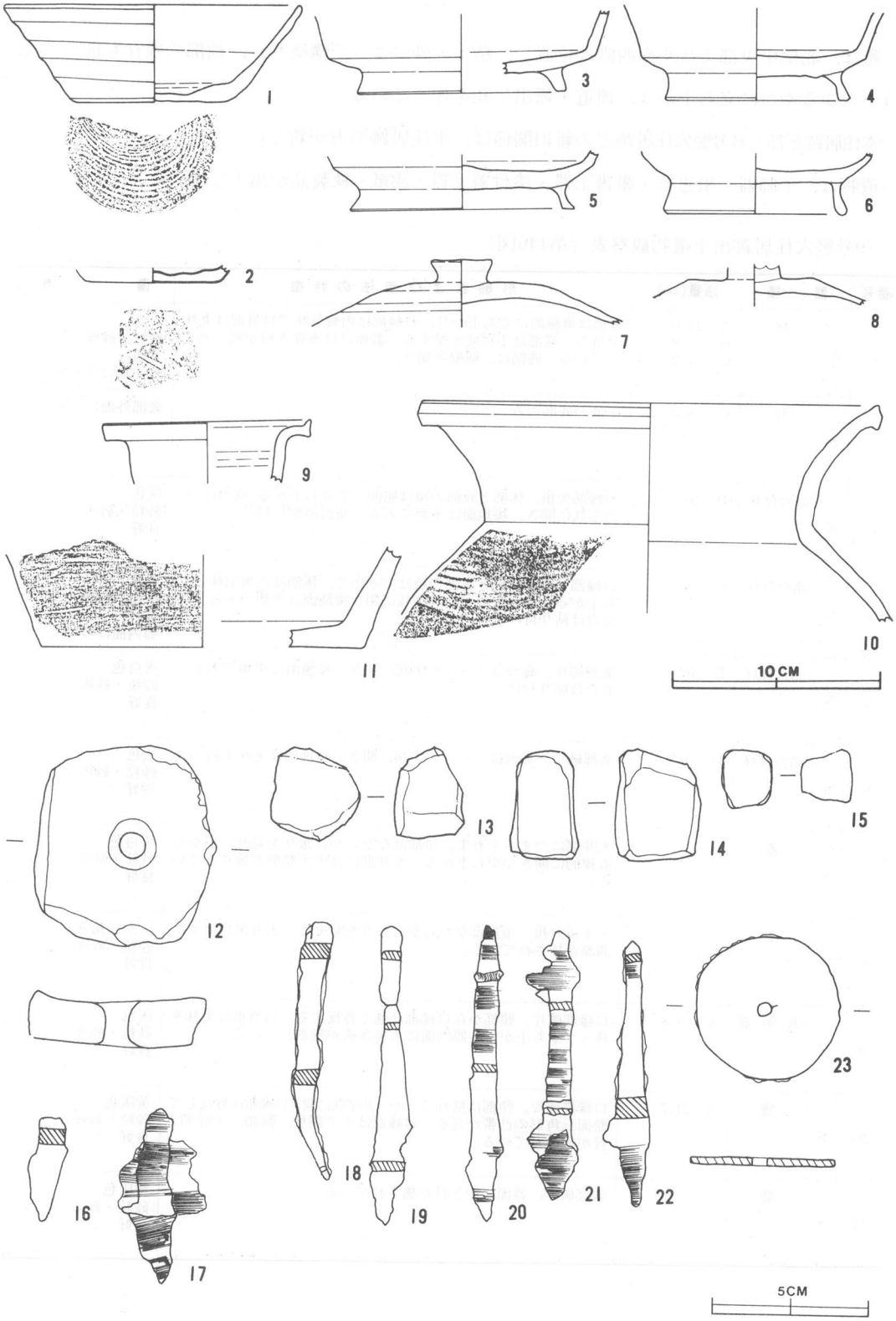
竈は，北壁中央部よりやや西側に位置し，粘土・砂によって構築され，袖部の残存も良い。焚口からゆるやかに立ち上がり，煙道・煙出し孔を作っている。

本住居跡と75－B号竪穴住居跡との新旧関係は，本住居跡の方が新しい。

遺物は，土師器・須恵器・墨書土器・漆付着土器・漆紙・鉄製品が出土している。

79号竪穴住居跡出土遺物観察表（第146図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 14.0 B 5.8 C 7.2	体部は直線的に立ち上がり，口縁部は内彎気味で口唇部は丸味を持つ。底部は上げ底を呈する。器面には水挽き痕が残り凸凹している。底部は，回転糸切り。	灰色 砂粒・砂礫・礫 普通 器内面に漆付着
2	S	坏	C 6.3	平底の底部のみ。	底部外面に箆書
3	S	高台付坏	D 10.0	口縁部欠損。体部と底部の境は屈曲して立ち上がる。高台は「ハ」の字状に開き，接地面は平坦である。高台は貼り付け。	灰色 砂粒・砂礫 良好
4	S	高台付坏	D 8.7	口縁部欠損。体部と底部の境は突き出て，体部は内彎気味に立ち上がる。高台は「ハ」の字状に開き接地面は平坦である。高台は貼り付け。	灰色 砂粒・砂礫 良好 器内面に漆付着
5	S	高台付坏	D 10.6	底部破片。高台は「ハ」の字状に開き，接地面は平坦である。高台は貼り付け。	灰白色 砂粒・砂礫 良好
6	S	高台付坏	D 8.5	底部破片。高台は「ハ」の字状に開き，接地面は丸味を持つ。	灰色 砂粒・砂礫 良好
7	S	蓋		天井部につまみを有す。頂部はなだらかに張りを見せ，肩から直線的に開きながら下がる。天井部にはナデ整形が施されている。	灰白色 砂粒・砂礫 良好
8	S	蓋		つまみ欠損。頂部はなだらかに張りを見せる。天井部にはナデ調整が施されている。	にぶい褐色 砂粒・砂礫 良好
9	S	長頸壺	A 9.8	口縁部破片。頸部から口縁部は強く外反する。口唇部は丸味を持って立ち上がる。器内面に水挽き痕が残されている。	灰色 砂粒・砂礫 良好
10	S	甕	A 21.7	口縁部破片。頸部は括れて「ハ」の字状に開き口縁部は外反して断面三角形の凸帯が巡る。口縁部はナデ調整，胴部に平行叩き目が施されている。	黄灰色 砂粒・砂礫 良好
11	S	甕		底部破片。器面に叩き目が施されている。	黄灰色 砂粒・砂礫 良好



第146図　79号竪穴住居跡出土遺物実測図

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
12	有孔円板	長径6.3 短径5.7 孔径0.7 厚さ1.3	周辺は割っただけで磨いていない。	須恵器甕片利用	15	砥石	3.6×2.7	方形を呈する。 表・裏・側面に使用痕がみられ，全体に滑らかである。	凝灰岩
13	砥石	1.8×1.6	方形を呈する。 全面に使用痕が認められ，丸味を帯びている。	凝灰岩	16 ~ 22	釘		先端部が尖り，全体に断面は方形を呈す。 18は全長(8.2)cm。 太さ0.5cm。	先端部に木質が残っている。
14	砥石	3.0×2.7	方形を呈する。 全面に使用痕が認められ研磨により凹みが側面に認められる。	凝灰岩	23	紡錘車	直径4.55 孔径0.4	円板部分である。	

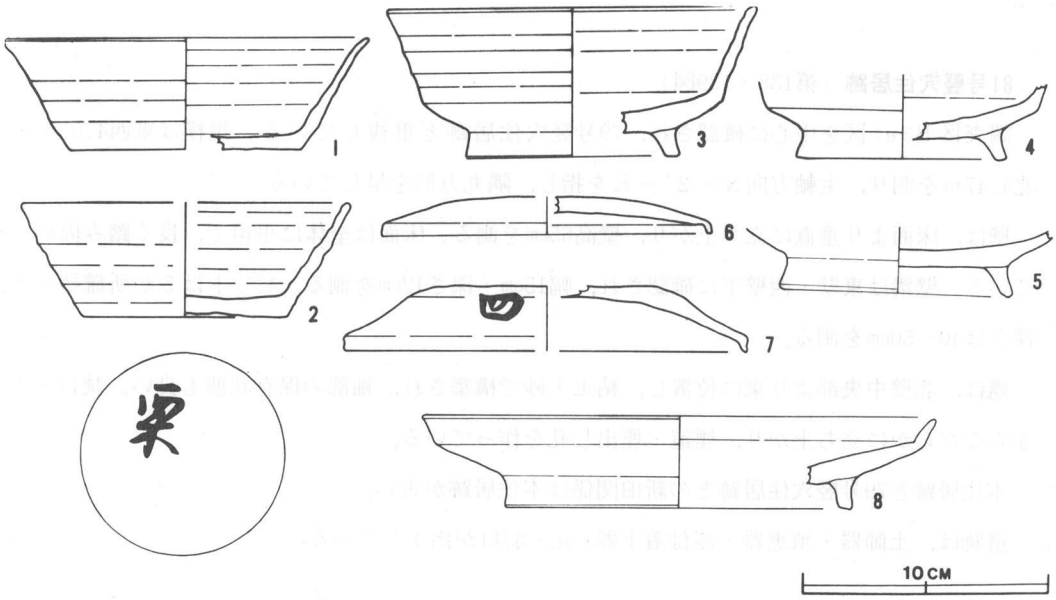
80号竪穴住居跡（第143・144図）

調査区B3h8区を中心に確認され，78・85号竪穴住居跡と重複している。規模は東西4.0m・南北4.5mを測り，主軸方向N－16°－Eを指し，隅丸方形を呈している。

壁は，床面から垂直に立ち上がり，壁高55cmを測る。床面は全体に踏み固められ，硬い。壁溝は確認されない。ピットは4か所確認され，深さは10～20cmを測る。

竈は，北壁中央部に位置し，粘土・砂で構築され，袖部の残存もよい。焚口・火床からゆるやかに立ち上がり煙道・煙出し孔を作っている。

遺物は，土師器・須恵器・墨書土器・漆紙が出土している。



第147図　80号竪穴住居跡出土遺物実測図

80号竪穴住居跡出土遺物観察表（第147図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 14.6 B 4.5 C 9.2	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反し，口唇部は丸味をもつ。器面には水挽き痕が残され，凸凹している。	灰白色 砂粒・砂礫 良好
2	S	坏	A 13.0 B 4.6 C 8.1	底部は平底で，体部と底部は明瞭な角度で分かれる。体部はやや内彎気味に外上方にのび，口縁端部を丸くおさめている。	底部外面に墨書
3	S	高台付坏	A 14.7 B 6.1	体部は外反気味に立ち上がる。体部と底部の境は屈曲して立ち上がり，稜を持つ。高台は広く，接地面は平坦である。器面には水挽き痕が残り，凸凹している。高台は貼り付けナデ調整。	オリーブ灰色 砂粒・砂礫 良好
4	S	高台付坏	D 8.5	口縁部欠損。体部と底部の境は屈曲して立ち上がる。高台は貼り付け，ナデ調整が施されている。	灰色 砂粒・砂礫 良好
5	S	高台付坏	D 9.3	底部破片。高台は「ハ」の字状に開き，接地面は丸い。高台は貼り付け，ナデ調整が施されている。	灰白色 砂粒・砂礫 良好 底部に漆付着
6	S	蓋	A 13.2	つまみを欠く。天井部は平坦となっている。身受け部が垂下する。天井部は篦削り。	灰白色 砂粒・砂礫 良好 天井部に自然釉
7	S	蓋	A 16.2	天井部中央につまみが付くが欠損。天井頂部は扁平で，やや反り気味に下降し，口縁部は下方向に屈曲し，端部はやや尖る。	天井部外面に墨書
8	S	台付盤	A 20.6 B 3.7	底部欠損。底部から僅かに稜を持って短い口縁部が外反気味に立つ。口唇部は丸味を持つ。高台は広く，接地面は平坦。高台は貼り付け・ナデ調整が施されている。	灰白色 砂粒・砂礫 良好

81号竪穴住居跡（第138・139図）

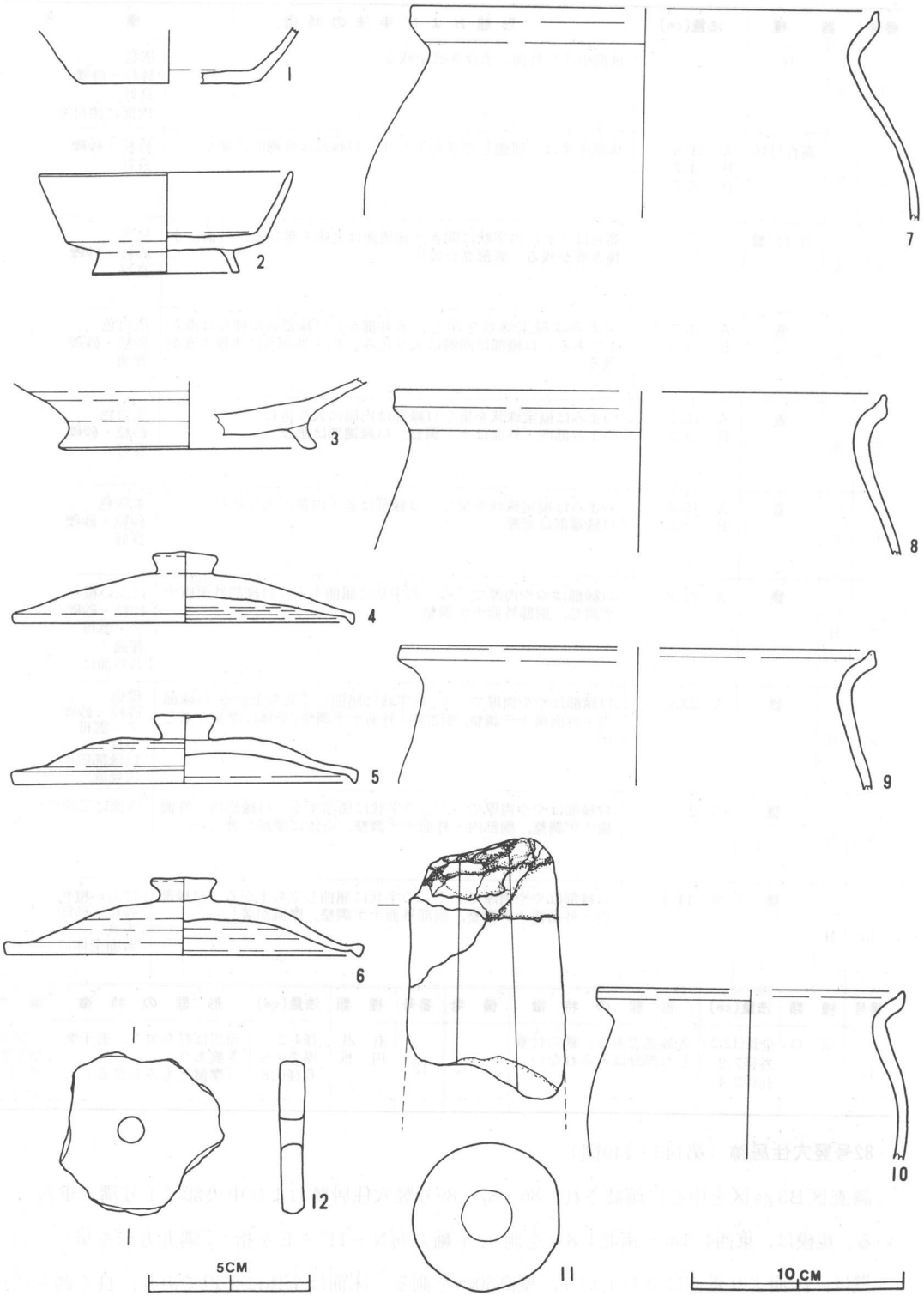
調査区B3e7区を中心に確認され，79号竪穴住居跡と重複している。規模は東西4.03m・南北4.47mを測り，主軸方向N－2°－Eを指し，隅丸方形を呈している。

壁は，床面より垂直に立ち上がり，壁高65cmを測る。床面は全体に平坦で，良く踏み固められている。壁溝は東壁・西壁下に確認され，幅15cm・深さ12cmを測る。ピットは5か所確認され，深さは40～50cmを測る。

竈は，北壁中央部より東に位置し，粘土・砂で構築され，袖部の保存状態も良い。焚口・火床からなだらかに立ち上がり，煙道・煙出し孔を作っている。

本住居跡と79号竪穴住居跡との新旧関係は本住居跡が古い。

遺物は，土師器・須恵器・漆付着土器・瓦・羽口が出土している。



第148図　81号竪穴住居跡出土遺物実測図

81号竪穴住居跡出土遺物観察表（第148図）

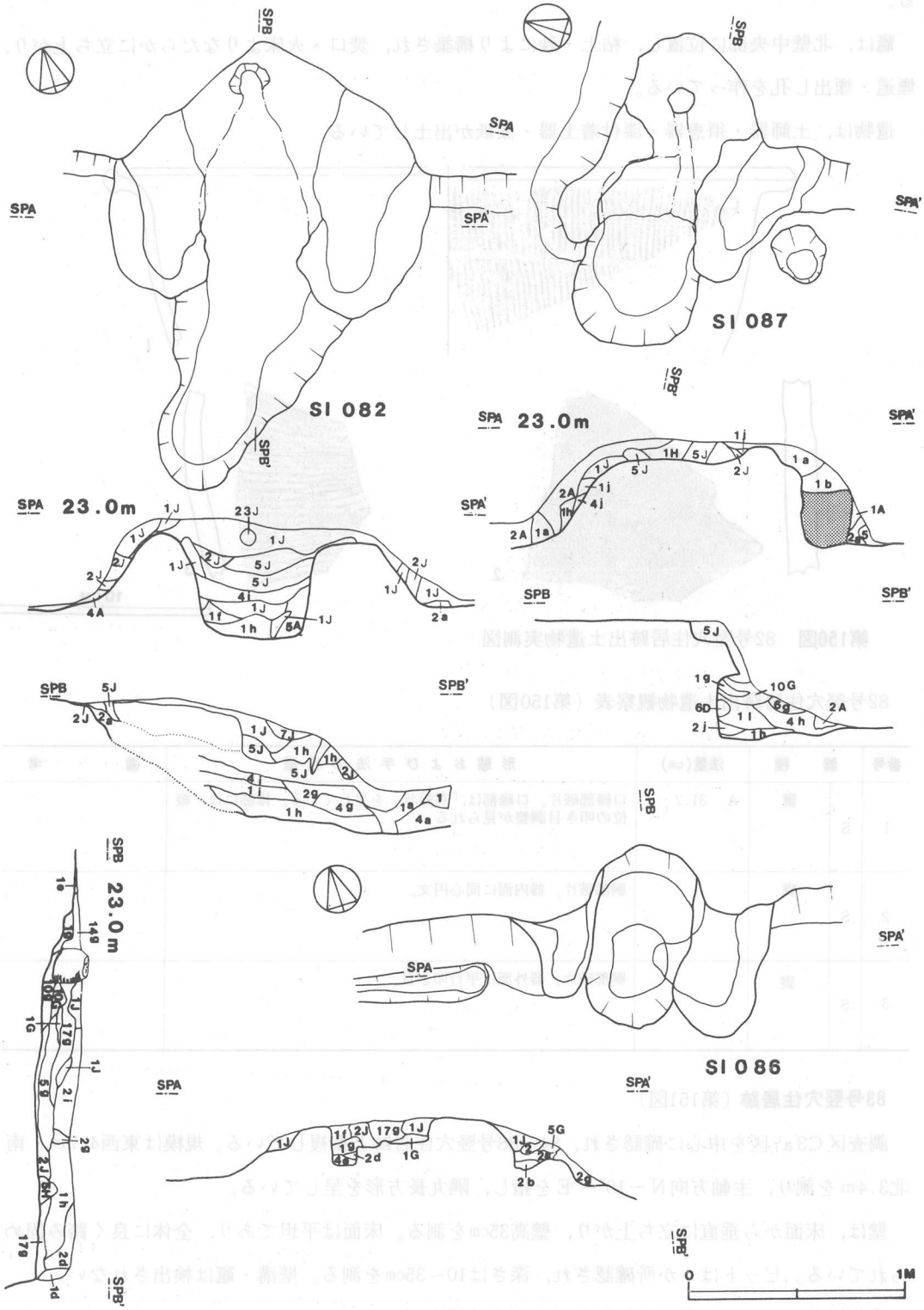
番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏		底部破片。外面に水挽き痕が残る。	灰色 砂粒・砂礫 良好 内面に漆付着
2	S	高台付坏	A 11.6 B 4.7 D 6.7	体部下半は，屈曲して立ち上がり，口縁部は直線的に開く。	砂粒・砂礫 良好
3	S	台付盤		高台は「ハ」の字状に開き，接地面は丸味を帯びる。外面に水挽き痕が残る。底部高台破片。	灰色 砂粒・砂礫 良好
4	S	蓋	A 15.7 B 3.3	つまみは擬宝珠状を呈し，天井部から口縁部への移行は滑らかである。口縁部は内側に入り込み，内・外面共に水挽き痕が残る。	灰白色 砂粒・砂礫・雲母 普通
5	S	蓋	A 15.7 B 3.2	つまみは擬宝珠状を呈し口縁部は内側に入り込む。 つまみ部内・外面はナデ調整。口縁端部は肥厚。	灰白色 砂粒・砂礫 良好
6	S	蓋	A 15.7 B 3.2	つまみは擬宝珠状を呈し，口縁部は若干内側に入り込む。 口縁端部は肥厚。	黄灰色 砂粒・砂礫 良好
7	H	甕	A 21.8	口縁部はやや肉厚で「く」の字状に屈曲する。口縁部外面横ナデ調整，胴部外面ナデ調整。	にぶい橙色 砂粒・砂礫・スコリア・雲母 普通 器外面に二次焼成
8	H	甕	A 23.0	口縁部はやや肉厚で「く」の字状に屈曲して立ち上がる。口縁部内・外面横ナデ調整，胴部内・外面ナデ調整。全体に摩滅が著しい。	橙色 砂粒・砂礫・スコリア・雲母 不良 口縁部内面に薄く二次焼成
9	H	甕	A 22.2	口縁部はやや肉厚で「く」の字状に屈曲する。口縁部内・外面横ナデ調整，胴部内・外面ナデ調整。全体に摩滅が著しい。	内面に二次焼成
10	H	甕	A 14.4	口縁部はやや肉厚で「く」の字状に屈曲し立ち上がる。口縁部内・外面横ナデ調整，胴部外面ナデ調整。摩滅が著しい。	にぶい橙色 砂粒・砂礫・雲母 不良 器面全体に二次焼成

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
11	羽口	全長(12.2) 外径7.2 孔径2.4	先端部である。鉄の付着した部分はみられない。		12	有孔円板	径4.2 厚さ0.8 孔径0.8	周辺は打ち欠き，若干磨き痕あり。 （摩滅ともみられる。）	土師器 甕胴部 利用 18g

82号竪穴住居跡（第143・149図）

調査区B3g5区を中心に確認され，86・87・89号竪穴住居跡および中央部で1号溝と重複している。規模は，東西4.3m・南北4.8mを測り，主軸方向N－11°－Eを指し，隅丸方形を呈している。

壁は，床面より垂直に立ち上がり，壁高50cmを測る。床面は全体に平坦であり，良く踏み固められている。ピットは3か所確認された。壁高は北壁・西壁に確認され，幅12cm・深さ6cmを測

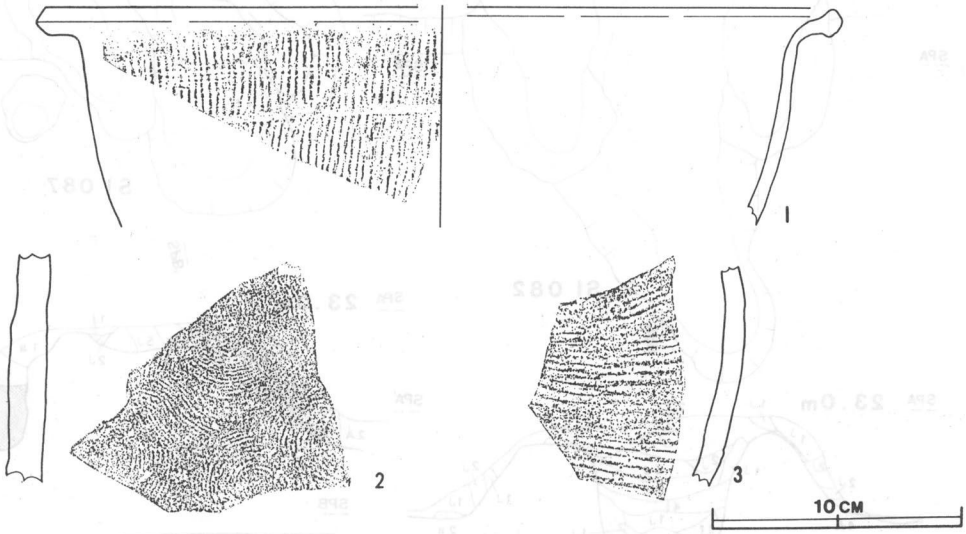


第149図　82・86・87号竪穴住居跡竈実測図

る。

竈は，北壁中央部に位置し，粘土・砂により構築され，焚口・火床よりなだらかに立ち上がり，煙道・煙出し孔を作っている。

遺物は，土師器・須恵器・漆付着土器・漆紙が出土している。



第150図　82号竪穴住居跡出土遺物実測図

82号竪穴住居跡出土遺物観察表（第150図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	甕	A　31.2	口縁部破片。口縁部は,「鳥頭状」を呈している。体部には，縦位の叩き目調整が見られる。	
2	S	甕		胴部破片。器内面に同心円文。	
3	S	甕		胴部破片。器外面に平行叩き目。	

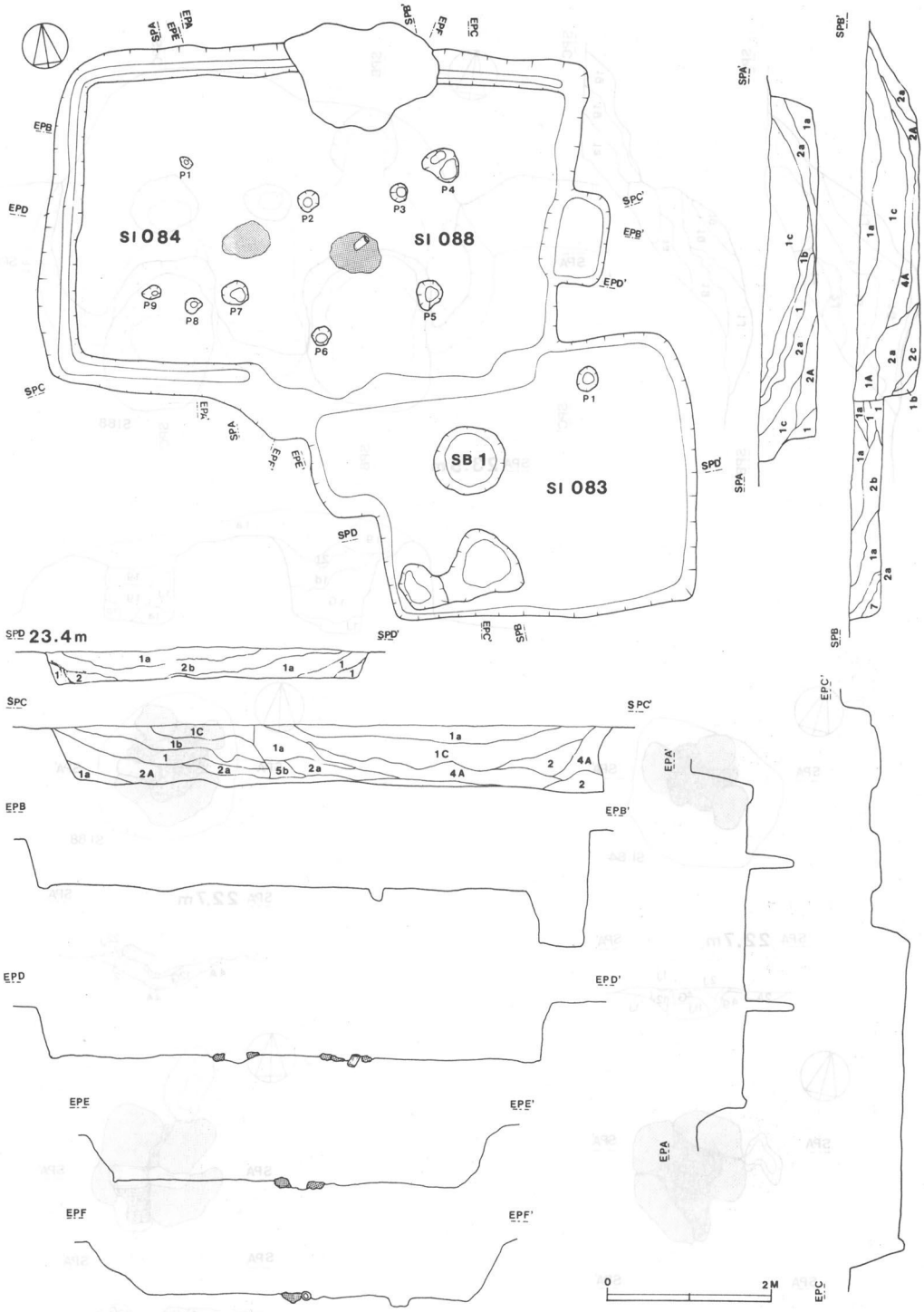
83号竪穴住居跡（第151図）

調査区C3a$_7$区を中心に確認され，84・88号竪穴住居跡と重複している。規模は東西4.7m・南北3.4mを測り，主軸方向N－10°－Eを指し，隅丸長方形を呈している。

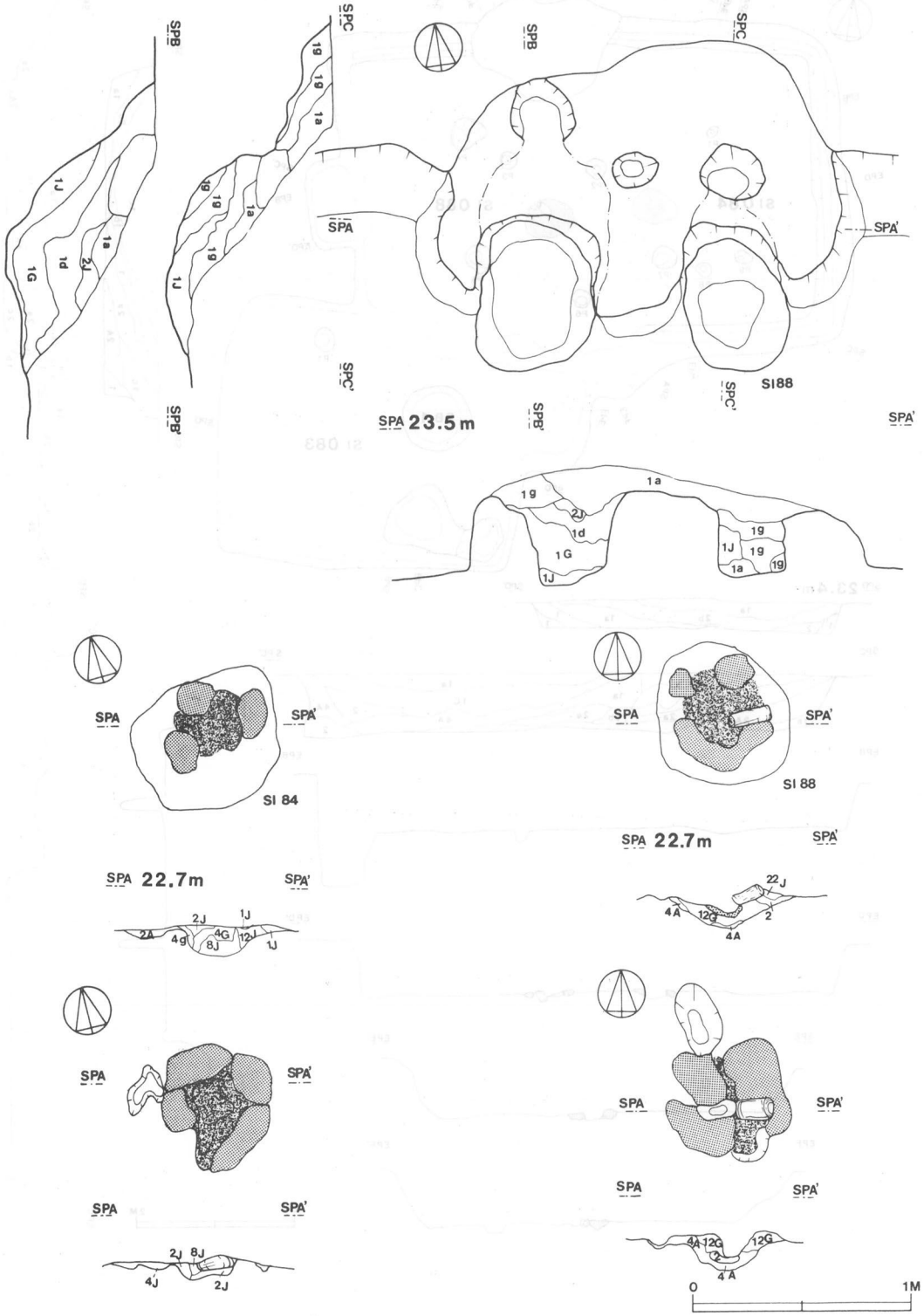
壁は，床面から垂直に立ち上がり，壁高35cmを測る。床面は平坦であり，全体に良く踏み固められている。ピットは4か所確認され，深さは10～35cmを測る。壁溝・竈は検出されない。

本住居跡は，84・88号竪穴住居跡によって破壊されている。

遺物は，土師器・須恵器が出土している。



第151図　83・84・88号竪穴住居跡実測図



第152図　84号竪穴住居跡炉跡，88号竪穴住居跡竈・炉跡実測図

84号竪穴住居跡（第151・152図）

調査区B3j7区を中心に確認され，東側で88号竪穴住居跡と重複している。規模は東西6.85m南北4.85mを測り，主軸方向N－12°－Eを指し，隅丸長方形を呈している。

壁は，床面から垂直に立ち上がり，壁高70cmを測る。床面はほぼ平坦であり，良く踏み固められている。壁溝は東壁・西壁・北壁下に確認され，幅25cm・深さ5cmを測る。ピットは6か所確認され，深さ50～60cmを測る。

竈は，88号竪穴住居の竈構築の際に破壊されている。他に鍛冶炉跡が検出された。

炉跡は，長軸45cm・短軸40cmを測るほぼ円形で，粘土・砂で構築されているが，4つのブロックの炉壁のうち一つが破壊されて検出された。

本炉跡の構造は，地山を掘り凹め，その上に粘土を張り，炉床としている。炉床粘土・炉壁は焼けて固化し，黒色ないし，灰黒色を呈し，炉跡付近地山は熱変化を受けている。

85号竪穴住居跡（第143図）

調査区B3g7区を中心に確認され，80・86号竪穴住居跡と重複している。規模は東西5.0m・南北4.3mを測り，主軸方向N－18°－Eを指し，隅丸方形を呈している。

壁は，床面よりやや斜めに立ち上がり，壁高30cmを測る。床面は全体に凹凸しているが，良く踏み固められている。ピットは3か所確認され，深さは40cmを測る。壁溝は確認されない。

竈は，北壁中央部に位置し，袖部は粘土・砂で構築されているが，残存部は少ない。

遺物は，土師器・須恵器が出土しているが，いずれも細片である。

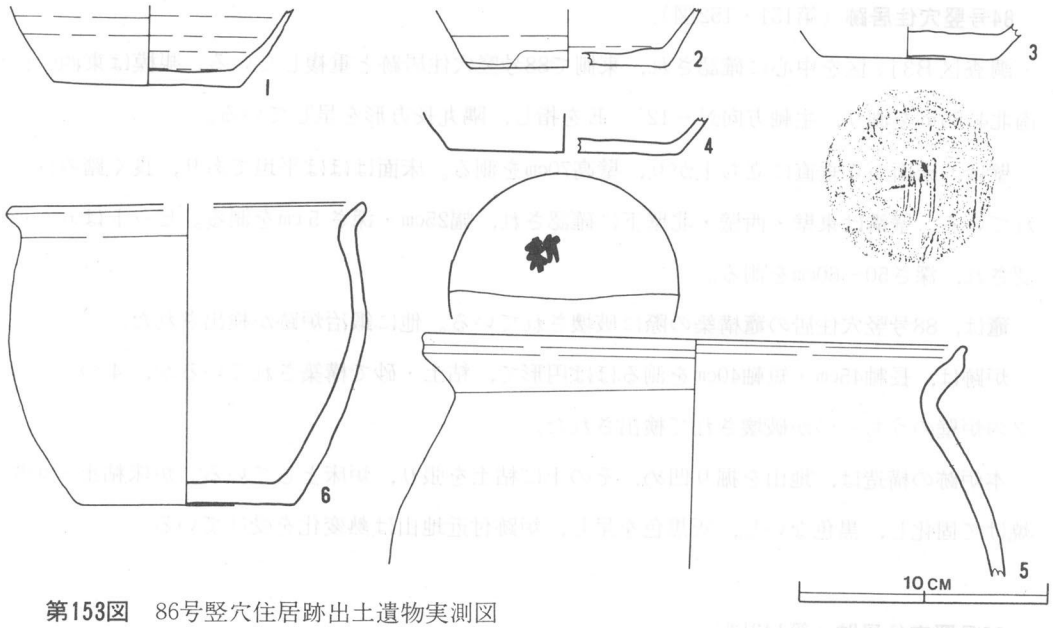
86号竪穴住居跡（第143図）

調査区B3g7区を中心に確認されているが，79・85・89号竪穴住居跡と重複し，壁と床面は一部しか確認できない。重複状況から，当住居跡は85・89号竪穴住居跡より古いことはわかるが，79号竪穴住居跡との関係は明らかでない。規模・形状については明確にできないが，東西6.0m内外・南北5.4mの隅丸長方形を呈していたものとみられる。

覆土は，北壁と南壁の一部しか残存していない。壁は若干傾斜をもって立ち上がり，高さ40cmを測る。床面はほぼ平坦である。ピットは明らかでない。

竈は，北壁中央部に位置し，長さ94cm・幅78cm・焚口幅35cmを測り，壁外へ30cm掘り込んでいる。袖部・天井部は山砂で築かれている。焼成部は床面と同じレベルで，焼土が若干推積している。奥壁はゆるやかに立ち上がる。焼成部中央に，土師器甕が倒立して出土し，支脚として利用したものとみられる。その他，土師器甕大破片が出土している。

遺物は，土師器・須恵器・鉄製品・漆紙が出土している。



第153図　86号竪穴住居跡出土遺物実測図

86号竪穴住居跡出土遺物観察表（第153図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	C　7.5	底部から内彎ぎみに立ち上がる。器内・外面はナデ調整。底部は篦削り後ナデ調整。	灰白色 砂粒・砂礫 良好
2	S	坏		底部は厚く外彎ぎみに立ち上がる。器面ナデ調整。底部は篦削り調整。	灰色 砂粒・砂礫 良好
3	S	坏		底部破片。底部は回転篦切り後ナデ調整。	長石粒・細砂 良好 底部に刻書
4	S	坏		底部破片。底部は篦切り後ナデ調整。	底部に墨書
5	H	甕	A　22.0	胴部上端に最大径があり，頸部で「く」の字に外反し口縁端部で立ち上がり，口縁部に1条の沈線が巡る。器内・外面ナデ調整。	にぶい橙色 砂粒・砂礫・雲母 不良
6	H	甕	A　14.0 B　12.2 C　8.5	胴部でふくらみ，頸部で「く」の字に外反し口縁上端部は立ち上がる。口縁部はナデ調整。胴部は横ナデ調整。底部は篦削り後ナデ調整。	にぶい赤褐色 砂粒・砂礫 不良

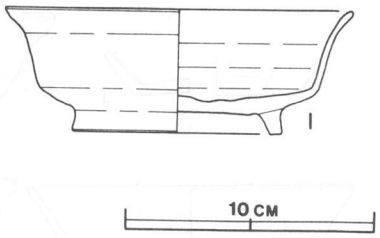
87号竪穴住居跡（第143図）

調査区B3f5区を中心に確認され，82号竪穴住居跡と重複している。東西4.2m・南北4.4mを測り，主軸方向N－92°－Eを指し，隅丸方形を呈している。

壁は，床面から垂直に立ち上がり，壁高は南壁65cm・北壁55cmを測る。床面は平坦で，良く踏み固められている。ピットは7か所確認され，深さは20～50cmを測る。壁溝は，確認されない。

竈は，東壁中央部に位置し，残存部が少なく，若干袖部が確認されたにすぎない。袖部は，粘土・砂で構築されている。

遺物は，土師器・須恵器が出土している。



第154図　87号竪穴住居跡出土遺物実測図

87号竪穴住居跡出土遺物観察表（第154図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	高台付坏	A 13.8 B 4.9 C 8.3	底部から内彎ぎみに立ち上がり口縁部で外反する。底部に大き目の高台が付き，接地面は平坦。器内・外面は水挽き成形。	灰色 砂粒・砂礫 普通 器内・外面に漆付着

88号竪穴住居跡（第151図）

調査区B3j7区を中心に確認され，84号竪穴住居跡と重複している。東西3.5m・南北4.0mを測り，主軸方向N－11°－Eを指し，隅丸方形を呈している。

壁は，床面からやや斜めに立ち上がり，壁高70cmを測る。床面は平坦であり，全体に良く踏み固められている。柱穴は3本確認され，深さは15cmを測る。壁溝は，北壁下に若干みられる。遺構内に鍛冶炉跡が検出された。

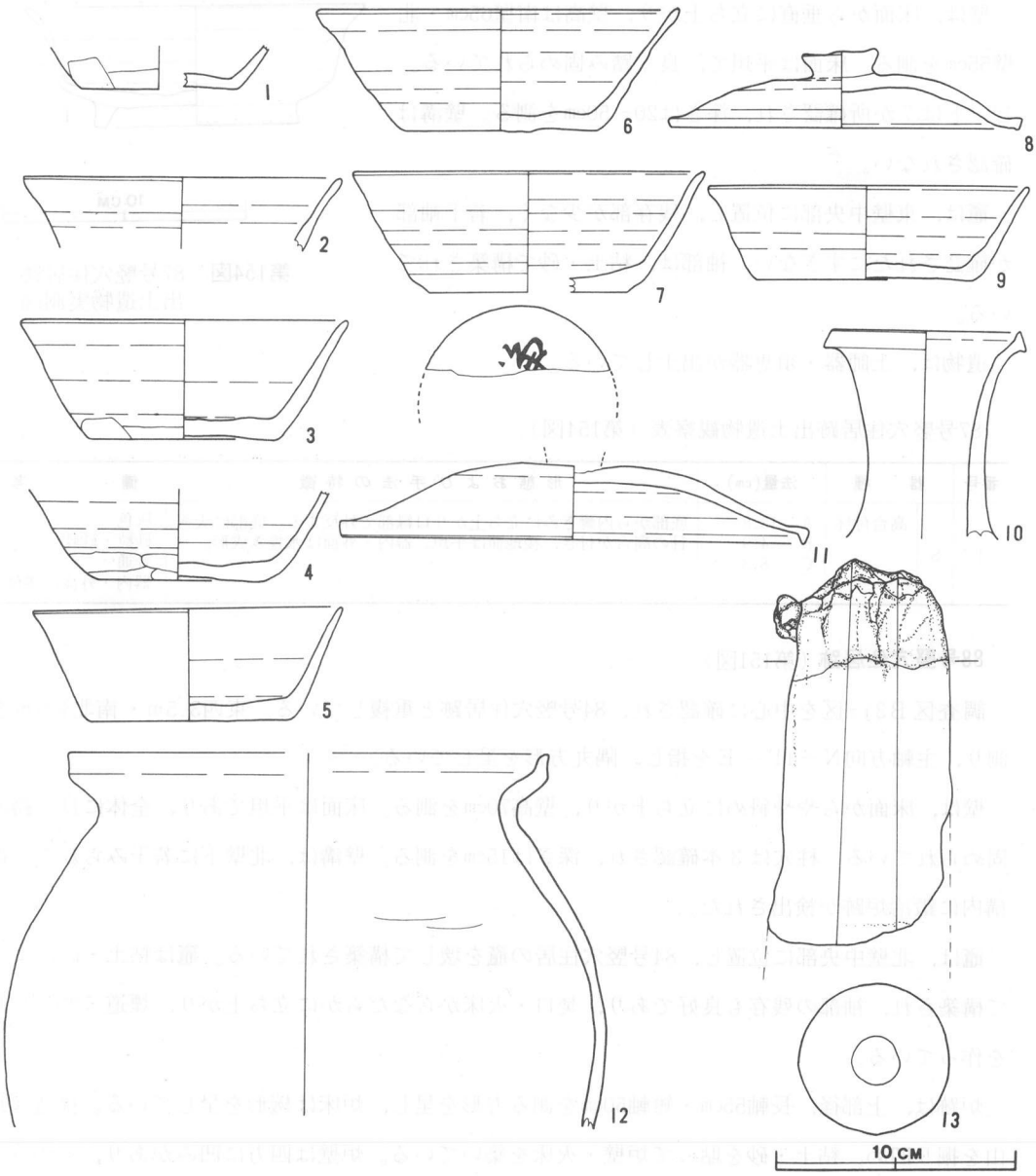
竈は，北壁中央部に位置し，84号竪穴住居の竈を壊して構築されている。竈は粘土・砂によって構築され，袖部の残存も良好であり，焚口・火床からなだらかに立ち上がり，煙道・煙出し孔を作っている。

炉跡は，上部径，長軸55cm・短軸50cmを測る方形を呈し，炉床は椀形を呈している。構造は地山を掘り凹め，粘土・砂を貼って炉壁・火床を築いている。炉壁は四方に凹みがあり，そのうちの一か所に羽口が装着されている。炉壁の凹みは，炉に付随して設けられている浅い溝に続き，溝の端にはピットが存在する。炉床の粘土は焼けて固化し，黒色ないしは灰黒色を呈している。ピットは浅く，覆土内から鉄滓（椀形滓）・木炭片・焼土等が出土している。

本住居跡と83・84号竪穴住居跡との新旧関係は，84号竪穴住居跡が当住居跡より古く，83号竪穴住居跡は当住居跡より古い。

遺物は，土師器・須恵器・墨書土器・漆付着土器が出土している。

なお，本住居跡は，住居としての性格を持ちつつ，鍛冶工房としての機能も有していたものと思われる。



第155図　88号竪穴住居跡出土遺物実測図

88号竪穴住居跡出土遺物観察表（第155図）

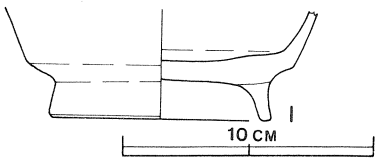
番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	C　6.4	底部破片で直線的に開く。底部は箆切り。	灰色 砂粒・砂礫 良好 器内面に漆付着
2	S	坏	A　13.0	口縁部破片。口縁部は外彎ぎみに開く。器外面には水挽き痕を残す。	灰色 砂粒・砂礫 良好 器内面に漆付着

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
3	S	坏	A 13.5 B 5.0 C 7.7	ぶ厚い作りであり，口縁部は外反ぎみに開く。底部はやや上げ底ぎみで器外面は，水挽き痕が残り底部周辺は篦削り。	砂粒・砂礫 良好 器内面に漆付着
4	S	坏	C 6.7	口縁部欠損。底部はやや上げ底ぎみで器内・外面に水挽き痕を残す。底部は篦削り。	灰色 砂粒・砂礫 良好
5	S	坏	A 12.7 B 4.6 C 8.3	底部はぶ厚い作りである。口縁部は外反ぎみに開く。器内面に水挽き痕を残す。	灰白色 砂粒・砂礫 良好
6	S	坏	A 14.8 B 5.0 C 8.1	口縁部は直線的に開く。底部はやや厚味を有し，上げ底ぎみである。器内・外面に水挽き痕を残す。	灰白色 砂粒・砂礫 不良 器内・外面に二次焼成
7	S	坏	A 14.3 B 5.0	底部破片。体部はゆるく内彎しながら立ち上がり，口縁部はやや外反する。口縁部から内面全体にナデ調整。	灰白色 砂粒・砂礫 良好 底部外面に「浄」墨書
8	S	蓋	A 14.4 B 3.3	天井部から口縁部への移行は強い屈曲を持ち，口縁部は直立している。つまみは擬宝珠状を呈する。器外面は回転ナデ調整。天井部は回転ヘラ削り調整。	灰色 砂粒・砂礫
9	S	坏	A 13.1 B 3.9 C 9.0	底部はやや上げ底ぎみで体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部はやや外反する。口縁部から内面全体にナデ調整。	灰白色 砂粒・砂礫 普通
10	S	長頸壺	A 7.7	頸部は上位ほど外反度が大きく，口縁部に至り，外端部は僅かに下方向に拡張した面を有する。	灰白色 砂粒・砂礫・礫 良好
11	S	蓋	A 19.1	つまみの部分が欠損している。全体に篦削り調整が行なわれている。天井部から口縁部への移行は強い屈曲を持ち，口縁部は垂下している。	灰色 砂粒・砂礫 良好
12	H	甕	A 20.0	胴部以下欠損。胴部に最大径を有し，頸部で「く」の字に外反し口縁端部が直立する。口縁部に沈線状の段がつく。口縁部内・外面に横ナデ調整，胴部外面にナデ調整。	砂粒・砂礫・雲母 普通 器外面に二次焼成
13	羽口		全長（15.5） 外径 7.5 孔径 2.5	大形羽口。	先端部は溶けて鉄が付着

89号竪穴住居跡（第143図）

調査区B3g6区を中心に確認され，82・86号竪穴住居跡・1号溝と重複し，ごくわずかに南壁が確認できる程度であり，遺構の全容を捉えることはできなかった。

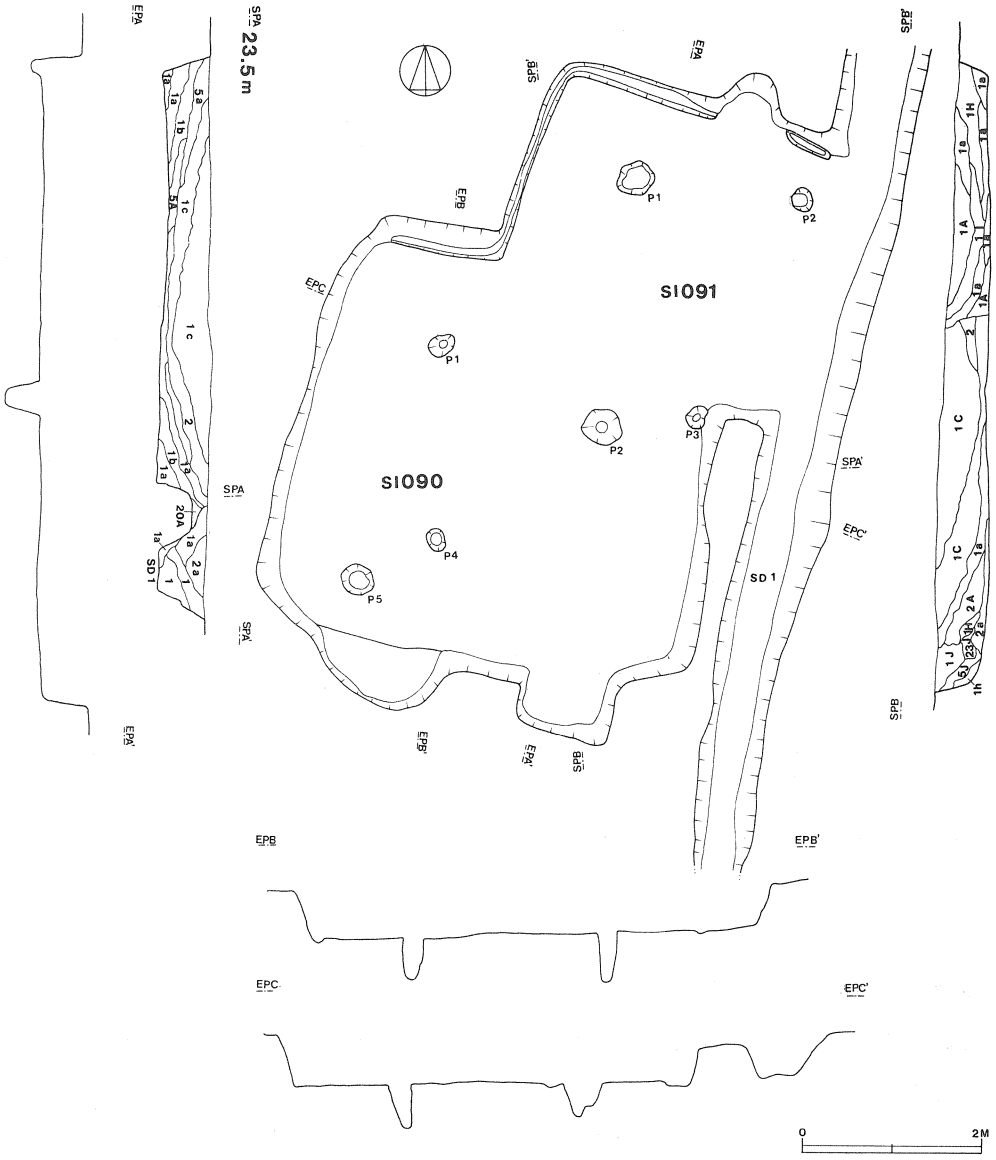
遺物は，土師器・須恵器が出土している。



第156図 89号竪穴住居跡出土遺物実測図

89号竪穴住居跡出土遺物観察表（第156図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	高台付坏	D 8.8	高台は外に開き，端部は厚く接地面は平坦。底部は，篦削り後高台を付けている。	灰色 砂粒・砂礫・礫 良好



第157図　90・91号竪穴住居跡実測図

90号竪穴住居跡（第157図）

調査区B3j5区を中心に確認され，北側において91号竪穴住居跡と重複している。規模は，東西4.9m・南北4.7mを測り，主軸方向N－11°－Eを指し，隅丸方形を呈している。

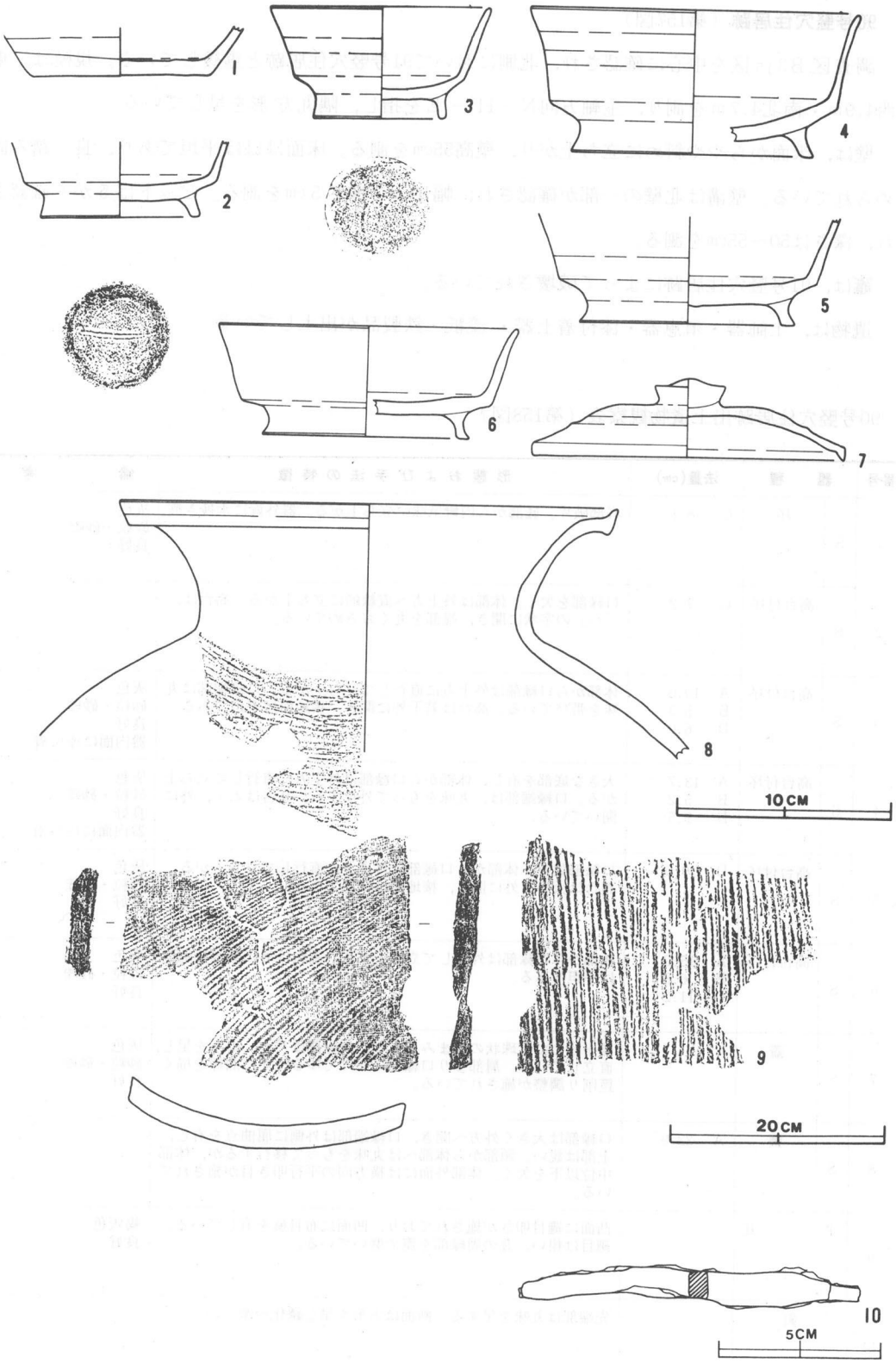
壁は，床面からやや斜めに立ち上がり，壁高55cmを測る。床面はほぼ平坦であり，良く踏み固められている。壁溝は北壁の一部が確認され，幅10cm・深さ5cmを測る。ピットは5か所確認され，深さは50～55cmを測る。

竈は，91号竪穴住居跡によって破壊されている。

遺物は，土師器・須恵器・漆付着土器・漆紙・鉄製品が出土している。

90号竪穴住居跡出土遺物観察表（第158図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	C 8.1	底部破片。底部から内彎気味に立ち上がる。器外面に水挽き痕。	灰色 砂粒・砂礫 良好
2	S	高台付坏	C 7.2	口縁部を欠く。体部は外上方へ直線的に立ち上がる。高台は，「ハ」の字状に開き，端部を丸くおさめている。	
3	S	高台付坏	A 10.0 B 5.3 D 6.0	体部から口縁部は外上方に直行して立ち上がる。口縁端部は丸味を帯びている。高台は若干外に開き，接地面は平坦である。	灰色 砂粒・砂礫 良好 器内面に漆付着
4	S	高台付坏	A 13.7 B 5.2 D 9.5	大きな底部を有し，体部から口縁部は外上方に直行して立ち上がる。口縁端部は，丸味をもって外反する。高台は太く，外に開いている。	灰色 砂粒・砂礫 良好 器内面に漆付着
5	S	高台付坏	D 10.0	口縁部欠損。体部から口縁部は外上方に直行して立ち上がる。高台は大きく外に開き，接地面は平坦である。	灰色 砂粒・砂礫 良好
6	S	高台付坏	A 15.2 B 6.8 D 11.2	体部から口縁部は外反して立ち上がる。高台は外に開き接地面は平坦である。	灰色 砂粒・砂礫 良好
7	S	蓋		扁平化した宝珠状のつまみをもつ。口縁部は「く」の字を呈し，直立している。肩部より口縁部にかけてゆるやかに曲線を描く。篦削り調整が施されている。	灰色 砂粒・砂礫 良好
8	S	甕	A 22.9	口縁部は大きく外方へ開き，口縁端部は外側に屈曲点を有し，上部は鋭い。頸部から体部へは丸味をもって移行するが，体部中位以下を欠く。体部外面には横方向の平行叩き目が施されている。	
9	平瓦			凸面に縄目叩きが施されており，凹面に布目痕を有している。縄目は粗い。瓦の周縁部を篦で磨いている。	褐灰色 良好
10	釘			先端部は丸味を呈する。断面は方形を呈し銹化が激しい。	



第158図　90号竪穴住居跡出土遺物実測図

91号竪穴住居跡（第157図）

調査区B3i5区を中心に確認され，北側において90号竪穴住居跡と重複している。規模は東西3.5m・南北3.5mを測り，主軸方向N－25°－Eを指し，隅丸方形を呈している。

壁は，床面から垂直に立ち上がり，壁高45cmを測る。床面は平坦で，良く踏み固められている。柱穴は2本確認され，深さは40cmを測る。壁溝は北壁・西壁下に確認され，幅20cm・深さ10cmを測るが，東壁下では1号溝によって破壊され，確認できない。

竈は検出されない。

遺物は，土師器・須恵器が出土している。

92号竪穴住居跡（第159図）

調査区C3a3区を中心に確認され，東西3.75m・南北4.0mを測り，主軸方向N－6°－Eを指し，隅丸方形を呈している。

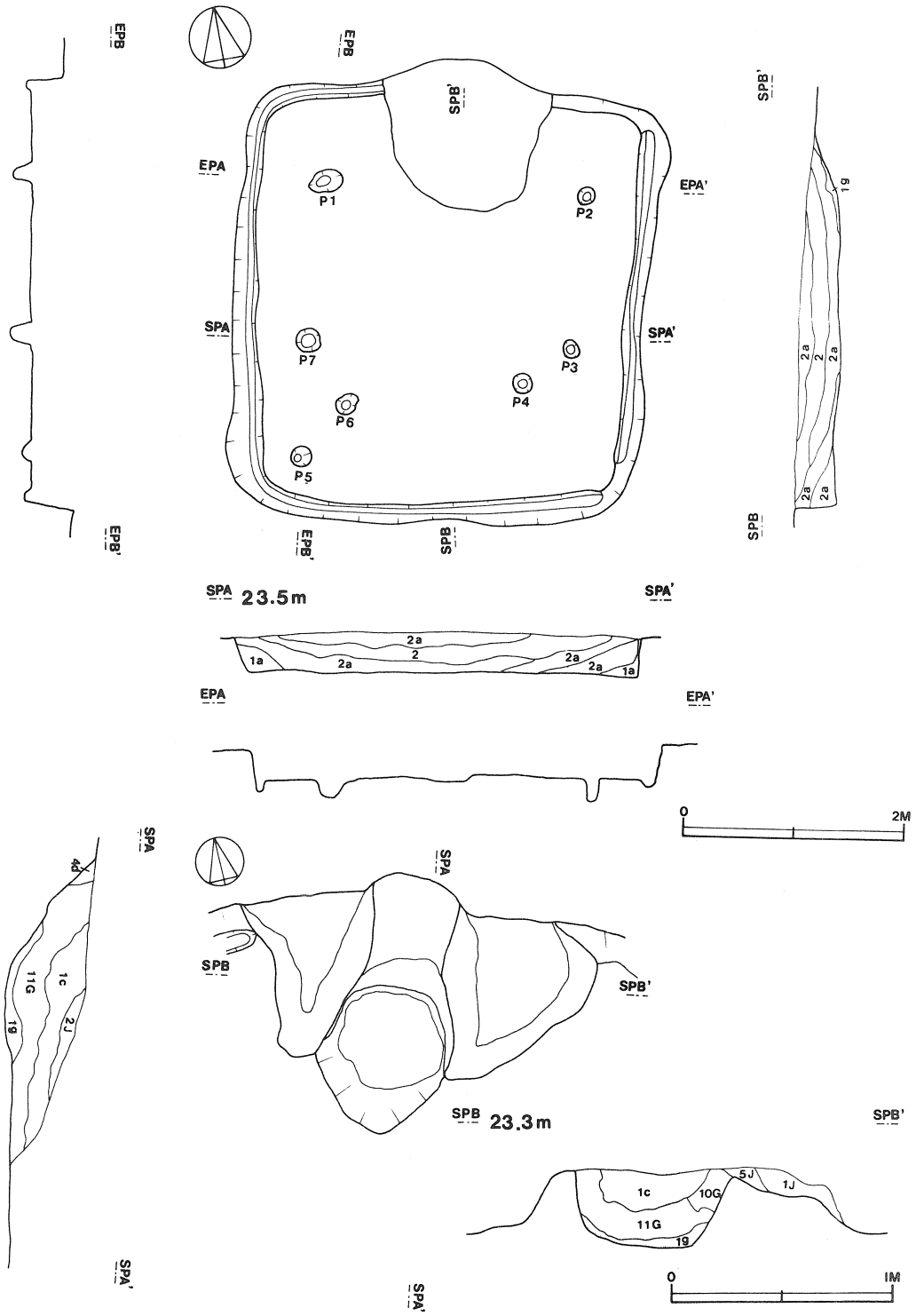
壁は，床面から垂直に立ち上がり，壁高30cmを測る。床面は平坦で，良く踏み固められている。ピットは7か所確認され，深さは15～20cmを測る。壁溝は幅10cm・深さ5cmを測り，ほぼ全周している。

竈は，北壁中央部に位置し，粘土・砂で構築され，焚口・火床からゆるやかに立ち上がりを示し，煙道へと続いている。

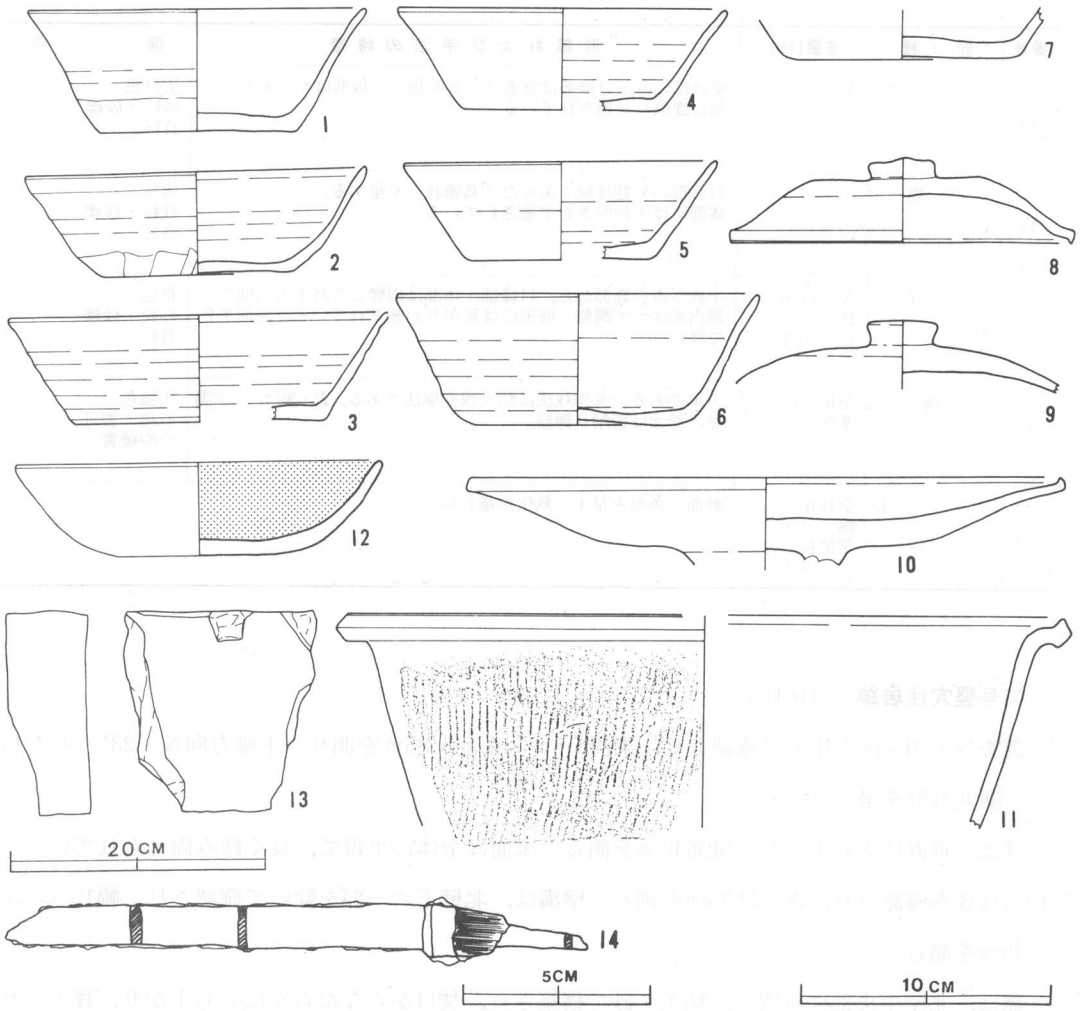
遺物は，土師器・瓦・塼・鉄製品が出土している。

92号竪穴住居跡出土遺物観察表（第160図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 13.3 B 4.9 C 7.8	口縁部・体部は直線的に外上方に立ち上がる。先端部は外反し，丸味をもつ。	黄灰色 砂粒・砂礫 良好 器内面に漆付着
2	S	坏	A 13.7 B 4.1 C 7.4	底部は若干上げ底ぎみで，体部は内彎しながら立ち上がり，先端部は丸味をもって外反する。 器内・外面は水挽き成形。底部周辺は篦削り調整。	灰色 砂粒・砂礫 良好
3	S	坏	A 14.9 B 4.3 C 9.8	底部欠損。器面には凸凹がみられ口縁部・体部は外反ぎみに立ち上がる。先端部は丸味をもつ。 器内・外面には，水挽き痕が残る。	灰黄色 白雲母・礫 良好 器内面に漆付着
4	S	坏	A 13.0 B 4.1	底部欠損。体部・口縁部はやや直線ぎみに外上方へ立ち上がる。先端部は外反し丸味をもつ。	浅黄色 砂粒・砂礫・雲母 普通 器内面に漆付着
5	S	坏	A 12.8 B 3.9 C 7.2	底部欠損。体部は外彎ぎみに立ち上がり，口縁部は丸味をもって外反する。器外面は凸凹がみられる。	浅黄色 砂粒・砂礫 良好 器内面に漆付着



第159図　92号竪穴住居跡・竈実測図



第160図　~~90~~ 92号竪穴住居跡出土遺物実測図

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
6	S	坏	A 14.4 B 5.2 C 8.1	底部はやや上げ底を呈す。体部は内彎ぎみに立ち上がり，口縁部は丸味をもって外反する。 器内・外面には水挽き痕が残り凸凹している。	明灰色 砂粒・砂礫 良好 器内面に漆付着
7	S	坏	C 9.5	底部破片。底部はやや上げ底を呈し，外反ぎみに立ち上がる。 器内・外面には水挽き痕が残る。	砂粒・砂礫 不良 底部に墨書
8	S	蓋	A 13.5 B 3.4	擬宝珠状のつまみを有し，天井部より屈曲して口縁部へ移行する。口縁部は短く折れる。 器内・外面には水挽き痕が残る。	灰色 砂粒・砂礫 良好
9	S	蓋		擬宝珠状のつまみを有し，天井部よりなだらかに口縁部へ移行する。 器内・外面には水挽き痕が残る。	灰色 砂粒・砂礫 良好

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
10	S	高盤	A 23.6	受け部のみ。口縁部は垂直につまみ出し，端部はやや尖る。一部に篦削りが施されている。	灰白色 砂粒・砂礫 良好
11	S	甕	A 28.5	口唇部の形態は鋭く尖った「鳥頭状」を呈する。 体部には平行叩き目が施されている。	灰色 砂粒・砂礫 良好
12	H	坏	A 14.6 B 3.7 C 6.1	平底ぎみの底部から，口縁部・体部は内彎して外上方へ開く。器内面はナデ調整。底部には篦削りが施されている。内面黒色処理。	橙色 砂粒・砂礫 良好
13	塼		全長（15.1） 厚さ6.5	方塼である。成作技法は粘土塊充塡法である。表・裏は，ナデ調整，側面は篦削り調整。	灰褐色 石英・雲母 やや硬質
14	刀子		全長10.7 幅 1.0 茎部長 4.0	断面三角形を呈す。錆化が激しい。	

93号竪穴住居跡（第161図）

調査区C3b6区を中心に確認され，東西4.5m・南北3.85mを測り，主軸方向N－23°－Eを指し，隅丸方形を呈している。

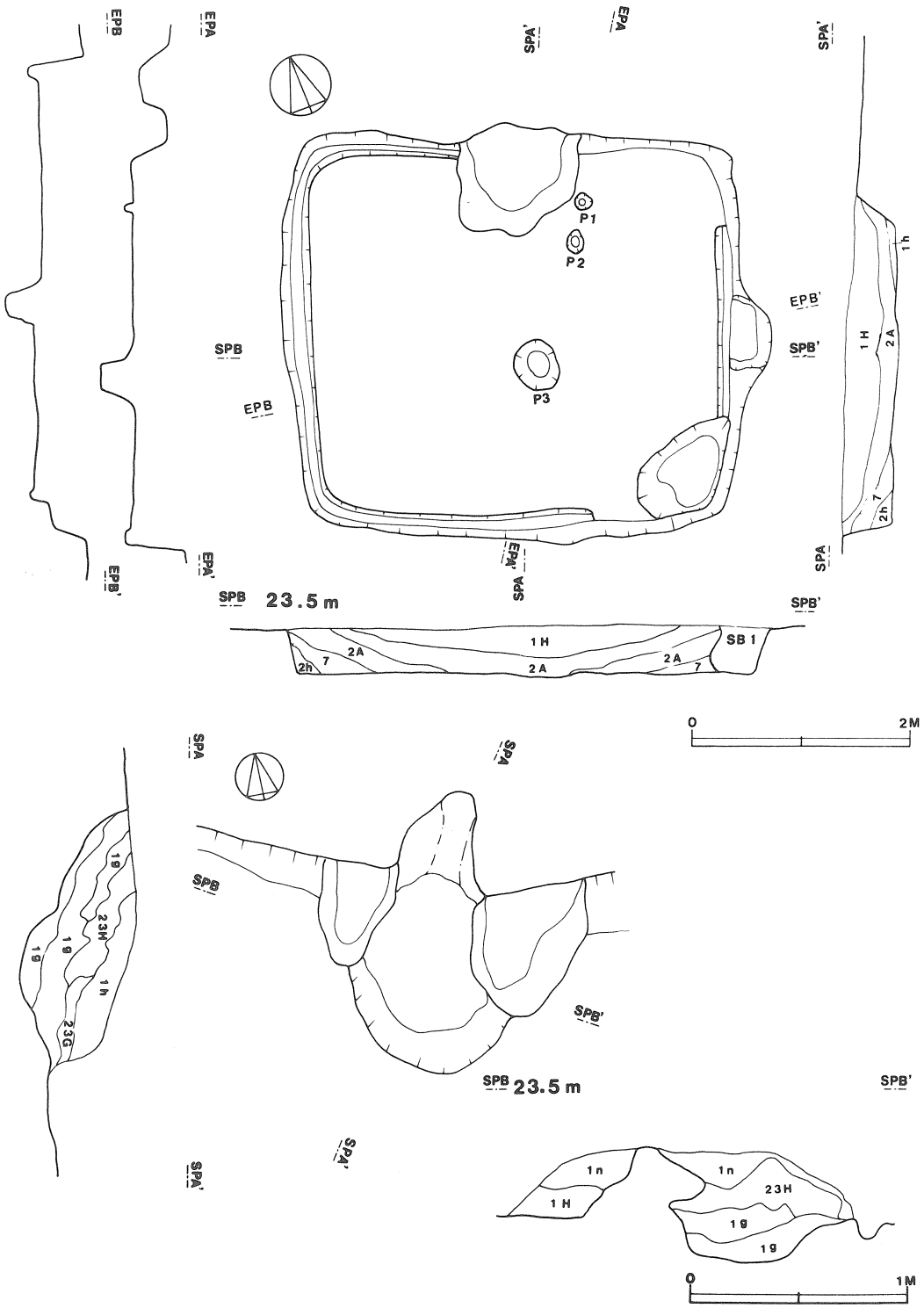
壁は，垂直に立ち上がり，壁高40cmを測る。床面は全体に平坦で，良く踏み固められている。柱穴は3本確認され，深さは35cmを測る。壁溝は，北壁下の一部を除いて確認され，幅15cm・深さ10cmを測る。

竈は，北壁中央部に位置し，粘土・砂で構築され，焚口からなだらかに立ち上がり，煙道・煙出し孔を作っている。

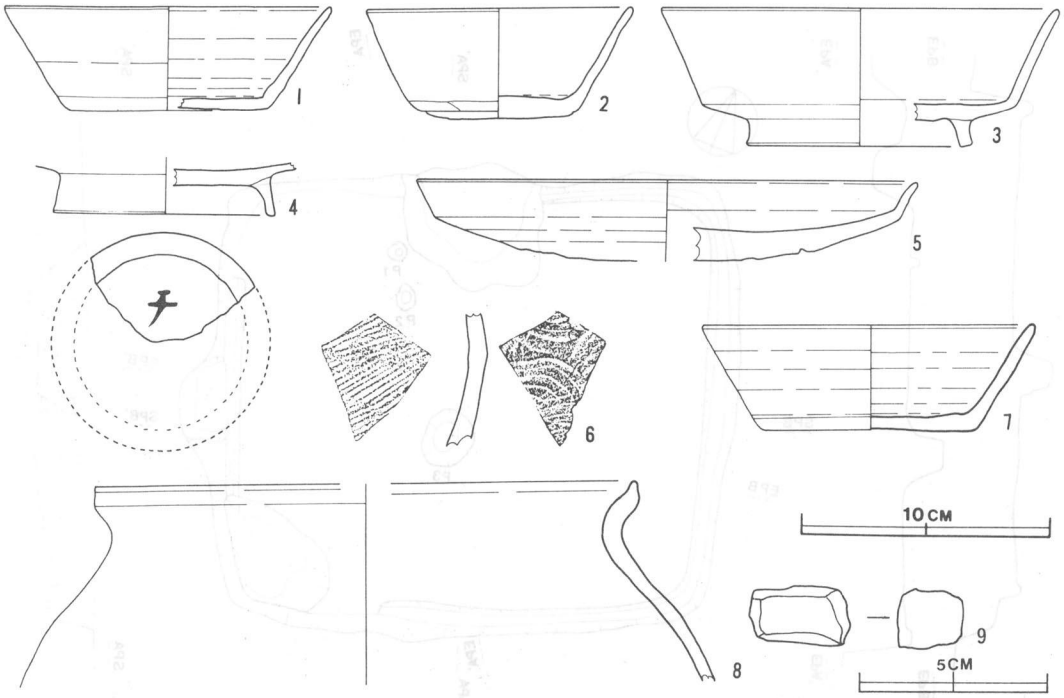
遺物は，土師器・須恵器・漆付着土器・瓦が出土している。

93号竪穴住居跡出土遺物観察表（第162図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 12.8 B 4.2 C 7.7	体部下部はふくらみ，口縁部から体部は外上方へ開く。底部は回転篦切り後外周を浅い篦ナデ調整。	緑灰赤色 砂粒・砂礫 良好 体部内面に漆付着
2	S	坏	A 10.5 B 4.1 C 6.2	底部欠損。口縁部・体部は外上方へ開く。器内・外面には水挽き痕が残る。	灰黄色 砂粒・砂礫 普通
3	S	高台付坏	A 15.6 B 5.5 D 8.7	底部一部破損。口縁部は外反して立ち上がる。高台は「ハ」の字状に開き，接地面は平坦である。器内・外面はナデ調整。底部は篦削り。	黄灰色 砂粒・砂礫 良好

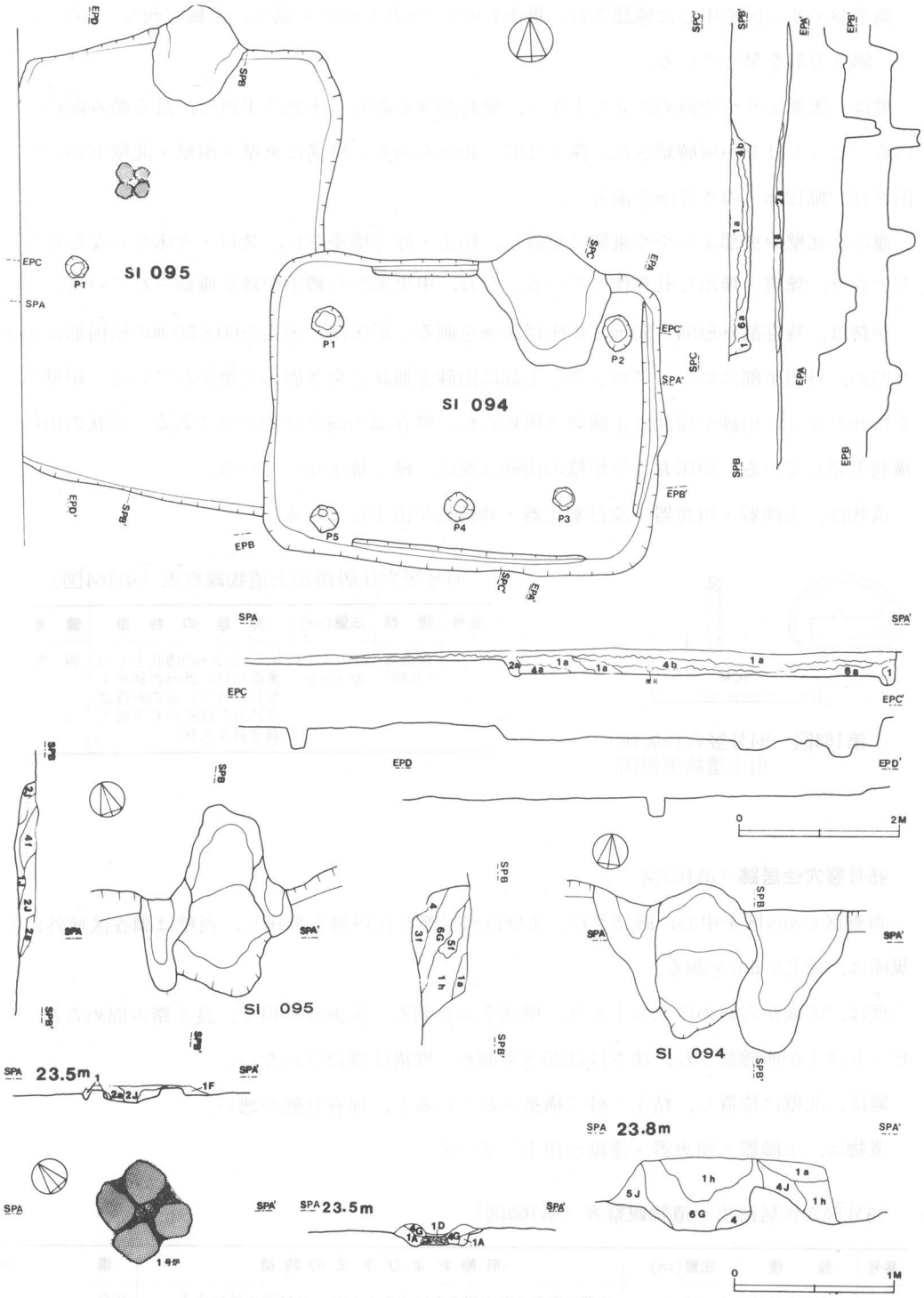


第161図　93号竪穴住居跡・竈実測図



第162図　93号竪穴住居跡出土遺物実測図

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
4	S	高台付坏		底部破片。高台は内彎ぎみで，接地面は丸味をもつ。	緑灰色 砂粒・砂礫 良好 底部に「千」墨書
5	S	台付盤	A 19.9	口縁部は内彎ぎみに立ち上がり，先端部は外反する。底部に高台が付くものと思われる。 器内・外面はナデ調整。底部は箆削り後ナデ調整。	灰色 砂粒・砂礫 良好
6	S	甕		外面は平行叩き目。内面は同心円文。	
7	H	坏	A 13.1 B 4.2 C 8.4	体部は内彎ぎみに立ち上がり，口縁部は大きく開いて先端部が外反する。 口縁部は横ナデ調整。内・外面はナデ調整。底部は箆切り後箆削り。	にぶい橙色 砂粒・砂礫 良好
8	H	甕	A 21.6	胴部以下欠損。頸部で「く」の字に外反し，口縁部上端が直立する。口縁部に一条沈線状の段がつく。 口縁部内・外面横ナデ調整。胴部，外面ナデ調整。	にぶい橙色 砂粒・砂礫・雲母 良好
9	砥石		2.6×1.5	長方形を呈する。全体に使用し稜も使用されている所もある。	凝灰岩



第163図　94号竪穴住居跡・竈，95号竪穴住居跡・竈・炉跡実測図

94号竪穴住居跡（第163図）

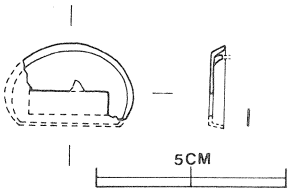
調査区C3i6区を中心に確認され，東西4.9m・南北3.85mを測り，主軸方向N－10°－Eを指し，隅丸方形を呈している。

壁は，床面よりやや斜めに立ち上がり，壁高25cmを測る。床面は平坦で，良く踏み固められている。ピットは5か所確認され，深さは35～40cmを測る。壁溝は東壁・南壁・北壁下の一部で検出され，幅12cm・深さ5cmを測る。

竈は，北壁中央部よりやや東側に位置し，粘土・砂で構築され，焚口・火床からなだらかに立ち上がり，煙道・煙出し孔を作っている。なお，中央部から鍛冶炉跡が確認されている。

炉跡は，残存部外形54×50cm・炉床径20cmを測る。炉床は，床面を60×50cmの楕円形に10cm掘り凹め，外周下部にロームブロック，上部に山砂を皿状に突き固めて築かれている。炉壁は，椀を伏せたように山砂が瘤状に4個突き固められ，残存部の高さは約5cmである。瘤状の山砂間は，溝状を呈している。炉床および炉壁の山砂は焼け，硬く焼土化している。

遺物は，土師器・須恵器・漆付着土器・銙帯具が出土している。



第164図　94号竪穴住居跡出土遺物実測図

94号竪穴住居跡出土遺物観察表（第164図）

番号	種　類	法量(cm)	形態の特徴	備　考
1	銙帯具（丸鞆）	2.15×3.4 厚さ0.2	0.6×2.2cmの透孔をもつ。裏面には0.25cmの鋲が1本打たれているのが確認された。透孔から下部と，裏金具が欠損。	銅　製

95号竪穴住居跡（第163図）

調査区C3h5区を中心に確認され，東壁は94号竪穴住居跡と重複し，西壁は調査区域外にある。規模は，南北5.5mを測る。

壁は，床面から斜めに立ち上がり，壁高7cmを測る。床面は平坦で，良く踏み固められている。ピットは1か所確認され，深さはは25cmを測る。壁溝は確認されない。

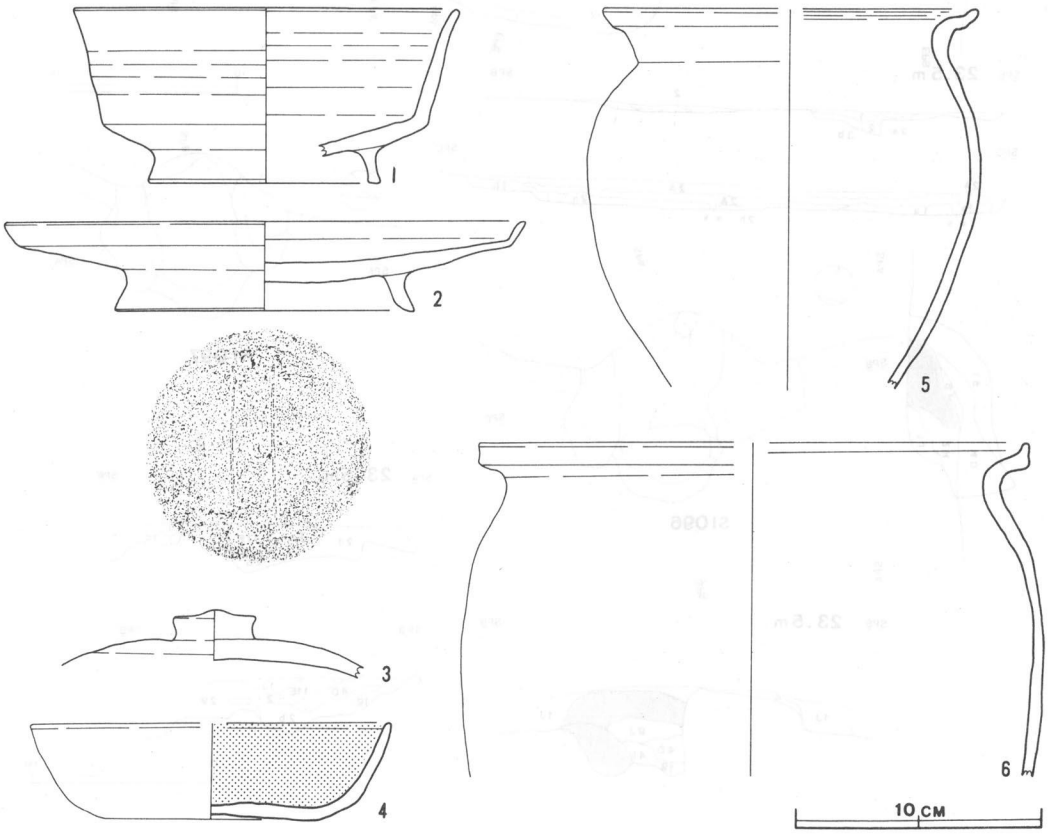
竈は，北壁に位置し，粘土・砂で構築されているが，保存状態が悪い。

遺物は，土師器・須恵器・漆紙が出土している。

95号竪穴住居跡出土遺物観察表（第165図）

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備　考
1	S	高台付坏	A　15.2 B　7.0 C　9.2	体部は底部より内彎ぎみに立ち上がり，口縁部で外反する。外側にふんばった高台がつく。器内・外面に水挽き痕が残る。	灰色 砂粒・砂礫・細砂 良好

番号	器種		法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
2	S	台付盤	A 20.7 B 3.6 C 11.9	底部から外反ぎみに立ち上がり，口縁部は直線的である。高台は太くしっかりしており，外に開く。器内・外面はナデ調整。	灰色 細砂・砂礫 良好 底部に箆記号
3	S	蓋		宝珠状のつまみをもつ。ナデ調整。	灰白色 細砂・砂礫 良好
4	H	坏	A 14.5 B 3.9	体部下部はややふくらみ，体部上部は外上方へ開く。水挽き後外周は箆削り。 体部内面は黒色処理。	黄橙色 砂粒・砂礫・雲母 良好
5	H	甕	A 15.0	胴部に最大径をもち，口縁部は「く」の字状に緩く折れ，先端部は外反して丸い。口縁部は横ナデ調整，胴部はナデ調整。 箆削り調整。	橙色 砂粒・砂礫・雲母 不良
6	H	甕	A 22.2	口縁部は「く」の字状に緩く折れて外上方へ開き，先端部は直立する。口縁部は横ナデ，胴部はナデ調整。	にぶい黄橙色 砂粒・砂礫 良好



第165図　95号竪穴住居跡出土遺物実測図